

ば、野火を燒て、四下を照し、犬山ぬしに對面しつ。迭に意中をとき盡して、渴望の素懷を遂たり。かくて兪うちつれ立て、未明にこゝへ來たれども、愁歎悲泣の折なるに、驚さんはさすがにて、且く便宜を候ふ程に、兩賢息の義死孝感、彼不可思議の一奇事に、胃潰れ肉動きて、慷慨嗟歎に堪ざりき。かゝりし程に癖者等が、利慾の爲に機密を撈りて、不覺にその死を饋りたる、そは患るに足らねども、なほ又寄する敵もやあらん、と且く後詰を心かけて、對面遂に今に及べり。嗚呼義なるかな、孝なるかな。世に有がたき兩賢息の、只俺們を延さんとて、其處に命を限されしは、うち歎くにもあまりあり。況離別の二親を、ひとつにせんとて、亡魂の、一ト夕こゝに顯れしは、儔稀なる純孝也。今その遺志を果さん爲に、俺們四名はこの婚姻に、氷人たらん事を樂へり。則是力二郎尺八等の孝義に酬ふ、寸志ばかりに候かし。許さるべしや。と正首に、辭齊一來意を告て、その婚席を提擲ば、猪平羞たる面色にて、過世の業因ふかき故にや、死すべかりしを、得死すして、子共を撃しつ、剩、相應しからぬ合番、辭するに方なき故主の懇命、おもきがうへにかさねて、四柱の俊士英傑、氷人となり給はん事は、分に過たる傍伴也。當りがたく候。と固辭を道節推禁めて、爲に謝義を述、答禮して、音音曳手單節等を、四犬士に引見すれば、四犬士はその不幸を悼みて、懇に慰めつ、力二郎尺八等が、首級に對ひて恩を謝し、生る人にもいふごとく、誠心言下に顯れて、愈感涙に哽びにければ、曳手單節は酌にも得堪ず、頭を低てうち泣くめり。音音も頻りに目を拭ふて、只道節がうへののみ、四犬士に憑み聞えたる、恰といひ恰といひ、人情節義、膽に銘し、骨に徹する哀歡苦樂に、道節は猪平と、險澗ふ目を指しつ、しばく嘆息したりける。かくてあるべきにあらざれば、四犬士は婚禮の式に據り提擲て、猪平音音に、形ばかりなる、合番執締して、千秋樂とぞ祝しける。粹既にして果しかば、道節ふかく歡びて、更に又盃を、四犬士に勸る程に、曳手單節は庖厨に退りて、飯を炊き膳立して、遺なく酒食を薦れば、音音は地炕の邊にづいて、酒を盃め茶を煮たる、管符大かたならざりけり。そが程に道節は、四犬士に告るや、世に情人の未

解となりたる、今昔多かれども、猪平音音が如きは稀也。就て又再擲あり。か二郎尺八等は、猪平、某と稱しかりしに、いとやく妻を娶りしは、わが父の指揮によれり。そは音音が老實に、某を字育たる、又猪平が先非を働いて、漁者となるまでに、敢又他家に仕へず、亦別妻を娶ざりしを、亡父道策傳聞て、竊に憐み思ふものから、猪平音音を今さらに、許して夫婦にせんことは、いとなしがたき所行なれば、その子にはやく妻を娶らせて、親を慰めたるなるべし。爾るに力二郎尺八は、婚姻の次の日より、母に別れ、妻に別れて、再會の時もなく、忠義の爲に身を殺せども、孝感の致す所歟、その二親を全して、婚媾の遺念を果せり。この事頗奇ならずや。といへば衆皆感嘆して、道策が惻隱の、大かたならぬを稱けり。且して信乃がいふやう、現成敗は必しも、前知しがたき事多かり。譬ば姥雪父子の存亡、吾黨の危難の如し。さればいぬる日猪平叟に、一封の書を委られたる、某に先だちて、犬川生はこゝに來つ、あるじの媼に對面して、犬山ぬしの郷邊をしつ、某等に引見したり。加旃彼書狀は、犬山生が開封して、後にそのぬしに見せたる、絆離離ふに似たれども、その叙を失はず、是則機變也。機變は前知すべからず。かゝれば彼根五平等を、漏さず擊留たればとて、こゝにをらんは究めて危し。さはあらずや。と誓けば、莊助も亦膝を進めて、彼定正は大敵也。縦令擊果さずとも、犬山ぬし身ひとつにて、越杉籠門等はさら也。敵兵夥討捕給へば、こも復讐の義に稱へり。又定正を討んとらば、八犬士具足の日に、里見殿を相佐けて、思ひの隨なる軍をしつべし。今はその時ならずといふ。現八これに同意して、兩兄寔に説得てよし。力二郎兄弟の首級を竊に擧りて、まづ女流を落すべし。といひつ、傍を見かへれば、小文吾も亦領きて、そは究竟の處あり。姥雪夫婦と兩婦はわれ行徳へ將て適て、父文五兵衛と妙眞に、憑みおかば後安けん。疾その準備をし給へかし。と四人齊一勸れば、道節この議に従ふて、馳て猪平音音等に、緯のこゝろを得さしつ、なほ行末を相譚ふに、力二郎尺八が首級の事、今この敵地に埋葬んは、快からぬわざなれば、犬田ぬしを煩さん。こは行徳を遣して、彼地に葬るこそよかんめれ。

幸にして馬もあれば、衣裳調度を附負して、曳手と單節と迭代に、牽もせよ、乗もせよ。脱落なせよ。と急せば音音は行李の準備して、晝餉の料の握飯を、人別に袋む程に、曳手單節は馬孤屋なる、馬に履穿、秣を飼ふて、縁類近く牽よしたるを、檐の柱に繫駐て、ひとしく音音音音等がほとりに並び跪きて、豫ては思ひ決めてし、自殺の事は、二かたの、禁めさせ給ふにより、こゝろに任せ侍らねども、切てけふより尼となりて、良人の菩提を弔まほし。この事のみは許させ給へ。といひも訖らず準備の刃物を、手に取て發願得度の、頭鬚を弗と剪放ちつ、力二郎尺八が首に添て、二袂に推包み引締びて、鞍の前輪に附るになん、猪平音音は感嘆して、禁んとするに竟に及ばず。道節等の五犬士も、貞操節義を嘆賞して、いと不便に思ひける。當下音音は曳手等が、荷を附る馬をつくぐと、見つゝ頻りに嘆息して、彼馬の事はしも、和子には豫て報侍りき。賓客達聞給へ。彼は古主の乗替にて、年來秘藏の逸物なれば、去年煉馬の没落に、敵に取せんことをしめて、兩個の媳婦を合鞍に、乗して重圍を脱れにき。さればこの地に落留りても、是ぞ古主の像見と思へば、貧しき家に畜立て、豫ては和子の乗馬に、と思ひしものを思ひきや、昨夕は子供の亡魂を、又合鞍に乗せて來つ、けふは又あの子供の首を、負して他郷へ遣らんとは。世とて時とて畜生までも、さぞ朽をしく思ふらん。不便にこそ。と今を思ひ、むかしを偲ぶ諄言も、忠義の外は他事ぞなき。現憑しき誠心やとて、人愈いよく感じける。そが中に猪平は、道節に希望ふやう、婦女輩を下總へ遣されんはしかるべし。某は子供に代りて、君に従ひ奉り、同行の諸君子の行箚筆をも聚負てん。何處までも召されよかし。といふを道節聞あへず、そは宛めて無益の議也。警ば雲と水との如し。これより各袂を分たば、誰か亦その往方を定めん。われ既に犬塚生と、別後の事を相譚たり。今現在の六士の外に、同因同果の二犬士あらん。こは智力をもて招くに由なし。各隨意に武者修行して廻國年を歴るならば、遭ふといふことあるべからず。かゝれば從者なきこそよけれ。汝は音音音音に、行總へ赴けかし。と諭せば又四犬士も、辭を添てぞ禁めける。猪平望を失ふて、慨然として退きかねし

を、道節うち見て、やと世四郎、さのみな心を苦しめそ。この三賢平と一が首説を、こゝろに添て出で、脱去りしといはれん。こは庭門に梟首せよ。といふに猪平身を起しつゝ、二級之首をもて出で、諸折戸なる逆劍梁に串き並べて梟にけり。既にして起行の、準備はやくも整ひしかば、道節は慨然と、四犬士を見かへりて、某今一條の懺悔あり。家に傳へし祕書によりて、火遁の術を獲たりしは、甚しき愆なりき。件の術は左道にして、勇士の行ふべきものならず。その要領は難に臨みて、わが一身を免るゝのみ、敵に克ときは、絶て要なし。尤恥べきわざになん。よりに目今その書を燔て、ながく左道の異法を斷ん。皆見給へ。と懐より、火遁の祕書をとり出しつゝ、なほ燃残る地炕の火中へ、忽地礮と投捨れば、骸々として立のぼる、火災と共に捕手の兵、いつの程にか潜寄けん、一ト隊凡十人許、柴垣の蔭、樹立の間より、篋々と走り出で、御説さふ。と呼かけ、はや縁類にうち登りて搦捕らんと競ひ蒐るを、こゝろ得たり。と五犬士は、立逆ひ引受て、修煉の大刀風、瞬間に、眞額肩尖、向敵、當るに任して斫例す、技も刃も海内に、儔稀なる勇士の働き、孰か一人も漏さるべき。頭顱を並べて撃れけり。さもこそあれ、と五犬士は、立並びつゝ衣の衿を、結りかへして血刀を、拭ひ納る程しもあらず、迥に聞ゆる陣鉦大鼓に、衆皆耳を欬て、原來この隱宅を、はやくも知りて撃んとしたる、是等の雜兵のみならず、後詰の大軍白井より、推寄來つるにこそといふ。そが中に現入は、檐旁の松にさやく、と攀登り見わたして、閃りと降て、堯爾とうち笑み、思ふには似ぬ敵の軍配、其勢凡三百餘騎、田道里道捕詣て、既に間近く推寄來れり。しかりとも吾黨が、力を勤して撃破らんに、敗れずといふことやはある。おもしろし。と勇腕を扼りて、騒ぐ氣色はなかりけり。當下信乃は、小文吾に、彼分捕の刀を贈りて、某は幸ひに、犬山生の厚義により、復村雨の大刀を獲たれば、今は三口の刃をもてり。獨和殿は、副刀なし。敵にあふてその大刀折なば、何をもて防ぐべき。且くこれを帯給へ。といひつゝ遞與せば、小文吾は、辱し。と受とりて、聽て腰にぞ挿添ける。その間に猪平音音は、力二郎尺八が、像見の身

甲投被て、腕鎧に鉢巻精悍しく、音音は納戸に祕置たる、薙刀を取て挟み、猪平は朴刀を、腰に帯び跪きて、頻りにはやる道節及四犬士を諫るやう、嗚呼がましうは候へども、敵を侮るものは亡び、謀なきものは危し。諸君の武勇、向ふに前なく、鬼神を拉ぐ手段ありとも、寡をもて衆に敵すべからず。五指の弾くや、一指を折かば、後悔其處に立たし。其夫婦はこゝに籠りて、命限りに寄手を防ん。近づかぬ間に敵を避て、とく背路より落させ給へ。行住不便に侍らめども、曳手單節がうへにのみ、憑み奉る。と只顧に、思ひ入たる必死の覺期に、四犬士は道節が回答をまたず頭を掉て、こは思ひがけもなき、曩には受し再生の、大恩をまだ一點も酬はず、况可惜兩賢息を、擊せし憾の大かたならぬに、今亦敵を叟等に任して、苟にも脱れんやとて、諸聲悍く否すれば、道節も亦いかてか聽へき、一步も退く氣色なく、俱に云々と諭すにん、曳手單節も共侶にとて、齊一死をぞ究めける。猪平音音はこれらの言に、又何とか答けん。畢竟姥雪夫婦の存亡、五犬士の進退いかにぞや。そは編を繼ぎ巻を更て、第六輯のはじめに解ん、姑く餘稿を、輯外に措のみ。

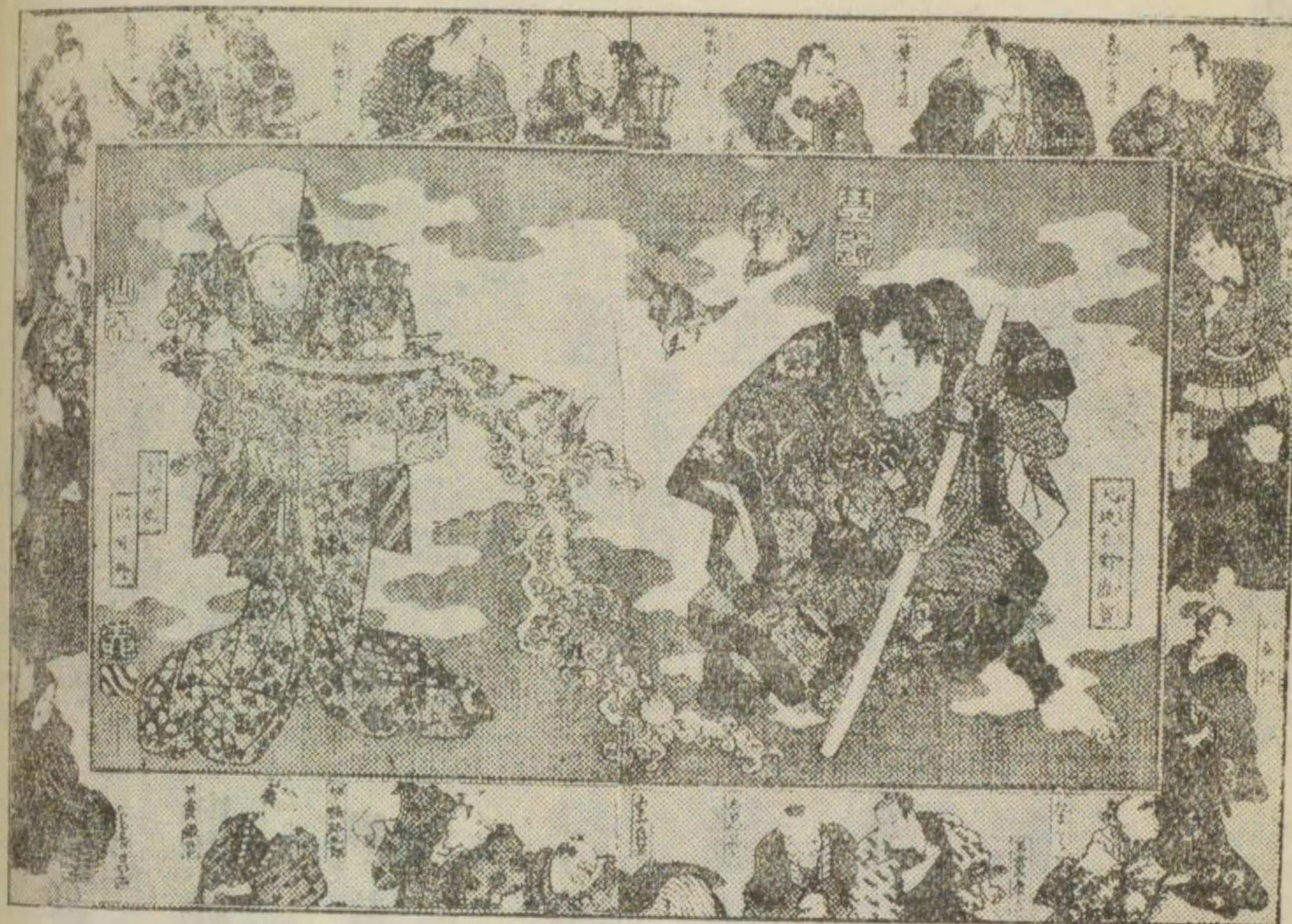
南總里見八犬傳 第五輯 卷之五終

八犬傳第六輯有序

予所著八犬傳一書。此秋夕冬夜戲墨。曩謬爲書賈山青堂所刊布。雖未足使楮價踊貴。而於書賈頗有贏餘焉。且暮以此爲搖錢樹云。自是之後。屢續稿。而至第五輯時。山青堂耽於他事。乃不果。俛仰之間。光陰荏苒。越歷四五年矣。今茲書肆涌泉堂。購得前書刻版。又揣刻。一日令山青堂爲介。告諸予乞代續梓。誅求數四。諄諄不已。予爲其言有理。漫然領之。將創餘稿以充鎖夏之料。然無有宿構也。偶其所有。皆忘之矣。因沈吟構思。然後費燈油者。每夜一二盞。漸費至一二升。則稿了一卷。彌費迨斗許之夜。稿了者總五卷。其第五卷楮數最多。遂釐之以爲二本。編纂共六本。手稿竟完矣。輒授之于涌泉堂。以登於梨棗。其書畫二工。依故出像。則柳溪二子所畫。淨書乃田谷兩筆錄之。閱五六月。而書畫盡成。嗚呼涌泉堂性太急。自克促工。而無虛日。及闕人告成。又乞顏予之自序於簡端。業在倉卒際。不遑含毫且回思。即便述本輯稍久而出世。趣代序以塞其責。

文政九年菊月中澣書于著作堂雨廳。

曲亭蟬史



坊買之獲利。素其所也。而猶有甚焉者。若拙著常世物語。三國一夜物語。二書。其刻版係于丙寅之歲。或爲烏有。或亡其半。曩一賈豎。補刻常語之闕。又翻刻一夜語。然不告諸予。乞校訂。擅改易常語書名及出像。而令是如新著。是以多不與舊本同。加之。其文誤衍亦多。拙劣不遑毛舉也。初予不知之。客歲涌泉堂。購得常語補刻之梓。而乞予校訂。於是予駭嘆久之。無所漏憤。譬如汚衣之油。屢洗乃耗本色。追今又莫奈之何。且也。一夜語翻刻。雖未得見。新刷。而推思之。則亦不與舊版同可知也。願廿餘年前戲墨。吾豈敢懸念耶。但見賣名之憾。不得無言也。因贅數行於簡端餘楮。

曲亭主人再識

第五十一回

兵燹山を焼て五彦を走らす
鬼隣馬を助けて兩齋を導く

再説、上野國甘樂郡、荒芽山のほとりなる、道節主従が隠宅には、白井の城兵既にはや、程遠からず寄するに及びて、猪平音音は道節等の、五犬士を延さん爲に、夫婦寄手を防留めて、戦歿せんとはやりしかば、曳手單節も共侶に、死んと思ひ決めしを、五犬士いかでか従ふべき、迭に諫め争ふて、言果へうもあらざれば、道節頻りに焦燥て、世四郎（猪平をいふ）音音が必死の覺期は、皆是忠義の爲にして、志はさることながら、視に餘る彼大敵を、老夫婦等が禦げばとて、いつまでか得柱ゆべき。況て曳手單節等が、怒に退かて、死して益なきのみならず、さしも犬山道節等は、命をしさに老弱男女を、遺して脱去たりなンド、後々までも敵にいれば、恥亦これにますものなし。さればとて汝達に、落よといふとも従ふべからず。よりてわれ亦思念あり。世四郎音音はこゝに籠りて、しばらく寄する敵を禦げ、吾們は七八反、背門の山邊に退きて、樹下暗き彼方より、不意に起て横さまに、敵の左右を撃崩さば、這奴等は、必度を失ふて、躬方に伏兵ありと思はん。當下逃走る敵兵を、よき程に追捨て、兪兵侶にいちはやく、他郷に避て時を俟ば、只今死するにますべきのみ。この議はいかに。と諭しつゝ、左右を佐と見かへれば、信乃、莊助、現八、小文吾等は、齊一掌うち鳴らして、説得て理あり、極めて妙なり。敵手に足らぬ雜兵を、幾人撃捕て死するとも、なほ隋侯の珠をもて、雀を弾くに異ならず。匹夫の勇は、えうなきものを。といふに道節悦びて、さらば先この

奔走不便等を、とく／＼馬にうち乗してん。嚮にも謀し合せしごとく、渠等がうへは左にも右にも、大田ぬしを煩さん。よき來去を相謀ひて、姥雪夫婦もろ共に、行徳へ將て還り給へ。と憑むを小文吾聞あへず、それはこゝろ得て候也。とく乗らずや。と縁頼へ、馬の鼻づら牽よして、曳手單節を合鞍に、落ぬ爲にと絆もて、あちこち楚とからまへて、一ト町ばかり牽退けて、繋く樹蔭によせ來る敵を、まつや常葉の老夫婦、猪平音音は今さらに、争ひ難て燒草を、家の内外に積寄せ投入れ、案山子ながらの圓竹弓も、俄頃準備の細竹の征箭、伐盡しつゝ携へて、いるわが宿の片廂、遣戸障子を盾にしつゝ、霎時はこゝに隱口の、はてしなきまでいそがしき、必死の覺期ぞ哀れなる。斯有し程に道節信乃、現入、莊助等は、背門の山邊に退きて、小文吾共侶露深き、茅萱の中に埋伏れつゝ、敵いと遅し、と俟程に、推寄來つる討手の軍兵、樞實の只孤屋を、稻麻のごとく捕卷て、咄と颯たる鬨の聲に、早雄の兵卒等、走入らんとしけるが、庭の折戸に殺擧たる、三寶平駄一が首級を見て、忽地鬼胎を抱きけん、左右なく進み得ざりけり。當下大將巨田助友、柴の戸狭し、と馬乗駐て、やをれ、犬山道節等は何處に在る。嚮には同類の援によつて、不思議に網を漏るゝといへども、一味の奴原共侶に、この處に躲れをるよし、密訴ありて定かに知れり。斯多勢をもて捕籠たる、この助友を認遺れずは、名告らずとも膽に徹して、本事は豫てしりつらん。かくまで窮るその身の命運、今はしも籠の鳥、檻の獸に異ならず。とく／＼出て、縛の索に係らば同類の命は時宜に依て免さん。いかにや奈何。と呼ばれども、軒端にかよふ松風の外に應はなかりけり。助友焦燥て、麾ふり揚、蓬き敵の迷足に、武士の作法もいらばこそ。思へば無益の問答なりき。とく踏込て討捕すや。と烈しき下知に、先隊の雜兵、うけ給はる。と答もあへず、群だち競ふて竹縁を、踏落しつゝわれ先にとて、走り入らんとする程に、箭來を諷る姥雪夫婦が、間近く敵を引よして、障子開亮の間より、差詰鶴射出す征箭の、裏缺までに至らねども、先に進みし五七人、矢庭に胸前射倒されて、おなじ枕に臥たりける。この弓勢に難易して、人を小盾に撰擧しつゝ、色めく敵に、思をも助せず、なほも與なき敵音に、

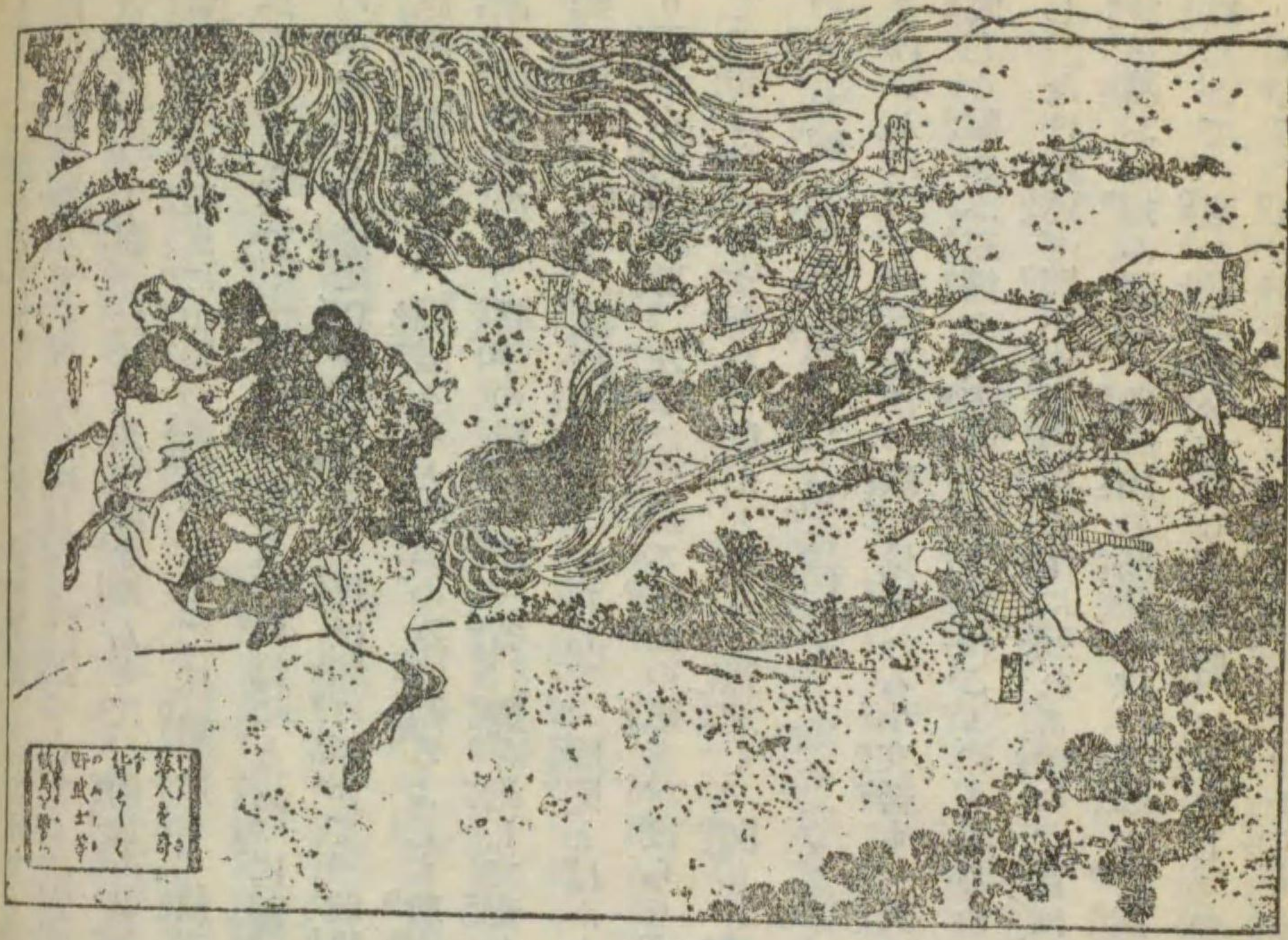
他箭なれば強とたつ、引板の響子の群、稲の穂なみに風騒き、よせては還すばかりにて、群衆べうもあかりざれば、助友眼を睜らして、いひがひなきもの共かな。さばかりの／＼箭に、何てふ怖るゝことやはある。退な進め。と罵たる、聲をちからに箭面に、たつとしいへば破障子、遣戸毘放ち踏摧く、擬勢も有繫雜兵の、鉄、鈇、頭衝棒、十手、得物々々をうち振て、ふたゝび進む程もあらせず、猪平音音は既にはや、矢種も射盡したりければ、手には雞刀朴刀を、腋夾み抜欵めて、物の蔭より顯れ出たる、對の身甲、腕鎧、脚盾、老木の松に蘿蔓、かゝる打扮も手に代る、勇氣を示す軍の宏言、夫婦齊一聲ふり立て、あな物々しき捕手の大勢、われ雜兵には所要なし。大將は誰ぞ、助友歎。進みてわがいふことを聞け。萬夫も敵なき道節ぬし、かばかりの寄手に怕れて、逃隠れしにあらねども、時のいまだ至らねば、かされて義兵を起さん爲、同盟の勇士と俱に、今朝はや他郷に赴き給へり。かくいふものを、誰とかする。犬山殿の譜第の老黨、姥雪世四郎、一名は猪平、老妻音音共侶に、汝を俟こと久しかりき。とく討捕て手がらにせずや。といはせも果す細入る雜兵、ほざいたり老惣等が、よしなや主を延さんとて、死に出しは夏虫の、火虫に似たる白物也。物ないはせそ、彼奴から、搦捕らずや、逃すな。と多勢に誇る侶擬勢、前後左右に鬨きて、撃んと競ふを、猪平音音は、右にひだりに受流す、刃の牙も覺知の手裡、近づく敵を斫仆す、電光石火の大刀風に、さしも老樹と侮りて、われから嵐の木葉武者、帚出さるゝ外面には、助友ますゝ焦燥て、蓬し進め。と鞍壺敵て、なほ繰入るゝ後陣の大勢、嘯き叫て攻著々々、火水になれ。と倭たりければ、木石にあらぬ老夫婦、心ばかりは早れども、これ彼共に手を負ぬ。秋の河瀬の丹楓より、八入に流るゝ鮮血のくれなる、今はかうと思ふになん、且戦ひ且退きて、家に火を被、猛火の中に、身を燒てん、と豫ての覺期も、心にかゝる主のうへ、曳手單節はいかにぞや、四犬士共侶この隙に、落給はずや、といへばえに、岩に碎る谷水よりも、腰留かねし多勢の刀尖、受流し又うけ流す、刃は彫となるまでに、なほその透を得ざりける。話説分兩頭、されば又道節は、信乃、莊助、現入、小文吾等共侶に、

家を離るゝこと八反ばかり、鬪戦闌ならん時、敵の左右を襲んとて、茅葺の中に埋伏れて、且くその圖を俟程に、既にして母屋のかたに、寄手の颯る鬨の聲、裕に響して、箭叫大刀音漸々に、最も急迫しく聞えしかば、時こそよけれ、と手を抗ひ、示せば領く四犬士も、彼此に草推分て、はや立あがる身輕の打扮、四人左右に立わかれつゝ、樹間立潜き、背門邊より、不意を撃んとする程に、ゆくこといまだ百歩に過ぎず、思ひがけなき岨蔭より、顯れ出たる、一隊の軍兵、忽地路を要りて、先に進みし一箇の大將、萌葱威の身甲に、皂毛織の陣羽折、十王頭の脚盾に、紫金作の大刀、鎧長に横佩て、弓杖つき立、聲高やかに、愚なり犬山道節、汝等なほも株を守りて、こゝにも奇兵を行ふ敷。然らずは走ることや、と豫て諷りし案に違はず、躬方の多勢に比れば、彼九牛の一毛もて、襲撃んと欲するとも、いかばかりの事やはせん。既にその機を察したる、巨田新六郎助友こゝに在り。敵ながら可憐勇士ぞ、とおもひにければ、きのふは免しつ。先非を悔、刃を伏せて、降参せば首を續せん。さるを猶惑を攪て、虎狼の心を改めずは、此度は決して免しがたし。といはせも果す道節は、ひとり眞先に進み向ひて、怒れる聲をふり發し、扱は助友ござんなれ、汝も警の隻別なるを、撃漏したるきのふの遺恨、ふたゝび本事を見せん。と罵りながら拔ぬ手も尖く、うち振る刃は半輪の、月敷氷敷、影に添ふ、四犬士も亦相副けて、共に刃を晃めかしつゝ、撃んと進むを、助友は、彼射て僵せ。と下知すれば、左右に従ふ許多の精兵、齊一弓を彎固めて、切て發せし矢箭にも、怯まず去らぬ五犬士は、打落し砍捨て、よしなや裏をかゝれにけり、と思へば前計合期せず。今助友を討捕らずは、世四郎音音を拯ふに由なし。自餘の端武者に目な被そ。と送に叫び激して、矢石を犯す奮撃突戦、面も揮らず駈散らす。死を只一擧に極めたる、勇士の大刀風、四下を拂ふて、五犬士一處に聚ひては、又五所に立わかれ、前に顯れ後に隠れて、秘術を竭す拳の牙に、血は涿鹿の野を浸し、紅波は盾を流すまでに、斫仆されたる雜兵の死骸は算を亂すが如く、きのふにも倍す五犬士の、さしも然しき刃尖に、崩れ立たる巖なれば、逃る野方に推著られて、助友さへに飛走るを、遂さず追撃す

犬士の、背に起る一隊の軍兵、中にも一人、高く叫びて、遊賊道節等、巨田新六郎助友こゝにあり。既にして、呼る聲に、五犬士齊一駈きながら、後方を借と見かへれば、おなじ打扮の寄手の大將、彼も助友、これも助友、面影さへによく肖たり。それかあらぬ敷、とばかりに、逃る敵をば追捨て、近づく敵に駈向へば、又引返す已前の助友、隊勢を進めて先後より、引夾みてぞ攻たりける。時に母屋のかたに當りて、俄頃に發る猛火の光に、秋の山風吹暴て、火燄飛散り飛移り、樹木を焦し草を焼く、煙に堪ねば敵も躬方も、別々になるまでに、頭の上に降かゝる、火華を拂ひあへずして、周章大かたならざりけり。この時にしも五犬士は、前後の敵に隔られて、相距ること百歩二百歩、或は岨のほとりに在り、或は巖の蔭に在り。火は道芝にうつりにければ、輒く聚合に由なけれども、思ひはおなじ信義の心魂、天うち仰ぎて嗟嘆に得堪ず。憐むべし姥雪夫婦は、今はや家に火を被て、共に煙となりけん、彼火の故に俺們が、圍を解しつ、ゆくりなく、死を脱るゝ時あるに似たるも、亦是夫婦が忠義によれり。然るをその存亡だも、見極めざらんは遺憾し。敵は猛火に度を喪ふて、路の開けしこそ幸ひなれ。よしや煙を犯しても、母屋のかたに近づきて、燒迹なりと見まくほし。いかにせましと云々に、いひ合さねど友どもの、心意の一致して、踰ゆく路を求めども、風はいよゝゝ烈しくなりて、西に吹ては東にかへし、南へ卷ては北に旋る、音凄じく沙磔を飛して、山林過半焼つべき、勢ひ犯しがたければ、母屋へ赴くことはさら也、五犬士は在る儘にて、ひとつに聚合ことも得ならず。武尊駿獵の災、田單火牛の謀も、これにはいかでかますべきやとて、數百の敵には怕れざりしも、おのゝ舌を掉ふのみ、送に手を抗意を示しつゝ、一ト圓山をうち踰て、煙を避すは草木と、共に焼れんとくゝ、と招けば招く繁茂、茅葺も風に燒立られて、通ふ路なきのみならず、火燄ますゝ散亂して、彼此となく犬士のほとりに、間なく隙なく降かゝれば、襟に袂に燃うつるを、拂ひ落しつ、撲滅しても、なほ生憎に焦熱の、地獄の責に異ならず。そが中に道節は、火遁の術をみづから非として、今朝しも破棄たれば甲斐なし。よしやその術ありとて、身ひとつ遁れて何にせん。

圍は解けて火に焼るゝも、みな是過世の業報ならん、と思ひ定めつなかく、に、觀念の外なきものから、犬塚信乃が
 ほとりへは、墜る火燄の殊さらに、多かりければ霎時も得堪ず、右へ走り左に避て、身は狂へども心には、正しく思
 ひつくよしありて、鬚に納めし村雨の大刀をふたゝび引抜て、ちからの限りうち振れば、刀刃の奇特舛たず、その刀
 尖より潰る、水氣は遠く散亂して、百歩二百歩あなたなる、道節現八莊助等が、ほとりに閃めく火燄すら、うち滅
 されつゝ落てけり。當下信乃は聲ふり立て、諸君子これを見給はずや。火急の難義に心まどひて、この大刀あるを忘
 れしは、負たる兒を人に問ふ、譬にも似て愚なりき。この刃をもて道芝の、火をうち滅して山を越てん、續き給へ。
 と呼かけて、なほも刃をうち揮打ふり、わけ入る山も數ならぬ、高き奇特に道節等は、復生たり、と勇み立て、後れ
 て見えぬ小文吾を、しばし呼かけ見かへるのみ。こゝに待間もあら芽山、あるじ夫婦が戦没の、迹は煙と立昇る、
 名残も有繋借れて、身は浮雲の草枕、翌は甚麼なる旅をやする、と思ひおもはず後方より、ひらけし路を葉にて、追
 蒐來つる三箇の助友、その隊の軍兵百餘人、手にく鎗を引提て、返せ戻せ。と呼かけたなり。四犬士これを見かへり
 て、小ざかしや巨田が輩、鬮には影武者の奇兵をもて、迷し撃んと謀りたる、智略の程は長透したるに、返すとして
 難き事やある。其處な退をと罵て、跳蒐て撲地と撃つ、四口の刃に佗撃なく、先に進みし雜兵四五名、或は鎗を斫
 折られ、或は腕を撃落されて、逃るを程よく追捨て、路をいそげば懲すまに、又むら／＼と近づくと、追ひつ返しつ
 樹下蔭、不知案内の深山路に、多勢と挑む再度の窮厄、且戦ひ且走る、岨邊歧路嫌ひなく、往方定めぬ四犬士は、別
 別になりけり。さる程に、犬田小文吾梯順は、曩に母屋の餘炎によりて、敵の圍を脱れしとき、ひとり心に思ふや
 う、山風いたく吹暴て、火燄滿山を焼んとす、勢ひ寔に怖るべし。然るをわが預りたる、曳手單節を合鞍に、乗した
 る儘に彼首なる、樹蔭に馬を繋ぎ置しに、今はやかの樹に火の移らば、馬を喪ふのみならず、彼鞍轡にからまへ著た
 る、姉妹も赤いかにして、猛火に必死を觀るべき、幸ひにして彼がへは、火のまだ移らずと觀るに、かの山火を觀る

るとも、敵の爲に擲じたらば、後衛其處にたちかたし。さはあらずや、と此に聞、既に答ていちはやく、燃る小草を
 踏越飛越、辛じてその樹のほとりへ、近づくと、前面を見れば、寄手の雜兵兩三名、はや曳手等を見出して、こ
 は奇貨ぞ。と繋ぎたる、馬の絆を取んとて、前後を其處に争ひけり。さらでも曳手單節等は、多勢としらるゝ敵の物
 音、母屋の猛火に山路の延焼、かくては舅姑も、故主も、亦彼友人も、脱れがたくやははすらん。おなじ巷にとも
 かくも、ならばやとのみ思へども、落ぬ爲にと惣に、幾重かからみ著られし、その麻索の淺ましく、釋ぬうらみはわれ
 のみならず、煙に狂ひ樹を遠る、馬は頻に嘶きて、前脚高く幾遍となく、跳揚ればいとどしく、鞍安からぬ妹姉、只
 瞑眩き胃潰れて、咄嗟々々と叫ぶのみ、禁るよしも軟弱々々と、馬より先に疲勞果て、心地死ぬべう鞍壺に、そが儘
 累り俯す折から、寄手の雜兵兩三名、煙を犯して走り來つ、馬の絆に手を被れば、曳手單節は又さらに、獵場の野
 鷄の箭にいたみ、鷹に寄るゝこゝちして、吐嗟とばかりもる共に、頭を擡る程しもある、小文吾は只飛が如くに、走
 り近づくと大喝一聲、左手に立たる一箇の敵を、ばらりずんと斫せば、残る兩兵は驚きながら、免めく大刀を抜擧し
 て、前後齊一小文吾を、撃んとするを逸速く、閃りと翻す身を沈まして、外せば狂ふ刃と刃、冤は翦て思はずも、馬
 の絆を破と斫る、斷られて馬は同胞を、乗せたるまゝに衝と脱て、走る蹄の音高く、東をさしてぞ放れゆく。こは
 こはいかに、とばかりに、駭き見かへる小文吾も、又この敵の雜兵等も、ほみなけれども今さらに、牽駐るに暇なく、
 厲しく撃あふ三箇の大刀音、小文吾はこゝにもあらぬ、心頻りに苛立まゝに、奮勇はじめに十倍して、又一人を斫倒
 し、なほ踏込て囚めかす、刃の下に残れる敵の、首は忽地前に落て、軀は仰反するを、見かへりもせず放れし馬の、
 迹を慕ふて追ふ程に、荒芽山の麓路には、近邨の野武士六七名、鬮に白井の寄手等が、鬮の聲を聞きより、落人を剝
 略んとて、東の巷に聚合てをり。浩處に放れし馬の、兩箇の女子を乗したる儘に、こなたをさして馳來るを、遙に
 うち見て、竊に歡び、衆皆前路に立塞りて、鈎索竹槍桿棒などを、うち合し柵めて、捕駐んとしたりしに、馬は頻り



(つ撃を馬放等士武野てしと貨奇を人落)

に哮狂ひて、人をも藩埒をも衝破る、勢ひ尋常ならざれば、準備忽地相違して、近づくものは露伴され、或は隄られ蹂躪られて、矢庭に死するもの一兩人、半死半生なるものも、三四人に及びしかば、なほその恙なかりしは、纔に二人のみなりけり。されども不敵の奴原なれば、一人、髻に著たりし、小筒の鳥銃取あげて、火蓋を断て撞と放せば、はや三四十間隔りたる、馬は肛門のあたりより、強梁をかけて打抜れ、兩箇の主を乗したる儘に、四足を折てぞ伏たりける。さもこそあらめ、彼女子等を、逃しなせそ。と鳥銃投捨、これ彼槍を引提て、走りゆかんとする折から、怪むべし兩團の陰火、何處とはなく閃き來て、伏たる馬の頭の邊に、墜留ると見る程に、馬は勃興と起あがりて、體戰しつゝ馳ること、はじめの駛にもいやまして、あれよくといふ隙に、往方もしらずなりにけり。有爾程に小文吾は、稍その邊に追蒐來つ、遙に馬の撃れし形勢、陰火の奇特も目撃見つゝ、只管驚嘆しつゝ、馬の往方を知らんとおもへば、喘ぎて走る足音に、呆れて立たる兩箇の野武士は、齊一後方を見かへりて、

おもふに彼奴も落人也。馬共併に追襲せし。女代りに物せずや。と聾く聞も暴奪略、怒地路を要りて、槍を搦て突撃るを、こゝろ得たり。と小文吾は、左手に槍頭を握り留、引抜く刀に右手なる槍の、眞中丁と研落す、本事に駭く野武士等は、槍役捨て左右より、利腕を捕て無手と組む。小文吾騒ぐ氣色もなく、はやく左に取なほす、刃を銜て立たる儘に、一推接する角舁の秘訣、髻を拵て揮解き、徒倚く項を雙の手に、掻擾み又引よせて、頭と頭を兩三遍、撲合さすれば堪難て、苦と叫ぶ聲も共に、足空さまに差揚て、地上へ撞と狗兒放下、譬に似たる風下へ、籠落しの野武士等は、ひとつ處に累り伏て、石に鼻づら、株に額、うつゝか夢敷、とばかりに、苦痛に堪ず盡きて、起んとするを小文吾が、疊蒐つゝ、擊大刀風に、一葉の露の玉櫛笥、ふたりが身とて四となる。いつしか積る兇惡の、むくひ來にけん天の網。七重やま風吹からに、こゝに天引く遠煙百千の國も萬みな、火宅なりきと悟りたる、おくこそ知らぬ無量劫、數盡されぬ煩惱の、俺にも狂ふ意馬心猿に、髻の鞆を取留て、曳手單節が存亡も、往方も定めなきまでに、かさねかさねし憂事に、身の疲勞すら忘草、路の秋草踏わきて、索ぞくらす壯士が、心の誠比なき。犬としいへば八の數、十日に近きふみ月の、筆に載てん是仁惟義、忠信禮智孝悌を、磨あげたる玉にしあれば、いづれ疎齒はなかりけり。

第五十二回

高屋噓に悌順野緒を搏にす
朝谷村に船虫古管を贈る

却説大田小文吾悌順は、途に野武士等を斫棄しより、只管馬の迹を逐ふて、東を望て走る程に、その日も佩なく暮にけり。昨兎通宵今鳥終日、或は數百の大敵と鋼を削り、さらに又幾里の、道を走りて索る人に、遭ぬ憾に心さへ、身もいといたう疲勞たり。こゝは何處と里人に、言問ふだにも葉ばかりの、多青の株に尻うちかけて、獨情おもふやう、今朝しも荒芽山の鬪戦に、兵火彼山の土毛を焦して、敵の圍の解し時、豫て契りしよしあれば、犬山犬塚等の人

人は 山うち越て西の方、信濃路へこそ走りけめ。然るを放れし馬ゆゑに、われは東へ道の程、かへり來つるも八九里敷、はや十里にも及べるならん。かくまで勞して功もなく、友に別れて又さらに、わが預りたる曳手單節を、その甲斐もなく喪ふては、よしやこの後道節等に、環あふ日の退からずとも、われ又何の面目ありて、信あり義ある人とせられん。嗚呼是非もなし何とせん、いかにせまし、と手を又て、瞻仰る天は夕月夜、曇らぬ影に胸狭く、霽ぬは心の迷ひ也。愚なりき、と身を賣つ、思ひかへしつ尋念をするに、轡に彼馬の馳たるとき、野武士の鳥銃にて撃れしに、いとも怪しき光物、そのほとりへ隕しより、馬は忽地身を起して、復奔ること箭の如く、駿足はじめに十倍して、往方も知らずなりし事、件の親子夫婦の義烈を、神明佛陀の憐みて、祐給ふにあらんずらん。如此有んにはけふ遭ずとも、恙あらじと思へども、然とてたづねて止べきにあらず。こゝらに露宿したらんには、還て人に怪しめられん。一十夜を曉しけり。されば又小文吾は、次の日の旦未明に、旅宿を出て、前路々々の、或は旅客里人等に、馬の往方を外めかしく、これ彼となく諮るに、絶て便宜を得ざりしかば、いよ望を失ひて、且疑ひ且詰み、只管涉獵ありくと、はや三日四日になりしかば、來るとも知らず武藏なる、淺草寺に程近き、高屋阿佐谷の村間なる、田圃のほとりを過るとき、秋の日なれば短くて、下晡になりけり。當下小文吾は、笠を斜に推擧て、ひとり四下を眺るに、新堀、湯島、神田の衆山、高く西北に連りて、樹木の葉はまだ染ねども、夕日に彩る、遠景親く、宮戸、隅田、千住の長流、南北に横はりて、網引の聲は聞えねども、且暮の業、近村寂たり。向上れば、幾群の秋鳥、雲に入て還らず、直下せば、千頃の稻田、花を合て戦ぐのみ。露は道之に玉を磨き、菊は藪蔭に金を敷く。人音に駭き飛ぶ虫は、星を見て鳴んと欲し、案山子に狎てかよふ鹿は、圃を暴して餓ざるべし。見るに就き思ふによりて、皆是旅泊駒勝の、蝶ならずといふものなし。あの河ひとつ打渡れば、はや下總國にして、わが舊里へ遠からず。忘れも得せぬ前月廿四日

の曉がたに、犬塚等を過るとて、市井より滯出せしは、一兩日の行なり、と思ひしものをおもひきや、犬塚が嶺原より、只狹厄のみ黄縁で、けふまで還らずならんとは、わが父もわが姑も、大聖も、蟹崎氏も、かゝるべしとはしらずして、さぞな待不樂給ひけめ。大八ひとりに慰かねて、益なき老の諄言より、房八が縁由、人にしられて又さらに、よからぬことにて來はせずや。親に物を思はするは、寔にこよなき不孝也。親戚交遊これ彼と、約束の違へるは、信なきものに似たり。ゆくりなくこゝまで來つるに、翌は夙めて行徳へ、還りて情由を報べき敷。いな／＼それも影護し。曳手單節が往方のしれぬを、そが儘にして舊里へ、立かへりしか、と犬山などに、思はれやせん、思ふべし。なほ兩三日新婦等を、索ても得あはずは、中山道をうち登りて、犬山大塚四箇の友を、索て環會んに、絆如此如此と報て後、親の安否を問ふべき敷。いな／＼それも四箇の友に、再會の日は測がたし。わが進退谷りぬ。死けん馬の再生て、奔りし奇特は有ながら、そを見きといふ人にだも、遭はて佗なる日を送る、わがうへばかり守らせ給ふ、神も佛もなき世敷、と思ひつゞけて、夏虫の、ひとりしゆけば宿に歸る、鳥越山のこなたなる、一條路の嶺に來にけり。この時入相の鐘適に響て、杜のかたより昏みたり。こゝより人煙は近かるに、遮て宿りを求んとて、足の運びをいそがす程に、と見れば前面の藁叢陰より、最大なる野猪の、手負たりとおぼしきが、忽然と駈出て、こなたに建し路傍の、石の地藏を衝倒し、木ともいはず草ともいはず、當るに任して壁折く、勢ひ虎彪に敵すべく、驀直にぞ走り來る。小文吾吐嗟と思へども、左右はすべて深田也、避避るゝに便なれば、手ばやく笠を擲投捨て、直立逆ふ程しもあらせず、野猪は哮りて牙を怒らし、矢庭に掛んとする處を、小文吾はやく身を翻して、野猪の膽破と颯る。蹴られて怯む氣色もなく、彌狂ひ倍哮りて、稍強向んとする程に、小文吾閃りと身を跳らして、背の上にあち跨り、刀を抜くに暇なれば、左に野猪の耳を颯て、右の拳を鐵器の如く、握り固めて眉間のあたりを、續ざまに搏しかば、これぞ聊弱る處を、なほ一身のちからを究めて、搏こと十拳に及びしとき、さしも老たる手負野猪の、

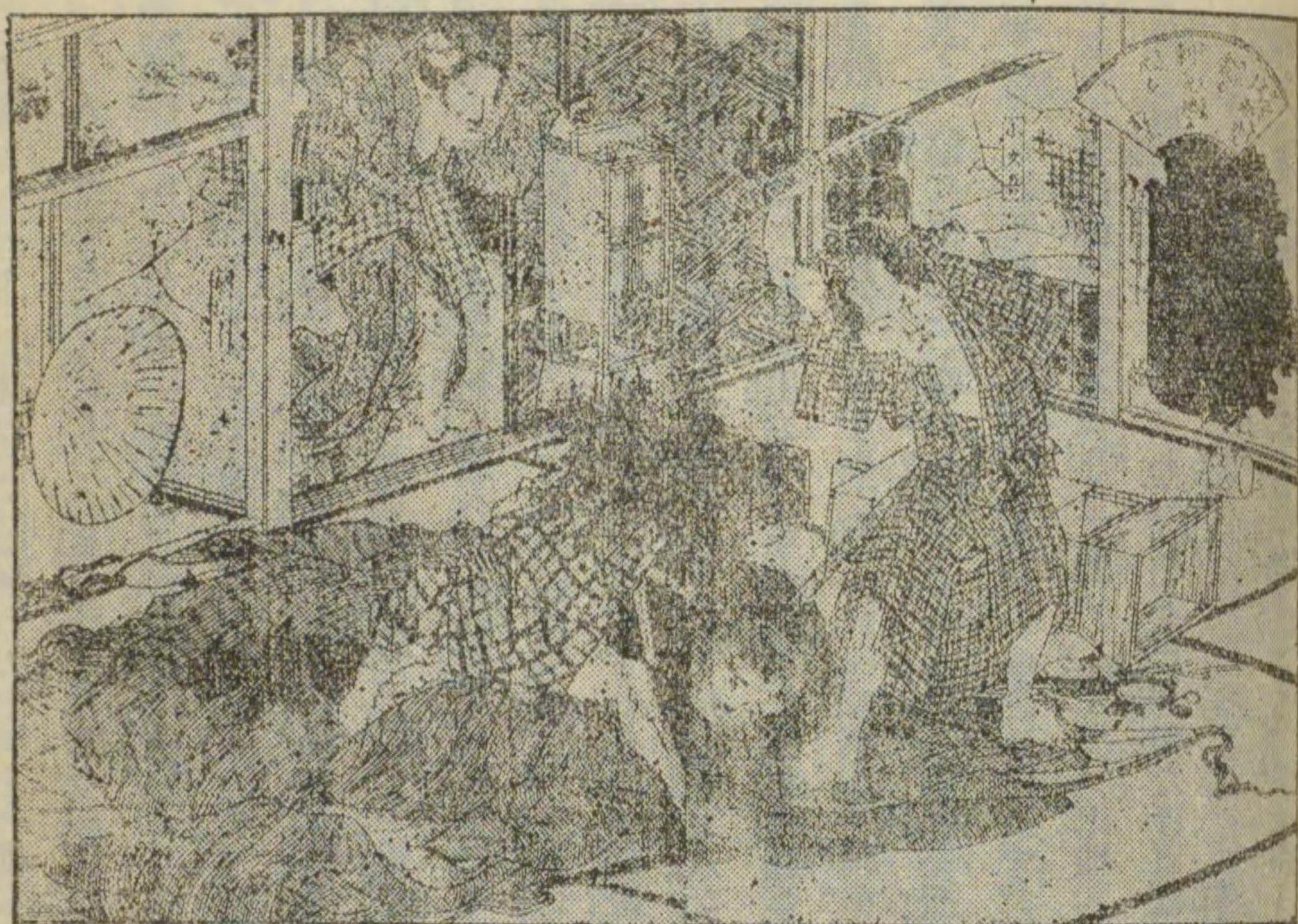
腦骨碎け、目子飛出、血嘔を吐ぞ死でける。當下小文吾は、徐々に傍に下立て、死たる野猪をよく見るに、全身す
 べて古木のごとく、大きなこと轆に等し。これらが年を経るときは、をり／＼松脂を身に塗らして、矢石を防ぐ爲
 にす、と豫て聞しを、見るははじめて、暴虎馮河の戒を、忘れたるにあらねども、脱るゝ路なき禍を、免れしは
 現けふばかり、力が益に立たるのみ。思へば危き事なりき。とひとりごちつゝ塵うち拂ひ、笠とりあげて今宵寝る、
 宿りを求めていそぐ程に、かの處より一ト町ばかり、ゆくての路の眞中に、仰反れし男あり。稍光を増す月影に、立
 よりて熟視れば、齡は四十餘なるべし。身には仁田山木綿の、裳短なる單衣を被て、足には木皮織の脚絆を、紐高
 に結著、髻には紅銅造の、二尺四五寸許なる獵刀を跨へ、手には長刃の短鎗を握拿たるに、その鎗はまだ放さねど
 も、氣息は既になきが如し。當下小文吾思ふやう、こは近村の獵戸ならずは、百姓の悍きものにて、彼野猪を刺んと
 せしに、刺損じて度を失ひ、立地に掛られて、息絶たるにぞあらんずらん。幸ひにして手を負ぬに、よくせば生るこ
 ともあるべし。われは、角觥を好みしかば、素より撲傷の奇薬をもてり。撲れて氣絶せしものに、わきて即功あるを
 もて、一ト日たりとも身をはなさず。舊里を出る日も、それを懐にしたりしかば、失はずは今なほあらん。用ひて見ば
 や。と遽しく、行袱を解披きて、あちこちと索るに、件の薬はなかりけり。捻服紗の内にかとて、又肌着の財布
 をとらう出て、端引揚て揮ひ出すに、嚮に蚤崎十一郎が、里見殿の賤祿とて、強て贈りし一包、三十兩の沙金のみ、先
 滾々と出しかば、これをば取て膏笠を、仰ぎまにして入措きつ、ふたゝび財布をうち揮ふに、果して件の奇薬も出け
 り。そをよき程に撮取りて、踏仆たる彼男の口の中に入れんとするに、齒をいたく咬締て、開くべうもあらざれば、
 腋挿の刀に附たる、笄を抜とりて、やうやく口を推開て、薬を遺りなく哺しつ、懐番を推圓めて、臂近なる田の
 水に、浸して口中に絞り入れ、薬を胃中に推下して、呼んとするにその名を知らねば、只喃喃と呼活るに、且して
 件の男は、舌と嚙きて眼を睨ひらき、鎗とり直し身を起して、忽地走り去らんとするを、小文吾急に起き留めて、や

よ俟給へ、いふことあり。われは旅ゆくものなるが、和歸の瘴作たるを、見過すに得忍ねば、當該々々に介指せしに、
 難生せられて本意に稱へり。おもふに和殿は老たる野猪に、掛られたるにあらざるや。われも亦彼方にて、如何々々
 の野猪にあひぬ。然れども怪我の功名にて、辛して擊留たり。疑しくは共侶に、誘ゆきて見給へかし。といはれて
 驚く件の男は、鎗投捨て跪坐き、原來おん身は再生の、恩人にてをせし也。既に賢察せらるゝ如く、某も先の程、
 野猪に一ト鎗著たれども、闕所をや外けん、忽地鎗を振解れ、勢ひ當るべうもあらねば、逃んとせしに、それすら慥は
 ず、果敢なく牙に掛られて、空さまに投らるゝ、と思ひし後は東西をも覺ず。かくて今、やうやくわれに返りしよ
 り、又もや野猪に掛られんかとて、見給ふごとく狼狽しは、嗚呼とやいはん今更に、面目もなき趣舎也。刺留給ひし
 彼野猪は、何處にか候。と問れて小文吾うち頷き、遠くもあらず誘給へ。といひつゝ後方を見かへりて、心づきけん
 遽しく、沙金を取て肌着の、財布に藏めて腹に巻締、又一ト包の行袱を、やをら肩にうち被て、先に立つゝゆく程
 に、西へ距ること一ト町許、只一ト條なる田中の路に、かの野猪は斃れてあり。件の男はこれを見て、ます／＼駭き且歡
 びて、遽しく小文吾が、ほとりについで額をつき、この野猪のかう死したるは、わが身ひとつの幸ひならず、阿
 佐谷高屋の村人が、なべてこよなき洪福也。抑この野猪は、何處より移り來にけん、鳥越山のほとりより、夜とな
 く日となくいで來りて、芋を掘り圃を暴す、損毛大かたならざれば、莊客們商量して、獵夫を備ひなどしつ、擊捕
 せんとしたれども、いと年ふりたる猛獸なれば、箭も鳥銃の丸も徹らず。これにより、村長の沙汰として、件の野猪
 を擊ものあらば、三貫文の辛苦錢を、取せんと徇られたり。某は阿佐谷の民にて、鷓尻の並四郎と呼るゝもの也。
 舊里に在りし比は、山獵を事として、さるすぢには些ばかり、こゝろを得たるよしもあれば、いかでわれ、かの野猪
 を擊留て、村の患を除くべく、辛苦錢をも獲ばやと思ふて、この日ごろ彼此と、猪徑をよく見おきつ、昨夕より寛濟
 せし、その甲斐もなく早りにければ、還ていたく掛られて、命も既に危かりしは、毛を吹き疵を求めしなり。然るを

おん身の助力によりて、命を拾ひしのみならず、三貫文も空しからず。且肉を鬻ぎ皮を售らば、一貫文は又得つべし。かゝれば四貫の徳あること、皆はおん身の賜ものなり。さばれ疑ひ奉るにあらねども、今亦この野猪をよく見るに、はじめ某が刺被たる、鎗傷の外に疵なし。おん身はいかなる術ありて、輒く殺したまひたる。こゝろ得がたく候。と問れて小文吾うち微笑み、否、われとても術はなし。手負野猪の癖なれば、只管狂ふて疲勞れしとき、辛して撃殺せしのみ。それを疑ふことかは。といひ瞞めつゝさりげなく、技も力も推隠すを、とはしらずして並四郎も、呵々とうち笑ひ、人には幸あり不幸あり。狗骨折て鷹が捉る、諺にも似たりけり。そはとまれかくもあれ、はからず御恩を稟たる某、今宵のお宿を仕らん。いまだ知召れずや。大約廣澤淺草よりこなた無戸、金曾木、阿佐谷、高屋、千束の村々は、みな石濱なる千葉殿の、采邑にて候が、敵より間者の用心とて、他郷の人を留るには、いとむづかしき作法あり。況て獨行などは、宿するものも候はず。せめてもの御恩報しに、とく村長に由を告て、某相計たらんには、障りあるべうも候はず。扱もおん身は何國より、何國へ通らせ給ふやらん。名告らせ給へ。と慥慥に、問れて小文吾一議に及ばず、吾儕が故郷は下總にて、犬田小文吾と呼ぶもの也。此度上毛に赴きしかへるさに、從弟女同胞を相伴ひ、合鞍に乘せていそぐ折、その馬放れて往方をしらず。渠等にたづね逢ん爲、迹を追ひつゝ來つれども、いまだ便宜を得ざる也。現獨行といへば、いづれの里でも歡びて、留るものにはあらねども、さまで緊しき法度ある、こゝらとしらねば、日の暮たるに、宿投惱みて難義ならんを、和殿に遭しは他生の縁、しからば一宿を憑みたし。といふに歡ぶ並四郎、そはいと易き事になん。させる管待こそしがたけれ、女中の往方を、近郷にて、問定の爲にとて、いく日逗留し給ふとも、飯のみならば進らすべきに、心つかひなし給ひそ。こゝより直に宿所まで、伴ひ奉んと思へども、いかにせん、今宵この儘この野猪を、うち捨て置ならば、狼にや服せられん。某はこの獲物を、村長許引揚ゆきて、これらの事も、おんみの事も、皆て述よりまかるべし。この際をゆきぬけて、駒懸峠の眼

かたより、東北へ三四町、赴き給へば阿佐谷也。村盡處なる東のかたの、いと大きな櫻樹のほとりに、いとちひさなる幹淨房あるは、恥しながらわが宿也。留守には船虫といふ女房ひとりをり。ゆきて如此々々と告給はゞ、扱むべうはあらねども、倘疑はゞ不便ならんに、これもてゆきて見せ給へ。と辭せわしく説示しつゝ、腰に着たる燈袋を、そが儘とりて遞與すになん。小文吾はその好意の、よろこびを述て立別れ、阿佐谷を望て赴くに、思ひしより路の近くて、聞しに違はず村盡處なる、櫻樹のほとりに幹淨房ありて、裏面より燈火の光幽に洩たり。こゝなるべし、と立ち寄り、折戸を敲きて呼門へば、誰そと應て、脂燭を乗て、出て折戸をひらくもの、これ則別人ならず、並四郎が妻船虫也。小文吾は先わが名を告て、縁頼に尻うち掛、さて並四郎が事、野猪のこと、今宵の宿りを許されし、緯の趣如此々々と、その大かたを告知らして、燈袋を出して見すれば、船虫は聞く事毎に、或は驚き或は歡び、そは思ひがけもなき、御恩にこそ侍るなれ。嚮に聞たる野猪の事、あぶなき所爲ぞと禁めしかども、聽かて命の危かりしを、救ひ給ひし人さまならば、わらはが爲にも城隍神也。先はやこなたへ登らせ給へ。と應て聽て忙しく、盥に湯を汲もて來つゝ、草鞋を解して、足を濯がせ、座席に行燈引提來て、小文吾を上座に推すゝめ、今朝はいづれの里を起て、いくばく里來給ひたる。俗にいふ盆の後前とて、残る暑の堪がたきに、さこそは疲勞給ひけめ。行水の湯を沸して侍り。あはせものは侍らねども、今夕饌をまゐらせてん。木枕もそこにあり、足踏伸して休らひ給へ。こゝ許は蚊の名どころにて、刺れし迹の瘡にもなるに、おん管待は紋遣火のみ。些霽悒とも怵給へ。といひつゝいと大きな、素麿の火盆を竹縁の、ほとりに措て團扇もて、あふぎ立つゝ魚菜折薫て、又邊しく身を起し、扱小文吾に浴みさせ、はや夕饌を差たる、管待態の精悍しく、團扇を取て小文吾を、うち扇ぎつゝ、給仕をしつゝ、果は中酒の盃に、鯽の烹醃取添て、器物さへ鄙ならぬ、鄙めづらしき宿ながら、女あるじに小文吾は、言葉すくなく款待の、よろこびを述るのみ。只つらくと四下を見るに、こゝの一ト間は、外に物なく、席薦は六枚ばかり布たる、上座には、唐紙張

の袋戸の小棚あり。紫竹の押縁したる葎實天井は、不破の關屋の廂ならで、月の漏るべき住ひにはあらぬを、いかなれば、出居のかたの壁、三尺ばかりいたく落頼れて、骨もなくなりたる儘に、あなたより戸を推被て塞きたり。この次の間は庖漏にて、別に夜物奔などする、納戸やうの處あり。其處に夫婦は睡るなるべし。又この女房船虫は、年歳も三十のうへを、六ツセツにやなりぬべからん、物のいひざま進 止まで、よろづ男めきたるが、ざりとて容貌の醜きにもあらず。頭髪は、堅さまに結執ね、櫛は横さまに挿光らしたる、をりく、釵を拔出して、額髪を掻く癖あり。男帯のふりたるを、腋下に結垂ても、禪のみ綺羅やかなるに、單衣の袖も身幅も、いと廣く長かるは、良人に貸て被せんと爲敷、迭代に被る敷なるべし。小文吾はこれらによりて、腹裏におもふやう、こゝのあるじが爲體、百姓ならず、商人ならず。抑亦何をもち、生活にするやらん。もし俠客の類ならずは、袁彦道をも欺くといふ、博徒の煉たるものなるべき敷。そはとまれかくもあれ、あるじの留守なる人妻と、うち對ひをるばかり、心苦しきものはなし。えうなき宿を取りぬるかな、と竊に困じて、盃は、受たるのみにて飲ざりしを、船虫が云々と、浮上手にて許さねば、已ことを得ず一度過しつ、しばし推辭てふたゝび受す。とかくする程に更闌て、夜ははや亥の比になりしかば、船虫もさのみはとて、銚子も膳もと納めつゝ、且して納戸より、嚮携ていて來つ。哺お客、並四郎はまだ還らねど、今聞えしは二更の鐘也。いざおん臥簾を備はべらん。些何方へも寄らせ給へ。といふを小文吾聞あへず。いな櫛はその儘置給へ。あるじのかへり給はぬに、臥房に入るは何とやら、影護き所あり。なほ且く俟んのみ。と推辭ば船虫微笑みて、あな物がたき刀禰にぞある。並四郎はかの野猪の、賞錢など得たらんには、友達さへにうち聚合て、酒飲曉すも測がたし。然らてもをりく夜遊に、出てかへらぬことも侍るに、俟せ給ふは要なき所行也。いざとくとくといそがして、近江木綿のみのぶとん、寐物語に敵手なき、小横披きつ、木枕は、塵生が夢を一炊の、あはれふりたる櫛の色、色紙當たる音圖の、十府ならなくに、六布七布、足らぬ釣緒に、下袴の、新紐解て結び垂、雨戸縋



(ふなしうを元に地立て刺を袈空賊破)

つ、障子を懸て、懸心流らす行燈は、櫛を櫛の枕上、ゆたかに休らひ給ひね。と告辭して、出居なる、紙戸をやをら立籠て、庖漏のかたに退出けり。さる程に小文吾は、行包をも、二腰の、刀も枕に引著て、嚮て櫛には入りしかど、蚤に責られ、蚊に叫れて、睡らんとするにいもねられず。船虫もはや納戸に入りて、熟睡やしけん音もせず。莎庭に聚く虫の聲、障子に響く竊虫の、生憎に耳につくのみ。親の事、友の事、曳手單節が事をしも、いかにいかにと思ひつゞけて、曉るを俟ば小夜深て、稍膚寒くなるまゝに、思はず小横を引被て、寐るともしらず目睡けん、智うち騒ぐに驚き覺れば、怪むべし、行燈の灯は滅て、定かには見えねども、出居のかたなる壁の類に、推當たる戸は失て、そこらに人のをるが如し。原來盜賊ござんなれ、と思へどもなほ些も騒かず、うまく睡りしやうにして、横の衣衿より窺ふに、果して彼首に人ありて、いまだ裡面には入らざりけり。當時小文吾思ふやう、今宵はあるじのをらぬを幸に、獨行と悔りて、殺して物を略らんとする敷。伎倆の程はしられたり。要こそあれ、

と深念をしつゝ、先枕方なる腋挿の刀をやをら掻取て、竊に櫛を出るとき、横の下には行包を、引入れて、故の如く、人の臥たるやうにしつゝ、息を籠し、しづかに跂ふて、袋戸棚のほとりなる、壁に身を倚せ、伏隠れて、猶も動靜を窺ひけり。さる程に偷兒は、件の壁の破隙より、入らんとては又退き、退きては又進む。かう數回狐疑しつゝ、やうやくに進み入りて、又張ふこと半响ばかり、疲勞て實に熟睡したり、とまさかと思ひ決めけん、忽ち直躬と立ち上り速く、晃りと抜たる刃の雷母、櫛の釣緒を斷落しつゝ、登しかゝりし小横の上より、彼行包をぐさりと刺す、刃の光を目當なる、小文吾透さず、跳、蒐て、抜く手鋭く丁と研る、刃の下に偷兒の、首は破と落たりける。當時小文吾聲高やかに、やよ内方起出給へ。われ偷兒を擊留たり。とく脂燭して見せずや。と呼立られて船中は、應口隠る聲かすかにて、狼狽たる歟、出ても來ねば、小文吾頻りに焦燥て、内かた恐れ感ひ給ふな。賊をば既に擊留たり。やよ燈火を、とくく。としばく呼れてやうやくに、行燈引提て走り來つ、出居の紙戸推開て、さし出す灯の光に、小文吾は擊落したる、彼偷兒の首を見るに、是則別人ならず、あるじ並四郎なりければ、こはくいかに、とばかりに、呆れてふたゞび辭を出さず、手を抉きてうち目成る、嘆息の外なかりけり。されば又船中は、行燈側にさし置て、只潑然とうち泣しを、やうやく思ひかへしけん。頭を擡て目を拭ひ、喃お客人、犬田ぬしとやらん、わらはが夫で侍れども、怒に感ふて、命の親なる、おん身の寝頭を搔んと計りし、天罰觀面に報ひ來て、還ておん身に擊れしは、よにせめてもの罪滅し、うらめしとはつゆ思ひ侍らず。問ずがたりに似たれども、わらはが家はむかしより、村長で侍りしを、三代前の祖の時、身上いたく衰へて、田地も過半沽却し、村の役義も人に譲りて、水飲になり侍りしかども、なほ農業は棄ざりしに、わらはが親に男兒なければ、この並四郎を婿にしつ。いく程もなく二親は、世になき人となりしより、本性あらはす良人の放蕩、酒と賭とに舊川水なる、田地田圃みな没却て、生活なきにともすれば、死す伎師のこれ微と、わらはが耳に入ること、目にかゝる日も傍りしを、泣つて口説つれば、その折ばかり先業を奪て、

こゝろ得與も難に釘、きかぬ夫のしよとさを、疎ましとのみ思へども、思ふに低せぬ女子の觀しさ。さりとも心の亂らん歟、と墓なく憑む久後の、いつとは知らぬ月と日を、けふまで送り侍りしに、子ふたつの比にやあらん、並四郎は潜やかに、背門のかたよりかへり來て、おん身に夥の沙金あり、と轟き告るに、はじめて知りぬ。されども受たる恩ある人を、殺して金を略んと迄に、思ふ心のあるべしとは、神ならぬ身の得もしらで、心緩して、敷妙の、枕ならべて睡りし間に、竊に臥房を脱出て、事のこゝに及べるならん。面目なや。と今さらに、返らぬことを繰返す、涙の瀧のいとせめて、心細げに泣洗めば、小文吾も亦嗟嘆に堪はず、聞くがごときはそなたの薄命、歎きは殊さら理りなれども、今はいく漏悔むとも甲斐なし。村長に告領主に訴へ、地方の法に任せよ。といふに船虫涙を收めて、そは勿論の事ながら、わらはがひとつの願あり。家の先祖は鎌倉の、北條家のおん時に、名ある武士で侍りしとぞ。その後子孫は零落て、百姓になり侍りしかど、近き世まではこの地方の、村長で侍りしに、血脈にあらぬ招婿の、個の並四郎が故をもて、先祖の名さへ汚されんは、いと朽をしく侍るか。おん身の心ひとつもて、今宵の事を人にしらせず、翌は夙めてこの地方を、立放れて給はらば、外へは洩るゝよしもなし。天明ぬ程に菩提所を、よくこしらへて村中へは、頓死と告て棺を出さん。悪人なれども所天なるものゝ、なき身の後まで悪名を、世に譴するも本意ならず。願ふが如くなるならば、わらはは頭誓を剪捨て、佛に仕てなき親良人の、菩提を弔はゞ早晩に、身の業因も滅ぶべし。これらのよしを聞きて、許し給はゞこよなき善根、いかでか悪く報ふべき。許させ給へ。とかき口説くを、小文吾聞て、頭を傾け、親は子の爲に隠し、子は亦親の爲に隠すも、直きことはおのづから、その中にありと聞く、聖の教はよくも知らねど、先祖の爲に良人の悪事を、世に知らせじと願るゝは、現見あげたる心操、落涙までに感心せり。あれ見給へ。並四郎が亡骸は、なほ行包を刺留をり。妻たるそなたが證人なれば、願ひを聴じともいひがたし。われは素より人を索て、いと忙々しき旅をすなれば、これらの訴にかゝづらひて、日を費んは便なき事也。香華

院だに承引なば、そはともかくも相計ひ給へ。といふに船虫うれしげに、小文吾を伏拜て、かゝる御恩を稟ながら、未明に出てゆき給はば、何の日に報ひをすべき。これも本意なく侍るか。家には先祖相傳の、尺八の侍る也。並四郎が、いく度か售らんといひしを推禁て、家廟の下壇に祀おきぬ、せめてはあれを進らせてん。先齋せ。といひかけて、納戸のかたに赴きつゝ、古金襴の袋に納たる、笛携來て小文吾が、ほとり近くさし寄するを、受とりて紐解ひらき、見れば寔に古物とおほしく、長サは一尺八分ばかり、黒漆に樺巻して、

吹おろすかたは高ねのあらしのみ音づれやすき秋の山里

といふ一首の歌を、高蔭繪にしたる也。小文吾つらくこれを見て、われも亦いとほやくより、尺八を好みしかども、そは虚無僧尺八にて、長サは一尺八寸也。この笛は亦異にして、一尺八分ならんと思ゆれば、必古代の一節切、四五百年の物なるべし。かゝる寶をいかにして、贈らるゝとて受られんや。且旅なれば些の物でも、荷の倍すはいと難義也。是はこの儘收め給へ。と返すを取らず、頭をうち掉り、推辭給ふはさる事ながら、かばかりの物腰に著ても、包の中にし給ふとも、何程のこと歟侍らん。恩に恩義の恩人の、重き情に、輕き一ト品、いつまで藏めおくととも、包と思ふ子もなきに、もしこれをしも受られずは、今さら心安からず。枉てうけ引給ひね。と唧々がましく薦めて已ねば、小文吾終に推辭かねて、しからば再會せん日まで、こはこの儘に預りおかん。といふに船虫歡びて、かくてこそ疑ひの、霽て心もおちみたり。わらはは寺へ走りて來ん。この亡骸をいかにせん。棺を買ふまで片隅へ、寄せてや措ん。と手を掛れば、小文吾も亦身を起して、死骸を打て壁際へ、よせて蒲團をうち被させ、わが行包を引解て、件の笛を袱に、巻こめて又中結を、絡て傍にさしおきけり。そが間に船虫は、裳引揚、遠しく、緩みし帯を結びつゝ、小窓細めに推開て、天を眺て殿と闔、喃お客、星の光の高かるに、曉るには尙程も侍らん。菩提所までは十町に足らず。彼處で時を移すとも、天明鳥の鳴く比には、遅くも遅り侍るべし。船がたは疾く、甲斐より船の多くて、

應て捨る程もぞ侍る。船はありても有がひなく、血に塗れしをいかゞはせん。蚊遣火盆は、彼首にあり。龜朶も侍るに焚つけて、燗し給へ。といひかけて、背門のかたより衝と出て、菩提所へとて走りけり。畢竟船虫がかへり來るまで、又いかなる物語がある。其は次の巻に、解分るを見て知らん。

第五十三回

知上諺て犬田を捕ふ 馬加竊に船虫を奪ふ

船虫は曉かけて、菩提所へ出て出てゆきたる、留守には小文吾ひとりをり、復らぬ悔も今さらに、過去しかたの暇なる、野猪といひ、このあるじといひ、人を替又物を替て、わが身を危くしたる事、今茲はいかなる星さへ祟りて、かさねくし厄難の、かくまで資縁の事やらん、と思へば猶も疑しく、心もとなきよしあれば、こゝにふたゝび尋思をするに、はじめ高屋の暇にて、並四郎を救んとて、撲傷の薬をたづねし折、膚著の財布より、沙金包の先出しを、とり藏るに暇あらで、笠の裡面に容措つ、扱並四郎を呼活しに、わが撃殺せし彼野猪を、見んといはれて共侶に、舊路へ還るに及びて、金を財布に收めしかば、わが懐に物あるを、彼奴には知られしならん。さればこそあれ並四郎が、陽には恩を復すと倡へて、己が宿所に誘引しは、殺して金を奪んとて也。斯思ひ合すれば、彼奴は竊に旅容を、殺して路費を奪略る、年來の強盜にて、今宵はじめてさる悪心の、起りしものにはあるべからず。もししからずはこの家の、造りさまも田舎備ず、さまでふるくは見えざるに、彼首の壁のみ三尺ばかり、顔落しを修復はで、戸をもて塞ぎおくべうもあらず。昔もかくや淺草の、石の枕の故事にも、をさく劣らぬ癖者なりしを、わが思慮の足らずして、誘引れつゝ伎倆の疎に、係られんとせし悪さよ。かの時にもし睡覚すは、毒悪の手に死んのみ。然るを女房船虫は、奥らぬ夫と知りながら、けふまでその身を儲せし事、口と心はうらうらへにて、只己のみ悔を覺え、いひ難き事なり。

量りがたし。彼彼船虫は、業より悪心なきものなりとも、出所正しき説教もなき、この尺入をいかにして、受難むべき事にはあらねど、受ずは必夫の悪事を、人にや告ると疑ふべし。その内心はとまれかくまれ、夫の爲に一點も、われに對ひて怨を述べ、身の薄命をうち歎きて、只管救ひを求るものを、猶それをすら聽ずして、告訴する歟、と今さらに、疑れんは影護し、と思ひにければさりげなく、霎時その意に任したり。彼女房のかへらぬ間に、えうこそあれ、と遽しく、又行包を解披きて、件の笛を袋の儘に、出して四下を見かへりつゝ、衝と身を起して、袋戸の、小棚の裏面に容措つ、ふたゝび四下を見かへるに、縁頬なる道蚊火盆に、握太なる樹の枝の、一尺あまり燃残りしを、これ究竟と取あげて、灰うち拂ひて行袱へ、手ばやく楚と巻籠て、故の如くに包みけり。とかくする程にはや、窓の隙よりしらみ初て、森を放る、鳥の聲に、小文吾は縁頬なる、雨戸を半開線納て、帯縮直しつ、臂近に、笠も脚絆も物とり揃へて、船虫が歸來ぬるを、今歟々々と待程に、且して外面に、近づく人の足音は、それかと思ふに、果して違はず、船虫は遽しく、門の戸開て進み入り、犬田ぬし今かへり侍りぬ。さぞ侍わびしくおもはれけん。菩提所の首尾よきまでに、こしらへ濟したりければ、さらばけふ後つかた、枕廻向の所化を遣らんず。亡骸を疾棺に斂めて、不覺に人にな見られそ。と住持の聖の宣ひにき。といふに小文吾領きて、そはよくこそせられたれ。嚮にもいひしことながら、往方もしらぬ人を索て、いと忙々しき旅をすなるに、後の事だに障りなくは、はやこの儘に立別れん。あるじの横死は自業自得、悼みを述るよしもあらねど、只痛しきはそなたの薄命、一善一悪夫婦となりしも、皆是過世の業報ならん。なき人の爲身の爲に、佛事追薦肝要也。こは香奠とも見給ひね。といひつゝ、嚮より、とり出す粒銀を、紙に捻りて亡骸の、ほとりに措つ。背向になりて、免し給へ。と膝立直し、着る脚絆も遠りあふ、程こそしらね別路に、迹を濁さぬ水色の、三尺手拭髯刀、身ごしらへして行包を、肩に被つゝたち出れば、船虫今は留めあへず、それはあまりに火急なり。朝飯ばかりも進らせん、と思へどもまだ炊をせず、遺憾しや。といひかけて、

門邊に立て目送りけり。却説犬田小文吾は牛嶋のかたへ渡らんとて、河原を望て赴く程に、ゆくこと僅に三町許、尙新しき草鞋なるに、締附の端緒の絶れしかば、そをよく結び合せんとて、ついゐて足を踏伸す、背に窺ふ捕手の影兵等、捕的。と被る聲より速く、地上に礙と蹴倒して、登し蒐て組んとするを、小文吾は臥ながら、手足を齊一働して、搔癢み又反かへせば、或は二間、或は三間、投らるゝあり輾ぶあり。腰を折かれ頭を傷られ、齒を折り血を出しつゝ、各々罵り騒ぐのみ。然れども多人數なりければ、彌がうへにをり果り、手を捕り足を抱縮めて、押へて索をぞ被にける。小文吾は思ひがけなく、かゝる手込の縲綆に、怒れる聲をふり立て、こはそも甚麼なる狼藉ぞや。犯せる罪はなきものを、浪人たりとも兩刀を、腰に帶たる某に、一言半句の作法もなく、索を被る事やある。そのよし聞ん。と教留たる、聲も曳せず一箇の武士、この捕手の頭人なるべし。朱韃の兩刀いかめしく、野裝束して十手を携へ、進み出、立對ひて、小文吾を乞と睨まへ、この癖者既にはや、事のこゝに及べるに、陳すればとて免されんや。汝はむかし當家にて、紛失したる古代の名笛、あらし山といふ尺八を、隠し持り、と密訴のものあり。只この一條のみならず、縁故を原るに、汝は昨夕阿佐谷なる、里人並四郎許宿投りて、夜食腹のよきまゝに、技に誇て件の笛を、竊にとう出て見せしかば、並四郎訝りて、この尺八は千葉殿にて、十六七年むかしより、今も年々御示させて、索ね給ふ笛に似たり。雲時某に貸給へ。とくその筋へもて参りて、いよく相違なきものならば、よき價を得てまゐらせん、といはれて駭く汝が狡悪、いたく酔たる體にもてなし、果は喧嘩に事托せて、只一刀に並四郎が、細頸丁と擊落して、逃去らんとしてけるを、あるじの女房船虫は、特に伶俐きものなれば、怨たる氣色を見せず、言如此々々に汝を賺して、そが儘留めて走らせず、並四郎が亡骸を、竊に寺へ送らん爲に、とく菩提所へ赴ん、といひこしらへて、宿所をたち出、投村長許走り來て、笛様々々と告るにより、われは赤毛檢の爲、影兵等を懸て五七日、當村に出發して、恍惚に此笛の折なれば、眼がたたく起出で、なほ此笛が、訴を、みづから返歸に歸定め、隠し合せて彼女房を、

にかへしてこの處に、汝をまつこと知しかりき。不肖なれども千葉家の御代、堀上御前五郎高直が、今も懸されん天の繩、車に逆ふ嬌嬌の、雲時は臂を振ふとも、被たる紫の帽入るまでに、縛めたれば、既にはや、芋虫にだも劣りたり。首に別るゝ時節ぞ、と思ひ絶て假名實名、その身の出處國郡、笛を盗し當時の形勢、箇様々々と首伏せば、呵責の苦痛を脱れん。とくくまうせ、いはずや。と辭せわしく譴問へども、小文吾騒ぐ氣色なく、こはゆくりなき誣言かな。某は下總なる、行徳の民の子に、犬田小文吾悌順、と呼ぶゝもの也。此度上毛へ赴きたる、かへさに伴侶を失ふて、索ねてこの地に來つるのみ。始をいへば如此々々也。終をいへば箇様々々と、高屋敷の野猪の事、又並四郎に誘引れて、一ト宿を彼處に曉す折、並四郎は小夜深て、路費の金を奪ん爲に還て、首を喪ひし、緯の趣如此々々と、おちなく告るに次第亂れず。その折女房船虫が、いひつるよしは箇様々々と、贈りし笛の事までも、述る辭に委みなく、説訖らんとする程に、われから枉る榛の樹の、蔭より出る船虫は、遽しく語路五郎が、前面にいつゐて涙ぐみ、刀禰達必あの兪兒が、辯舌にな迷されて、驚を鴉と謬り給ひそ。うたてやいへばいはるゝとて歎、現おそろしき口ばかり、よに朝榜なるものはなし。論より證據に何かはましたる。憚ながらその行包を、披きて笛を、嚮さば、いづれは實事歟虚言歟。それが證據で侍らずや。と聲戦して怨ずれば、語路五郎領きて、その怨みはさることながら、汝にいへるゝまでもなし。やよ影兵達、その癖物の贓物を、とくくこゝへ。と取よして、手づから披く行包の、内より出るは笛ならで、一尺あまりの籬灰、その他は疊みし雨衣の、外には物もなかりけり。これはいかに、とばかりに、迷ひは解ぬ語路五郎より、船虫は立て見つ、又居て見てもそこらには、有とし見えぬ尺八に、こころ忽地滅る如く、且驚き且呆れて、面を鐵めつ頭を掻きつ、臂くるしさを今さらに、人には告るよしもなく、しらで黄蘗を舐りたる、啞子もかくやと思ふのみ、なほ疑ひは釋さりける。當下犬田小文吾は、左右を借と見かへりて、各位何と見給ひたる。鶴にもよしを報たる如く、その夜さり船虫が、言葉巧みに彼笛を、先祖相傳のもの也とて、某に贈りたる、

事の虚實も心の邪正も、いまだ知るよしなかりしかども、いと穢れたる人妻の、その手より今何をか受くべき。仍な
しとは思ひながら、しばしば推辭に許さねば、姑くその意に任しつゝ、爾後渠は菩提所へとて、出てゆきたる留守の
程、件の笛を臂近なる、板厨の内に遺し置きたり。されども笛を包て見せたる、行祇の形初に似ざれば、蚊遣火
盆に燃残りたる、枯木の枝を巻籠つゝ、そが儘肩にうち掛て、別れて彼處を立出しは、欺くに似たれども、濁りに染
ぬ心の潔白。こゝに至て正に知る、彼尺八は船虫等が、先祖の遺愛にあらずして、並四郎が竊みしを、領主の穿鑿嚴
なれば、年來ふかく祕おきけん。それを吾儕に贈り與へて、笛の賊とし訴て、無實の罪に陥れ、夫の怨を復さん、
とたくみし賊婦の邪智奸計、おそるべし、嗚呼懼るべし。この外にも亦證據あり。その行祇なる太刀迹は、その夜
さり並四郎が某なりと思ひたがへて、小横の上より刺徹したる、雨衣さへに破れたり。かくても惑ひのまだ曉すは、
船虫を留めおきて、兩三名の夥兵達を、渠が宿所へ走らし給へ。錦の囊に納たる儘に、笛は板厨の裡面にあらん。又
並四郎が刺徹したる、大刀迹は蒲團を見ても、席薦を見ても定かにて、紛れあるべうも候はず。今さら躊躇ふことか
は。といはれて知上語路五郎は、慚愧に勝す夥兵に下知して、且船虫をうち成らせ、遙後方に侍りたる、村長を案内に
立て、さらに又兩三名の、夥兵等をいそがしつゝ、とく並四郎が宿所に到て、屋捜せよとぞ下知しける。且くして
夥兵等は、村長共侶かへり來つ、跪坐きて報るやう、某等並四郎が、宿所を展檢してけるに、笛は果して編室なる、
袋戸棚の裏面にあり。又並四郎が亡骸は、如此々をなり。この餘蒲團と席薦の大刀迹、人の出入せん爲に敷、吹落し
たる彼壁の、爲體に至るまで、すべてこの犬田とやらんが、口狀と吻合せり。先はやこれを御覽せよ。といひつゝ一
人さし寄て、笛を運與せば、語路五郎は、囊の紐を解かけて、手ばやく出して本末を、と見かう見つゝ大に駭き、
この操巻といひ歌といひ、これは昔年故ありて、紛失したる當家の重寶、嵐山の一節切に疑ひなし。原來件の並四郎は、
小將を敵で、兎曾敵罵したりける。船虫は小文吾に、板厨のうらを隠れたる、こゝに至て一言半句も、言ひ誤るとし
のなれば、怒れる眼に朱を沃ぐ、兎相惡鬼に異ならず。帯の間に隠したる、準備の魚切庖丁を、逆手に拿て閃めか
し、良人の警敵。と叫びも果す、跳り出走り寛て、縛められたる小文吾を、撃んとするを夥兵們、驚駭して立塞り、
こは狼藉也不敵也。鎖れやツ。と制すれども、耳にもかけず突退る、女流に似げなき暴暴早剽、進むに前なき勢ひ
と、且その刃に辟易して、左右なく搦め得ざりける。透を得たり、と船虫は、小文吾目かけて突懸る、刃を外す身の
關し、捕壓へんにも兩の手は、背にかゝる縛の、索も心も紊れぬ大勇、避る刃尖あちこちと、再三たび疲勞して、
足を蜚して丁と踉る、角觥に熟たる力士の突衝に、船虫は霎時も堪はず、弱腰撲れて横ざまに、撞と轉ぶを起しも立
ず、片足に楚と踏すえたり。これにぞ弱る船虫は、虫ばかりなる息垂絶に、血の氣は失て全身も、眼も白くなるまで
に、苦痛間なき程しもあらせず、夥兵等は面なげに、兪うち聚ひ立代りて、重索被る船虫を、引起してぞ推居ける。
當下知上語路五郎は、小文吾が縛の、索を手づから解祛て、傍に請じて辭を改め、潮には玉石いまだ分れず、片言
以獄を、折めんとせし疎忽の一條、今さら謝するにあまりあり。就中驚きおもふ、御邊兩手を括られながら、猛
惡の船虫を、拉ぎ給ひたる、武藝といひ、膂力といひ、當今得がたき勇士にこそ。並四郎等が積惡發覺れ、喪たる
笛の手に入る事も、みな是御邊の貺ものなれば、宜く吹嘘いたすべし。御邊官途の情願ありて、武者修行などし給
はゞ、今より當所に杖を駐めて、わが主君千葉殿に、仕へ給へ。と叮嚀に、いはれて小文吾うち微笑み、その罪にあ
らずして、辱めを受るといへども、犯人立地にあらはれて、疑を解れし事、歡ひこれにますものなし。浮浪人て
は候へども、然とて仕官は願しからず。此度の旅にゆくりなく、同行等を失ふて、索遣まく欲するのみ、所要果なば
この處より、とく放遣り給へかし。と推辭を聽かず頭をうち掉り、いかてかは今放遣るべき。仕官の事はとまれかく
まれ、旅客なりとも領主に功あり。然るを聞えもあげずして、立別れなば某は、後日の咎めを脱れがたし。御邊が



(ぐ拙歌を虫船若文小てれらせ縛束を手兩)

ゆくと留るとは、姑くこゝに議すべからず。といひつゝ、
夥兵が牽居たる、船虫を佐と見て、やをれ牡盜家を
抱きて臭きを忘れし、汝は非義の怨をもて、犬田めしを
撃んとせしとき、夥兵等が怒に、女流と思ひ悔りて不
覺の働きたれども、わが身みづから逆へ撃ば、搦捕
ることいと易し。なれども特に大切なる、笛を損ふこと
もや、とそこらに遠慮せし程に、小文吾どのを勞したり。
かくても挑む敷、陳ずる敷。身より出たる鎗に、繰れ
んは現天罰ぞ、とみづから思ひ諦めて、あらし山の尺八
を、並四郎が竊たる、事の顛末同類まで、首伏せずや。
と責問へば、船虫は低俯たる、頭を擡て冷笑ひ、あない
かめしき問状に、勢ひをもて威せばとて、なきことをい
ふ吾儕に待らず。同類の名を聞たくは、そをうち出すに
難くもあらねど、人の痛みになることあらん、と思ふて
いはぬが還て情。絆のこゝろを得知らずは、御家老さま
に問給へ。氣疎き人の鈍ましや。といはせもあへず語路
五郎は、眼を睜り肘を張り、怒れる聲を轟して、塵外の
斷髮、太鼓不驚、怒吹響まで顛末まで、断髮をば

をいふ。小鳥獵の篇にとて、今朝しも御館を出させ給ひて、こゝろを逍遙し給へば、はやおん間も遠からず。そのお
んこゝろ得あるべくもや。と報るに驚く語路五郎は、夥兵に下知して船虫を、阿佐谷の村長許牽もてゆかしめ、又犬
田小文吾をも、おなじ宿所に伴ふて、酒食を羞めて款待せよ。と阿佐谷高屋の村長等に、言葉せわしく分付て、兪共
侶に追立遣し、その身は道次についで、主君自胤の過り給ふを、遙にうち見て待程に、千葉介自胤は、鳥網吹箭
鵜竿などを、近臣等に持しつゝ、四五十名の従者を、後に従へ先に立して、こなたへあゆみ近づき給ふに、眼代畑
上語路五郎が、道次に頼つきるたるを、うち見て訝り立留り、近臣をもて故もやある、と問せ給ふに語路五郎は、お
そるおそる小膝を進めて、並四郎船虫等が、悪事の顛末を始として、旅人犬田小文吾が、智勇の働き如此々々、とはから
ずも手に入たる、あらし山の笛の事、すべて遺なく告まうしつゝ、件の笛を懐より、とう出て返しまらすれば、
自胤は聞く事毎に、駭き嘆じ且歡て、手づから笛を囊より、出してうち見て、うち戴き、われ弱冠の比謬て、
小篠落葉の兩刀と、この笛をさへ失ひしより、年々に徇知さして、穿鑿懈りなければにや、盜賊やうやく顯れて、復
この笛を見つる事、歡び何事かこれにますべき。彼船虫とかいふ賊婦を、緊しく鞫問したらんには、等しく失たる兩
刀の、ふたゝび出来る事もあるべし。さばれ件の小篠落葉は、先君相傳の刀にあらず、只假染の祕藏のみ。笛は當家
の重寶なれば、これ崑山の片玉に勝れり。しかるをその盜賊の、わが知る村に年來在りしを、汝も亦村長等も、けふま
で絶て知らざりしは、怠慢の罪ありといへども、此度の功もて償ひ得せん。さるにても、彼犬田小文吾とやらんは、
多く得がたき智勇の武士也。そのもの浪人ならんには、左も右も説勸めて、當家の股肱となす事あらば、是汝達が忠
なるべし。けふ獵くらす小鳥より、その大鳥こそ獲まほしけれ。とは思へどもこれらのよしを、馬加大記に報知して、
渠より聞えあげさせよ。わが歸城せん比及まで、犬田を厚く管待して、將て參るこそよかんめれ。よくせよかし。と

町噺に、こゝろ得さして床几をはなち、衝と立とき近臣に、笛を持して眞菅成、篋輪のかたへ通り給へば、語路五郎は思はずも、背に汗を流すまでに、いたく恐れ且恥て、目送る事半响ばかり、やうやくに身を起して、膝の塵埃を拂ひつゝ、村長許赴きて、事熟たる夥兵兩名を、石濱の城に還して、長臣馬加常武に、事の趣を報知らせ、その使のかへり来るまで、みづから盃を勸て、小文吾を款待す程に、秋の日既にかたむきて、未のあゆみ過にけり。浩處に、石濱へ遣したる、兩箇の夥兵かへり来て、某等、嚮に馬加殿の宿所にまゐりて、口狀を演しかば、且くして執繼の若黨をもておん答あり。旅人犬田小文吾をば、語路五郎伴ふて、城中へ將て還るべし。又賊婦船虫をば、なほ村長等に預け置て、翌こそ獄舎に繋ぐべけれ。いかにとならば、各々かへり參らん比は、はや黄昏になるべきに、さる癖者は路次の程、心もとなく思へば也。この意を得られ候へ、と傳られて候が。といふに語路五郎領きて、かたの如く相計ひつゝ、先村長にこゝろ得さして、莊客們を呼集合、汝等は終夜、船虫を緊しく成りて、洩て下知のあらん時、とく城中へ率もて來よ。といと殿に下知を傳へて、扱小文吾に如此々々と、事の趣を告しらし、將てかへらんとていそがすに、小文吾は濡衣の、乾きし甲斐もなまじいに、出水の河に留らるゝ、心持はすれど今さらに、勢ひ推辭むべくもあらねば、心苛だつ瑣細粟の、しぶぶながら承引けり。かくて如上語路五郎は、小文吾を俱し、夥兵等を將て、はや石濱へ立還れば、村長は莊客等と、圍坐をしつゝ船虫を、縛めたる儘うち成るに、その日も暮て甲夜の程、如上殿の下知狀とて、下部使のもて來ぬるを、村長やがて披き見るに、今宵罪人船虫を、將て參るべし。と書れたり。あなこゝろも得ぬ事かな。嚮には夜分の用心とて、船虫を預け措れ、今亦俄頃を夜を犯して、召さるゝはいかにぞや。と吹きながら下知狀を、懐に刺入れて、言承をして使をかへしつ。扱莊客們によしを告て、船虫を牽出すに、路次の用心等閑ならず、蕪火を把、擗棒を携、たるもの七八人、索とりのもの兩三人、村長を後に立して、各々職位を整へつゝ、石濱を觀ていそぐ程に、聲ははや二更の比になりぬ。駈にして、石濱の城へは、城東門

里へ六町なり。あまりになりたり。とく、走れ、といそがす程に、城東門の北の壁より、嚮とはしらず駈懸と、放かくる鳥銃の、音に駭く莊客們、こはそもいかに、とばかりに、慌忙き逃るもあり、腰を脱して駈ぶもあり。そが中に村長も、さらに生たる心持はせねど、猶罪人こそ大切なれ、と思へば目今莊客們が、捨たる索の端握り、牽つゝ逃んとする程に、單面したる癖者四五人、手に手に刀をうち振て、咄と噴て殺て蒐れば、村長いかてか怵ふべき、亦船虫をうち捨て、咄々ぞ逃たりける。扱あるべきにあらざれば、村長は先に逃たる、莊客們を呼集め、その地方の里人さへ、二三十人、駐催して、舊所へゆきて見るに、人影はなくて、虫のみ聚く、小草の上に斷棄たる、捕索ばかり遺りたり。原來はや船虫を、奪ひ去られたるにこそ。こは同類の悪棍等が、所爲なるべし、と思へども、その一人、だも捕得ざれば、まうし釋は立がたからん。いかにすべき、と路傍に、ついめて額を集めつゝ、商量に小夜深にける。折衷前論再説、如上語路五郎高成は、犬田小文吾を伴ふて、その日晡時ばかりに、石濱へかへり来て、長臣馬加常武が宿所に赴き、有功の旅人犬田小文吾を將て、歸城のよしを報しかば、常武馳て老僕を召て、犬田とかいふ旅人を、客房にて休息させよ。語路五郎には今出て、對面すべし、といへといふに、老僕はこゝろ得果て立ぬ。かくて如上語路五郎は、玄關の側なる、編室にをり、あるじの出るを候程に、秋の日はやく没果たり。當下馬加常武は、若黨に燭を秉らしつゝ、やゝ土圭の間に坐を占て、こなたへ、と呼入るゝに、語路五郎は阿とばかり、應て膝行頓首しつゝ、あへて隔の敷居を踏さず、嚮にも告たる事ながら、並四郎船虫等が事の顛末、且犬田小文吾が武勇の事、又阿佐谷の田中にて、あらし山の尺八を、主君自胤に進らせたる、絳の趣如此々々と、はじめ尾を演しかば、常武聞て冷咲ひ、その並四郎とかいふ奴が、小文吾を殺さんと、謀りしことは一定なりとも、件の笛の失たるは、昨今の事にあらず。はや廿年に近ければ、必しも並四郎を、その賊也とは定めがたし。賊物としらずして、物買ふこともあるぞかし。そはとまれかくもあれ、これらのよしを逸速く、俺們には告ずして、中途に主君に聞えあげ、贖件の笛

をも、俺們には見せずして、途にて主君に進らせしは、烏滸とやいはん、越度とやいはん。その職にあらずして、したり良なる計ひは、これ長臣を侮る也。かくても當家の法令や建つ。奈何々々。と聲高やかに、いひ慥されて語路五郎は、頭を席薦に擡るのみ、返す辭もなかりけり。常武呵々とうち笑ひて、すべて和殿が出来過たる、けふのみに限らねど、此度の事は用捨しがたし。こは又後日に議すべき也。彼船虫はいかにしたる。と問れて僅に頭を擡、さん候囊に某影兵をもて、おん下知を伺はせしに、犬田ははやく將て參れ。船虫は村長に、預置くこそよかんめれ。その故は如此々々と、承て候へば、彼處に遣し留めたり。といはせも果す常武は、ふたゝび聲をふり立て、そは甚しき錯誤也。わがいひつるは然にあらず、船虫をば牽もて來よ。犬田も長途の疲勞もあらんに、今宵は且村長許、留るこそよかんめれ、と答たるを何とか聞たる。願ふに彼船虫は、女流に似げなき癖者なるを、武藝に疎き農夫等に、任して捕も逃しなば、笛と共に紛失したる、小篠落葉のおん兩刀を、かさねて索るよすがなし。使に立たる影兵等が、傳へ違ふことありとも、三歳兒も思はん理の當然。その職に居て心もつかず、大かたならぬ罪人を、等閑にして失あらば、抑誰が越度ぞや。和殿みづから彼處に赴き、とく船虫を牽もてかへりて、今宵獄舎に繋がずは、怠慢の罪脱れがたし。さてもく。と繰りかへす、論議に小夜の更るまで、語路五郎は只權威に怕れて、隻言一句も陳じ得ず、理を非に枉る膝節の、折るゝばかりに居縮まる、痠痺は京へ登らずとも、ゆかてかなはぬ阿佐谷村、身の過をしばしば勸解て、やうやく宿所にかへりつゝ、猛に影兵を呼聚合て、石濱の城戸を出るとき、總泉寺の鏡鑄々と、夜ははや二更になりけり。

第五十四回

常武疑て一犬士を囚ふ
品七漫に奸臣を語説す

ず、と見れば人あまた、前程の小草折敷で、何事やらん愛々々。さう相評ふ罷してければ、ふかくこゝろに慥みつゝ、近づくまゝに呼かけて、そは何ものぞ。と答れば、是則別人ならず、阿佐谷なる長村が、莊客們とこゝに聚合て、辯の僉議をするなりけり。當下村長は、いと面なげに立出て、道次に額をつき、御眼代さま某等を、救はせ給へ。とうち勸解れば、莊客們も異口同音に、お慈悲を仰ぎ奉る、救はせ給へ。と叫ぶにぞ、語路五郎訝りて、汝等は船虫を、うち成りをるべきに、何等の故にこゝに聚合る。且われを見て救ひを乞ふこと、一切そのこゝろを得ず。おもふに狐に魅されたる歟。然らずは汝等が狐にて、魅さんと欲するとも、われ豈その術に乗せられんや。疾正體を顯さずは、目にも見せん。と反うちかくる、刀の柄も摧るばかりに、握語てぞ睨まへたる。氣色に呆るゝ村長等は、忙慌手を抗て、御眼代さま早らせ給ふな。狐の所爲では候はず。察する所、同類の、悪棍等が所爲なるべし。嚮に船虫を將て參れといふ、おん下知狀を給はりしかば、殊さら夜行の用心して、この莊客們八九名と、彼罪人を守護しつゝ、この處まで來る程に、あの杜の樹蔭より、許多の癖者顯れ出で、或は鳥銃、或は白刃、得物々々をうち放うち振り、蕩直に撃んとす。これより後はもうさすとも、御推量にも定かなるべし。扱近き里人等を、駈催して加勢としつゝ、ふたゝびこゝに來て見れば、人ひとりもをらばこそ。只斷捨たる、捕索の、小草の上に遣りしのみ。既にはや船虫を、奪ひ去られて、剩、癖者ひとりも捕得ざれば、もうし釋は立がたからん、いかにせまし、と額を集めて、商量果しなき折から、思ひがけなく此處を、過らせ給ふに度を失ふて、もうさんことの後前なりしは、恐れ入て候。と告るに駭く語路五郎は、影兵等と面を見合して、呆るゝこと半响ばかり、忽地聲を苛立て、そは甚胡亂也。われは決して船虫を、將て參れといふ下知狀を、遣せし事はなし。その狀あらばとく見せよ。といはれて村長遽しく、懐執懐鼻輝まで、搔撈りても、揮ふて見ても、鼻紙さへになかりけり。悲しや嚮に逃るとき、ふり落せしか。と身を起しつゝ、月を燭に彼此と、草推わきて索れば、ますく焦燥語路五郎、頻りに轟つく霹靂火の、墜るが如く聲ふり發し

て、是奴逆とて逃さんや。汝不覺に船虫を、捕逃せしにはあらずして、同類に相譚れ、渠を落してさまふに、虚言をまうすならん。わが夜を犯して出て來つるも、馬加殿の指揮によりて、彼罪人を翌迄またて、獄舎に繋ん爲なるに、汝等が越度もて、連係せられん朽をしさよ。一人も漏さず縛めずや。と烈しき下知に夥兵們、齊一撥と走蒐て、村長共に十人許、數珠繋にしてければ、衆皆面色菜の如く、戰慄れて齒も合ぬ、口に唱る念佛を、囁す歟虫の鉦敲き、宿に妻子のまつ虫と、いと鳴るゝ命虫の、りん回應報過世の業と、悟らばおもひきりゝす、翌はこの野の螢より、先にや滅ん、とうち歎くを、追立させて語路五郎は、石濱の城に歸るとやがて、その夜の中に村長等を、皆獄舎にぞ繋せける。とかくする程にはや、曠がたになりしかば、語路五郎は馬加が、門戸を敲んはさすがにて、翌こそ告め、と思ひつゝ、曇時臥房に入りしより、既に天は明、日は昇て、巳の比及になりしかば、遅かりけり、と忙々しく、衣裳を改めて出るほどに、馬加常武は既にや問注所に在りとおぼしく、われを召るゝ使に遣ぬ。胸うち騒ぐを鎮めもあへず、使とともに參りしかば、常武うち見て、待わびたり。彼船虫をいかにしたる。と問れて語路五郎蔽すに由なく、村長等が不覺にて、船虫を癖者に、奪去られしといふ一條を、おそるゝ報知して、彼村長も莊客等も、緊しく禁獄せしめたり。なほ同類を穿鑿せば、船虫を捕へんことも、遠からずこそ候はめ。といはせも果す常武は、勃然として眼を瞪らし、さればこそいはざる事歟。船虫を走らしたる、村長等が罪輕きにあらねど、渠が宿所に留め措て、絆を等閑に致したる、和主が罪はいよく重かり。誰かある、是奴をはやく搦めずや。と呼はる聲に當番の、若侍等兩三名、阿と應て走り來つ、語路五郎を縁類より、衝落し推伏せて、忽地索をかけしかば、常武獄舎に送りして、ながく陽光も見せざりけり。さる程に、阿佐谷の村長、莊客等が、親族妻子は、事の趣を傳聞て、駭歎くこと大かたならず。日毎に石濱の城に參りて、哀み訴へ、或は田を售り、林を售て、竊に馬加主従に、物あまた贈りしかば、大尉一十月あまりを監て、村長等は幸じて、金銀財物を免されけり。只此は語路五郎のみ、この恩赦に得あらずし。

て、獄舎の中に身まかりければ、これを憐むものもあり、又驚るものもありて、驚は年來此の刑罰を繰りかたの罪類にて、馬加殿の響の塵を、探摸ねしより憎れて、可憐命を預しぬ。と竊にこれを評するものから、妻も近ごろ世を去りて、歎きを遺す子もなければ、只親族と朋友等が、その亡骸を葬りけり。是より先に、千葉介自胤は、失せて年歴し嵐山の、尺八の手に入りしより、その日ははやく歸城して、彼大田とか聞えたる、勇士の事を高成は、常武に告たる歟。渠を當家に留めなば、千騎にも優るべし。とく對面せまほしけれ、とこゝろに思ひ給へども、長臣等がまうしも出ぬに、召出すべきよしなければ、且く黙止給ふ程に、次の日馬加常武は、ひとり後堂に見參して、名笛ふたゝび寶庫に返りし、悦びを述まうし、且阿佐谷の村長等が、謬て船虫を、走らしたる絆の趣、并に畑上語路五郎が罪科の事、筒様々々と聞えあげて、渠等は禁獄せしめたり。なほ八方へ部して、彼船虫を匿索なば、追捕輒く候へし。縦往方のしれずとも、原是匹婦の事なれば、喪家の狗に異ならず。終にはみづから斃れんに、賢慮になかけ給ひそ。と異もなげにまうししかば、自胤聞て眉を蹙め、失たる笛の復るといへども、なほ彼賊婦を鞫問せば、小篠落葉の兩刀の、いで來ることもあるべかりしに、語路五郎が疎忽によりて、村長等が過失は、禁獄いづれも法に當れり。おもふにいにしへの賢君は、古器名物を寶とせず、良臣賢者を貨とすとは、尙書に本文見えたるならずや。かゝれば子が欲するものは、あらし山の笛よりも、小篠落葉の大刀よりも、彼犬田小文吾なり。渠が野猪を搏にしたる、又並四郎に行包を、刺せて輒くこれを擊留め、又船虫が贈りたる、笛を遺して奸計の、杪を缺きしは大勇智明、賞感尤淺からず。其方も亦このこゝろもて、旅館の管符等閑ならずは、勸めて當家へ仕へさせよ。遠からず召よせて、對面すべう思ふはいかに。と問れて常武小陸を進め、仰ては候へども、彼小文吾が事をおもふに、並四郎に鎗もて刺れて、弱り果たる野猪ならば、撲殺すも易かるべし。又並四郎を害せしは、欺撃にて手柄にならず。就中彼笛は、小文吾が所持せしものにて、後難を思ふにより、竊に板厨へ遺し置きし歟、これも亦知るべからず、かゝればはじめ船虫が、訴出し

が實事にて、小文吾が陳ずる所、虚言にてもあるべき歟。もししからんには船虫が、冤枉を憐むもの、渠を奪ふて走らせし歟。船虫既に逐電して、再度の糾問によしなれば、何をもて、この疑ひを解き候べき、然るを今更小文吾に、御對面の事などは、物體なくこそ候はめ。と憚る氣色もなくまうし、かば、自胤且く沈吟じて、いはるゝ趣理なきにあらねど、その疑ひは人によるべし。纏に小文吾が、進止を傳聞て、つらくその人となりを思ふに、詭譎をもて人を虐げ、褒譽を求て徳幸を、欲するものにはあるべからず。再三再四の勘辨こそ、あらまほしけれ。と宣へば、常武かさねて、心の惑ひは愛すると、憎むとの深きに起れり。縦小文吾智勇ありて、言と行の正しくとも、倘敵國の間者ならば、怕るべきものに候はずや。その故郷は下總にて、行徳わたりのものといへば、孝胤ぬしの腹心歟（千葉介孝胤當時千葉の城に在り）然らずは里見歟、潛我殿（成氏をいふ）の、間諜者にて候はん。凡智勇に捷れしものの、人を用る戰國に、主どりもせず虚々と、諸國を流浪せん事は、あるべうも候はず。今愚意をもて致んには、はやく小文吾を獄舎に囚へて、答を重く責懲し、いよく敵の間者ならば、首を河原に殺棄て、後來を箴むべし。是當家の武威を示す、第一義にこそ候へ。と言葉巧に説破れば、自胤ふたゝび沈吟じて、敵の間者と間者ならぬは、寔に測りがたしといへども、假染ながら功あるものを、賞せずして罰せん事は、よろしき沙汰とおもほえず。事の眞偽の知らるゝ限り、只いつまでも留め置て、日毎の饗應等閑ならずは、よしや敵國の間者なりとも、志を轉して、遂に服従する事あらん。これより外にせんすべなし。と又他事もなく宣へば、常武終に拒み難て、しからば彼小文吾を、某に預け給へ。衣食の賜もの、こゝろを盡して、眞偽を撈り候はん。といふに自胤歡ばしげに、疑心暗鬼を生ずといへば、疑はしき事ありとも、同僚們と僉議して、疎忽の相計ひすべからず。と傲めたまふを常武は、生應して退出けり。さる程に犬田小文吾は、その日よりして馬加が、客房に留められて、朝夕の饗を差る外には、訪問するものもなく、あるじも對面することなければ、ふかくこゝろに耽りて、脚安からぬ旅宿の床に、昨とくらし今と異

せば、一ト日も千載に異ならず、憂をやるせはなかりけり。かくて第三日に到りて、家の老僕、南角九念次とか呼ぶるもの、小文吾がほとりに来て、主人大記の口狀にて候。よろづの務に暇なくて、宿所に在ること稀なれば、歎待もさぞ疎ならんを、許されなば幸ひなるべし。けふはたま／＼半日の、閑暇を得て候へば、對面し候はん、といはれたり。誘給へ。といひかけて、先に立つゝ間毎の紙門を、押開々々、いと奥まりたる、小書院に將てゆく程に、馬加大記常武は、縮羅の單衣に、精好の袴を穿て、聖柄の短刀を横佩、年十三四なる童扈從に、大刀を持して後方に侍らし、二間の棲牀を背にして、優に坐したり。その縁頬には、肥て色黒く、力士めきたる若黨四五名、蕉布の袴の稜取たるが、各々二尺あまりなる、巨内刀を帯て、肘を張り肩を怒らし、こなたを見出したる眼睛、素破といはゞ、組も伏せんと思ふ面構したり。さればこの馬加が、大く傲れる威權は、主の自胤に、十倍したるなるべし。當下老僕九念次は、遙にあるじの方に向ひて、是なん犬田小文吾ぬして候。と調を執て退く程に、小文吾は、進みて紙門の裡に入り、恭しく額づきたれども、常武は只膝に、手を加えしのみにて禮を復さず。側に措たる扇を取て、こゝへ。と呼近づくるに、小文吾はなほ舊の處にをり。然とて臆せし氣色もなく、常武にうち對ひて、某不測の事によりて、當所に抑留せらるゝ事、一チ日千秋の思ひあり。傳へも聞せ給ひけん、途に同行を失ひて、索遣まく欲するのみ。箇の盜賊のあらはれしより、させる所業もあるまじきに、とく／＼放遣れんことのみ、願しくこそ候へ。といふに常武領きて、愁訴寔に理り也。某その誼を思ふをもて、心ぐるしき限りなれど、いかにせん、自胤和殿を疑ひ給へば、絆速には決しがたかり。その故は、彼あらし山の笛の事、和殿に船虫が贈りしを、陽受て板厨の中へ、遺置たるよしなれども、受たると授ざるとは證據なし。只是のみならず、當夜中途に癖者ありて、彼船虫を奪去りぬ。是によりて再おもふに、船虫が首伏は、苦痛に堪ぬ虚言にて、冤枉を憐むものゝ、奪取て走らしたる歟、これも亦料りがたし。是疑ひの一ツ也。ふたゝびこれに加るに、和殿は智勇兼備の人、武藝も亦備れたり。人を用る戰國に、往ところとし

て售れずして、流浪せらるゝ事こゝろ得がたし。是疑ひの二ツなり。察するに、千葉の孝胤の間者ならずは、里見殿
 哥我の間謀者ならん。速に禁獄して、予が推量に違はずは、首を河原に殺梟て、武備を隣國に示すべし。と君命嚴
 なるものから、某しばし諫めしかども、眞偽明白の證なければ某さへに疑れて、殆寒心すること多かり。
 今且く俟給へ。某方便を旋らして、主君の疑ひを解ん日に、進退その意に儘すべし。といはれて驚く小文吾は、又
 一層の思ひをかされて、刺るゝ如き胸膈に、とさまかうさま思へども、思ひかねつゝ貌を改め、思ひがけなきおん疑ひ
 は、理りとしも覺ぬ也。彼船虫が逐電より、還て某を疑れて、渠がまさしき首伏さへ、實事ならじとせらるゝは、
 抑いかなる道理ぞや。又某を敵がたの、間者ならんと思はれなば、人を行徳へ走らして、彼處の里人等に問給へ。
 舊里にはなほ、老父あり。某、いまだ五斗米に腰を折めず、人の爲に刺客とならず。初は市人、今は浪人、古那屋が
 男兒とたづね給はば、隠れあるべうも候はず。この義をもつて今一度、某が爲に諫め給はば、彼おん疑ひを解れん
 事、春の氷の如くなるべし。愛顧を祈り奉る。と、只管に請求れば、常武頻に嗟嘆して、いはるゝ趣みな理あり。し
 かれども行徳は、當家の舊領なるものから、今は千葉の孝胤ぬしの、采邑なれば敵地也。いかでか輒く人をもて、和
 殿の素生を問れんや。縱問ふよしありとて、敵地の人の答るを、實言と信んは疎なるべし。とてもかくても今速
 に、和殿を放遣ん事は、わがちからに及びがたし。氣ながく時を俟給へ。と親切めかせし便使利口に、うけ引くべく
 もあらざれば、小文吾は愀然と、手を叉きて應せず。常武これを慰めて、犬田との聞給はずや。近き比ある人の歌
 にも、

いそがずは濡れざらましを旅人のあとより露るゝ野路のむら雨
 短慮は功をなしがたし。いつを限りと定かならぬ、逗留の事なるに、母屋は人の出入繁くて、煩しき事多かるべし。
 奥庭のあなたには、此所の幹淨房あり。けふより御座に懸して、おぼしき事を説き給へ。炊食の事、その餘のものも、心

づきなきことあらば、思ひ限なく老僕等に、如此々々といひ給へ。御こそ對面すべけれ。といひ果て身を起し、靴履
 従を隨へて、しづかに奥へ退きける。小文吾は常武が、君命に假托て、われを留るなるべし、と既に意中に曉りに
 ければ、敢てふたゝび争はず。老僕九念次に誘引れて、幹淨房にゆきて見るに、二間に九尺の數奇屋にして、浴室あ
 り廁あり。その次の間は、席蓐纒に三ひらを布て、夜物を藏る板厨あり。あなたの庭より寛して、曲演水盤などへ
 水を沃するは、夏を宗とすればにや、四目色に咲く芳宜の、時しり顔なる、神影石に倚る小松の、挿頭貞なる、夕日
 を抱く寒蟬は、いづれの杪ぞ。朝露に消る丹鳥は、かしの草なり。濕するときは、爐に百年の釜あり。倦ときは、
 庭に冊歩の地あり。有繫に眺なきにあらねど、惆悵たる心の憂は、亦遣かたもなかりけり。この處三方は築垣にして、
 南面に、諸折戸あり。あれどもなきに異ならで、常にあなたより鎖したり。かゝれば罪なくして、楚囚の如く、旅館
 さながら獄舎に似たり。これよりの後、男の童等が、三たびの飯を贈來ぬると、老蒼頭等が、月の中に兩三日、庭の
 小草を刈拂ひ、落葉を掃除しに來ぬるのみなれば、譚敵となるよしもなし。わが身には似て生憎に、過る陰陽をと
 どめかねたる、小文吾頻に焦燥て、憂苦に堪ず天うち仰ぎ、いかなれば枉津日の、神のしうねく責縁て、かくまでに
 物をおもはするぞ、荒芽山の厄難より、別れし四友の存亡を、夢にだも知るよしなく、預けられたる兩箇の女人の、
 往方は今に定かならず。舊里には、親あり姪あり、父は喜ぶべく、おそるべきの齡にして、姪は尙鳩車、竹馬の年に
 ぞ有ける。これを思ひ彼を思へば、身はこゝにありといへども、心は四方に走らぬ日もなし。佛説に聞く、火宅の煩
 惱、苦海の風波はこれなるべし。是併、馬加大記が妬諱に起りて、虐らるゝことかくの如し。渠は奸曲の小人なり。
 誠なるかな大功は、細謹を顧ず、大禮には小讓を、辭せずとこそ聞くものを、あの諸折戸を推破て、出んことの難
 くもあらねど、この處だも鎖を抜かず。いかでか城門を出されんや。愁に抑留せられれば、求て恥辱を累るに近し。
 いかによすべき、と胸にのみ、思ひかねつゝ飛鳥の、翹なき身を恨み不樂、音にこそ鳴ね果しなき、籠に養れて友呼か

はす、雀色時暮なくも、又夕ぐれになりけり。かくて秋ゆき多枯れの、寂しき宿に年暮て、明れば文明十一年、春も三月になりしかば、われのみならで見る人もなき、庭の花のいろくくなる、いと美しく咲く程に、彼帝とる蒼頭の、常よりもしばし来て、日ぐらし草を刈てけり。そが中に、品七とかいふ老蒼頭のみ、小文吾を訪慰めて、木訥ながら物のいひざま、老實だちたるものなれば、小文吾も亦隔なく、その鎌休めの折毎に、煎茶を飲せなどしつゝ、江湖上の事、今昔を、うちかたはらせて聞しかば、品七ふかく歡びて、稍親みを累る程に、一日品七ひとり來つ、日なきころのことなれば、牛飼過して縁頬に、尻うち掛て憩ひてをり。小文吾これを勞ひて、又端近う出たるを、品七曇時見かへりて、いたく苦勞をし給ふにや、なべての人のこゝろのどけく、浮れぬはなき花の春に、面色の病者めきたる、瘦さへ見えさせ給ふにこそ。現その該でもあらんかし、不測の事に拘づらひて、旅ゆく人の引留られ、閉籠られて既にはや、一ト歳ちかくなりぬれば、いと痛しく思ふのみ、又せんすべもなきものから、人は過世の業によりて、智者も勇士も、趣合歹く、生涯頭を擧難るは、世にその傳多くあり。近くはこの武藏なる大塚に、大塚番作といひし猛者は、家督を姉夫に横領せられて、憤りにや堪ざりけん、腹かき飲て死給ひき。その獨子も親に劣らぬ、器量ありとか人はいひしが、いかになりけん、よくは知らねど、今はその迹絶たりとぞ。かゝれば智者も勇士でも、時に遇ねば埋れて、人にも知られずなるものあり。さばれ人は七轉、八起とかいふ世話もあるに、なほ年わかく見え給へば、よしや一千年三ヶ月、囚徒に等しきも、隨意になる日のなからずやは。あまりにいたく物を思へば、命を縮るものぞとよ。みづから心を長閑くもちて、厄の関るを待給ひね。と慰られて小文吾は、臂うち騒ぐを推鎮め、いはるゝ趣理り也。われも亦大塚親子の、名のみは豫て聞たるなり。和殿は相識なりし歟。と問れて品七頭をうち掉り、否相識ではなけれども、大塚の里人に、縁助といふものは、そが先代より由縁あり。渠が世に在りし程は、訪もし訪れ、せしにより、そが辱にて聞しのみ。現世間のさまなる、高きいはれぬ事ながら、こゝの龍門馬加殿は、いと

おそろしき人なれども、なすこと毎に前く義讓て、守りたまへども、憐れ給ふは、苦難なる事があるや。といふに、文吾膝を進めて、その縁由聞まほし。世に悉しき筋ありととも、われは他郷のものなるに、こゝに詳問ふ人のなければ、聞とも外へ洩やはする。とくうち出し給ひね。とそゝのかされて品七は、頭を掻きて四下を見かへり、おん身はよろづに辭些く、憤み深き人と思へば、彼一ト條を告申さん。忘れても洩し給ふな。聞も及せ給ひけん、いぬる享徳四年の秋のころ、下總の千葉家二流に分れて、合戦已ときなかりけり。縁故を原るに、當君故千葉介胤直主は、尙弱冠なりけるに、千葉の一族、原越後胤房は、清我の御所成氏朝臣に、從ひ給へと薦めまうし、圓城寺下野守尙任は、鎌倉の管領(山内顯定、扇谷定正)に、從ひ給へと諫めしかば、胤直遂に圓城寺が、議論を是として鎌倉なる、管領方になり給へば、胤房ふかく憤りて、成氏朝臣に加勢を乞受、千葉の馬加陸奥入道光輝と相共に、軍兵數千を引率して、同國多胡、志摩の、二箇城を攻潰し、臆て大將胤直ぬしに、詰腹を切らせしかば、胤直のおん父、前千葉介入道常瑞、舍弟中務入道了心も、齊一おん腹をぞめされける。これにより、成氏朝臣の沙汰として、陸奥入道光輝の嫡男孝胤を、千葉介に任じて、千葉の城に居置れ、又管領家の沙汰として、康正元年の冬、入道了心の長男實胤と、二郎自胤を執立て、武藏の石濱赤塚の、兩城に居置れしより、千葉家はいよく二流に分れて、互にながく怨讐の、鐵をなん磨ぎ給ひける。しかるに此ころ、千葉庶流の郎黨に、馬加記内常武といふものありて、孝胤に仕へしが、その身過てる事ありて、下總を逐電し、石濱殿へ降參して、千葉の爲體を演説し、奉公無二に進止ふ程に、實胤これを登用して、遂に長臣となし給へば、記内は大記と改めて、特に時めき榮ける。かゝりし程に、實胤ぬしは、年來多病なるをもて、遁世の情願あり。家督を舍弟自胤に、譲らんよしを議し給ふに、馬加常武承て、肚裏におもふやう、赤塚の城中には、栗飯原首胤度、籠山逸東太縁連といふ、兩箇の老黨あり。いづれも當家の一族にて、就中胤度は、下總志摩の如來堂にて、常瑞了心自殺のとき、主君と共に腹切たる、栗飯原右衛門尉が子なるをもて、自



(處の死 讓度 胤首 原飯 粟語 物昔 が七品)

胤に隸られたり。自胤家督を承嗣給はゞ、彼兩人も隨ひ來て、第一の權門とならん歟。しからんには、わが權勢を削られて、外聲歹く朽をしかるべし。縁連は血氣の壯俊、ふかき思慮あるものならねば、謀るに難くもあらざめれど、心憎きは胤度也。要なからずや、と密々に、謀を旋らして、これよりの後時々に、赤塚に赴きて、自胤の安否を伺ひ、粟飯原龍山の兩老黨等と、他事なきまでに交りしが、一日常武は、實胤の寶庫より、あらし山といふ一節截を、潜やかにとり出し、これを懷にして赤塚なる、粟飯原が宿所に赴き、密議ありと倡へて、あるじと閑室に、對面しつゝ、弄くやう、某けふまゐりしは、守の仰によつて也。いまだ開給はずや。此度計我殿と兩管領家と、おん和睦の風聞定か也。守には近き程に、家督を赤塚殿(自胤をいふ)に譲り給はん、と思召定められた候に、なほ管領の助力ありといふとも、今さら計我殿に、わろく思はれ給はんには、よろづに後安かるべからず。されば彼おん和睦の事、世に披露なき先に、使者を密に赤塚へ遣り給はゞ、彼等の歸よりしかるべし。な

れども石濱より進まば、鐵籠への眼を影隠し。自胤より進まば、物のこと、當家本殿に離れしより、させる重器もなし。この一節截は、乃詔貞胤のおん時より、相傳のものにて、密所にも知し召るべければ、これを進らせ給へかし。この餘の物は、自胤のこゝろもて、相添らるべき歟。この事尤も密議なれば、汝竊に、胤度が宿所に赴きて、予が意を傳へよ、と仰られて候、と實言しやかに説示して、件の笛を渡與すになん、胤度斜ならず歡びて、一點も疑はず、仰の趣有がたきまでに承り候ひぬ。速に聞えあげて、仰のまに／＼相計らひ、某計我へ赴きて、歸城の後、彼處の首尾を、申上候はん。この義宜しくおん執成を、憑奉る、と答しかば、常武は謨濟したり、とこゝろの中に含咲て、石濱へぞ還りける。却説粟飯原胤度は、その日自胤のほとりへ參りて、馬加常武が傳へたる、實胤の密意を演て、件の笛を進らせしかば、自胤感悦大かたならず、石濱殿のおん計ひは、某を思しめす、おん慈愛なるものを、いかでか違背致すべき。現計我殿へ牽出物に、笛のみにてはいかゞあらん。今一ト品は何を欲得、とおもひかねつゝ、問給へば、胤度憂時沈吟じて、曩に某鎌倉へ、おん使を承りたる折に、彼地にて購得つる、長短二口の刀の事、焼刃尋常ならざるをもて、その儘進上仕りしに、小笹落葉と名づけられて、をさ／＼御秘藏し給ふならずや。彼兩刀こそ然るべけれ、といひも果ぬに自胤は、頻に領き微咲て、彼大刀あるを忘れたり。牽出物は、はや整ひぬ。この使に立んもの、首ならて誰かよくせん。疲勞ながら參らずや、と亦他事もなく宣へば、胤度莞然とち笑て、仰なくとも既にはや、用意を致したり。明朝發足仕らん、といふに自胤歡びて、次の間に侍りたる、近習の者にこゝろ得さして、小笹落葉の兩刀を、嵐山の笛もろ共に、胤度に渡與し給へば、胤度これを受とりて、いそしく宿所に退きつゝ、その日の中に細工人等に、笛と兩刀を装らるべき、箱兩三箇造らして、猛に整ふ行装も、現戰國とて逸早き、乗馬、持鎗、甲冑櫃、命は今宵一節切、小笹の雪敷、消にゆく、其處に落葉の兩刀を、携させし若黨二名と、從者すべて十人ンばかり、その詰且まくらかの、計我を望てぞ起行

ける。畢竟胤度、許我へ使して、又甚麼なる話説かある。そはこの巻に著したる、出像を見ても、大かたを知らん。

南總里見八犬傳 第六卷 卷之二

東都 曲亭 主人 編次

第五十五回

馬大記謙言して途に籠山を窮せしむ
粟飯原滅族せられて里に大坂を遺す

品七は興に乗して、馬加が隠匿の、長物がたりに時を移せば、小文吾耳を側だて、感嘆膝の進むを覺えず、春の日も只けふばかり、短しとなん思ひける。當下品七は、小文吾が汲て出せし、茶を遽しくうち喫て、縁頬のほとりなる、扇を把て膝に突建、さる程に、馬加大記常武は、その夜腹心の若黨を、あちこちへ差向て、粟飯原胤度が起行や、否を見よとて遣せしに、そのもの詰且歸來て、粟飯原殿は黎明の比、主從大約十人許、行装を整へて、栗橋のかたへ赴き給ひぬ、と報しかば、常武聞てうち領き、その日赤塚の城に伺候して、時節の安否を訊まうせしかば、自胤對面し給ひて、きのふは守の御内意を傳へられて、怡悦の至り、謹て承りぬ。就て送り給はりしは嵐山の笛に、小篠落葉といふ、予が秘藏の兩刀を相添え、これを胤度に齎して、今朝はや許我へ遣したり、と仰も果ぬに常武は、うち駭きたる面色して、そはこゝろ得ぬ事にこそ候へ。某はさる御内意を、傳へたる事絶てなし。いぬる比胤度は、某が宿所に来て、何くれとなく相譚ひし語次に、當家の重寶、あらし山の一節截は、貞胤朝臣より六世、相傳のおん物なれども、赤塚殿には、いまだ見ることを得給はざりき。この義和殿の計ひをもて、恩借を許させ給はゞ、さこそ歡び給ふらめ、と又他事もなくいはれしかば、某これを諾ひて、御秘藏の重器たりとも、他家へ貸て見するにあらず、御舎弟の御所望、何か苦しかるべき。近日便宜を得ば、貸進仕るべし、と約束したるにより、昨日かの笛を携

て、胤度が宿所に赴き、前約の一節截を、持參して候也。御覽の後速に返させ給はん事をのみ、憑み奉る、と期を推して、胤度に遞與し候ひき。しかるにきのふは、公私の所要を相兼て、なほ又ゆくべき處あれば、そが儘退出候ひし。爾るに彼笛を、故なく他家へ渡されなば、粹某が越度となりて、忽地に罪蒙るべし。いと愚にも胤度に、欺れぬる悔しさよ、といふ聲怒をあらはして、頻に嘆息してければ、胤度いたくうち駭きて、そは安からぬ椿事なり。胤度はこの年來、忠信無二の老黨也、と思ひしものを、思ひきや、さる奸曲のあらんとは、この事必情由あるべし、思ひ合ふことはなきや、と問れて常武頭を傾け、そのよしなきにも候はず。近ごろ世の風聞に、栗飯原首胤度は、千葉一族の家系に誇りて、主君御兄弟を推倒し、武藏七郷、葛西三十箇莊の采邑を、横領せん、と竊に計較み、成氏朝臣に内應して、逆心既にその間なし、と仄に聞え候ひしが、こは怨あるものの、讒奸ならんと思ひ捨て、なほ疑はて候ひしに、原來實事候ひき、といふに胤氣色變て、しからば霎時も捨置がたし。誰かある。とく逸東太を召よせよ、と烈しき仰に當番なる、近臣忽地奔走して、時を移さず呼繼ぐ程に、常武は謨濟したり、と思ふ心を色にも見せず、遠侍にぞ退きける。さる程に、當城第二の老黨なる、龍山逸東太縁連は、猛の召に物とりあへず、走りて御前に參りしかば、胤度は召近づけて、胤度が事の趣、箇様々々と遺もなく、辭せはしく説示して、汝今よりうち立て、胤度を追留めよ。おもふに渠は路程五六里もゆきぬらん。若早敵地に到りなば、進退尤不便なるべし。栗橋よりこなたにて、追著んこと肝要也。さばれ愈忽の舉動して、暴立なば、後悔せん歟。只何となく命を傳へて、いひ遣せし事あれば、對面していはんと欲す。速に還るべし、と告て且その氣色を見よ。胤度野心ながらんには、疑はずしてかへり來つべし。渠もし命を聽ずして、推て彼地に邁んと欲せば、その逆心分明なり。方便をもつて無々と、搦捕てとく將て來よ。縦、敵より加勢有て、胤度を擊瀾すとも、嵐山の笛、二口の各刀を、とり復さすはあるべからず。手を密に詰めて並かへれば、われ彼敵を、死なせよ。と仰すれば、胤連は一談におよばず、欣然として

言承しつゝ、胤を置立て退く程に、胤連は遺言の辭にをり、外縁連がそのはしりを、退るを頼むに對面して、御邊大事のおん使を、承り給ふ事、朋友の情、歡ぶべし。某今一言をもて、胤とせん歟。御邊胤度に追著れば、豫て了簡あるべき事也。胤度なきときは誰か亦、御邊と肩を比るものあらん。胤連の石濱に、移り給ふに及びては、某も亦下風に立べし。かならず脱落給ふな、とそよのかされて縁連は、意中に曉得て、莞爾とうち笑み、貴論の趣感佩せり。相こゝろ得て候、といふより速く衝と立て、走り出たる城戸のかたに、はや牽居る栗毛の駒の、鞍に手を掛け閃りと乗て、東を望て奔らすれば、續く從者四五十人、喘々ぞ逐ふたりける。されば又栗飯原首胤度は、その日申比及に、はや八九里の路を來て、杉門の里のこなたなる、並松原を過る程に、後方に聞ゆる馬蹄の響きに、心もたなく見かへれば、思ひがけなき縁連が、鞭を揚て招きつゝ、やをれ栗飯原殿、留り給へ、と呼懸々々、瞬時に乗着て、馬より閃りと下立たり。胤度は且從者に、下知してその馬を勦らせ、縁連には腰着なる、藥籠の藥を與て、その縁由をたづぬれば、縁連霎時呼吸を頓て、御説の趣餘の議にあらず。殿には鶴に一大事を、仰遺されたるにより、將て還れ、と仰られたり。とく引かへし給へかし、といふに胤度異議もなく、そは何事敷知るよしなけれど、遠路を數はて、胤、御邊をもて召しめ給ふは、大かたならぬ一談にこそ。誘給へ、といひかけて、そが儘踵を旋せば、胤度が從者等は、縁連が乗捨たる、馬さへ牽て舊來し路へ、衆皆齊一立歸れば、縁連は胤度と、雜譚しつゝ、いそぐ程に、この日も既に黄昏たり。浩、處に、縁連が從者等、後馳に走り着くもの、或は二人、或は三人、一千里餘の程にして、はや三四十人になりしかば、胤度これを訝りて、縁連を見かへりつゝ、御邊何等の故をもて、從者許多具せられたる、と問れて縁連聲をふり立、この事も亦別議にあらず。和主を誅罰せん爲也、といふ間もあらせず拔撃に、晃めかしたる刃の列缺、肩尖丁と砍著れば、こゝろ得たり、と胤度も、共に刀を抜合して、兩三合戦ふものから、初大刀の深痕に右手衰へて、只受ながすのみなれば、縁連は踏込々々、はや頸捕て刀尖に、推貫きてさし揚たり。思ひがけなき

事なれば、胤度が從者等、罵り騒ぎて別よしもなく、恰釜湯の涌くごとく、上を下へと返したる、周章大かたならざりける、當下縁連聲高やかに、粟飯原胤度逆心あらはれ、某討手を承りて、かくは誅戮せられたり。汝等もし異議に及ばず、皆悉、首を召れん。静れやツと呼ばば、胤度が譜代の若黨、村主金吉、使主銀吾、主の首級をわたさじとて、はや拔連て殺て蒐れば、中間小厮に至るまで、脱れがたしと思ひけん、齊一刃をうち振りて、敵手を擇まず殺結ぶ。そが中に金吉銀吾は、恩義の爲に必死を究めて、左右等しく縁連を、さし挟みつゝ攻戦へば、いづれ暇はなかりける。時に並松の樹蔭より、頬被りせし一箇の癖者、忽然と顯れ出て、道次に捨措たる、嵐山の尺八と、小篠落葉の兩刀を、手早く箱より引出し、小腕に抱きて逃んとす。程もあらず胤度が鎗奴遙にこれを見て、飛ぶがごとくに走り來つ、癖者等、と呼かけて、鎗を捻て刺んとすれば癖者は、件の三種を、後方へ撲地と投遣りて、巨刀丁と引拔受とめ、逆へ進て追つ返しつ、丁冬發石と戦ふたり。その間に又樹蔭より、頬被りせし奇怪の賤婦、軋ぶが似く走り出て、笛と刀を擡取て、舊の樹蔭に躲るゝ程に、怯ず挑むこなたの癖者、鎗の蛭卷斬斷て、返す刀に鎗奴を、砍伏したる血煙の、夕映残る玉弄時、樹蔭を出る賤婦と、目を指しつゝ微笑みて、造化精妙と夕間暮、うち連拉て逃亡けり。さる程に、籠山逸東太縁連は、既に件の癖者等が、笛と兩刀を奪略たる、爲體を遙に見つゝ、吐嗟と思へど金吉銀吾と、劍を削る真中なれば、こゝろは忙、拳は亂れて、金吉が撃大刀に、小鬘三寸深痕を負ふて、既に危く見えたる折から、縁連が從者等、四五人齊一走り來て、金吉銀吾を前後左右に、推取籠て攻つけ、遂に亂刀に砍伏して、やうやく頸を捕てけり。かゝりし程に、胤度が從者等は、或は撃れ、或は逃亡、敵一人もなくなられたれども、縁連は緊要なる、笛も寶刀も癖者に、奪去られたりければ、有緊にこゝろ安からず、いかで往方を索ん、と思へどもはや日は暮れつ、如此も他領の事なれば、後難も亦料がたし、と思ひかへせば忙々しく、躬方の死骸も捨措つ、胤度主從三銃の、首ばかりを擡携て、路引ちがへて走りつゝ、その夜を岩窟のほとりなる、古寺に曉せしが、つくんと思慮る

に、われ胤度を討捕たれども、緊要なる笛と兩刀を、癖者に奪られたれば、まうし憐んことかたかるべし。胤度が從者等の、われより先に走り歸て、有つる儘に訴、まうさば、わが私恨によつて、胤度を將てかへらで、欺撃にしたりといはれん。さるときはわが罪の、命に及ぶこともあるべし。所詮赤塚へ、歸るときは甚危く、還らざれば安きに似たり。父母は既に世を逝て、いまだ妻子はあらず。人を用る今の世は、いづれの國もみな主也。赤塚にのみ日の照るものかは。三十六計進るに不如、と肚裏に尋思しつ。その曉がたに只ひとり、往方もしらずなりにけり。從者等はこれをしらず、天明て後に驚騒ぎて、且く兪議を擬せしかども、いかにとも術なさに、三ツの首級を携て、兪阿容々々と赤塚へ、還り參りて如此々々と、粟飯原胤度主從が、撃れたる爲體、并に嵐山の尺八と、小篠落葉の兩刀を、その折癖者に、奪去られたる事の趣、又籠山縁連は、その曉に旅宿より、逐電したる事までも、遺なく聞えあげしかば、自胤駭き且呆れて、是非の思念に及び給はず、竊に馬加常武を招きよして、緯云々と説示し、彼笛既に紛失したれば、守のおん咎め測がたし。いかにすべき、と問給へば、常武も殊更に、うち駭きたる面色して、寔にこよなき兪變なり。所詮胤の紛失も、みな胤度より事起れば、渠が妻子を誅戮して、仰わけられあらんには、おん身に異なるおん咎めの、あるべうも候はず。某緯よく計ふべし。うち任し給ひね、と答まうして退きつゝ、實胤自胤の兩下知也とて、胤度が長男に、粟飯原夢之助とて、今茲十五歳になりける美少年に、腹を切らせ、并に胤度が妻稻城と、五才になりける女兒をも、兪おなじ日に殺してけり。只この人々のみならず、親族妻黨も罪家りて、或は追亡はれ、或は閉籠られて、憂死せしものも多かり。誠に邯鄲一炊の、粟飯原氏の榮枯得失、覺て悔しき夢之助を、惜まぬものはなかりけり。そが中に、胤度の妾に、調布といふものあり。有身てより三年経るまで、今もて産の紐を解かず、醫師も後にはその病症を、とにかくに決めかねつゝ、こは血塊の病也とて、をさゝその療治をしてけり。かゝりし程に、常武は、彼妾調布に、胤度の遺腹ありと聞て、これをも殺さんとしたりしを、相憐むもの哀

告て、醫師をもて證人としつ、決して有身たるにあらず。血塊に疑ひなしとして、くさんの方書を引つ、醫師も共に寛しかしも、常武はなほ疑ふて、調布に墮胎の薬を、三日つゞけて飲せしかども、させる験のなかりしかば、原來血塊也けりとして、遂に追放されにけり。此は是今茲より、十五六年の昔なる、寛正六年乙酉の冬、十一月の事にぞありける。かくて件の調布は、些の由縁を心あてに、相摸州足柄郡、犬坂といふ山里に在りける程に、かの病惱は血塊ならで、その年の暮に、子を産にきと、それより三年ばかりの後、應仁元年丁亥の秋の頃、誰いふとなく風聞せしを、常武聞て、駭きあやしみ、そは安からぬこと也とて、老僕柚角九念次を、犬坂へ遣しつ、緯の虚實を撈せしに、子を産たるは一定なれども、今は其處にも住わびて、往方しれずと聞えしかば、常武は靴を隔て、癪を搔る心持しつ、なほ彼此と索しかども、終に便宜を得ざりしとぞ。又彼龍山逸東太縁連は、千葉家恩願の郎黨にて、その家柄も大かたならねば、年尙わかきものなれども、胤度の下に居られて、赤塚殿の覺よかりしに、慾深く智淺うして、年來胤度と、中わろかりければ、常武に屬路を食れて、生命を用ひ奉らず、忠信篤實なる胤度を、欺撃にせし冥罰、立地にその身に報ひて、可惜しき俸祿を、われから棄て谷蟾の、日蔭者になりけるよとて、知るも知らぬもおしなべて、憎み嘲り笑ひけり。しかれども石濱なる實胤は、年來多病なるをもて、緯みな常武一人に、任用し給ひつ、此ごろ遁世の願ひ頻りにして、當時の領所を悉く、舍弟胤胤に譲らるせ、その身は美濃に退隠して、いく程もなく世を逝給ひき。これにより、鎌倉の兩管領より、二郎胤胤を、千葉介に補任して、石濱の城にすえ置れ、武藏七郷、葛西三十箇莊、管領せしめ給ひしより、今に至て繁昌せり。されば馬加大記常武は、緯みな己が隨意謀濟して、權勢肩を比るものなく、主の胤胤も、渠には憚り給ふゆゑは、はじめあらし山の笛の事も、實胤より咎なく、その家督をさへ嗣給へば、皆常武を徳として、權威を貸給へばなるべし。よりて思ひ合するに、胤度の撃れし折、常武竊に地方の惡徳、並四郎を相謀て、件の笛と兩刀を、竊せたるに疑ひなし。その折の隠跡は、並四郎が女房の、船舩にこそある

ンなれ。爾後笛と兩刀は、並四郎が所蔵にして、小籠落葉の兩刀を、巖に懸へ置して、よき價に售たるなめれど、胤山の尺八は、古き代の物にして、今の笛と異なれば、好みて買んといふ人もなく、且時繪したる歌などの、けやけきに憚て、年來秘おきたるにこそ。果して如此らんに、いぬる比中途にて、阿佐谷の村長等を撃走して、船虫を奪去たる、幾人の癖者も、馬加どのの間諜者、一洞穴なる狐どもならん。いかにとなれば、船虫が責られて、苦きまゝに首伏せば、彼人の舊惡の、あらはるべし、と思へば也。さればおん身を推留めて、辛く閉籠措るも、そこらの疑念ある故ならん。斯長々しき彼人の、年來の惡計を、誰も知るものはなかりしに、狙渡増松といふ扈從者黨は、馬加どのの腹心にて、機密を掌りたれども、緯ある毎の賞祿の、多からぬをいたく恨みて、件の機密をある人に、如此如此と漏せしかば、語續ぎ傳聞て、今では知らぬものもなければ、かの威勢に憚りて、聞え上るものなければ、守には知し召ぬなるべし。馬加どののよろづのうへに、疑ひふかき性なれば、彼増松が口を利しを、曉りて毒飼をせられしかば、いく程もなく増松は、一夕睡滅に死にけり。かゝればおん身も朝夕の、食物に用心して、鈍くな謀らひ給ひそ。と毒く程に男の童が、はや夕餌をもて來つ、いつの程にか後方にをり。長物がたりに聞惚たる、小文吾が袂を掖て、夕餉の箸を把り給はずや。といはれて見かへる小文吾と、共に駭く品七は、慌忙き箸を取て、塵拈隻手に引提つ、折戸のほとりに立出て、こゝ開ずや。と呼ばば、外面より人の來て、鎖を披きて、品七を、出して楚と閉れども、現筈られぬ人の口、吁天言は聲なくて、よくいはしむる隱匿の、掩ひがたきは以あるかな、と小文吾竊に舌を掉ふて、そが儘饌に向ひても、箸とる事の懶きまでに、なほ嘆息は已ざりける。かくてその日は暮果て、甲夜よりぞふる春雨の、音蕭然に更闌て、いと寂しき鐘の聲、寐られぬまゝに小文吾は、獨つら／＼思ふやう、彼常武が人となりは、われも大かた猜せしかども、あの品七が巨細なる、思ひがけなくその隱匿を、聞しもひとつの資にて、なほこの後の用心に、なるべき事ぞいと多かる。されば馬加が若黨なる、狙渡増松とかいふものの、毒殺せられしと

いふ一條にて、今さら思ひ合すれば、われも亦日ごろより、食後猛に腹痛みて、いと堪がたき日のありしに、藥の貯藏あることなければ、護身囊をうち披き、感得祕藏の玉を出して、或は鳩尾へ推當つ、又あるときは口に含みて、その玉液を吸ふ程に、苦痛忽地たひらぎて、心持清々しうなりたるも、幾度といふことをおぼえず。これ必かの腕中に、ありけん毒に中られしを、只この玉の奇特に依て、わが身に恙なかりしならん。禰に犬川莊助が、大石憲重の獄舎にて、笞杖の撲傷の頓に癒しも、亦彼玉の靈應なれば、裕と云恰といひ、靈玉の加護疑ふべからず。吁神なるかな、妙なるかな、世は塞翁が馬にして、戸田川の窮厄には、十條力二尺八等が、助によつて吾曹は、思ひがけなく虎口を脱れ、今は千葉家の尺八ゆゑに、わが身を殆危くせり。彼は忠信義烈の兄弟、此は音曲尙古の名物、尺八の名は等して、利害損益甚異なり。わが厄今に解すといへども、彼粟飯原に比れば、屑にもあらざりき。さるにても粟飯原氏の、遺腹なる子は生育し歟。宇宙の間に不平の事、渠にましたるものやはある。嗚呼憐むべし、憐むべし、と繰返したる胃の中に、積る日數の春過て、夏は來れども彼品七は、爾後掃除に來ることなければ、小文吾竊に訝りて、一日又草刈に來つる蒼頭に、彼品七が事を問ふに、そのもの答て、尋給ふ品七は、いぬる月、いく日にかありけん、こゝへ庭掃除に來たる、次の日の夕つた、俄頃心地煩しとて、うち臥して程もなく、夥しう血を吐て、眞夜中比に身まかりにき。生平には病ひ氣のなくて、風だも引ぬ老痴なりしに、食傷にもや候ひけん。健なりとて憑まれず。現命數は豫てより、量知られぬものにこそ。といふに駭く小文吾は、なほさりげなく應をしつゝ、肚裏に思ふやう、原來かの日に夕饌を、もて來てすえたる男童の、品七が長物がたりを、幾條か聞とりて、主の常武に告しより、常武いたく品七を、憎みて毒殺せしならん。噫馬加が人を害ふ、毒惡何ぞかくまでに執念深や。彼品七はわが兄弟、犬飼現八が實父糠助と、ふるき由縁のありとし聞けば、谷を隔て響をおもふ、心の憐みを誰にか告ん。寔に口は禍の、門也けり。と舌を掃ふて、是よりの後物食ふ毎に、必まづわが玉を齧りて、彼の影計をぞ觀ひける。

第五十六回

朝開野歌舞して暗に銀瓶を遺す
小文吾諷諷して高く舟水を論ず

馬加大記常武は、去歳の七月小文吾を、推留め閉籠たる、言と心はうらうへにて、其時既に思ふやう、彼犬田小文吾は、智勇究めて侮りがたし。渠もし當家に仕へなば、必わが身の仇とならん。さればとて今追遣りて、他し諸侯の佐とせんも、なか／＼に快からず。かゝれば渠を竊に害して、後安くせばやとて、爾後腕中に毒をまじへて小文吾に差めさせしに、させる驗もなかりしかば、こはいかに、と訝りて、なほ又烈しき毒を飼ふこと、六七遍に及びしかども、僅に一チ日半時だも、病煩ふこともなければ、常武は呆れ果て、彼奴は神仙不死の術を受たるものにてあるべき歟。縦今死なずとも、この處たに出さずは、何事をかよせんやとて、いよく鎖を緊しつ、その害せんと謀りしことは、且く思ひとゞまる程に、この年は果敢なく暮て、次の年の春三月の比、庭掃除する蒼頭品七が、一日小文吾に聳きたる、長物がたりの事の趣、その願末は定かならねど、わが身の惡事を告たるよし、その折配膳の男童が、おぼろげながら聞とりて、竊に常武に報しかば、常武聞てうち領き、われ日ごろより汝等を、密張孔目にしつることは、これらのよしを知ん爲也。誰にてもあれこののちも、わが蔭事をいふものあらば、とく知らせよ。と聳き示して、壺なる菓子をごぼるゝばかりに、紙に包みて投與へつ。是よりして品七を、心にふかく憎むものから、然として罪せんよしのなければ、果して小文吾が猜せしごとく、竊に毒殺しつる也。これによりて常武は、さらに思念を旋らすに、品七奴が口を嗜きしより、小文吾は大かたならず、わがうへを知りたるならん。われは年來大望あり。彼享徳の例に倣ふて、自胤ぬしに腹を切らせ、わが子鞍彌吾常尙を、當城の主として、千葉介たらしめん。と思はざる日はなけれども、自胤には鎌倉なる、兩管領といふ後衛あり。管領われを非義として、大軍をもて攻られなば、毛を吹て疵を求る也、と思ひかへして年月を、いたづらに過せしが、方便をもつて小文吾を、わが腹心となすものなれば、

先主の孔明、後醍醐の、楠公にも劣るべからず。嘻しかなり、と方寸に、計較既に決りつ、折も欲得とおもふ程に、此ごろ鎌倉より、女田樂の色子共五六名、石濱の城下に來にけり。さらぬだに常武は、をさく、聲色のみ嗜む、烏濤の驕者なりければ、さる技に長て、且良妍き淫婦を、多く婢妾としつ、生平に歌舞せなどすれどもなほ飽かて、他郷より來ぬる俳優も、己が愛するものあれば、その費を教ふことなく、幾月の久しきまで、なほ家に留置て、酒宴の興にぞ備ける。こゝをもてこの度も、件の女田樂等を招きよして、その技を試みたるに、そが中に、且開野といふ少女の、年は二八ばかりにて、顔色も美しく、技に堪能のものなりければ、そを只一人留置て、一日老僕九念次をもて、小文吾にいはするやう、去歲初秋一面識の後、白駒の足掻速うして、朞月も近づきたり。豫てもいへることながら、主君の疑念いまだ解ず、良薬口に苦きの故に、諫言その甲斐なきに恥て、心ならずも疎遠に過たり。斯長々しき籠居を、いと痛ましく思ふをもて、切てをり、母屋へ招きて、慰めばや、と月ごろより、くさく、方便を旋らし、主君へ聞えあげしかば、この一條のみ許されたり。よりに今宵後堂にて、龜盃を勧め進せんと欲す。既にして時刻もよし、九念次に案内をさして、とくくこなたへ來給へかし。餘は面會を期してこそ、意中を盡すべけれど、白草の紋染たる貝夾衣に、袴一ト領をとり具て、牽出物とて贈りける。小文吾は思ひがけなき、常武が懇切態なる、招請に肩を翫て、渠又何事をか計較けん。われを害せん爲なるべし、と思ふものから今さらに、推辭ば必臆せしめて、後々までも笑れん。只命運を天に儘して、ゆくには不如、と思ひ決めつ、忽地莞爾とうち咲みて、ゆくりなき懇命を、推辭奉らんは無禮ならんに、貴教に應じて御席を、汚し奉るべきにこそ。旅にしあれば禮服に、事缺ぬるを猜し給へる、既ものと見奉れば、これも辭はず身に着て、見參に入るべき也。且く待せ給へかし。と應て次の間に退きつ、刺着袴被て、夾衣を、そが儘に被て、遠く、片足がはりに踏入る、袴の紐を前うしる、楚と結びて中刀の、胸釘を潤す當座の用心、扇を肩に、さすが現、人品整ふ姿の華美き、引提て出る櫛室に、刀の意突立て、

とばかりに、擲をすれば、九念次は短に立て、臨より響く響石解ひて、開かね關の謝折戸さへ、腰旗ちつ、徳がなる、殿庭過て、長廊の、浮橋渡る後堂、縁廊よりぞ伴ひける。そのとき馬加常武は、遠く出迎へて、小文吾が手を携つ、賓席に推居るを、小文吾は固く辭ひて、敢その席に當らず。しばし請れてやうやくに、東面に坐を占て、送に寒暖を述、安否を問ふ程に、鎌倉様に結髪したる、女童がふたりして、小文吾に茶を薦め、花紅葉數種なる、菓子を折敷に積登せしを、もて來て等しく差めけり。是よりして配饌の男女、盃銚子を掌るあり。羹、羹、種種の、殺を安排るありて、饗應特に叮嚀也。かくて常武は、やをら、盃をとり揚て、犬田どの、且毒嘗を仕らん。曩には君命諫るに甲斐なく、肝膽もなほ胡越に等しく、可惜世の豪傑を、久しう籠にしつる事、意外の趣舎、差るになほ餘りあり。しかるにかううち解て、膝をまじえ歡びを盡すこと、一朝の苦心にあらず。主君の疑念を些しは釋きたる、某が月ごろの、方便さこそと亮察し給へ。いざいざ、といひかけて、その盃をさしければ、小文吾は進寄て、受戴きて、盃を、側に措て、左右なく飲まず。寔に圖ざる事によりて、去歲より衣食の頗食に預り、今亦山海の魚蔬を羅られて、淺からぬおん款待を受奉ること、皆是賢大夫の、客を愛し給ふ、好意にあらずといふことなし。歡び何ものかこれに優すべき。某は素市井の匹夫也。近ごろ故ありて、兩刀を帶るといへ共、身に一階の格式なく、人に敬る、徳もなし。然るをかくまで懇切なる、謝し奉るも憚りあり。といふを常武聞あへず、そは又介意あるに似たり。故の席に着給ひね。としばし、いはれて小文吾は、盃を持って退きつ、酒は飲むやうにして、竊に腕中へ傾け捨、肴も箸を添ながら、露ばかりも食ざりけり。とかくする程に日は暮て、彼此に置並べたる、菊燈臺の銀燭は、宛衆星の晃く如く、和漢の細工を盡たる、方圓の盃盤は、恰寶の市に入るに似たり。浩處に、年四十ばかりなる老女の、摺箔したる夾衣を被て、六ツ七ツばかりなる、女の子の手を掖たると、甘あまりなる男子の、肥て脂盈たる、身長も一ト炭高きが、黄黒の袴を穿たると、うちつれ立進み入て、小文吾に揖をしつ、躑躅あるじの傍にをり。

常武これらを見かへりて、小文吾にうち對ひ、犬田どの、是は荊婦戸牧也。彼は拙郎、馬加鞍彌吾也。母のほとりに候は女兒にて、鈴子と呼ぶもの也かし。子は四五人擧たれども、多くは襦袢の中に喪して、今は冢子と季女の。残りすくなくなりたり。といふに小文吾膝を進めて、歡びを述、名告をするに、戸牧はさしも鷹揚に、辭寡く應答訖れば、鞍彌吾もいと無禮げに、英名は去歳よりして、耳に轟きたる犬田どの、君父に憚るよしあれば、面をあはせがたかりしを、本意なしとのみ思ひしに、けふの圓坐は一刻千金、先や鬱胸を舞すべし。武藝は家業の事なれば、弓馬擊劍、鎗棒拳法、人に劣べうは思はねども、いまだ事に遭ざれば、戰場の進退は、熟士に譲りて、姑くいはず。折もあらば一ト、試合希ひ候。といふに常武微笑て、何を孩兒が小さかしげに、まけじ魂いはずもあれ。よき折なるに四天王等を、召よして酒を飯せよ。やよとくく。と急せば、次の間に聚ひ居たる、馬加が股肱の若黨、渡部綱平、下部季六、白井貞九郎、坂田金平太は、齊一阿と應じて、進み入て額をつき、その席末に居並びて、衆小文吾にうち對ひ、疊に當所へ入來の折、主人の側に侍りしかば、面を認められ候やらん。某は渡部綱平。某は云々と、名告をすれば小文吾は、いと慇懃に禮を返して、各位は源頼光の、四天王にも劣らざる、勇士とは誰も知るべき、姓名といひ骨相といひ、いと憑しく候。といはれて四人は羞たる色なく、賢察の如く、不幸にして、腕を砍るべき鬼女に得あはず。土蜘蛛などの變化も出ず。野飼の牛にこゝろを付れど、鬼童丸も躲れをらず。いく野の道の遠ければ、大江山路を踏わきて、酒頭童子が舊迹だも、見ることを得ざりしは、残念至極に候。と讀語爲句の似非的宏言に、小文吾は堪がたき、笑を袖に包あへず、うち咳きてぞ紛しける。かくて又くさくさなる、殺を添ていく遍となく、盃を巡らす程に、鞍彌吾と綱平等は、いたく酔ふたる癖なれば、兪輪の如く小文吾を、とり環しつゝ、誇兵に、武藝相換の技などを、いと謀々しく論ずれば、常武これを推禁めて、あながまや何事ぞ。すべて武士の武士くさきは、杖放の杖杖具きが如く、そは素よりの事なれば、めづらしげなく、いと嗚呼なり。並ね。と退けて鞆六をのみ呼解め。

汝は靈時其處にをれ、なほ分付る要事あり。とこゝろ得さしつ、微笑ながら、小文吾を見かへりて、犬田どの、さぞな傍痛かりけん。壯俊輩が殺風景は、いはする酒の科なれば、心になかけ給ひそ。たま〜愛を慰ん、と思ふものから興なほ淺かり。頃日鎌倉なる女田樂の、幾人かこゝへも來たり。そが中に、一人堪能のものあれば、呼とりて留置たり。渠を着に今一度、過し給へ。といふ聲洩るゝ、次の間には豫てより、絆の準備をしたりけん、大小の鼓を拍、笛を吹く婢兒共、いと美しき打扮して、出て縁頬にならびてをり。當下いと艶妖なる少女の、年は二八ばかりなるが、揚箔縫箔したる、六尺袖の表衣に、雑色の下襲して、炷籠たる奇南の香も、えならぬまでに、今の世にはいとめづらかなる帯の襷めきて、幅廣きを懸ぎまに、締なしたる、腰は風に靡く柳の如く、姿は獨立る花に似たり。色好みなる心もて、今これを見たらんには、魂忽地天外に飛て、この君の爲には、命も惜からずと思ふれど、小文吾は性として、靡色を嗜ざれば、目前に出て來ぬる、この少女をよくも見ず、こゝろの中には爪弾して、あらずもがなと思ひけり。かくて件の女田樂は、まづあるじ夫婦のかたにうち向ひて額をつき、又小文吾にも額をつき、それが儘些し退きて、この席の中央を、前面さまにしてゐたり。常武は咲しげに、遙にそなたを見いだして、やよ季六よ、汝は何と思ふやらん。これ程の俳優に、開場の白なくは、素本の源氏を讀に似たり。汝は武藝のみならず、猿ぼうにもこころを得たれば、瓣に呼とめ置たる也。やよとくく。と促せば、季六は酔に乘して、些も推辭む氣色なく、仰寔に理り也。いで〜。といひかけて、扇を取て再歩に、進み出つゝ、袴の襷積を、左右に拿て披せながら、件の少女が左のかたに、おし直り膝折伏して、靈時額つき、頭を擡て、訛たる聲をふり發し、東西々々、南北中央、この席上なる大人君子へ、敬て報奉る。罷出たる少女は、薪樵る鎌倉下り、名を且開野と呼ぶ、甲斐に、當今日の出の堪能もの。當處へは初度の見參、咲も揃はぬ初花に、降そ〜雨の足拍子、扇の風の手毎の間に、聊失つことありとも、そは海津藻のおん目ながに、鬱し給はんことを、庶幾奉りぬ。抑田樂の幾番なる、題目も亦多なり。そ

を數へんはことふりにたれど、就中、呪師、侏儒舞、田樂、傀儡子、唐術、品玉、輪鼓、八玉之曲、獨相撲に、獨
 雙陸、無骨有骨、延動大領之腰支、蝦、瀝舍人之足、仕、氷上專當之取袴、山背大御之指扇、琵琶法師之物語、千秋萬
 歳之酒禱、腹鼓之胸骨、螳螂舞之頭筋、福廣聖之袈裟求、妙高尼之襪襪乞、形勾當之面現、早職事之皮笛、目、舞之
 翁體、巫遊之氣、髮貌、京童之虛左禮、東人之初京上、これらは男、田樂の、僉宗とす「る」所、しかるを又この
 君は、男の技にも堪能にて、幾節竹の一本立、八尋細の綱渡、これらは特に本事也。さはさりながら更闌たれば、
 そは後會の事としとめて、今宵は且今様の舞踏の熊を仕らせて、御笑に備へまつらん。是則桃源の故事に倣ひた
 る、いとも愛たき一曲にて、山路の桃と名づけたり。その爲開場爾いふにこそ。と暗りつらねつ逃るが如く、次の間
 さして退きたる、跡には咄と婢女等が、腹を抱へて立もあり。得堪ず弗と噴出しつ、そが儘俯して笑ふもあり。山
 田の畔に樹隠れて、日影不樂と集る木兎の、たつをも知らず群雀、われから狂ふ散動には、且く鳴も已ざりけり。于
 有然程、つゝしりうたふ笛の音に、鼓のしらべ打そえて、立ぞあがれる且開野が、態も體も美しき。
 抑是は讚岐州、八嶋壇の浦のほとりたる、弓削山の麓に住ひ候、賤婦にて候。一日里の少女子とつれ立て、同
 國八栗山に遊び候程に、この谷川の水上より、いとも愛たき盃の、流れ來て候へば、原來この山の奥にこそ、
 浮世を遊たる神仙の、をはしますにや候はん。何處までもわけ登りて、たづねて見ばやと思ひ候。峯の白雲谷の
 水、源遠く來て見れば、現玉鐸のみちとせに、なるてふ桃の林かな。
 と唄ひ出せる聲澄て、佛の國にありてふ鳥の、迦陵頻伽もかくこそ、と見る目あやしき舞の袖、翳す扇の蝶々の、閃
 めく桃の花鏡兒に、光照添ふ燈燭の、花や物いふ序破急の、節曲比類なべて世の、俳優人は數ならずとて、常武夫婦
 鈴子等は、瞬もせず見惚たる、紙門障子のあなたより、覗く奴婢等の幾人歟、人を極わけ、推わきあへず、頭に頭
 をうち果ね、目に目並べて餘念なき、眺に時を移しけり。かくて舞曲も果しかば、戸牧は罷て婢兒等に、こゝろ得さ

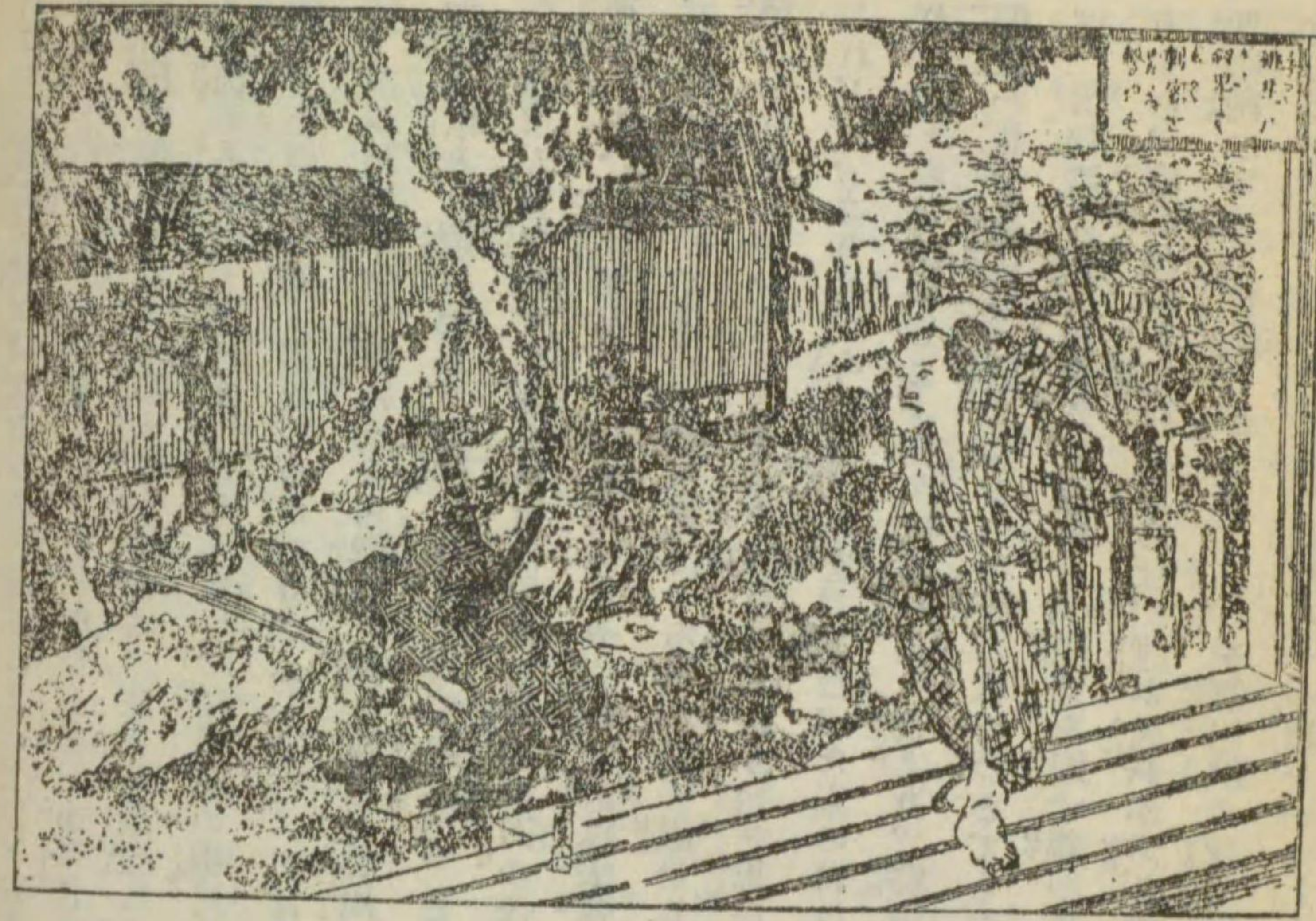
せし籠頭の、小袖一ト襲をもていてさして、且開野に取らせしかば、そが儘肩にうちかけて、横笛或の婢兒等の、先に
 立てぞ退きける。時は四月の下流にて、夜はいと短き比なれば、曉るともなき鐘の聲に、東ははやくしらみたり。小
 文吾は困じ果たる、俳優の稍終るとやがて、あるじ夫婦に別を告て、退き出んとしけるを、常武頻りに推留めて、何
 どてさのみ急ぎ給ふぞ。是處も彼處もわが家也。殊さらこの新亭は、をさく眺望の爲に建たり。彼首の意を推開
 けば、墨田河の流れ、大かたならず見ゆるをもて、即便これを臨江亭と命け、又樓上より眺れば、牛島葛西の海邊ま
 で、すべて眼下にあるをもて、對牛樓と名づけたり。誘給へ。薄茶一服進らせん。といはれて小文吾推辭むによしな
 く、側に置たる腋挿の刀を取て立んとするに、白銀をもて造りなしたる、桃花の鏡兒の、何の程にか落かゝりて、刀
 の緒に挟りたり。こはいかに、と訝りつゝ、そのほとりに侍りたる、婢兒共を見かへりて、こは何人の遺したる。そな
 た達にはあらずや。と問つゝ取てさし出せば、一箇の婢兒受とりて、こは且開野が物に侍り。嚮に素を舞ひしとき、
 振遺せしを知らざりけん、といふに小文吾領きて、しからばそなたに遞與したり。楚と屈けて給ひね。といひかけて
 はや身を起し、引れて對牛樓にうち登れば、常武は婢兒等に、雨戸遺なく開せたり。當下小文吾は、且頭を回して、
 彼此と見かへるに、樓上の東、向には、僧一山が欸印ある、對牛彈琴といふ、四大字の額を掲げて、左右には、唐の
 王勃が、蜀中九日の詩を、白字に鏤たる竹聯あり。時は今、夏と秋との違ひあれども、犬田が爲にはこゝも亦、望郷
 の臺にして、北地より來る鴻雁はなけれど、いざこととんと詠れたる、都鳥は今もありけり。かくて欄干に身を倚
 せて、つく／＼と見たせば、天ははや明し横雲の、色紙めきたるに筆はなけれど、誰が硯せし墨田河、前面に黒き
 牛嶋は、宛も水に臥せるが如く、彼方に蒼き柳嶋は、糸よる瀟に靡くに似たり。世間は、何に歸ん朝開、趾なき如と、
 滿誓が、詠たる歌はしら波に、漁翁生涯一ト葉の舟、東へ漕くあり、西に歌るあり。莫西村落幾戸の烟、南に沖あり、
 北に滅るあり。鎌田、浮田、行徳の浦々、あれ歟とぞ思ふ目も廻に、登る旭を舊里の、方とし見れば翁さびし父のう

へ又親戚の事、曾に湛てながらふる、甲斐こそなけれ剣刀、身を浮橋の中絶し、この石濱の玉塵より、數し蘊れる艱難憂苦の、遺瀨は絶てなかりけり。常武これを慰めて、犬田殿犬田殿、いつまで物を思ひ給ふぞ。尺、螻の伸んとするとき、且その身を縮むといへば、窮達時あり、運によるべし。あれ彼船を見給はずや。久しう水際繋れたるあり、又眞帆揚て走るあり。繋ぎし船は走るべからず。走る船は留りがたし。和殿が今の滞留も、只この理をもて悟るべし。これをわがうへに譬ていはゞ、君は船なり、臣は水なり。水はよく船を浮べて、又よく船を覆す。自胤は暗愚の弱將、菽麥をだも辨へ得ざれば、いかでか和殿を知るものならん。彼鄰國なる敵の爲に、滅されんこと疑ひなし。某も亦千葉の一族、馬加光輝が侄なれば、代て取るとも、誰か咎めん。然れば享徳の例に倣ふて、自胤に詰腹切らせ、わが兒鞍彌吾常尙を、當城の主にせばや、と思はざるにあらねども、いまだ智勇の軍師を得ず。和殿今よりわれを佐けて、事成るときは葛西の中、半郡を宛行ふべし。うけ引れんや。と小膝を進めて、亦他事もなく聶けば、小文吾聞て貌を改め、こは思ひがけもなき、密議を談ぜらるゝものかな。某素より學問せざれば、聖の教はよくも知らねど、譬を取て利害を推し。貴所は只水と船との、反覆を説給へども、順逆の理に暗きにあらずや。いかにとなれば、水の船を浮むるは經なり。その船を覆すは變也。苟も只その變を己が利として、その經を取らざるものは、亂臣賊子の心なるべし。君臣禮あり、舟車に楫あり。君臣禮を失ふときは、舟車に楫を失ふが如し。一旦その利を得るといふとも、滅亡せん事疑ひなし。いにしへより臣として、その君を弑せしもの、誰かよくその久しきを保ちたる。希、望は、非義の妄想を除去て、千葉家の諸葛といはれ給はゞ、徳證後世に芳流して、子孫餘慶を承ることあらん。某武藝を好めども、短才にして文學なし。いかでか人の佐となるべき。只その志す所は、忠信の狗となるとも、亂離の人とならじとのみ、念する外は候はず。と憚る氣色もなく答へしかば、常武は勃然と、怒は面に見れども、手を叉きて物いはず。忽地莞爾とうち笑て、いはるゝ趣、道理に稱へり。われも亦如右思ふのみ。今の言は亂

れにて、漫に和殿を試みたるに、思ふにましていと愚もし。心にかけ給ひそ。先早飯をまゐらせんに、こなたへ來ませ。といひかけて、廳で樓下に誘引ひしを、小文吾は後方に立つ、階子を下りて別を告、又九念次に送られて、幹淨房に還りけり。却説犬田小文吾は、ひとり縁頼に立出て、面を洗ひ口漱んとて、淨手盤に立よる程に、母屋の庭より洗し入るゝ、寛の水に木葉ありて、淨手盤の中に入りたり。心ともなく取あげ見るに、こは和多羅葉と呼ぶ木葉にて、その葉の裏に書たるものあり。ふかくこゝろに怪みて、うち返しつゝよく見るに、

へわけ入りし葉たえたる麓路に流れも出よ谷川の桃

一首の歌とは讀れたり。熟、そのこゝろを思ふに、こは昨夕酒宴の席上にて、彼桃源の俳優したる、且開野が所爲なるべし。もし果してしからんには、わが腋挿の刀のほとりへ、彼劍兒を遣せしも、意ありての事とはしらる。これも亦馬加が、誘せんとの爲にあらずや。彼常武は去歳よりして、われを推留め閉籠たりしに、きのふ猛に母屋に招きて、親切めかせし歌儂酒宴を、こゝろ得がたく思ひしに、渠は素より逆心ありて、その主君たる自胤ぬしを、亡さん爲にわれをもて、股肱とすべき底意によれり、と思ひ合せしその密議を、説破りつゝ、窘しを、陽にはうけ引く如くなれども、さりとして今さら、志を、改むべきものにはあらず。なほ懲すまに色をもて、われを逆徒に引入れん、と謀れることをかきさよ。しかはあれども初より、渠が密議に従はず、なほ色をもて誘ふを、怒に乗して罵辱しめば、渠又われを速に、害せんとこそ謀らるめ。とてもかくても脱れがたき、時運ならばいかにせん。今袋の爲に捨ん命は、惜むによしもなきことながら、歎きを遣す親の事、迭に生死を契りたる、四犬士に環りもあはて、曳手單節が往方すら、索かねつゝ空しくならば、誰か又わが方ざまに、かうなりけり、と告やはする。これをおもひ彼を思へば、世に稀なるべき旅泊の悲しみ、腸を斷巴峽の猿の、叫ぶを聞けん人は物かは、既に覺期を究めたれども、脱れん程は脱るゝぞよき、只用心に優ることなし、と思ひかへしつゝ、夜は殊さらに、目睡もせて身を護るに、三度の饌も、その餘



(す 殺 撃 を 客 刺 く よ 兒 奴 の 花 桃)

の事も、母屋の扱護日ごろにはならず。然ばとて復招きもせず、およそは閑暇無事にして、十日あまりを過す程に、降み降ずみ皐月雨に、檐の玉水音のみぞする、五月申漸になりしかば、憊るとにはあらねども、やうやくに勞倦をまして、一日甲夜より假寐したれば、まだ縁頼なる雨戸も引ず、天めづらしき皐月霽に、十四日の月隈なく照らして、障子にうつる人影あり。小文吾忽地駭き覺て、脱落にけり、と遽しく、頭を撞て見かへる程に、外面に苦と叫ぶ聲して、撞と仆るゝ人音に、小文吾ふたたびうち駭きて、刀を引提て縁頼なる、障子をやをら開つゝ見れば、紛ふべくもあらぬ隙の癖者、手には刃を
持ながら、仰ぎまに仆れたる、その項のあたりより、血の夥しく流れ出たり。こは何もの敷わが爲に、擊留けんと思ふにも、且疑ひ且怪みて、白晝の如く明かりける、月を便りに件の死骸を、引起しつゝなほよく見れば、桃花の添飭したる。白銀の鉸見を、盆の窪の眞中より、吮までぞ打込たる。只この事の奇異のみならず、擊れて死したる癖者は、常武が股腹の若黨、下部至六なりけ

れば、原來常武わが虚を猜して、このものをもて撃せん、と謀りし事は違はざれど、この鉸見も獲て認めれる、彼且開野が物とし聞けば、わが爲にこの仇を、殺せしは彼少女なる歟。渠は女田樂なれども、輪鼓、品玉、刀玉、八玉、綱渡の技などにも、をさく長たるものといへば、さる俳優より自然と熟して、銃鏡を撃ことさへに、その妙を得しものなる歟、それかあらぬ歟、とばかりに、惑ひは解ぬ夏の霜、傾く月の影見れば、夜は丑三の比なりけり。かくて又小文吾は、ふたゝび心に思ふやう、この季六が擊殺されしを、はやく常武に知られなば、渠かならず多勢をもて、われを撃捕んとするなるべし。かゝれば死骸を推隠して、得しらぬ良にて常武が、猶せんやうを勘察して、生死を其處に究むべし、とひとり點頭く簞竹の、ほとりに伏たる手應の石を、掻起しつゝもて來つゝ、死骸の裳に推包み、既にして曲演の、深水へやをら沈むる折から、月は忽地雲隠れして、朦朧となるまゝに、あなたの庭の松を傳ふて、はや築垣を踰るものあり。小文吾はやく透し見て、扱はふたゝびわがうへなり。えうこそあれ、と潜歩しつゝ、身の程掩ふ袖垣を、小盾にとりて隠待せり。さる程に癖者は、頬被せし手拭の、端を銜て築垣を、閃りと降立こなたの庭面、樹間々々を遶り來て、且縁頼に手を掛て、裡面のやうを透し見つ、進み入んとする程に、小文吾はやく走り出て、癖者等。と叫びもあへず、刀を亮りと引抜て、砍らんとすれば、吐嗟とばかり、刃の下を彼此と、落り脱つゝ一間あまり、後さまに飛退て、やよ犬田ぬし、吾儕で侍り。早りて怪我を、さし給ふな。といふ聲聞けば女子也。小文吾は訝りながら、刃を小脇に引著て、然いふは誰ぞ。と透し見る、天にもこゝる鮮明の、月を吐く雲、はや適過て、限なき光にふたゝび見れば、見忘れもせぬ且開野也。さりとして小文吾油断せず、いぬる面目を認るのみにて、物いひはれしこともなきに、女子に似げなく夜をこめて、垣を乗り越界を犯し、潜びて來つるは故もやある。と問質されて恥かはしげに、その疑ひは理りながら、嚮にわらはが打かけて、おん身の仇を擊留たる、花鉸兒を見給ふても、心は大かたしられもせんに、物いはぬとは相見たる、夏野の男女郎花、結ぶは露の玉櫛笥、ふたゝびこゝにあはんとて、神を

かけ樋に流したる、木の葉に示せし水莖の、深き思ひを今さらに、知らず良なる薄情。とても愜はぬ戀ならば、切ておん身の手にかゝりて、死んとまてに覺期して、來つるを不便と見給はずや。心づよし。と怨ずれば、小文吾聞て冷笑ひ、浮たる技もて世を渡る、俳優などはさもあらん。われは素より色を好まず。身に罪なくて囚れと、なりし憂苦を外にして、化なる戀に靡んや。そは實情にはあらずして、竊に人に相譚れてわれを惑はす便點にこそ。といはれていと恨しげに、顔つくくんとうち瞻仰て、嚮に贈りし歌のみならば、然る疑ひを稟もせん。女子のうへには有まじき、花釵兒に血を染しを、誰が爲なりきと思はれけん。希婦の陝布胸あはて、盡す誠の届かずは、とくく殺し給ひね。と刃に怕れず身を衝附し、覺期の氣色に、小文吾は、いふにや及ぶ、と拿直す、刃を引提て背のかたに、立遶りつゝふり揚ても、些も騒がぬ女子の一心、項を延し、掌を、うち合しつゝつゝいるたるを、小文吾靈時と見かう見て、刃を鞘に納めても、治りがたき當座の難義に、靈時念じて、辭をやわらげ、死をだに厭はぬそなたの痴情、稍疑ひは解たれども、いよく逼るわが身の蓄害、とてもかくても久後遂がたき、妹伏と思ひ諦めて、とくくかへり給へかし。といふを且開野見かへりて、然る御ころのあるならば、いかでわらはを伴ふて、竊に脱れ出給はずや。手を束つゝ寛なす人に、苦しめられて後終に、命を喪ひ給はんは、いと愚にも侍るか。と罵されても小文吾は、嗟嘆に堪ず額を押拊、脱れ去らるゝものならば、けふまでかくてやはあらん。彼首に鎖せし諸折戸を、踰んは軋きわさながら、夜は殊更に出入を許さぬ、城の門戸をいかにかすべき。といふを且開野聞あへず、そは亦手段の侍るなり。わらはこの廿日あまり、馬加殿に留められて、内外の事をよく知り。大凡城を出入するもの、晝は晝の符牌あり、夜も亦夜の符牌あり、竊に方便を旋らして、その符牌だに手に入らば、出るに難きことやは侍る。と聾き示せば、小文吾は、歡び面にあらはれて、そは幸ひの事ながら、見咎められなば毛を吹て、疵を求る後悔あらん。疎忽の舉動し給ふな。とこゝろを付れば顔きて、いはるゝまでも侍らねど、只俯みて日を過さば、おん身はいよく危がるべし。命にかけ

て翌の夜は、件の符牌を取らん事、曉までは過し候らじ。よろづの用意して、俵給ひね。と遣しき、竊に小文吾感激して、かくはそなたの助けによりて、脱れて出る事を得ば、これ天縁の端ざる也。豫て契りし友の爲に、なすべき事をなし果て、やうやくこの身の落著は、迎へとりて妻とせん。嚮に卜部季六を、擊留られし釵兒は、わが手に留めてこゝにあり。受納め給へかし。といひつゝ返せば、手にとりて、睡れる龍の腮を撈りて、探る珠よりもなほなし難き、符牌を取る歟、わらはが命を、果敢なく其處に喪ふ歟。生死不定の大事を抱へて、この釵兒を何にせん。翌の首途の手向草、小柴に代て道祖神に、贊まらせん。と曲演へ、そが儘閃りと投入れて、伏拜みつゝ立あがり、喃犬田ぬし、いふべき事は多なれど、相譚ふ程は短夜の、こゝに明なば岩橋の、契りも遂に絶ぬべし。只翌の夜をまち給へ。さらば。とばかりいひかけて、故の樹の間を遶りゆく、裳褰けて築垣へ、登るもはやき田樂の、技に熟たる身の翻し、閃りと松に手をかけて、彼方の庭へ降ると思へば、姿は見えずなりにけり。嗚呼伶人にも隠君子あり、歌舞妓にも亦節操遊俠なからんや。むかし逢阪山の蟬丸は、榮枯得失、遇不遇の理りを諷詠し、みづからこれを琵琶に奏して、もて濁世の煩惱を脱離せり、又華夏の靜娟は、鶴岡の社壇にて、廷尉別離の愁訴に代るに、吉野山の歌を吟じて、右幕府の震怒を怕れず。況て千壽が重衡を、相憐て死に至り、又微妙が親を慕ふて、よく尼になれるが如き、亦その所を得たりといはまし。畢竟且開野、竊に小文吾を資けて、又甚麼なる話説かある。そは次の巻に、解分るを見て知らん。

第五十七回

對牛樓に毛野鬻を塵にす
墨田河に文吾船を逐ふ

却説犬田小文吾は、且開野が又垣をうち越て、はやくも母屋へ還りたる、そなたを靈時目送りて、懸て臥房に入りし
かど、心おちぬぬ翌の事、さるにても且開野は、田樂傀儡に儔稀なる、男魂あるのみならず、百歩あまりあなたな
る、築垣のほとりより、釵兒をもて季六を、擊留たりし手煉といひ、飽までわれを奨したる、心操の雄々しさよ。今
圖らずも彼少女の、資によりてこの處を、脱れ出る事を得ば、海月の骨にあふこもましたる、得がたき幸ひなるべ
れども、常武も亦搔拊の、敵手にしもあらざれば、城門出入の符牌などを、等閑にして盗れんや。もし事成らずは
且開野は、命を其處に隕すべし。情慾とはいへど俠氣ある、可惜少女をわれゆゑに、喪事不便也、といふて今さら
術もなし。女々しく物を思はんより、彼我が運を天に任して、翌の便宜を俟ばや、と思ふも果しなつ夜の、明れば
五月十五日、この日は朝より雨降そゞぎて、未の比より天霽たり。小文吾は心にかゝる、季六が撃れし事を、常武は
やく猜しなば、多勢をもつてわれを撃つべし。今や討手の來つる歟とて、刀の寢刃を磨しつゝ、終日油斷せざりしか
ども、男童等が三たびの飯を、運ぶも日ごろに異なることなく、けふもはかなく暮にけり。故あるかな常武は、いぬ
る日對牛樓にて小文吾に、密謀を告て相譚ひしに、絶て承引氣色なければ、只速に結果て、後の患を除んとて、
且男童等にこゝろ得させて、日毎々々に小文吾が爲難を、窺せしに、凡十日あまりを経て、小文吾は夜となく日とな

く、肝心に際なかりし程に、やうやくに懲られて、をり／＼熟睡することあり、と彼童等が報しかば、擬は心やすし
とて、竊に下部季六をもて、一夕小文吾を撃せんと謀りしに、次の日に至りても、季六はかへり來ず、還て小文吾は
恙もなく、幹淨房にをるよしなれば、常武いよ／＼疑惑ふて、又男童をもて密々に、彼處のやうを窺せしに、
曲演のほとりなる、草葉に塗れし鮮血あり。又曲演の水常に異りて、薄紅なりき、と報しかば、常武頻りに太息を吻
て、肚裏の思ふやう、原來昨夕季六は、返撃にせられしを、小文吾がその死骸を、水に洗めて隠せしならん。われそ
の死骸を穿鑿して、人殺しの罪をもて、小文吾を撃せんに、幾十人をもてすとも、自胤もわれを非として、咎め給
ふによしなからん。としてや撃せん、かくやすべき、と靈時肝膽を摧くものから、この日五月十五日は、その子鞍
彌吾が誕辰なるをもて、年毎に城中なる、甲乙を招聚合て、壽の席を開き、酒もり遊ぶ吉例あれば、已ことを得
ず小文吾を、擊捕の一議は明後日に延して、この日午の比及より、賓主盃をめぐらして歡びを盡し、且開野が田樂
能に、各々興を催す程に、長き日ぐらし遊び足らで、燭を續げども尙飽ず、その夜子二ツの比に至りて、客は漸々に
歸去り、あるじ親子主従は、泥の如く醉ざるものなく、或は臥房に倭燈き入り、或は處々に倒たる、鼾睡の音は牝
を争ふ、田野猫よりも囂しく、前後も知らず臥したりける。されば又小文吾は、母屋にてかゝる醜會の、ありとし
も知らざれば、晝は終日わがうへに、討手や來ると油斷せず、日暮ては且開野が事のみ心もとなければ、或は外に出、
背門に立、又築垣に耳をよせて、彼方の容を知らんとするに、對牛樓敷とおぼしくて、笛鼓の音聞えしかば、原來今
宵も酒宴ありて、舞うたはせて遊ぶにこそ。よき折なれば且開野は、符牌を奪ふ便や得たる。いかに／＼、と思ふ程
に、夏の夜はやく更闌て、又音曲のしらべも聞えず、寂寥として夜風涼しく、樹間々々を照らすなる、月影のみぞ明
かりける。當下小文吾は、舊所に退きて、さらに又思ふやう、今宵且開野がなす事の、成る成らざるはとまれかく
まれ、あれ程に迄約束したるに、用意もせてをらば、實なきものと思ふべし。行包と笠より外に、身に添ふ物はな

けれども、既に時刻の近づきぬらん、準備をせばや、と遽しく、物とり集て、裳袴を、袴りからぐる三尺手拭、楚と結びて、脚絆を着て、腰に放さぬ中刀の、さして往方はまだ定めねど、大刀引提て縁頼に、立出て見れば望月の、西に近づく景清み、嘸報る鐘の聲、數復れば四更なりけり。時に母屋のかたに當りて、頻りに人の叫ぶが如く、踏鳴らすその足音さへに、いとも幽に聞えしかば、小文吾耳を敬て、扱は且開野、事成らずして、見咎められて捕はるゝ歟。然らずは酒狂の圖諍歟。心もとなしにぞや、と思ふに胸のみ騒がれて、外に出て見つ、入りて見つ、千々に心を碎くこと、凡半時許にして、物の音は静りぬ。彼垣一重に隔てられて、こととふべくもあらぬ身は、靴を隔て舞を搔くに、なほその手だも届かぬに似たり。縦今且開野は、搦捕られたればとて、われ惣に命を捨て、救んと欲するとも、轆鮒を枯魚の市に問ひ、麀鹿を肉俎の上に、憐むに似てその甲斐なからん。よしなや渠に大事を任して、可惜烈女を殺さるべし。われ愧りあやまてり。とひとりごちつゝ縁頼に、尻うちかけて母屋のかたを、なほつくづくとうち見てをり。浩處にあなたの庭なる、松を傳ふて築垣を、跳越つゝ飛鳥の如く、こなたへ走り來るものあり。小文吾亦復得うち騒ぎて、そは且開野歟。と呼かくる、程しもあらず且開野は、素す黒髪、劈れたる、衣に鮮血の韓絳、右手には明晃々たる、氷の刃を抜拿て、左手に物を引提つゝ、はやくも走り近づきて、犬田主々々、さこそは待かね給ひけめ。辛じて約束の符牌は手に入り侍りたり。是見給へ。といひかけて、縁頼へ投出すを、小文吾は訝ながら、裡より光さず燈火と、天に隈なき月影に、引よして見れば符牌にあらで、思ひがけなき馬如大記常武が首級なりければ、こはくゝいかに。と駭きて、先そのよしを語れば、且開野莞爾とうち笑みて、縁故を告ざりければ、疑惑は寔に理り也。吾儕は素より女にあらず。今は何をか懸むべき。往時寛正六年、冬十一月、馬加常武が奸計の讒訴に陥られて、籠山逸東太縁連に撃れたる、千葉家一族の老黨なりける、栗原原首胤良が、遺腹兒は吾儕にて、大坂毛野胤智と名告れども、浮世を潜ふ女田樂、俗字の毛野を襲りて、且開野と呼らるゝも、深き故あるべし。

世の風聞に聞れたりけん、父の正妻、各は繼婦、わが兄果實、幼習かりし鏡玉松に在るまで、常武が母に對し、喪れて、親戚も連坐の科を蒙り、家系傳斷絶せしより、はや十五年の月日を經たり。わが母は父の妾にて、名を調布と呼れしが、有身しより三歳まで、産の紐を解ざりければ、知音醫師等相告て、血塊也といふにより、辛く命を助けられて、臈て追放せられにけり。かくて由縁を心あてに、相摸州足柄郡、大坂の里に落留りて、その年の十二月、安らに吾儕を分娩しぬ。然れども千葉家に聞えを憚り、女の子也人には報てわが名を毛野とつけられしが、兩年の程にして、貯財も竭果しかば、母は吾儕をかき抱きつゝ、竊に其處を立出て、鎌倉へ赴くものから、さりとして世渡る便着はあらず。母は只俳優の、鼓を拍に妙なりければ、女田樂等に雇れて、その技をもてともかくも、吾儕を字育給ひしに、なほ馬加に知られじとて、八九歳の比よりして、吾儕をも亦田樂の、隊に入れつゝ且暮に、技を習せられしかば、熟るゝに易き遊藝の、人にしられて且開野ともて囃さるゝ不便趣舎。かくていくその月日を送るに、わが年十三なりし秋、憂事積れる母の大病、頼みすくなく見えし比、吾儕を枕邊に近づけて、おん身が素生は如此如此と、親の事兄弟の事、馬加籠山兩箇の冤家の、事の趣遺もなく、告られしより淺ましく、いと悲しく朽をしく、いかで兩箇の讐敵を、撃て亡父に手向すは、われ人の子と生れし甲斐なし。縁連こそ往方はしれぬ、常武は今もなほ石濱の城にあらん。先常武を撃捕て、後に縁連を索んものを、とこの時思ひ決めしかども、母の看病に暇なければ、且く時を俟程に、哀しきかな垂乳女は、その年の冬身まかりぬ。忌ども既に閑しより、この石濱へ赴きて、いかで怨を復さん、と思ふに甲斐なきこの身の生育、輪鼓、品玉、綱渡り、或は今様田樂舞の、外には得たる技もあらず。大刀抜く術もしらずして、彼大敵を撃んこと、かなふべくもあらざれば、心ならずも復讐の、時を延しつゝ、田樂の、技に假れ、夜となく日となく、習覺し自得の武藝は、擊術、拳法、鎗、薙刀、鉄鏡、組撃、鎗、誰語るにあらねども、心を師とせし自然の煥煉、既に三年に及びしかば、神物有てわが術を、祐らるゝと思ふばかりに、自我一流を

究めたり。父祖は千葉家の一族にて、家系正しき武士なりしに、われいかなれば幼少より、俳優人となるのみならず、たま／＼男子と生れながら、女子となりて世を渡れるは、人間の不幸、これにますものなしといへども、又これなくはいかにして、彼常武等に近づくべき。わが宿望を遂る日まで、なほ此儘にてあるこそよけれ、と思ひかへしつ、心にも、あらて日毎の髪化粧、物のいひざま進止ひまで、よろづ女子のおも／＼ちして、近ごろ女田樂の一隊と列立て、はじめてこの地に來たりしに、誠心の致す所、天助空しからずして、求ずも仇人常武が、招きに應じて廿日あり、母屋に逗留せし程に、人傳に聞く和殿の行狀世に稀なるべき勇士ならんを、捨殺しにすべきにあらざり。わが宿望を遂る日に、相伴ふて走らばや、と思ひにければ舞曲の宵に、竊に桃の花鉞兒を、座邊に遺してこれを試み、爾後桃源の歌をもて、相憐むの意を示し、又昨夕は常武が、若黨季六を刺客として、和殿を害せんと謀りしを、われ洩聞て迹を跟け、あの築垣のほとりより、鉞兒をもて思ひのまゝに、季六を撃留たり。さればその折斷語をもて、相譚よりつゝ、情を示して、再び和殿を試みに、色に迷はぬ大丈夫、柳下惠にも恥ることなし。今はかうと思ひしかば、城の符牌に假托て、約束しつるは、親の讐を、撃捕らん夜に相伴て、走り去らんと思へば也。天なるかな時なるかな、けふは鞍彌吾常尙が、誕辰の壽きとて、主客酒宴に目を消し、眞夜中比に席を收めて、來客は皆退き去り、常武親子主従は、彼此に醉臥したり。今宵怨を復さずは、何の時を期すべきやとて、隠し指たる利刀を、竊に引提て窺へば、常武父子綱平等は、對牛樓に假寝せり、先はや這奴等を撃んとて、登る階子は潜龍の、蜚語を得たる心地して、潜び寄つゝ常武が、枕邊に直立て、天地に響けと聲高やかに、馬加常武とく覺よ。昔年汝が讒訴によつて、杉門路にて撃れたる、粟飯原首胤度が、妾孕なる遺腹兒、相摸の犬坂にて生れしかば、その里の名を家號に替たる、大坂毛野胤智、こにあり。親の讐、兄弟等の、怨を復す今時目今、起て勝負を決せずや、と名告かけ呼聲して、枕を蹴と蹴てければ、常武驚駭、眼を睜て、眼をなげける常武の、刃を斬て擲んとするを、然しも疑はず、常武は、

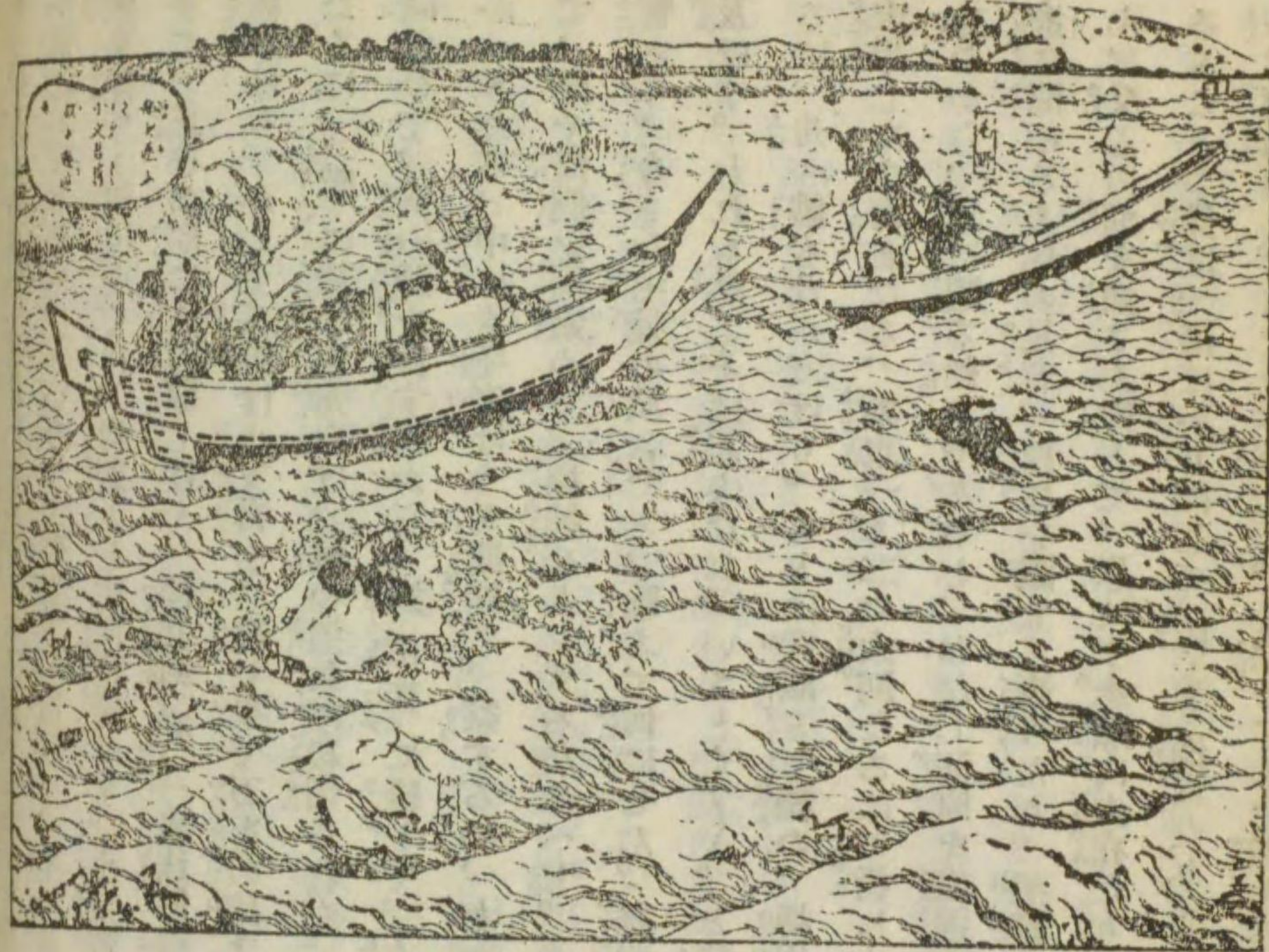
胸を穿て、齒を剥ぎ、並たる階の、骨をかけてぞ斬たりける。左若に脱たる常武常平、一擲てうち、擲は擲者脱さじとて、共に刀を引抜打振り、撃んとするを右に受、左に拂ふ奮撃突戰、乙と嘯て鞍彌吾が、刃を愛哩と擊落せば、駭嚇て逃んとしたる、背をふかく劈て、仰反るところを横ざまに、研はなちたる腰車、ふたつになりて仆れたり。この大刀音に女房戸收は、驚き覺て、霎時もありず、こは何事ぞ、と呼掛々々、登る階子のこなたには、手疵に怯む渡部綱平、刃を引て逃んとしたる、撞見際に眼眩みて、わが助撃とや思ひけん、戸收を一ト大刀破と破る、破られて苦と叫びもあへず、階子の上より仰ざまに、落る下にて女兒の鈴子が、母を慕ふて起て來つ、母御々々と呼かけたる、その頂の眞中へ、直倒に墮しかば、鈴子は母に項骨を、撲折かれて矢庭に死し、戸收も共に臥累りて、忽地息は絶てけり。綱平これに心やつきけん、呆迷ふて引返しつゝ、ふた／＼び吾儕に殺て蒐るを、雙手難切に撃捕たり。はや樓上には敵もなし。残る奴原目に物見せん。としづかに樓下にをり立て、間毎の紙門蹴放せば、まだ酔醒ぬ金平太、老僕九念次、貞九郎、奴隸まじりに多勢を憑む、短鎗、桿棒、貸刀、得物々々を打振て、足並取次に撃んと競ふを、縦横無碍に追崩す、群る羊の牧の中へ、猛虎の衝て入る如く、薄手負せし白井の貞九が、逃んとするを韓竹割返す刀に金平太が、短鎗を丁と破折て、鼻掛たる合掌撃、最期の十念、九念次も、數个所の痛手に倭燈々々、逃るを透さず背より、あびせかけたる大刀風に、血姻立てぞ死てける。残る奴隸の幾人か、僮僕まじりに逃迷ひつゝ、追詰られて南厨の土間に、高く積たる米苞の蔭に、推合減合驟る、程に、遂に米苞を推頰しつゝ、忽地撞と墜かれば、密張孔目の男童等は、これに撲れて目子飛出、或は肩骨腰の骨撲拗がれて自滅を取るもの、六七人に及びたり。残るも半死半生にて、隠伏て手を合しつゝ、免させ給へ、と勸解しかば、さのみは無益の殺生と、思ひ捨てこれを撃ず。ふた／＼び樓上に走登りて、仇人の血をもて傍の壁へ、

爲ニ父兄一鑿、爲ニ舊主鋤、好、自、今而後、知、君之爲、君、勿、使、編、葛、復、倒、絹。

文明十一年己亥夏五月十六日、天粟飯原首胤度遺腹子、犬坂毛野胤智、十五歳書

と五十餘言を書留め、懸て馬加常武が首級引提て來つる也。と息物あへず説示せば、小文吾は聞く事毎に、類に感嘆の聲をたゞず。われ初よりその言と、行ひの凡ならぬを、世に有がたき少女にこそ、と思ひしはなほ疎にて、扱は人言に傳聞たる、粟飯原大人の子なりしよ。三歳は永き胎内にて、未生に畜害を避られしも、天孝烈の勇士を生じて、冤を伸、世を濟はせ給ふ、一大奇事といはまくのみ。御邊生年十五歳、三年胎に在りしを數て、十七歳といふといへども、單身にして十數人の、大敵を撃撃されしは、いにしへにまだ聞かず。後の世はなほ有がたかるべし。いふべき事も夥あり、聞べき事も多なれど、こゝは清談の室にあらず。もし虚々と夜を曉さば、城兵等に捕籠られて、擣となるの後悔あらん。とはいへ脱れ出るに路なし。御邊のこゝろいかにぞや。と問れて毛野はうち領き、某馬加許在りし程、夜毎に臥房をぬけ出て、城の要害、藪の淺深、こゝより脱れ去らんと思ふ、その處をよく見究めたり。誘給へ。といひかけて、亂れし髪を推執ね、仇人馬加常武が首級引よせて、鬚を、結合して腰に著、裳を高く帯に夾みて、先に立つ、踏折戸の、筈木に飛びつき、手をかけて、閃りと外面へをり立つ、輒く鎖を振斷捨て、やをら門扉を推開けば、小文吾はその神速に、感じて舌を掉ひつゝ、われは寔に及びがたし。と稱へて俱に馬加が、屋敷を出て潜やかに、うちつれ立てゆく程に、毛野は豫て見究め置たる、搦手の東の土手なる、樹粒深き中に到れり。この處は、藪の幅も廣からねど、なほ四丈あまりはあるべし。當下毛野は腰に著たる、準備の鈎索を取出すに、その索の端の處に、繫丸めきたる物を附たり。扱その物なき索の端を、こなたの松に結留め、件の丸を握拿て、前面の水際に斜に柱たる、揚を望んで擲つに、窟違はずその幹へ、丸は三ツ四ツからみ着て、引結びたるごとくになりたり。さらば向へ渡さんとて、件の索に足踏かけて、走りて向へ越くに、平地をゆくより易かりければ、小文吾類に感嘆して、續きて渡らんと思へども、太くもあらぬ一ト條の、索には足を掛くべくもあらず、思然れ懸懸て、驚、脱に懸懸たり。毛野は越にこれを

見て、魁からまへたる索の端を、なほも懸へ懸留めて、ふたゞびこなたへ渡り來つ、犬田ぬ、懸留ふことかは。索が肩にかゝり給へ。といひつゝ、背をさし向けて、その身より二歳も、いと大きな小文吾を、輒く背負ふて徐々と、索を踏つゝ渡りゆくに、自若として面色變ぜず。小文吾ます、駭き感じて、むかし宇治河の戦ひに、彼橋桁を走渡りて、思ひの隨に大刀撃しけん、筒井明春、一來法師等也といふとも、いかでかこれに優べきやとて、不測の助けを歡びけり。かくて毛野は小文吾を、渡し果て刀を引抜き、件の索を水中へ、敬捨て、天うち仰ぎ、東ははやくしらみたるに、惣に陸地を走らば、城の追兵に殺留られん。墨田河をうち渡して、俱に進退を定むべし。といふに小文吾諾なひて、齊一踵を旋す折から、城中猛に騒しく、人數を集る大鼓の音の、いとも烈しく聞えしかば、兩人乞と見かへりたる、中にも毛野はうち點頭て、察するに、わが撃漏せし常武が、奴隸等の告訴によりて、城より夥の兵もて、はや俺們を獵索めて、搦捕せんとするなるべし。そは怖るゝに足るものならねど、なほ籠山縁連といふ、一箇の警あり。今さら追捕の城兵と、戦ふて何にせん。誘給へ共侶に、いそぎて前岸へ渡すべし。といふに小文吾一議に及ばず。われも然こそは思ふなれ。いざとく。と後になり、先に立つゝ足ばやに、墨田河原に赴きて、渡舟を索るに、舟一艘もなかりけり。こゝは武藏と下總の、堺川とぞ名にしおふ、その水上は迥なる、秩父山より流れ來て、末果しなき海となる、坂東一チ二の大河なるに、折しも降つゞきたる皁月雨に、水炭増して波高く、淺瀬は絶てなきものから、岸に繋る船もやあると、おなじ河原を幾遍となく、ゆきつ戻りつせし程に、天ははかなくも明はなれて、遙に聞ゆる人馬の足音、塵埃を蹴立て轟々たり。毛野小文吾はこれを見て、追兵は既に近づきぬ。殺脱て陸をや走らん、又この河を渡さん歟とて、思はず水際に立在たり。浩處に千住のかたより、流に隨ふ柴船の、こなたの岸を離るゝこと、僅に一反ばかりにして、棹とり憊みたりけるを、毛野小文吾は齊一うち見て、天の祐と手を抗て、やよ雲時等、便船せん。こなたへ寄せよ。と招けども、頭をふりてぞ漕てゆく。毛野は機ばやく大きに怒りて、憑むに聴ぬこ



(す道題に故舊吾文小てふ逐を船)

とやある。貸すとも今借んず。と罵りながら水際に添ふて、一ト町ばかり返蒐れば、舟人はなほあざみ笑ふて、棹とり收め艫を推立て、漕ひらかんとする程に、毛野は閃りと身を跳らして、一反許隔りたる、舟へ發動と飛入たり。舟人これに駭き怒て、棹搔取て撃んとするを、物をしや。と引外し、怯むところを蹴仆して、足下に楚と踏居て、漕戻さんとて艫を推せども、箭よりも早き出水の勢ひ、進退自由ならざれば、思ふにも似ず推流されて、川下遠くなりまざるを、小文吾うち見て、霎時も得堪ず、諸肌袒ぎて單衣の、袖卷込つ、兩刀を、挿たる儘に水中へ、跳入り拔手を切て、湧着んと早れども、流烈しく波高ければ、行徳わたりの鹽濱に、成長たる水煉も、遂に追着くことを得ず、いと難義に及びし折から、物幾苞か積登したる、大平駄の船一艘、千住のかたより漕來り。小文吾は辛くして、件の船の舷に、手をうち掛て乗移れば、兩三箇の舟子共、駭駭きて諸聲ふり立、この竊盜奴が朝働きに、米物せんと敷、不敵さ。打や然れ。と罵りて、たがれ一撃んとするを、小文吾はやく

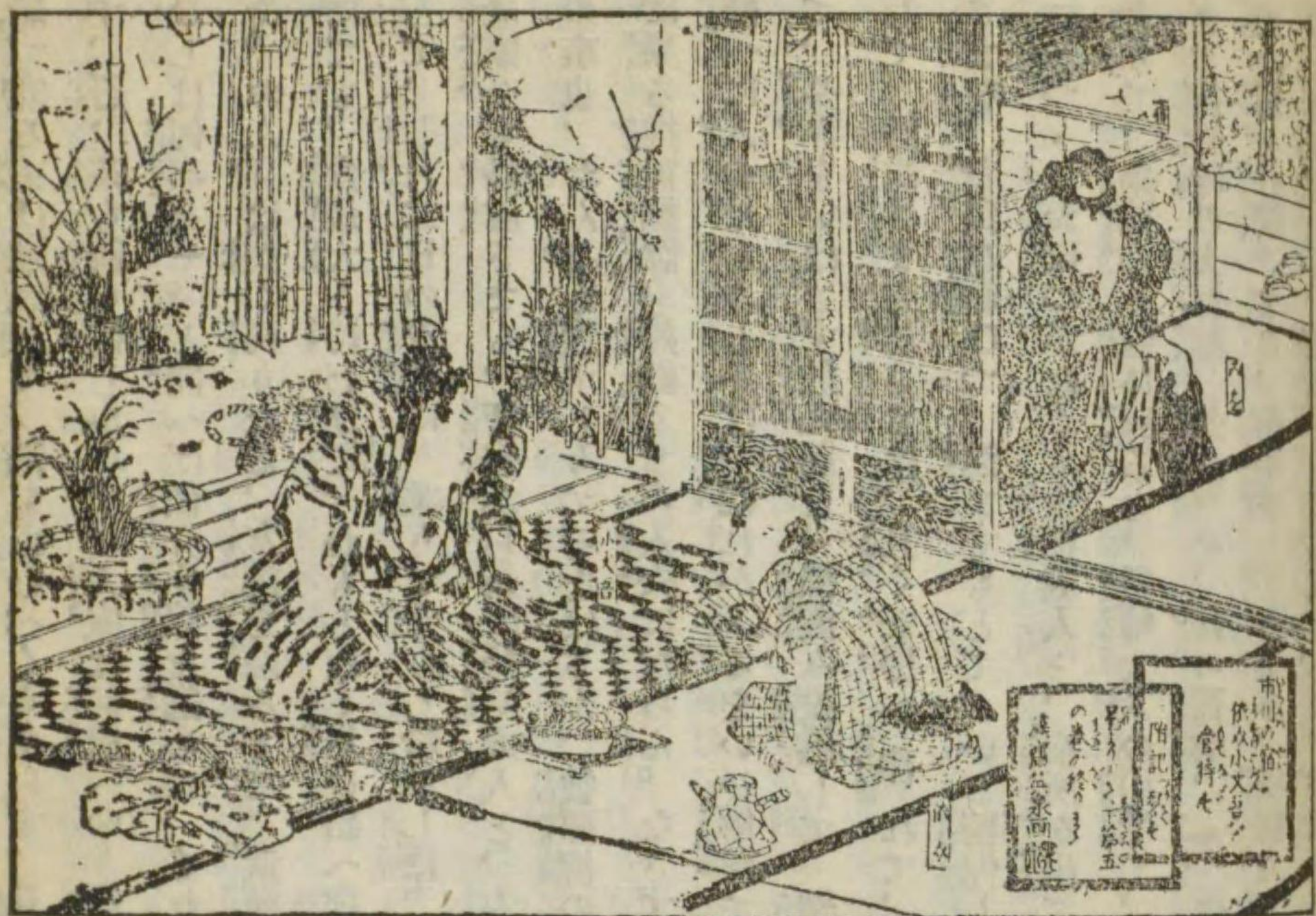
身を離て、兩三箇舟徒へ、進退したる鹽濱の正中、諸手に操り操術し、兎鹿かけて奪取る、悪形に驚嚇して、驚嚇んと、疾視へたる、腕に擲る一箇の舟長、睨たる艦戦して、やよ喃古那屋の令郎公、且く怒を鈍め給へ。と勸解つ、只管禁めけり。この人は誰そ。其は下回に解分るを見て知らん。

第五十八回

寫陋初て解て轉故人に遭ふ
老實主家を續て舊憂を報

小文吾は怒に乗して、篙工等を撃んとしつるとき、思ひがけなくわが親の、家號を呼て禁るものを、と見れば是別人ならず。豫て相識る大江屋の、寶師依介なりければ、こはくいかに、とばかりに、權を憂哩と投捨て、絶て久じき依介男、猝急なれば搔摘て、先頼むべき事のみいはん。われは去歳より友の爲、又身にとりてもうち續きたる、大厄難に奔走しつ、剩このわたりなる、佞悪人に抑留せられて、命も既に危かりしを、ある人の資によりて、やうやく脱れ出たれども、彼見よ追捕の兵等は、西の岸に立聚て、もろ手を抗て招く也。そは怖るゝに足るものならねど、わが再生の恩人は、纏にこの流を漕下す、柴舟に飛乗て、みづから艫を取て推切て、南のかたへ赴きたり。われ彼人に問ふべき事も、いはまほしきことさへあるを、あの儘にして別れば、復遣んこと難かるべし。舟子等にとく分付て、件の船を迫してたべ、われも伴艫に力を勤せん。やよとくく。といそがせば、依介はこゝろを得て、やうやくに身を起したる、舟子等を見かへりて、皆の衆よ、今聞るゝ如く、この郎公は日ごろより、和主達にも噂をしたる、彼行徳の犬田の大人なり。今朝未明より故ありて、仇に追れ、友を逐ふて、馮河をし給ひつ、思ひがけなくわが船に、乗せ進らせしは幸ひならずや。今より些し先の程、南のかたへ赴きたる、柴舟のあるそとよ。こゝでは見えすなりたれども、衆骨折らば、消もや着ん。兪艫を推しね、やよ喃。と辭せわしくいそがし立て、みづから舵を取しかば、舟子等は犬田の二字に、いよく驚き、ますく怕れて、誰かふたゝび異議すべき。俺們はこの春より、大江屋にをる

者共なれば、さる兄之公とはしらずして、大く無禮を仕りぬ。免させ給へ。とうち勸解て、齊一纏を推し權を操り、聲を合して漕ぐ程に、然らでも流るゝくだり船の、湍はいとはやく、追風はよし。瞬間に一二里ばかり、品草澳も見ゆるまでに、南をさして追せしかども、件舟の往方もしれず、後よりは亦わが船を、追ひ来る敵もなかりけり。そのとき依介は、彼此を見わたして、喃古那屋の令郎公、親しく鬱することく、篙工の衆の腕限りに、漕走らしてこゝまで来つれど、尋ね給ふ柴舟は、何處ゆきけん見えざるなり。おもふに彼は荷の軽くて、舟も亦細小ならんに、遙に先だちたるものならば、勞して功のなき技なり。その事は且思ひ捨て、僕等と共に、市川へ立よらせ給へ。行徳の事、市川の爲體を、報まらする義あれど、傍に人の多かれば、船中にては盡しがたかり。さらでも去歳よりけふに及べる、おん身のうへも聞まほし。僕等は昨夕の夜船に、乾鯛を千住へ積送りたる、辰船には大豆小豆の、交易物を受とり來つ。けふこの荷主に遞與ねば、約束違ふて不便なり。先早飯を進らせん。濡たる衣を苞の上に、抱きかけて乾し給ひね。いで〜。といひかけて、片隅焦たる木竈に、簾柔折焼て、茶を煎じつゝ、網に入れたる飯櫃の、蓋掻除て盛出す、燕脂殻塗の二荒椀。斑剝ても誠ある、心の堅地あらはれて、燗焼なる、油揚豆腐に、黏著たる浮衣を、拂ふ火箸も木の端歟。竹の節皿推す多つ。葛西茄子は、紫の、灰後れたる糞秋漬、屁臭くなりぬ空腹の、飢にみつ四ツとり添て、精悍しげに羞れども、小文吾は心にかゝる、犬坂毛野に別れしより、終に得あはずなりければ、本意なき事の限りもあらねど、値偶も別離も時あればや、亦いかにともすべからず。勢ひかくの如くにして、市川船に乗ながら、大江屋へも立よらで、今行徳へかへらずは、親を思はぬものに似たり、と思へどもなほ思ひ難て、とさまかうさま深念をしつゝ、やうやくその議に任せしかば、依介は歡びて、馳て舟子に如此々々、とこゝろ得さしつゝ、いそがはしく、船を東へ推向て、なほ只管に漕せけり。小文吾は今依介が、行徳の事、市川の爲體、報べき事のありといひしを、とく聞ばやと思ふものから、人にはしらせぬよしなるを、強て聞んばさすかにて、いと心は安からぬ。



(す待管を吾文小介依に宿の川市)

わがうへさへに告かねて、ひとり不業しく漕つかね、船に任してゆく程に、その日午の比及に、はや市川に着しかば、依介は苞物を、荷主の河岸に水揚して、船を大江屋の門邊に繋ぎぬ。當下篙工等は、蛇を引揚、繩を掛藏め、管を巻き、筵をたゝみ入るゝとて、訛聲高く散動にぞ、裡面よりわかき女房の、遠しく走り出て、只今還り給ひし歟。思ひしよりは早かりき。晝飯たうべて休ひ給へ。と勞ふて船の椀家具と、釜を引提てとり入るゝを、依介は、ややとばかりに、件の女を呼近づけて、水浴よ、稀なる客人あり。茶をも疾煮て、晝饌の、準備をせよ。といそがして、誘給へとて、小文告が、先に立つゝ奥まりたる、榻室へとて案内をしつゝ、いと正首に款待したる、あるじ態すらこゝろ得がたき、小文吾は彼此と、しばしば頭を回して、見れば原見し家ながら、妙眞は聲もせず。又大八の親兵衛も、何處ゆきけん見ることなれば、ふかく心に訝りて、とく問ばやと思ふ程に、依介は一ト土瓶の、任に茶碗とり添て、小文吾がほとりにもて來つ、けふは早月の猛齋にて、今茲の暑熱はじめなるに、

船で煮る茶は鐵氣染て、濁を止むべくもあらず。且これを利し召せ。程なく飯を進らすべし。といふを小文吾聞あへず、否、茶も饌も欲しからず。大家は何處へゆき給ひたる、親兵衛をも伴れし歟。嚮にこゝらの爲體を、報んといひしは何事ぞや。と問へば依介小藤を進めて、さればこそその事なれ。忘れも得せぬ去歳の六月、廿四日の事ならずや。おん身は深く契りたる、友達を送るとて、武藏へ赴き給ひしより、日數歴れどもかへり給はず。行徳にてもこゝにても、愈最大う待わびて、心もとなく思ひ給へば、彼、大道徳とやらんが、われ大塚へ赴きて、絆の要を見て來んとて、七月二日の夕舟に、乗りて走らし給ひしに、これも亦約束の、日數に違ふて信なし。この故にこそ行徳なる、老家公も妙眞さまも、曾安からねば蛭崎大入と、左やらん右やらんとて、商量果しなかりけり。かくてその月五日の事も、おん身も豫てしりてぞをはさん、彼悪棍の舵九郎が、こゝの親方夫婦のうへを、いつの程にか嚙着て、衰射に祟る推被嬾譚、妙眞さまの入夫にならん。なさは岡の新墓を、發きて守へ訴て、辛きめ見せん、と手剛き難題。傍へに人のなかりしかば、纏れかゝるをいひ解難て、殆困じ給ふ折から、文五兵衛さま共侶に、蛭崎大入の來給ひて、是非をいはず舵九郎を、搔擾み投擲して、絆濟たるに似たれども、後難料りがたければ、蛭崎大入の意見に任して、妙眞さまと坊さまは、且く安房へ伴れて、彼奴が毒氣を避んとて、その嚙昏に睥しく、文五兵衛さまは坊さまを、背負ひ給ひつ、途までもとて、いと精悍しく送り給へば、僕は亦要用の、物多く納られたる、袱包を背にしつゝ、おぼつかなくも主従五人、宿所を出てゆく程に、埋伏したる舵九郎、夥計の悪棍許多將て、忽地路を横ぎりて、搦捕んと競ひ蒐るを、蛭崎大入の引受て、防戦ひ給ふになん、文五兵衛さま僕さへに、敵に當りて暇なき、黄昏時の大厄難、是擲せ、額の舊痕、僕ははやこゝらに撃れて、生死も知らず仆れたり。さる程に舵九郎は、透を窺ひ妙眞さまの、抱給ひし坊さまを、搔擾走り退て、己がこゝらの隙にならずは、この孩兒を擊滅んとて、毒手の石を振擲たる、癡忍非道の壓狀盡しに、妙眞さまの驚きはさらし、蛭崎大入も、文五兵衛さまも、敵惡棍等を擊退

けて、齊一其處に聚合給へど、はや保質をとられしかば、赤せんすべもなかりしを、さこそと驚る舵九郎、再、搦捕ととり揚て、坊さまを只一ト撃に、塵粉になさんとせし折から、一朶の聚雲天引降りて、風凄しく沙礫を飛す、雲の中に物ありて、磁石の塵を吸ふごとく、忽然として坊さまを、はや中天に卷登しつ。又舵九郎を卷騰て、臂より鳩尾まで、破竹の如く引裂たる、軀を挫と墜されたり。かゝれば思ひがけなくも、強敵亡滅たれども、緊要なる坊さまの、往方もそが儘しるよしなれば、妙眞さまのおん歎きは、喩るに物もなきを、蛭崎大入も、文五兵衛さまも、思ふにあの親兵衛は、神躲しなどいふものにて、且く見えずなりたる歟。然らば往方のしれずといふとも、舵九郎と共侶に、殺さるべくもあらずかし。返さるゝ日を待給へとて、頻りに諫めこしらへて、その宵の宿りにいそがせ給ひし。この時に、僕は、やうやくに息出たるに、幸ひに瘻の淺かりければ、妙眞さまのおん伴して、そが儘安房に赴きつ。文五兵衛さまはその夜さり、市川まで還り給ひて、おん身の安否をしらん爲、夜船に乘りて武藏なる、大塚へなん赴き給ふ。叔是までの一ト條は、はじめ僕はしらざりしを、程經て後に妙眞さまの、説示させ給ひしかば、かく巨細なる言を得たり。さる程に文五兵衛さまは、次の日(六日)の巳の時ばかりに、大塚に尋ゆきて、彼額藏どのとやらんを、里人等に問給ひしに、件の人は罪決りて、いぬる初のふつかの日に、庚申塚のほとりにて、刑戮せらるべかりしを、額藏が友達なる、大塚信乃等總て三名、法場を鬧して、卒川菴入、簞上社平等を斫殺し、はや額藏を奪取て、戸田の河耳まで逃去りしを、陣番丁田町進、大勢を將て追蒐捕詰、あまりに早く早しかば、丁田氏は、水中にて、敵の爲に撃れたり。然れども後話の仁田山晋五が、新隊を以推捕籠つゝ、額藏信乃等を討捕たりとて、その首級共を梟られしに、この宵又癖者ありて、番卒等を斫仆し、件の首級を竊取て、往方もしれずなりしとなん、語るに膽を潰させ給ひし、文五兵衛さまのおん歎き、さこそと想像り給へ、とばかりにしておん身の存亡、定かに知れるものなれば、なほさりげなき面色しつゝ、件の里に旅宿して、世の風聞を撈り給ふに、彼梟られたる首級共は、信乃にもあらず、

額藏ならず。そが方人の戦殺したる、枯頸をもて云々と、守を異く仁田山普五が、伎倆也とて密々に、識れるものあるにより、疑ひいよく解給はず。その假首級は何人なりし、と問給へども定かにしれねば、倘おん身にはあらずや、と思ふ心をいへばえに、いはて苦しく憂宿に、日をのみ過し給ふものから、おん身の安危も、彼人々と、大道徳の往方すら、其處にしるよしあることなれば、逗留五日ばかりにして、その九日の夕つかた、行徳に還り給ひつ。相譚敵もなきものを、膝を抱きて日を送らんより、妙眞どのにも、蚤崎ぬしにも、縁由を報んとて、おなじ月の十一日に、安房へ赴き給ひけり。さるをおん身に恙なく、岡らずこゝまで相伴來つる、歡ししさに就て又、ほみなき事もいと多かり。扱もおん身は去歳よりして、何處にか居給ひたる。こゝらの事を云々と、傳へも聞せ給はずや。といふに驚く小文吾は、聞く事毎に歎息しつゝ、席の進むを覺ぬまでに、をさく耳を敲しが、忽地小膝を破と拍て、いかなれば飛禽の、翳の鬚と齟齬ふ、思ひし事の仇なるや。去歳のその日に大塚等を、送りて武藏へゆきたるとき、神谷河原のほとりにて、姥雪猪平と呼れたる、漁翁に邂逅しつゝ、大塚大飼共侶に、額藏の莊助が、冤枉の事の趣具に聞て遺恨に堪はず。扱道傍に退きて、莊助を拯ふべき、謀を相譚ふ折、大塚大飼辭等しく、吾儕にはとく行徳へ、還りて親にも人々にも、よしを告よといはれしを、聽ずしてわれ思ふやう、彼大川は一トたびも、面をあはせし友ならねども、同胞に優す因果あらんを、その大厄を外にして、何處へとてか還らるべき。今行徳は無事にして、こゝには火急の大事あり。先莊助を拯ふて後に、親に告、又人々に、告るとも絆遅きにあらず、と尋思をしつゝ力を勤して、終に大川莊助が、必死を其處に拯ひ得て、かくは異姓の兄弟に、志を致せしに、豈料んや舊里にも、亦暴風の殃厄起りて、大八の親兵衛が、往方もしらずならんとは、彼處に一箇の犬士を得たれば、こゝに一箇の犬士を失ふ。これ寒翁が馬ならずは、亦彼牧家の牛に似たり。これらの故にわが父に、物を思はせ奉りし、この身の罪をいかにせん。その事果てもさまざまなる。枉津鹿にのみ償はれて、けふまで歸り得ざりける、情由を知り給はねば、

そは恨み給ひけめ、言盆なきに似たれども、先中和主に物たりして、當座の心遣りにせん。彼莊助は如此々々として、靈六龜條が狂死の事より、大川莊助が、主の仇を撃たる願末、巖上兄弟、菴入等が事、又猪平が任俠、音音が孤忠、力二、尺八が精忠孝友、曳手單節が貞操節義、すべて大山道節が、君父の仇を報ひし趣、大塚大飼等と、共に彼人を助け助られたる、荒茅山の奇遇、白井の大敵、そを殺脱て走るとき、曳手單節を相伴て、合戦に乘したりける、馬を撃れしその日の怪談、遂に犬山大塚等の、四犬士と相別れて、只管に彼馬の、迹を慕ふて日を累ねつゝ、遠く武藏の淺草わたり、阿佐谷巖を過りしとき、傷鎗野豬に撞見して、そを刺留たる緋の形勢、又並四郎船虫が、隱匿の事の趣、この一ト條に拘づらひて、石濱なる千葉の權臣、馬加常武に抑留せられて、去歳の秋より彼首にをり、命も既に危かりしを、犬坂毛野胤智といふ、義勇の少年の資によりて、辛く石濱を脱出つゝ、彼墨田河を歩涉せし、事情は大坂毛野が、乗たる船を追ふと思ひし、大凡今朝の爲體まで、その要領をとり摘みて、辭せわしく説示せば、依介頻りにうち驚きて、覺す太息を吻くまでに、感嘆しつゝ且く已す。額に加し手を解きて、扱も危き事なりき。かゝるべしとは知らずして、きのふまでも疑ひしは、いと疎にて候ひき。俠を磨き義を守り給ふ、心がけは格別にて、及ぶべき事にはあらず。しかはあれども恙なき、命めてたく還らせ給ふを、かう伴ひまゐらせたる、僕さへに面を起す、歡びにこそ候へ。とその祝壽を述しかば、小文吾聞て、さればとよ、岡らず和主の資によりて、舊里近く歸り來ながら、隻時親に面を見せずは、又隻時の不孝にこそ。とく行徳へ赴きてん。草履一雙借し給へ。といひつゝ、躰て身を起すを、依介急に推禁めて、なほ報遺せし事もあるに、且くおちみて聞給へ。噫、神ならぬ身の何事をも、知らてをはする歎きの種を、まうし出るもうれはしく、傍痛き所爲ながら、いはて叶はぬ一ト條は、老家公の事なりかし。といふに小文吾傳うち騒ぎて。そは何事ぞ、心もとなし。とく／＼告よ、いかにぞや。とせわしく問れて鼻うちかみ、嚮にも言の端を、とき出したることながら、文五兵衛さまは大塚なる、縁由を知んとて、安房に赴き給ひつゝ、妙眞さ

まに對面して、云々と報給へば、搦て加し愁歎悲泣に、涙ぞ共に進みける。是より先に里見の殿は、蛭崎ぬしの如此
 如此と、聞えあげ給ふにより、犬士達の奇異天縁、親方(房八をいふ)夫婦の勇敢義死、又坊さまの事までも、詳
 に聞し召れて、御感尤淺からず。かゝれば大江親兵衛が、祖母妙眞をこゝに留めて、乏しからず扶持せよとて、奴
 婢兩三名冊かして、厚く款待し給ひつゝ、いかで件の親兵衛が、存亡を見究めて、恙もなくは四犬士(信乃、現八、小
 文吾、莊助)共侶、將て參れとあるおん旨を、蛭崎ぬしに命じ給ひし、その折に大塚なる、事の趣聞えしかば、さ
 らに又驚き給ひて、しからんには十一郎は、大法師に再會して、大塚犬川四犬士の、存亡定かに撈問ふて、恙なき
 や否や。吉凶共に報申せとて、此度は究竟の影兵五七名を、行若黨に打扮して、蛭崎ぬしに諱給へば、文五兵衛さ
 まも亦、拙郎と孫の往方を索ん。お伴に召れ候へとて、只管早給ふになん、妙眞さまも共侶にとて、身の暇を乞ひ
 給ひしを、里見の殿の許し給はず、志はさることながら、行歩不便なる老人と、婦女子などが果しなき、旅宿を
 せまく欲するは、勞して功なきのみならず、是禍を醸する也。十一郎を遣せば、安否をしるよしならずやは。こ
 こにて便をまちねかし。文五兵衛は神餘の忠臣、那古七郎由武が、弟なるよし傳へ聞たり。爾らば又行徳へ、かへり
 て市の活業するを、本意とはせざるものなるべし。妙眞と共にこゝにおちりて、その子の參るを樂みに、靜に老を願
 へかし。宜く扶持して得させんずとて、おん目前に召出さして、みづから慰め給ひしかば、文五兵衛さまも、妙眞さ
 まも、只感涙のみさしくみて、御前を退出給ひにけり。これは是去歲の秋、七月下旬の事になん。この故に起行の、
 願ひを思ひ絶給ひぬる、妙眞さまは、文五兵衛さまと、竊に商量し給ひつゝ、一日、僕を招き寄て、詳如此々々と示
 させ給ひ、かゝれば俺們兩人は、この地の逗留限りしられず。よりにて大江屋の船家扶は、備を遺迹に立べきぞ。備が
 年來老實なる、こゝまで件を致したる、心操に見どころあり。勉て家を守れかし。船橋は妙眞が親里で侍れども、二
 親世を遺給ひしより、今はさしたる親類なし。只水滸といふ一箇の親あり。いまだよすがも求めずとぞ。年來遺迹なき

るものから、親き血すぢの事にしあれば、備に渠を妻すべう、思ふはいかに、と問給ふ。思ひがけなく懇話なる、こ
 の告言に膽のみ潰れて、果敢々々しくは應も得せず、畏りて候ひしに、文五兵衛さまの宜ふやう、妙眞刀禰には佳
 姪あり。われにはさる親族なきに、とてもかくても小文吾は、市人になるべくもあらぬを、他し人の子を養ふて、古
 那屋の遺迹を立るも要なし。庫をも家扶をも沽却して、後安くすべう思へば、備ははやく立かへりて、件の用意を
 せよ。彼舵九郎が支黨の、いひ立たる事なからずや。これもこゝろにかゝる也。俺們は思ふよしを、守に聞えあげ奉
 りて、推續きて迹よりゆかん。こゝろ得たる歟、と繰返しつゝ、諭し給ふに涙こぼれて、言承しつゝその詰且、ひと
 りかの地をうち起て、日ならずこゝにかへり來つ、又行徳へも起きて、文五兵衛さまの口状を、村長どのに傳へしに、
 彼處は特に穩當にて、この市川も舵九郎が、支黨はをらずなりたり。かくて一句あまりを歴る程に、文五兵衛さま妙
 眞さまは、里見の殿より謝させ給ひし、若黨奴隷多く將て、行轡にて還り給へば、里人驚き、且訝りて、巷に立て、
 觀るもの多かり。かくて件の從者をも、逗留中とせめて措て、先船橋へ脚を遣し、件の姪御を呼とりて、云々と示さ
 せ給ひ、叔僕を故の親方、房八さまの遺迹になされて、姪御の水滸を妻し給ひ、村長へはありつる儘に、房八沼蘭
 は世をはやつして、臘孫の大八は、神樂しにやなりにけん、出にし日より往方しれず。かくまで幸なき吾儕に侍る
 に、いつまで世帯を執賄ふべき。されば依介を養嗣にして、大江屋を譲り侍りぬ。吾儕は女房の親族許、兩三年秋
 をとどめて、浮世をやすく送らん、と思ひ決め侍るか。年なほわかき夫婦のものを、頼み奉ると聞え給ふに、村長
 どのも四鄰の人も、いかでか異議に及ぶべき。悼むものあり、祝ぐものあり。授受を提擲て、緯立地に整ひにき。
 是併、妙眞さまの、おん曾廣き洪恩也。緯果て文五兵衛さまは、行徳にかへらせ給ひつ。これも亦村長とのへ、小
 文吾はしらるゝ如く、市人の所爲を嫌へば、親の迹を嗣べくもあらず。渠は近屬鎌倉へ、よすが求めて赴きたれば、
 かへり來ん日の測りがたきに、己は既に老憐ひて、活業も懶くなりぬ。よりにて安房なる親族に、身を任せんと思ふの

み。就て客店の家扶、屋庫共に、望る人に沽滅與てん。この義をこゝろ得給ひね、とこしらへ給へば異議もなく、し
 かるべしとぞ答らる。叔望る人早にいで来て、商量既に事成しかば、沽券の金は百あまり、五十兩獲給ひしを、そが
 中百金遺し留めて、二十金は三世の父母、并に房八沼蘭等が爲とて、近き寺々へ進らせ給ひつ。三十金は里の貧民、
 乞食牛馬に至るまで、遺なく施行に引給ひぬ。人愈こよなき功德といひけり。此は是去歲の秋、七月中浣の事になん。
 是首も彼首も思ひのまゝに、事果たりと歡び給ふ、文五兵衛さまはさらに又、この市川に立より給ふを、妙眞さまは
 待つて、かの夥なる従者を、相將て安房へ還り給ひき。是よりして後、文五兵衛さまは、月ごろ心機しんきの疲勞つかれにや、
 老病漸々に身にそひ給へど、然とて苦惱くなんの氣色けしきもなく、臥給ひしより枕あがらず。このよし守に聞えしかば、醫師に
 命じて療養りやうやうの、術を盡さし給へども、命數既に限りあればや、病むとはなしに瘥り給はず。妙眞さまは駭おどろき憂うれひて、
 等閑ならず看とり給ふに、頼みすくなく思はれけん、この春二月初旬に、こゝへ飛脚を立さして、かうくとな
 ん告給ふ、おん消息せうしに驚きて、物とりあへず飛脚と共に、日ならず安房に着しかば、妙眞さまの呼入れて、なほ詳
 に告給ふに、胸はいよ／＼安からず、病牀びやうじやうに近づきて、このやうを訊まうせしに、文五兵衛さま聞給ひて、依介
 どの歎なげ、よくこそ來つれ。誘いざなひなたへ、と間近く寄らせて、枕を擧て宣のたまふやう、某老病身に逼れば、對面も此度を
 限りなるべし、わが兄小文吾、孫親兵衛が、存亡も得しらずして、長き別れになりなん事の、ほるなきにならねども、
 つらく思ふに彼者共は、伏姫うへに過世ある、入行八字、入犬士の、隨一人とおぼゆれば、鬼神も敢害ふことな
 く、況て怨敵殘賊に、亡るべくもあらずかし。されば、一旦不幸にして、窮阨きゆうあつの中にありといふとも、八人具足し
 たらんに、里見殿に仕へまつりて、名を揚家なげを起さんこと、大かたは違ふべからず。愚按のごとくならざれば、
 渠等は遠く父祖ふそに優れる、未然の功德をとり來して、親を安らに養はるゝ、里見殿に値あはせんや。去歲の秋より關守
 の洪恩、奴婢さへこれ彼歸られて、出して食ひ、糶あらてある、正罪に不足なきのみならず、心地常ならざりし初より、

名醫長進何れとなく、命をなしたさるゝ、冥加あまりて感涙に、袖濡らす日ぞ多かりける。然るを餘命を賣りて、
 此世の名残を惜まんや。齡も既に六十にあまりぬ。よき死時と覺るに、倘小文吾が後に聞くと、親の終焉しゆうわんにあはざ
 りしとて、憾なせそ、と傳へてたべ。させる像見はなけれども、行徳なる家を售たる、一ト包の金こゝにあり、小文
 吾が恙もなく、彼友達と共侶に、かへり來る日のあらんには、長き旅宿に借財の、債ちやうなどもなからずやは。この
 中なる拾金は、和殿へ紀念に進らす。その餘はすべて小文吾が、物にしあれば時至るまで、和殿に預置ちゆうちくべきぞと
 て、遺言細やかなりければ、應ずるのみ慰めかねて、塞胸さいきゆうの苦しさに、立まくしつゝ見かへれば、側かたにはせし妙
 眞さまも、涙に咽なむ泣聲なみせを、袖そでに包みて立給ふ。この日よりして看病に、逗留とらうとま一句あまりを経たる、その二月の十五
 日に、文五兵衛さまは苦痛もなく、睡れるごとく息絶給ひぬ。佛滅涅槃ぶつめつねはんの會日に稱ふ、終焉はいと愛たし、とこゝろ
 ある人はいひけり。此よし守へ聞えあげられしに、葬りの事、七々の法筵ほふぜんさへ、大かたならず沙汰し給ひき。僕わがは
 二月下旬に、彼地をたちて還るとき、妙眞さまの心ほそげに、かき口説給ひぬるを、思ひ出ても痛しきに、くだく
 して盡しがたかり。みづから察し給ひね。と報るをうち聞く小文吾は、慨然がいぜんとしてしばたゞく、眼包あまに餘る涙の雨
 に、猛たけきこゝろもうち濕る、胸を敲きつ搔拊かいたて、悲しきかなきのふまで、親の亡日をしらずして、なほ舊里ふるさとに恙なく、
 をはするとのみ思ひし事の、夢と覺たる悔しさよ。いふ甲斐もなきことながら、去歲の七月曳手等を、故郷へ俱して
 かへりなば、かゝる憾うらみのなからんに、身は石濱いしはまに囚れて、信すべきよしもなく、たま／＼かへる遠慮とんりょ瀉、波なみのよる
 べや水江すゐゑの、浦嶋子うらしまのこが七世の孫に、あへるにも似て慚愧ざんけい後悔。人傳ひとつてに聞くなき親の、御遺言ごゐごんこそ哀しけれ。縦名たてなを揚
 家を起して、俸祿ほうりくこの身に餘るとも、なほ貧みくて事奉る、親あるものにまさらんや。疎おろなりける年來としらの、不孝ふこうを免ゆるさ
 せ給へかし。と勸解くわんげて、東あづまにうち向ひつゝ、みすがごとく伏拜ふしやうめば、依介よけいこれを慰めて、そのおん歎なげは理ことわりながら、
 今は千萬せんまんいふとも返らず。先はや件の一ト包なる、像見がみを遞た與まるらすべし。といひかけ後方あとへを見かへりて、水滸みづよ、

水濡よ。と呼立れば、女房ははや次の間に、物かたらひを聞てをり、應をしつゝ間なる、簀戸を聊推ひらきて、半面を密とさし出すを、依介うち見て、やよ阿水濡、この春欄に預けたる、おん像見の金もて來給へ。これもてゆきね。と腰を撈りて、投出す鍔袋を、手長に取て、納戸のかたへ赴きつ、件の金をもて來にければ、依介これを受とりて、備も霎時こゝにゐよ。と留めて小文吾にうち對ひ、既に傳へまうしたる、こは老家公の像見なり。數檢めて納め給へ。といひつゝ、懸てさしよするを、小文吾とりてうち戴き、去年蚤崎照文ぬしが、里見殿の賜ものとして、贈られたる沙金すら、今なほ過半あるなれば、盤纏に物を缺ねども、慈愛を籠られたる、親の遺財と聞くからに、なほも異日の要に充べし。さばれこの中なる十金は、和主に與へられたるならずや。然るをそが儘置れしは、律義に稱ふ心操、感ずるにあまりあり。先々といひかけて、包を解きて十金と、更に又十金を、加えて依介にわけ與へ、この十金はわが親の、遺言に任するのみ。又十金は某が、墨田河にてゆくりなく、資を得たる薄義也。受收め給ひね。といふを依介聞あへず、そは思ひがけなき事也。文五兵衛さまの賜りし、十ひらの金はとまれかくまれ、この十兩は要なし。と辭ふを小文吾推返しつゝ、辭を盡して薦めしかば、依介はやうやくに、受戴つゝ妻もる共に、歡びをなん述にける。當下又依介は、妻を側に進まして、喃犬田の郎公、こは嚮にまうしつる、妙眞さまの姪女、船橋に候ひしを、僕に妻せ給ひし、その名を水濡と呼れたり。おん目を給はり候へかし。といふに小文吾領きて、名をのみ豫て聞しかど、よき折からに對面して、よに憑しく歡びも、一ト入にこそ候へ。重縁といひ、相應しき、當家の新婦になり給へば、沼藪が事さへ思ひ出て、妹にあへる心地ぞする。勉て内を治め給へ。とこゝろ隔ぬ應倉に、水濡は顔うち赧めて、先小文吾が安否を語ね、且文五兵衛が悼亡を述て、又妙眞が薄命さへに、辭すなくいひ出れば、依介霎時沈吟じて、郎公は何と思召らん。こゝまで還り給ひし甲斐に安房へ赴き給はずは、爹公の墓へ詣がたく、妙眞さまをも慰めがたかり。一トふび御處へ参り給はば、里見の殿のおん歡びも、さこそと想家らるゝなれ。僕、おん仲仕らん。近き

に思ひ立給ひね。といへば小文吾頭を掉て、いかでかは安房へゆくべき。里見殿の恩徳を、仰げばいよ／＼高けれど、も、同因果の友具足せず。況てわが預りたる、曳手單節を失ひながら、その存亡をいまだ得しらず、恥有て且功もなきに、親の墓參のせまほしきとて、阿容々々として彼地に到らば、友を棄、義に背きて、榮利を急ぐ、と人衆いけん。われ亦思ふよしあれば、且くこゝに逗留して、親の中陰を送るべし。さりとして竊に消息して、妙眞どのへ報知せなば、後々までも仇と怨ん。必多言すべからず。と禁めて申の比及より、笠ふかくして行徳なる、香華院に赴きつ。廻住持に對面して、文五兵衛が菩提の爲に、こゝにも石塔を建べき事と、月忌年忌に當る毎に、二親の追薦讀經を、町學に頼聞えて、物多く布施しけり。かくて小文吾は、次の日より喪に籠りて、七日々々の忌日毎に、此度行徳に建たりける、親の墓に詣る程に、はやくも五十日の中陰は開けり。既にかうと思ひしかば、依介夫婦に告別して、今こそ汝達わがうへをも、おもふよしをも妙眞刀禰に、巨細に告て慰めよ。小文吾かくて候へば、親兵衛も恙なかるべし。八箇の犬士相連日に、見參に入るべき也。みづから愛して俟給ひね、と傳へよかし。といひ果て、往方も定めず出てゆくを、依介夫婦は留めかねて、里盡處まで送りけり。畢竟小文吾、市川の旅宿を去て、又甚麼なる説話がある。そは次の卷に、解分るを見て知らん。

南總里見八犬傳 第六輯 卷之五上冊

東都 曲亭主人編次

第五十九回

京鎌倉に二犬士四友を憶念す
下毛州赤岩 庚申山の紀事

再説、犬田小文吾は、依介夫婦に辭し別れて、市川の宿を出しより、且行徳へ立よりて、亡兩親に起行の、告別をせばやとて、笠ふかくしていそぐ程に、はや香華院に來にければ、準備の櫓を携て、寺門に入りつ、壇塋戸なる、手桶索ねて汲揚る、阿伽井の吊桶籠弛み、漏りてはいと袖濡らす、歎きの霧の籠敷と、外の卒都婆も偲るゝ、憂事聚ふ身ひとつの、心づくしをいへばえに、巻柏ならぬ雨後の苔、洗ひ流して手向の水に、うつれる影もなき人の、名をのみ遺す石塔に、うち對ひつゝ額づきて、回向に時を移しけり。扱あるべきにあらざれば、稍身を起して、外面へ、退き出んとして思ふやう、萬里の逆旅に赴きながら、投て往方もまだ定めねば、繫ぬ舟の楫を絶て、よるべの岸もなきに似たり。曩に犬山犬塚等に、別れし折は信濃路へ、走りけんとおもひしかども、曳手單節に逢んとて、ひとり東へ還りしより、朞月にはやなりぬ。かゝれば今さら彼地に到りて、索遣んと欲するとも、船に契して遺せし劍を、求るに似てその甲斐の、亦あるべくもあらずかし。かゝれば何處を心當に、件の四箇の友を索ん。況て曳手單節等が、存亡はなほ知るに由なし。加以日ごろより、心にかゝるは墨田河にて、ほるなくも別れたる、犬坂毛野が事也けり。われは及ぬ膽勇智略、多く得がたき少年なるに、そが生れたる里の名の、犬坂をもて氏としたれば、彼人も亦吾曹と、同因果の犬士にあらずや。この推量に違はずは、形骸牡丹の根に似たる、駒もあらん若も掛てん。聞ず

は知るよしなきものを、と思はざりしにあらねども、わが身危難の折なりければ、その義に及ぶ暇なく、別れても往方は知れず。遺憾しさに、試て又、とさまかうさま思惟るに、鎌倉はこれ犬坂が、成長りたる里にして、母親の墓あるよしなれば、かの折竊に鎌倉へ、立かへりしことなからずやは。縦彼處に潜ひ難て、今は他郷へ移しとも、兩三月の程なれば、われ且彼地に赴きて、しのびしのびに里人等に、撈りも問はゞかの人の、在處を定かに知るよしあらん。再會の日に意中を告て、わが推量に違ふことなく、同因果の犬士たる、證據分明ならんには、去歲より空に送りたる、月日もこゝに虚ならず。孤雁の更に侶を得て、北地に歸る歡びあらん。かくて犬坂共侶に、又犬塚等の四友を索て、環りも會ば石濱に、抑留られし吾うへを、報るに正しき證人あり。且曳手等を亡へども、亦一犬士を獲て伴はゞ、さばかり面を興すに似たり。吁然也、と腹裏に、思ひ決めつ、引提たる、笠を翳して遠しく、寺門を出て、新樵る、鎌倉を投ていそぐ程に、次の日の哺時に、既に彼地に着しかば、米町なる客店に、草鞋を解て逗留しつゝ、日毎に巷に立出て、或は茶店、尻掛酒舖、衆人聚ふ所にて、世の雜談に耳を敲、又假初に名もしらぬ、人と物いふ言の次に、こゝらに名だたる女田樂、且開野といふものあらん。そが宿所は何處ぞ。と外々しく詰るに、知らずと答るものもあり。又復讐の爲體を、傳へ聞たるものもあれど、忌よしありとて定かに告ず。そが中の一箇の老人、小文吾が問ふに答て、索給ふ且開野は、許多の人を殺せし折、武藏の石濱より逐電して、ふたゞび當所にかへり來ず。おもふに石濱の千葉殿は、管領家と疎からねば、こゝへもよしを告られけん、その沙汰はまだ聞えねども、渠もこの義を察しなば、その身の追捕を怕れもせて、薪を抱きて火に近づく、この地へ歸り來べくもあらず。虚實は定かならねども、彼且開野は女子にあらず。親の冤家を撃んとて、穉き時より姿を變て、幾萬人を欺きたる、よに凄じきものぞとよ。この地に忌のあるよしは、件の情由によりて也。おん身はざりとも知らずや有けん、漫に渠が宿所を訊ふとも、今はその甲斐なきのみならず、もし悪棍に疑れて、支黨也とて誣られなば、いひ解くにいとむづかしからん。そま

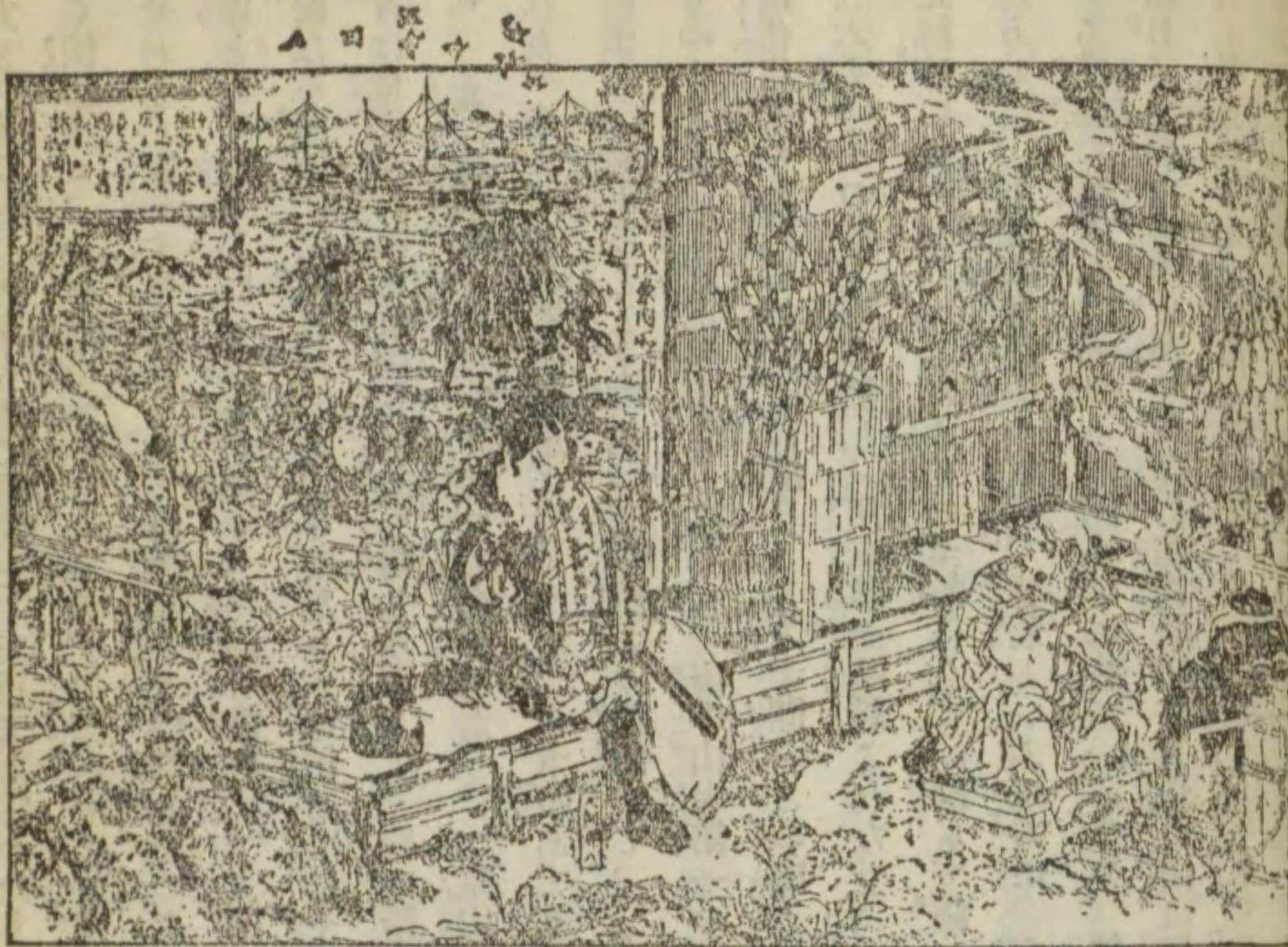
らに用心し給へ。と推禁めつゝ弄きたる、人の實意に小文吾は、忽地曉り且驚きて、遂に望を失ひつゝ、この日もひ
 なしく旅宿にかへりて、獨つら／＼おもふやう、けふ里人にいはれし如く、現鎌倉の管領は、かの千葉氏の忠家に
 て、水火迭に相極ふ、中にしあれば、常武が、撃れし事も告られたらん。爾も自胤邪正を辨せず、是非の境に惑ひ
 を取りて、なほ犬坂を憎しと思はゞ、彼胤智が事のみかは、わがうへさへに云々、と告て追捕を頼れけん、その議な
 しとは決めがたし。然るをこの地になほ日を透らば、勞して功なくわがうへに、凶多くして吉少し。心盡して索る人
 に、逢んよすがもなき里に、遺憾しこは思はねども、去歳より三たび三方へ、別れし知己は男女七人、そが一人にも
 あふこと難く、又何方をこゝろ當に、翌より索あるくべき。世にも思ふ人はありとも、秋より秋に十三箇月、一日
 も胸は休からぬ、われにますものあるべしや、とおもひ沈みて鄙語の、獨商量果しなき、膝を抱きて消す日の、壁に
 向ひて幾遍か、歎息の外なかりしを、忽地乞と思ひかへして、日本六十六箇國、廣しといふとも限りあり。凡舟車の
 かよふ所、足跡の至る所、東西南北四維八荒、索巡らば必遣ん。遲速に拘ることかは、と志を奨せば、曾の爵也
 蒙也稍齊ても、慰めかねし意の月、明なばこの地を立去んとて、用意をしたりける。案下一生又説一生、犬飼現八
 信道は、去歳の七月七日の危難に、荒芽山路を越かねて、踏留りては立塞り、追來る敵を防ぐ程に、道節、信乃、莊
 助等と、別々になりしより、終に迭に往方を知らず。やうやく追兵を殺退けて、其處ともわかぬ深山路に、迷ひく
 しつ、辛くして、信濃を投て兩三日、雖過々々道節等に、絶て得あはずなりしかば、心いよく安からぬ、肚裏に思
 ふやう、吾曹は幾回となく、必死の厄に遭ふといへども、神明佛陀の護らせ給ふ歟、又瑞玉の奇特に依れる歟、こ
 の身に恙なきを思へば、犬塚大山四箇の友も、撃れしものはあるべからず。然ればとて信濃路に、誰が相識のありと
 いふ、心當はなきものを、素より往方を定めねば、何處を投て索あふべき。進退既に度を失ひぬ。そが中に小文吾の
 み、曳手單節を相伴て、隠れて故郷へ還りけん、彼がは定かに知られたり。なほ五六日この地を索ねて、三箇の友に

得あはずは、且行徳へ赴きて、大田に報て權認ん。これより外に下館あらし、と尋思をしつゝ、彼此に、密符を求めて
 案しかども、一犬士にだもあふことなくて、七月も中流になりしかば、やうやくに思ひ絶て、下總を望てゆく程に、
 その月の廿ヶあまり、三四日といふ日子に、はや行徳へ著とそが儘、案内知たる事なれば、古那屋の門より入らんと
 しつゝ、と見れば思ひがけなくも、戸を闔籠て人影はあらず。こはいかに、と訝りながら、扱たる戸襖に隻眼をよせ
 て、裏面のやうを闔ふに、全く空房になりたるなれば、せんかたなきに退きて、四鄰の人に語るに、その人答て、さ
 ればとよ、小文吾どのは六月下旬に、辭家して遂に歸らず。老父は安房の親族許、呼とられしとて彼地にをり。かゝる
 ゆゑに奴婢等には、身の暇をとらせしより、見給ふごとくなりたり。といふに現八こゝろを得ず。爾らば古那屋の
 通家なる、市川の大江屋には、異なることもあらずや。とふたゞび問へば頭をうち掉り。否、大江屋はこゝにもまし
 て、幸なき事の續きたり。しらでやはする房八夫婦は、六月の日子身まかりたるに、搦て加えて禪兒は、神隠しに
 やあらんずらん、往方もしれずなりしとぞ。かゝればお懐妙眞どのは、こよなき歎きに身を措かねてや、これも安房
 なる親族許、赴きして今にかへらず。留守には篙工等と耳疎き、婆々のみありと聞えたり。いと痛しきことならず
 や。と告るに驚く現八は、それは／＼。とばかりに、愀然として退きかねしを、かくてもあるべき事ならねば、なほ
 外々しく應をしつゝ、人なきかたに立出て、つゝいて獨思念をするに、古那屋の叟も、妙眞刀自も、安房へゆきしは
 親族ならて、里見殿に徴れしならん。さらば兩箇の翁媪は、後安きに似たれども、最心もとなきは、往方もしらずな
 りしといふ、親兵衛が事になん。よしやこゝより市川なる、大江屋へ赴きて、尋問んと欲するとも、あるじはをらぬ
 留守の宿に、罷託たる篙工、耳疎き、薪水の婆々等が何を知るべき。しか也とてもわれひとり、安房までたづねて邁
 べくもあらず。さるにてもこの舊里へ、還りたらんと思ひし大田が、けふまで親にも里人にも、信なきは、甚不審
 し。かの折敵に撃れはせずや。曳手單節はいかにぞや。思ふのみにて問ふよしもなき、こゝもわが身の敵地也。且武

藏まで退きて、又ともかくもすべけれ、と思ふ心を肚に問ひ、腹に答へて身を起せば、秋の日影の短くて、はや暁首になる物から、その宵の出船に便り求めて、終夜漕れて江戸に赴き、なほも心は遣りたる、信濃路投て日に歩み、夜に宿りつゝ草まくら、急がぬ身にも旅馴し、袖は露けき小篠原、岐岨の御坂もうち過て、憂みの末は友人に、あふみと聞も頼しき、峯の楓葉色はませども、花の洛に近づきぬ。とてもこゝまで來し甲斐に、王城の地を踏ずして、又何國へか赴くべき。行客聚ふ都會の地は、人を索るに便りあらん、と思へば心いそがれて、魑て京師に赴きつゝ、旅宿を定めて日毎々々に、名所古迹をたづね巡るに、應仁以來兵火に荒けん、京としいふも名のみにて、聞しには似ぬ光景なれども、都の事態はさすがに愛たし。されば文學武藝の師の、門戸を張るもの里巷に多かり。これにより現入も、早晩に相識いで來て、迭に訪つ訊れつゝ、今茲は暮て立かへる、春を旅宿に迎へけり。登時現入思ふやう、限りある路費をもて、限りしられぬ旅費をせんに、遠謀なくは後悔あらん。われも年來習得たる、擊劍拳法を人に教へて、口を餉はゞ逗留中の、諸雜費を省くべし、と思ひにければ如此々々と、親しき人に相譚ふに、舊を捨て新に、附くはなべての習俗なれば、その人早に承引て、これ彼弟子を汲引るに、初は一兩人なりしも、武藝の世評よき隨に、門に入り教を請ふもの、僕へ盡しがたくなりけり。この時にしも現入は、久しく留るこゝろなければ、人勸れども居宅を求めず、貸座敷とかいふものの、庭を武藝の稽古所にして、雨ふる日にも請るゝ隨に、弟子の宿所に赴て幾人となしく教けり。勢ひかくの如くなる、現入はこゝろともなく、京師に杖を駐ること、既に三年に及びけり。時に文明十二年、小文吾が市川より鎌倉へ赴きし翌年也。そのふみ月も循り來て、星祀る比になりしかば、過にし事のみ偲るゝ、現入はある旦、とく起出で思ふやう、われ四犬士に別れしより、只爾索遣んとて、東西百里を往復りして、圖らず京師に逗留の、日數つもりて今ははや、中一ト歳を隔たり。爾るに昨宵見し夢に、犬塚信乃は大八の親兵衛を扛抱き、犬山、犬川、犬野共偕、わがこの旅宿にたづね來て、最大恨みしを、いひ解んとしつるとき、枕に響く鐘の音に、驚

覺て驚れば、夜は佛玉の啼なりき。佛説に聞く瀟湘夢寐、纏むに足らぬ事ながら、遺恨しきも限りなく、さればとて又快からず。彼五犬士は異姓の兄弟、骨肉に優す別れの、交りを虚にして、恨みらるべきわれならねども、路費乏しき故をもて、旅宿ながらに弟子を聚へて、武藝を教えて口を餉へば、名利を樂ふものに似たり。老幼順逆世に多かる、人の命は期しがたし。わが命數のはやくも竭て、この儘身まかる事あらば、四犬士後に傳聞て、うたてやな現入は、誓に背き約を違へて、相別れしを幸ひに、年來京師に住ひして、一己の名利を謀りにけり、といはれん事は疑ひなし。しからんにはわが爲に、誰か然らずといひ釋くべき。さては死しても朽がたき、千載不滅の遺恨也。いでや當所を立ざりて、ふたゝび東に赴くべし。西國四國も見まほしけれど、おもふにわが友達は、みな關東にて生れたり。遠く京師をうち越て、西に留るべくもあらず。そが中に犬江親兵衛は、神隠しにあへりといへば、去々歳この地に來つる比、遠きは大和の葛城大峯、近きは愛宕、高尾、鞍馬、深山々々に攀登りて、索ねしかどもその甲斐なかりき。此度はいかて東海道を、真直に鎌倉へと思へども、伊勢尾張より東には、諸侯おのゝ割居して、新關の多かれば、旅人の往還不便のよし、その聞え定か也。かゝれば、又近江路より、中山道を下るべし、とこゝろひとつに思ひ決めて、扱門人の甲乙には、舊里なる親族より、猛に招るゝ一義あり。よりて東國へ歸る也。この義を遺なく傳へ給へ。といふに人々驚きて、辭を盡して禁めしかども、留るべくもあらざれば、事の趣云々と、同門們に傳る程に、現入は一ト日もはやく、立去んとのみ思へども、衆皆別を惜みつゝ、留別の爲席を開く、是首の勸盃、彼首の饗饌などとして、招るゝ日の多きをもて、七月は過て八月さへ、既に半になりしかば、現入竊に焦燥て、類に辭して起行の、準備に他事もあらざれば、門人等は留難て、錢を哀め銀に貸て、贈りて路費の資にしてけり。さる程に現入は、行装を整へて、その詰旦門人等に、別れて東に歸るになん、なほ後に跟き先に立て、逢坂山のほとりまで、送りゆくもの多かりしを、やうやくに推留めて、終に袂を分ちしより、いそがぬ旅も急がれて、その日はゆくこと十里あまり、守

山の里に宿りを投めて、なほ行とゆく程に、既に日を歴て、上野なる、遭坂の里まで來にけり。三とせ以來三回まで、この山里を過れども、あふ坂は只名のみにて、思ふ友には遭ふよしもなし。こゝよりして荒芽山までは、路の程も遠からず、切ては旅の心やりに、姥雪夫婦が戦没の、迹を見ればや、と雲のある、明鏡山邊に進み入ること、半日にして既にはや、件の山のほとりなる、彼燒迹に來て見れば、草は彼此に生繁りて、半幹焦れし常盤木の、枝を生じ葉を布て、復榮るも多かれど、有つる家は迹を埋めて、ふたゝび住る人もなし。忠臣孝子、義姑節婦も、時に遇ねば人にも知られず。主の爲に身を殺せども、祀られぬ鬼となる迄に、旅魂はなほも吟呻ふらん。いと憐むべく惜むべき、これを思ひ彼を思へば、別れし友こそなつかしけれ。とひとりごちつゝ徘徊しつゝ、惘然として嗟嘆に堪ねば、暮ぬ間に舊來しかたに、戻るも獨路傍の、茅葺の露に袖濡れて、その夜を明鏡山の麓なる、一白屋に曉す夜すがら、現入ふたゝび思ふやう、上野よりして武藏相摸へ、赴くは是順路なれども、去々歳の秋下總まで、はやゆきたればおなじ路也。此度は下野に赴きて、二荒山にも登るべく、なほ陸奥の盡處までも、足に信して索あるかん。吾四犬士は鎌倉など、繁華なる地はなかく、に、敷ふて僑居すべくもあらず、と尋思をしつゝ次の日は、又遭坂まで立かへりて、高崎川をうち渡り、前橋、大胡、室深津、花輪、梅雨入の里を過るに、その行程は二日路にて、下野州眞壁郡、綱亭と喚るゝ里に來にけり。秋の日ながら尙高かるに、五里も六里も邁ばゆくべし。且くこゝにて憩ん、と思ひつゝなほゆく程に、その里盡處に茶店あり。檐下に吊せし賣草鞋の、間より見かへれば、一挺の鳥銃と、六七張の半弓を、傍の壁に並掛たり。こゝろ得がたく思ひながら、紐解く笠を引提て、凭几に尻をうち懸れば、あるじとおぼしき一箇の老人、ふりたる茶碗に汲とる煎茶の、生澁よりなほ混みたるに、茶釜ものして泡たゝせしを、縁の離れし日光盆に、乗せていざとて蓋るを、現入右手に取りあげて、兩三吸喫ながら、腰後方を見かへりて、翁の弓鳥銃は、何の爲に掛たるぞや。と問へばあるじは悲みよりて、いまだ知し召れずや。この處より五六里ばかり、巖山山のあるたまで、人



(く 聞 を 話 蓄 が 平 鷗 八 現 に 店 茶 の 亭 綱)

類はいと罕也。これによりて歎すれば、山賊ありて旅人を剝奪り、或は猛獸妖怪變化に、可憐命をとらるゝもの、年には三人も四人もあり。この故に白晝といふとも、獨行はこの里より、郷導の者を備ふて身の衛にせらるゝ也。さりけれども、耕作に、暇なき里人等は、件の需に應じかたがり。僕は素獵戸にて、足緒の鷗平と問給へば、こゝらで知らぬものはなけれど、見らるゝ如く年老たれば、今は山野の揮了をせず、をさく、旅人に備れて、かの郷導を仕れり。あの鳥銃はその折に、用心にもてるのみ。又圓竹の半弓は、武藝を待む行客の、導者を備ひ給はぬも、必、あの弓と箭を、買とりてもてゆき給へり。直の賑きを旨とすなれば、掛流しとかいふ類にて、いと不通東には見ゆれども、よく繁たれば矢頭狂はず。殊さらに弦と鐵は、いづれも眞物を用ひたり。おん身も亦庚申山の、麓を躰んと欲し給はゞ、導者を備ふて將てゆき給へ。さらずは弓箭を携へて、みづから衛り給へかし。郷導者は六里の程を、鳥銃の

丸と、火薬と、火索も加て貨錢を、三百文と定めたり。弓箭の價もこれに同じ。そはおん好みに任してん、さばれ且候給はゞ、おなじ路へとこゝろさず、旅客もいで來つべし。不知案内なる崎嶇を、ひとりには要なき事にこそ。と辭せわしく説示すを、現八開て冷笑ひ、そは然る事のあるかはしらねど、われも亦この年來、美濃信濃の深山路を、幾遍となく過りしに、導者を憑ず、弓箭も借りず。さばれ山賊猛獸の、思ひありとは聞ざりき。扱も件の庚申山は、乍麼なる魔所にて白日だにも、さばかり人の怖るゝにや。われは一切こゝろ得がたし。と詰れば鵲平眼を睨りて、おん身は他郷の行客なれば、縁故を得しらずとて、疑ひ給ふは疎齒に似たり。こゝろ得の爲報まうさん、言長くとも聞給へ。抑赤岩庚申山は、下野州安蘇郡にあり。二荒山と相距ること、西のかた七里にして、こゝよりは路五里にあまれり。さればこの網芋の里より。ゆくこと十町あまりにして、前凸の山路也。既にして登ること、二十町にして巔に至り、又下ること十町也。この所より銀山まで、一十里の間水澤を傳ふ、路の苦辛はいふべくもあらず。かくて又登りゆくこと、大約三里あまりにして、庚申山中第一の、石門に至るべし。土俗これを庚申山の胎内齋と呼做したり。造化自然の石門にて、その廣きこと方十間、この處より進み入ること、二十間許にして、左右に建る大石あり。高さ各五六丈、その形二玉の如し。(所云執金剛神これなり。左輔を密迹金剛といひ、右弼を那羅延といふ。正法念經、釋門正統等に見えたり)これ天工の至妙にして、鑿もて鑿れるに彷彿たり。これより奥へは人愈怕れて、絶てゆくものなかりしに、近屬中居松原の村間、赤岩といふ地方に、赤岩一角武遠といふ一箇の郷士あり。心飽まで猛くして、名だたる武藝の達人也。一日その門人等に告ていふやう、傳聞く赤岩庚申山は、千劍破神代に、稚日靈尊、素戔鳴尊、猿田日子、個三柱の大神、神談に相謀給ひて、件の山に登らせ給ひ、石を穿て室を造り、石を渡して路を通し、住せ給ひし神迹也。かくて數万歳の後、皇朝四十八世の女帝、稱徳天皇の神蹟景雲元歳、釋尊道志、願に依て、下野州二荒山を開き初しかへるに、庚申山に懸置りて、彼三柱の大神を、親しくおがみ奉りき。と世の口傳には傳

れども、今は七百十餘年の星霜を歴るまでに、胎内齋をうち過て、件の山の奥の隙を、見きといふもの絶てなし。われ當國の郷士として、間近く住るに、彼高嶺の奥だにも見盡めずは、莊客們に異ならで、耳怕をするものに似たり。翌は夙めて登山して、數百年なる蒙昧の、迷ひを釋んと思ふのみ。各位も同意ならば、必相伴ふべし、といふに衆皆呆れ果て、辭齊一諫るやう、先生の武藝勇力もて、如右思ひたち給ひしを、理りならずとまうすにあらねど、件の山路はいと峻しく、且谷川に渡しかけたる、自然の石橋虹の如く、若滑にして進みがたし、と故老の口碑に傳へたり。加旃、彼山中には、木精あり。或はいふ、是數百載歴る野猫なり。その猛きこと虎の如く、その變化測るべからず。もし謬て山中に、迷ひ入るものあるときは、忽地引裂咬ふといへり。これらの事は先生も、傳へ聞せ給ひけん。さればとて露ばかりも、恐れ給ふべきにあらねど、君子は敢危邦に入らず、孝子は嚴墻の下に立ずとかいふ、本文も候はずや。孝子の親を思ふのみかは、親たるものその子の爲に、自愛して危きに近づかずは、亦慈ありといはまし。みづから賢慮を回らして、おもひとままり給はんことこそ、願しく候へ、といはせもあへず赤岩ぬしは、呵々と冷笑て、原來おのゝ怯せしな。大約深山大澤には、鬼魅妖怪もなからずやは。武術を學ぶは何の爲ぞ。昔平維茂は、戸隠山なる惡鬼を退治し、又源頼光は、大江山なる妖賊を、討夷たるにあらずや。爾るに武士たらんもの、魑魅妖怪に怕れてゆかずは、習ひし武藝もその甲斐あらず。かくてははやく刀を棄て、農商出家おのがまに、生業を易べきのみ。かくいへばとて只管に、武藝を恃み膂力に誇りて、人の諫を拒むにあらず。われ赤岩を氏としながら、おなじ名だたる靈山に、登陟せずは、虚稱に似たり。虎穴に入らずはいかにして、よく虎子を獲ることあらんや。おのゝさまで恐れ給はゞ、われ決して誘引はず。翌の留守を頼む也。うち相譚ふて俟給へ、と勢ひ悍く説破られて、洩て返すものもなし。そが中に允可の高弟、某甲某乙三四名、師の宏言に獎されて、恥しくや思ひけん、齊一膝を推進めて、現先生の卓見高論、はじめて夢の覺たるごとく、ほとゝ感服仕りぬ。餘人はしらず俛

門は、翌のおん供せまくほしけれ。この義を許させ給へかし、といふに一角歡びて、通微妙くいはれたり。稽古の力
 顯れて、いと頼しくこそ候へ。然らばとく／＼宿所に還りて、翌の準備をし給へ、といそがされたる四人はさら也、
 留守せんといふ弟子さへに、翌を契りて兪共侶に、散動たちて門邊より、別れて家路にいそぎける。されば赤岩一角
 ぬしに、前後三箇の正妻ありけり。第一の正妻の、その名を正香と喚れしは、賢女の譽れこゝへも聞えて、よく内を
 脩め奴婢を慰れみ、生平に神佛を深信して、良人に愆あるときは、諷諫めて悖はず。この腹に男子うまれて、角太
 郎と喚れたり。惜むべし正香の刀自は、この年の春世を早うしつ。その子は四か五ツのとき也。かくて又その夏の比。
 迎られたる後妻の、窻井とか喚れしは、亦これ美人の聞えあり。さばれその心操は、前妻に劣れるにや、娶られ來つ
 るその年の、初冬の比に至りて、むかしより人みな怖るゝ、庚申山へ登らん、といひし良人を諫も得せず、只その武
 藝を怙るにや、いはるゝ隨に出立せしを、後に悔しく思ひしとぞ。間話休題、さる程に赤岩ぬしは、その次の日の
 未明より、四箇の高弟共侶に、野裝束に身を固めて、手にはおの／＼弓箭を携へ、從者には晝餉の割籠を負して、庚
 申山へぞ攀登る。比は十月初の三日、天よく霽て暖く、世にいふ小春の日和にて、麓の千草冬枯ながら、孤花開る
 も珍しく、朝鳥の聲を聞つゝも、胎内寶の石門より、二玉石臺石など、四方の眺望に暇なく、この處より一山の、風
 景眼下に盡すべき、奇絶に驚く可也。是よりして下りゆくこと、纔に二間ばかりなれども、その巖石の峻嶒なること、
 鬼の髻髻ともいひつべし。是處よりなほも下りゆくこと、亦復二町あまりにして、前溪に石橋あり。その長サ一丈三
 尺、廣さは五六尺なるべし。かくてこの天工奇絶の石橋を、辛くして渡り果れば、前面に自然の石門あり。是第一の
 正門歟、まさかにして東に向へり。大サ大凡十二三丈、中面は一丈二三尺、左右に兩箇の小竇あり。各九尺許にし
 て、全段宛琴柱に似たり。是より二町あまりにして、左のかたの幽谷より、數十丈なる大石高く峙て、塔の如く櫓
 の如く、巖巒頂の上に生茂りて、奇ならずといふことなし。又下ること、二町あまりにして、裏見の巖あり。その巖

凡五六尺、その高きこと巖るべからず。こは二巖山の巖に似て、その奇はなほも優りたり。かくて、この巖布のほと
 りより、登りゆくこと五町餘にして、右に五隻の大石あり。色白くしていと高かり。遙に瞻仰る所、石中に文字顯れ
 て、庚申と讀るゝ如し。こは文字石といふべきのみ。又詰端ること、一ト町にして石門あり。その大 丈八九尺、中央
 は九尺許なるべし。この二の門より一ト町餘にして、燈籠に似たる大石あり。高サは四五丈ばかり也。又登ること數百
 歩にして、遙に戌のかたを眺れば、洪鐘に似たる大石あり。その高きこと二三丈、蘿生し兔絲黄線て、蒼然として亦奇
 也。是より又下ること、數百歩にして石橋あり。長サ七丈餘にして、恰虹蜺の引るが如く、苔滑に雲蒸て、その潤
 底の見えざれば、渡らんとするに蹊眩き、足さへ難て進難たる、門人等はこゝに至りて、齊一その師を諫るやう、先生
 膽勇武藝の徳もて、昔より人のかよはぬ、この山に入り給ふこと、既に過半に及びたり。誰か感服せざるべき。是よ
 りしてゆくてのかたも、風景大かた猜すれば、相似たるものなるべきに、とく／＼還らせ給へかし、と迭 代に禁れ
 ども、赤岩ぬしは頭を掉て、蓬きことをいふものかな。奥の院迄至らずして、この中途より空しく歸らば、初よりし
 て來ぬこそよけれ。おの／＼こゝに俟給へ。われ走一走りに登り盡して、瞬間にかへり來つべし。いで／＼、とい
 ひながら、禁る袂をふり拂ひ、弓杖突て件の橋を、忽地に渡り果て、見る間に見えずなりしかば、門人等は忙然と、
 從僕共侶五六人、こなたの岨に立在て、齊一臂を痛るのみ。俟こと二响あまりにして、日ははや大く傾けども、赤岩ぬ
 しはかへり來ず。こは平事にあらじとて、迭に額を合しつゝ、商量果しなきものから、今さらにこの礪を渡りて、追
 索んといふものなければ、所詮一ト圓宿所にかへりて、内政によしを報て、夥の人を驅催して、ふたゝび來て索 求
 ん。こゝにて虚々日を消さば、一人として恙なく、還らんものはあるべからず。いざ／＼、と一人がいへば、衆皆有
 理と雷同しつゝ、逃るが如く故來し山路を、迎る／＼も辛して、その黄昏に赤岩なる、宿所へ還りて、如此々々と、
 後妻窻井に報しかば、こはそもいかに、とばかりに、伏沈みてぞ號哭ぶ。されば留守せし門人等も、件の凶 音に、

駭 騒ざるものなく、是首に三人、彼首に四人、膝をまじえ額を鳩めて、とやせんかくやせましとて、群議を凝すものもあり。しかれども武藝力量、賢ある師のいかにして、命に恙あるべしやは。山路に迷ひ給ひなば、後れてかへり來給ふべし。涙を斂めて俟給ひね、と内政を慰めて、通宵戸に立迎に出て、ゆきつ戻りつするものあり。とかくする程に天は明て、日ははや高く升れども、赤岩ぬしの還らねば、存亡定めがたしとて、猛に里人を驅催し、一ト隊すべて六十人、弓箭、鳥銃、竹槍など、器械々々を引提たる、門人遺なく先に立て、庚申山に攀登り、既にして彼石橋の、ほとりまで來つれども、怕れて渡るものはなく、又商量に時を移せば、冬の日影の傾き易くて、未の半はや過たり。かくてはけふも事果じ。翌はなほ又人数を倍して、ふたゝび來て橋を渡らん。とてもかくても時後れしを、さばかり急ぐことかはとて、又徒に引かへしつゝ、その日申の比及に、胎内竇を出んとせし時、忽地後方に入りて、聲ふる立て喚かくるを、愈駭きて見かへれば、是則別人ならず、赤岩一角ぬし也けり。これはこれは、とばかりに、且歡び且罵り、引返し圍繞らして、恙なきを祝しつゝ、きのふもけふも還らざりける、縁故を語れば、赤岩ぬし微笑て、きのふわれ頻りに進て、ひとり石橋を渡りしとき、且彼此を見かへるに、寶藏に似たる大石あり。又二重の扉に似たるもあり。又屏風に似たるもあり。箆筒の引出してふものに似たるもあり。この餘或は舟、或は釜、或は鶴龜に似たる自然石の、巖々として立るあり。磔石として伏せるあり。天造地工の精妙なる、見れども言葉に述べたく、畫くとも筆に寫し易からず。これより岩窟數箇所あり。上古穴居の址なるべし。既にして登盡すとき、前面に三箇の窟室あり。是則奥の院なり。駭然として向上れば、屹兮帆兮、その高きこと二三丈、礪兮峻兮、その峻きこと近づくべからず。その窟の形たる、中宮は□にて、左は△、右のかたは○かりける。便是天地人の三才に象るもの歟。その窟口の廣きこと、おの／＼八九尺なるべし。所謂雅日靈尊、素盞鳴、猿田日子と共に三神、迦古靈座の舊蹟ならん歟。この窟口の神前に、石張三隻並びたり。その形、非禮勿言、非禮勿言、非禮勿言の三獸にして、蘇若自然の流

石也。庚申山と名づけしは、蓋これに依れるのみ。神祇官の記に云、庚申の日に伴の三神を奉拜すといへり。こゝに至て年來の、疑念漸氷解して、深信肝膽に銘したり。この神室を拜み果て、右の方に歩ること、數百歩の程にして、東の陝ともいひつべき、峻峻たる山陝あり。眺望尤奇絶也。其處より又下ること、凡四町あまりにして、いと平なる大石あり。その長サ十八丈、高サは一丈餘りにして、建屏風に異ならず。この平岩の斷間より、八町あまり東へ下れば、胎内竇へかへり出づ。これ今わが來つる順路也。爾るにきのふ、われ奥院をおがみ果て、東 陝より投降を、迎る／＼もかへる折から、雲忽地に足下に起りて、晦 冥瞬息、暗きこと。野干玉の夜に異ならねば、こはいかに、と心迷ひて、平岩の斷間より、東へは得下らず。後に思へば、謬て、釜石のほとりより、未申なる岨路へ、頻りに進みゆく程に、思はず足を踏らして、數十仞なる溪底へ、忽地墮と滾落たり。然れども幸ひに、底には砂礫のみにして、水も亦膝を過ねば、右の腕を傷れるのみ、命に恙なけれども、索の絶たる吊桶に等しく、人揚ざれば彌勤の世まで、出て歸らんよしもなし。とかくする程に日は暮れて、溪底に天を明せしかば、頻に飢て堪がたかり。いかにせまし、と四下を見るに、巖に岩菌の生たるを、飽まで探て飢を凌ぎ、さりとて登る路ある歟とて、彼方是方とする程に、足懸りよき處あり。このほとりには藤蔓の、上より長く降りたり。こは究竟、とこゝろ娛しく、手練著ては岩稜に、足踏掛つ辛して、攀登ること半日あまり。やうやく故の山路にかへりて、今あしこまで來る折から、各位の後影を、遙に見つゝ呼び留たり、と一五十を説示せば、門人、奴隸、里人等、駭嘆せざるものもなく、その高運を相賀して、且勸ること大かたならず。懸て胎内竇に憩して、割籠の飯の遺れるを、開きて差るものもあり。或は又その衣の、溪水に濡れていまだ乾かず、處々に積壤の、塗たりしを脱更さして、瘼を勸るものもあり。しかはあれども赤岩ぬしは、氣力日ごろに異なることなく、衆人を勞ふて、多くは途より歸し遣し、門人と從者のみ將て、宿所にかへり來にければ、内政は只死したる人の、甦生れる心地して、その歡びをいへばさら也、尙休き角太どのは、天性孝心備りけん、穉こ

ころにきのふより、かへらぬ親を思ひ屈して。昨夜は睡りかねたるも、今恙なくかへりぬる、親の袂に黄縁て、問慰るもいと可愛し。これより親族知己里人、一人かへれば又一人、詣來て緯の悦びを、述るもの少からず。一句ばかりは庚申山の、物がたりにて日を消す、家内賑しく、赤岩ぬしの剛勇を、感ぜぬものもなかりしを、ぬしは憇たる氣色もなく、人々にうち對ひて、件の山は昔より人耳怕して登らぬのみ。山には毒蛇猛獸なく、藥草奇石、銀錫銅鈿、奇石蠟石多かるのみ。誠に海内無双の神迹、實に別世界の仙境也。愚按するに、疑らくは、これ神代の山陵にあらずや。某が謬て、水溪に落ても恙なく、還りしをもて魔所ならぬを、各賢察せらるべし。今よりして後、われに等しき、志あらんものは、必登山し給へ、と鼻齧めかして誇りてけり。この一ト條は寛正五年、冬十月の事なれば。といひつゝ指を僕て、十七年の昔になりぬ。赤岩ぬしは形の如く、異もなげにいれしかども、かゝりし後もかの麓にて、折々人の亡すること、今に至てかはらねば、登山するものありとは聞えず。かくて赤岩の宿所には、後妻の窓井どの、その十一月より有身て、次の年八月の日子、赤岩ぬしを産れしかば、赤岩ぬし歡びて、牙二郎と名づけたり。凡世の人心、前妻の子を繼母の、憎むは和漢に多かれども、赤岩ぬしはいかなる故にや、二男牙二郎の生れしころより、前妻腹なる角太郎を、憎むこと大かたならず。さもなき事を咎々しく、穢きものを打擲しつゝ、傍痛き事多かれど、孝心深き角太郎のは、搏つ杖の下よりも、親を慕ふて、まはらぬ舌に、勸解る辭の伶俐さを、見も聞もせし人毎に、皆痛しく思ひけり。この時赤岩に程遠からぬ、犬郎といふ地方に、亦是一個の郷士ありけり。素より文武の達人にて、姓氏は犬村、名は儀清、俗字を蟹守といへり。これは是、赤岩ぬしの前妻なりし、正香どのの家兄にて、角太郎どのの爲には、外伯父なりければ、愆もなき幼侄の、親に愛を失ひしを、いと不便に思はれけん、わが子は女兒ひとりなれば、角太郎を呼びとりて、養子合にすべけれとて、赤岩ぬしに乞れしに、可愛くもなき子の事なれば、赤岩ぬしは情氣もあらず、並に承けて、そが養子とて迎へけり。これにより角太郎の、六の歳

より犬郎なる。伯父公夫婦に、養はれて、その孝心に親疎なく入ては、養父養母に仕へ、出ては實父繼母を離り、セツ入ツの比よりして、手習讀書に怠らねば、養家はさらなり、里人等まで譽ぬものななかりける。されば又、犬村蟹守儀清ぬしは、弱冠のころ京師に上りて、文學武藝、その師を擇み、留學年を累しかば、文武二道の達人なれども、舊里へかへりては、隱逸をのみ旨として、人の師となることを欲せず。只角太郎どののみに、力を入れて旦夕に、教導ざることなきに、子は亦その才養父に優て、一チを聞て二三チを知る、下學上達速にて、年十五六に至りては、文武の奥義を極めたり。されば爾後犬村ぬしは、一日その内政と相譚ふやう。角太郎もこの春は、十八才になりたり。わが女兒雛衣は、二ツ劣りて二八になれ、ば、婚姻さすべき時至れり。生ごころのつくものどもを、わかち置んは要なき事也。翌は黃道吉日なるに、とくその準備をし給へとて、雛て子どもを喚よせつゝ、緯のころを告しらすれば、齊一顔を赧して、應かねてぞ立にける、かくて次の日犬村ぬしは、先角太郎どのの、額髪を剃とらして、元服の義を執行ひ、養父の諱の一字を授けて、犬村角太郎禮儀と名告らせ、女兒雛衣どのには、袖を摘させ、齒を染さして、その脊里人甲を、媒妁に憑み備ふて、婚姻愛たく整ひければ、窓の竹に千歳を壽き、檐下の松に萬代を契りけん、いと相應しき新夫婦を、親はさら也里人等さへ、副には類あらじといひけり。されば浮世の月と花、盈れば虧るならひにて、歡びの果は又、哀も遠からず、犬村ぬしの内政は、その次の年の秋のころ、風のごちうちうち臥せしより、鍼灸藥餌の驗なく、五十に足らぬ齡もて、遂にむなしくなりけり。かゝる歎きのうち添て、犬村ぬしもその冬より、類中とやらんにて、うち臥せしより枕あがらず、病ごと二年あまりにして、これも今茲の春の比、黄泉の客となり給ひぬ。齡は六十あまりなるべし。さる程に、角太郎のは、養父母前後の病牀に、晝は終日枕邊を去らず、夜も通宵帯を解かて、夫婦心をひとつにしつゝ、看とり冊き、療養祈禱に、醫師を擇み、驗者に便りて、長き月日を怠もなく、心の誠を盡しぬる、孝行その甲斐なかりしは、命數限りあればなるべし。是より先に赤岩にては、彼後妻の窓井どの

は、二男牙二郎の、三歟四ツになりける比、一日頓死をしたりける。これよりして赤岩ぬしは、妾一人をものし給ひて、年來を歴る程に、その妾はとにかくに、尻の落つくものはなくて、或は半年、或は一稔、立や立ぬにいひこしらへて、身の暇を乞ふもあり、又遂電するものもありて、幾人となき置替られしに、去々歳の秋の比、武藏のかたより流れ來ぬる、船虫といふ妾のみ、いたくころに慍ひけん、いく程もなく正妻に、推のぼされて二とせ歴たり。さて又犬郎の宿所には、わかき夫婦の世になりて、しばく赤岩に詣來つゝ、親の安否を訪ふ程に、犬村ぬしは優にて、遺財の夥ありといふ、人の噂に船虫は、良人に薦めて角太郎夫婦のものを呼とりつ。兩家をひとつに合するは、件の金を略ん爲也。とはしらずして角太どののは、實父の招きに歡びて、取るものもとあへず、家も田地も人に預けて、雛衣どのの共侶に、赤岩に來て同居したれど、赤岩ぬしは見もかへらず、又彼二男の牙二郎どののは、心しぶとく頑固にて、兄を兄とも思はねど、角太郎どののは悖はず、三方四表に機を包て、なほ孝悌を守られしは、人のしがたきことになん。かゝりし程に雛衣どののは、今茲の夏より身おもくなりしに、彼鳩鷹の船虫が、豫て伎倆しことなるべし、雛衣どののは赤岩ぬしと、情由ありなるといひ立て、血で血を洗ふ恥を思はず、素よりあるべき事ならねども、角太どののは已ことを得ず、雛衣どののに休書を、とらして媒人許預け遣し、飽ぬ夫婦の別れをせられし、心の中はいかなりけん。妻は義理ある養家の女兒、從母兄弟にて重難なりしに、身ひとつにてもある事歟、有身てより既にはや、三四箇月になるとか聞けり。況て歎きは彌増る、雛衣どのの恨みのかずく、涙に袖は朽るとも、乾すことかたき濡衣は、雲時浮世の笠やどり、急がぬものをとくく。彼媒人に披立られて、泣つゝ出てゆき給ひぬ。とばかりにして猶治らず。角太どののさへとかやくと、なき事をのみいひ懲されて、遂に勘當せられしかば、犬郎よりも來たる、金銀調度を置土産に、田園さへに推留られ、その身その儘追出されて、世を形なく思ひにけん、赤岩村と犬村の、間なる片田舎の、字を遊歴とか呼べる地方に、草の卷を解びてをり。さばれ親は半信にて、その行ひは法師も不及、と彼處より

り來ていふものあり。いと痛しき事ならずや。僕はその初、獵戸なりし比よりして、赤岩ぬしは花主也。彼先生は最大、野味を嗜給へば、月の中には幾遍となく、彼處へ肉をもてゆきて、よき商ひをする日も多かり。今では殺生せざれども、餘の獵戸より申買して、なほ疎からず交加すなれば、件の口舌の折からも、ゆき合したるにより、かう具なる事を得たり。としたり貌して説誇らしつ。花主甲斐なく人事いへば、影さす鳥の驚してや、外面猛に見出して、あな無益しや、われながら、庚申山の來歴より、興に乗して思はずも、いはてもの事いはんとて、漫に時を移しつゝ、末の半過るまで、おん身の足を駐たり。許し給へ。と賄話にけり。

第六十回

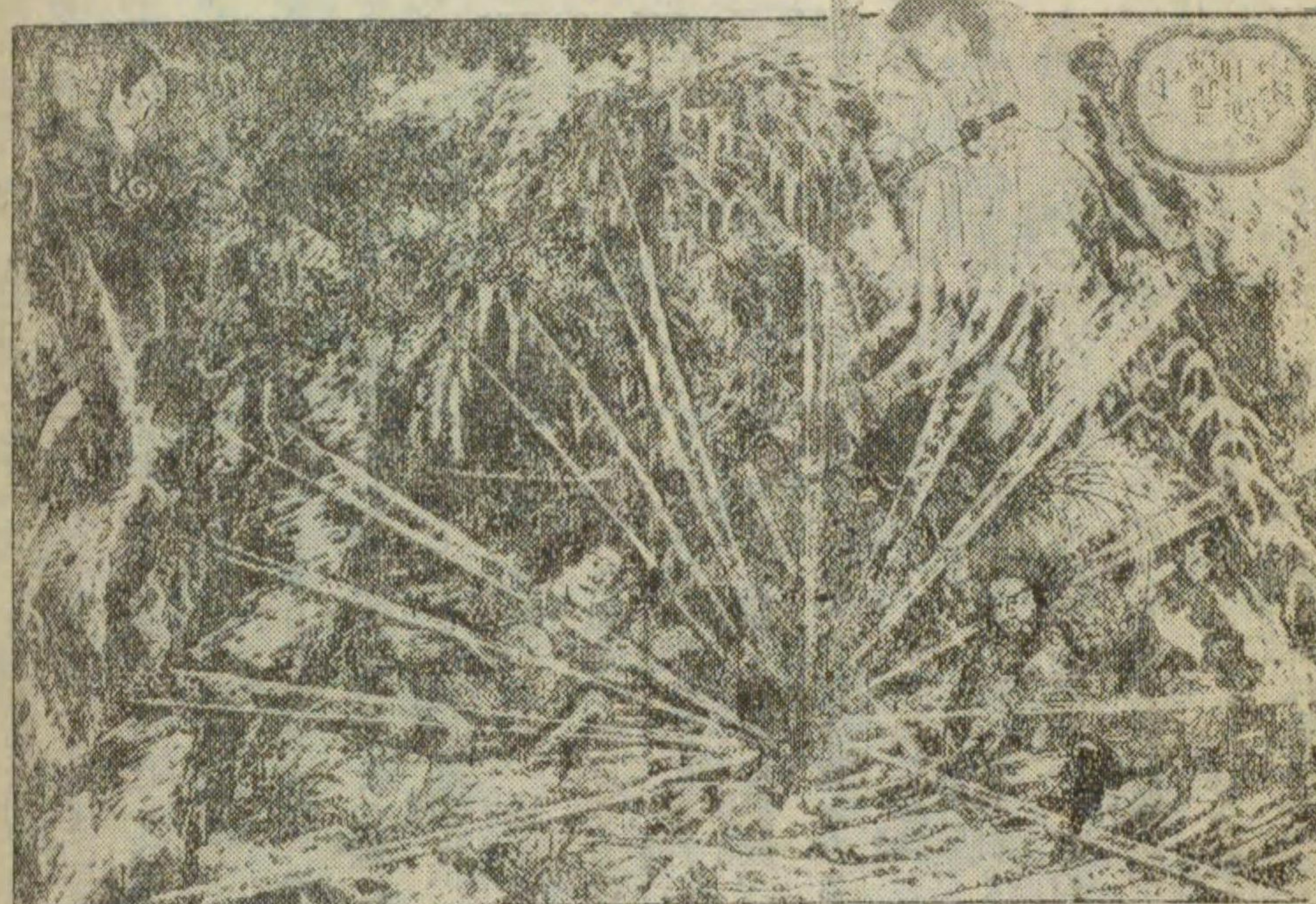
胎内竈に現入妖怪を射る
申山の窟に冤鬼醜體を託ぬ

登時犬飼現八は、鵲平が長物がたりを、開果て嗟嘆に堪はず、現世の人のさまぐなる、得がたき孝子をもちながら、かくまで不慈の親もありけり。さるにてもその子の賢なる、直き心に吳竹の、世を形なく思ひ捨てや、菩提の道に入らんとすなるは、いと惜むべき事になん。いざ退らん。と臂近に、笠引よせて、喃翁 庚申山の奇異怪談、赤岩犬村親子のうへさへ、いと詳に告られて、日數累し旅宿の憂苦を忘るゝまでに慰めたり。たま／＼この地に、來つる甲斐に、さる靈山の壤を踏ば、後々までも話柄に、なるべき事の多かめれど、此度はをさ／＼人を索て、心急ぎのせらるれば、そは又かへさの事にせん。されば彼山の麓路を、過らずはいかにして、わが志すかたに至るべき。かゝれば意見に隨ふて、弓箭を買もてゆくべきのみ。和主が好と思へるを、取出てはやく賣すや。といはれてやゝと身を起す、鵲平は微笑ながら、ふたゝび外面瞻望て、彼 樹せ。日影は欵て、彼處の櫃を外れたり。哺時に程もなからんに、今より急ぎ給ふとも、神子内村て日は暮なん。さればとて彼村に、客店はなきものを、今宵は枉てわが宿に、曉し給へ、と勸めても、いはまほしうは思へども、さては宿錢の欲かる隨に、さもなき事を物々しげに、權し懲して、旅ゆく人の、足さへ禁めたりなど、思はれもせば痛まぬ肚を、摩らるゝに似て朽惜かるべし。弓箭はおん身の意に稱ふを、みづから擇み給へかし。と應て懸て左右の手に、懸懸みづもて來て見するを、現八はこれ彼と、擇み取たる

半弓を、いざとて選與せば、鵲平は、そが儘柱に推當て、張引かけて兩條の、獵箭共備さし密する、その間に現八は、腰に著たる錢解出して、弓箭の價を取らせつゝ、はや立出んとする程に、鵲平はなほ叮嚀に、客人路次に由斷なく、彼神子内をうち過ぎて、嶺村まで急がせ給へ。是首よりして嶺まで、大約三里半道なれども、山にしあれば四里にも敵へり。倘この風が北にかはらば、雨にならんも測りがたかり。こゝろ得給へ。と諄かへす、田舎氣質の實意ある、人の辭に現八は、歡びを演別を告て、手ばやく結ぶ笠の紐、搔取る獵箭を背のかたへ、帯にそが儘挿めども、後へは引ぬ手束弓、小脇に楚と携へて、震くも麓路を、足に信して急ぎけり。却説犬飼現七は、今さら路を貪りて、頻りに進みて身の危きを、おもはざるにあらねども、茶店のあるじが賣弄問話は、只世渡りの方便のみ。土俗の言は特むに足らず。行銷したる處にて、今宵の宿りを投んに、さのみ難きことやはある、と侮りしより導者を備はて、只かの弓箭を携て、登る山路は二里あまり、神子内村を稍うち過て、嶺をさして急げども、頃は九月初旬、日影短くはや黄昏て、天さへ曇る山ふところの、さらでも闇き樹下蔭に、前路もわかずなりしかば、こゝろ有緊に安からぬ、肚裏に思ふやう、かゝるべしとは知らずして、鳥夜に要なき弓箭より、買ふべきものは松明なりしを、噫悔しくも脱落にけり。任他神子内より、嶺村へは路程、一千里半道ありとか聞り。既にして神子内より、二十餘町も來つらんに、こゝより進むも退くも、路に損益なかるべし。嘗者も京へ登るといふ、世の常言もあるものを、暗きに怖ることかは、と志を奨して、其處とも知らぬ崎嶇を、辿るも果しながき夜の、深ぬ程にと辛じて。雖邁々々人に遇ねば、西敷東敷問ふよしなくて、迷ひ入ること幾町なりけん、澤邊傳ひに登ること、二三里ならんと思へども、嶺村へは至らずして、牡鹿の聲のみ聞えけり。かゝれば里へはなほ遠かり。いかにすべき、と思ひかねて、且疑ひ且詰めば、心ほそさもますら夫が、後悔臍を嚙まで、又つく／＼と思ふやう、不知案内の深山路を、如法闇夜に辿らんより、こゝにて驚るを俟べき歟。否々こゝに留るとも、猛獸毒蛇の患ひを禦く、よすががあるにもあらざれば、只命運を天に儘して、

夜鳴し走らば何處まれ、里にも到らん人にも逢ん。さはとてなほも上りつ下りつ、又幾十町敷ゆく程に、思ひがけなく最大なる、石門のほとりに來にけり。このとき天は稍霽て、没遣りたる七日の月の、山峽になほ幽なる、影を便著に睛を定めて、且彼此を見かへるに、繻に足葎の鵬平が、設せしにてそれかと思ふ、庚申山にありといふ、胎内竈に似たりけり。こは何麼生、とばかりに、且驚き且呆れて、茫然として立在しを、しばらくして又おもふやう、とてもかくても山深く、迷ひ入りしを又今さらに、嶺村まで至らんこと、輒き路にあらざれば、今宵は且この窟籠に、曉して里に下るべしと、尋思をしつゝ坐を占て、弓箭を側に引つけて、なほ深る夜を成てをれば、月は忽地没果て、ふたゞび鳥夜になりけり。現幽谷の峻岨なる、この四邊には鹿もかよはず、山氣頻りに肌膚を犯して、夜寒は里に彌増たり、熟ぬ山路に夜をこめて、迷ひあるきしことなれば、身さへ心も疲勞果て、よしなや路を貢らずは、かかる艱苦はあらざらましを、通言を察せず、田舎翁とのみ、思ひ悔りて、實意ある、人の諫を聴ざりしより、千金の身を危くしつるは、愚魯なりき、と亦さらに、後悔の外他事もなく、寢られぬ隨に友の事、養父母の事親の事、在となき世の過去かたを、思ひ續けて曉る天を、いとく遅しと俟ほども、ゆめにも鐘は音づれねども、星の光を仰て瞻るに、丑三にやと思ふ比、東のかたより忽然と、螢火可の火光、閃々として兩三點、こなたを投て來る如く、いと幽に見えしかば、現入ふかく怪みて、彼は鬼火歟、しからずは、天狗火にもやあらんずらん。要こそあれ、と遽しく、半弓拿て、胎内竈を、出て傍の樹蔭を、盾柴にしつゝ闊ひをり。さる程に伴の火は、近づく隨に大きくなりて、そばあたりを燭すこと、炬に異ならず。既にしてその間、四五反ばかりになるまでに、現入はなほよく見んとて、瞬もせてありけるに、怪しむべしその火の光は、地狗(狐)天狗の所爲にはあらで、えもえしれぬ妖怪の、兩眼の耀る也。且その模様を瞥ていはど、面は暴たる虎の如く、口は左右の耳まで裂て、鮮血を盛れる盆より赤く、又その牙は眞白にして、劍を倒に裁たる如く、幾千根の長き鬚は、雪に閉たる柳の糸の、風に紊れて聳ぐに似たり。しかれど

もそが形體は、魁人にも異ならず。既に離口の大刀を握佩て、驍騎に跨たるが、その形も亦異形にして、全身すべて枯木の如く、處々に苔生て、四足は樹枝なるべく、その尾は芒の生たる也。左右に従ふ若黨あり。一箇はその面藍より青く、一箇はその色赭石に似て、頭髮さへにいと赤く、畫る諸天に彷彿たり。かくてこの妖怪主従、徐々に馬を歩せつゝ、何事やらん相譚々々、或は高く笑ひなどして、胎内竈のかたに來にけり。現入は彼爲體を、はや見定めてなかく、に、些も騒ぐ氣色なく、心の中に思ふやう、彼馬に騎たるこそ、妖王なるべけれ。先にすれば物を征し、後るゝときは征せらる。彼奴をだに射て落さば、その餘は必逃亡なん。よしや怨を復さんとて、これ彼一うち逆ふとも、そは怖るゝに足るものならじ、と早速の尋思は、勇士の大膽、兩條の箭は腰にあり。半弓左手に突立て、竊に件の樹に攀登るに、その神速きこと猿猴の如く、程よき枝に足踏留めて、弓に箭刺ふて舞固めつつ、霎時矢比を張ひけり。さりけれども妖怪等は、かくとは思ひかけざりけん、心のどけくうち相譚て、胎内竈に近きつ、進み入らんとする程に、寛濟せし現入が、矢聲も猛く發つ箭に、件の騎馬なる妖怪は、左の眼を窺深に射られて、一ト聲苦と叫びもあへず、馬より墮と墮しかば、吐嗟と騒ぐ兩箇の妖物、手負の手を取り肩に引かけ、一箇は馬を牽つゝも、舊來しかたへ逃亡けり。こゝに至りて野干玉の、又黒き夜となるものから、現入は思ひしごとく、一ト箭に三箇の妖怪を、射走らしたりければ、先樹の下にをり立て、かさねて思念を回らすに、彼妖物等は不意を撃れて、恐れ惑ふて逃たれども、わが半弓は圓竹にて、箭も亦眞物ならねば、勢ひ鈍く力弱かり。かゝれば眼にあらざして、捷を取ること難かるべし、と思ひし矢坪の違ねど、さしも老たる妖怪が、あの一箭にて脆くも死んや。或は眷屬同類を、駆催してふたゞび來ば、その回は防ぎ難かるべし。地方を易て彼奴等が、なほせんやうを見るこそよけれ、と思ひにければはつかに特む、弓に一ト箭を携て、胎内竈を西のたかへ、ゆき抜て又見かへれば、靈山異境の奇特なるにや、没たる月の出るにあらねど、今まで黒白を別ざりし、星光は恒にもまして、晝夜よりも明かりければ、進退大く便りを得て、只管



に攀登りて見れば、彼鵝平がいへるに違はず、臺石あり。又髯の難所あり。二間餘の石橋、裏見の瀑布、庚申の文字石、第二の石門、燈籠石、洪鐘石を遙にうち見て、十二三間なる石橋を、自若として渡りけり。信なるかな現八は、拳法捕物に妙を得て、且樹に登り嶮岨を渉るに、坦地をゆくより易かる事を、初許我に在りしとき、芳流閣の屋上にて、犬塚信乃と組撃したる、働きをもて知られたり。然ればこそあれ今宵も亦、深山の樹上に登居て、妖怪を射て拳八案れず。恰といひ恰といひ、十三間なる細谷橋を、足下暗き夜深に渡りて、亦怕れたる氣色なきは、人の及ばぬ所爲なれども、猶夜視にして遠景の、定かならぬを憾とするのみ。既にして石橋を、渡り果て又攀登れば、前路に岩窟數箇所あり。上古穴居の迹にやあらん、といひつるは現こゝなるべし。聞くが如くばこの處より、奥院まで遠くもあらじ、と思ひつゝ、又ゆく程に、就中巨大なる、岩窟の中に人ありて、火を燒てぞるたりける。こゝに至りて現八は、

心ともなく兩三歩、逡巡をするまでに、うち驚きつ且怪みて、限來こゝにも妖怪あり。漫に地方を要んとて、深入したる悔しさよ、と思へば騒ぐ胸を鎮めて、纔に残る一ト條の、箭を拔出し、弓彎固めて、寄せは立じ、と身構たり。登時件の岩窟より、いと細りたる聲を立て、勇士われをな怪み給ひそ。吾儕は素より妖怪ならず。和殿は今宵ゆくりなく、胎内竈のほとりにて、わが響をなん射給ひたる、その歡びをいはんとて、俟こと既に久しかりき。猶相譚て顧むべき、事しもあれば立よりて、且火にあたり給はずや。と呼かけられて現八は、些も擬議せず見かへりながら、術裏に思ふやう、彼奴が甘言をもて、誑引寄せんと欲するとも、いかばかりのことやはする。且試て時宜に依る、術こそあらめ、と尋思をしつつ、勇氣を示す聲高やかに、浮世に遠き深山幽谷、人の住むべき所ならぬに、和玉は妖怪ならずといふ敷。爾らば亦これ何者ぞや。と詰問つゝ立對へば、彼人答て、さればとよ、某年來ここに住るは、わが兒も知らぬ以あれども、一朝には説盡しがたかり。枉て且く立より給へ。といふに現八こゝろには、なほ疑ひの釋ねども、推辭ば怯したりとや思はん、えうこそあらめ、と領きて、弓箭投捨岩窟に、進み入つゝ件の男の、ほとりによるを遠しく、手をうち揮て推禁め、勇士そなたに坐し給へ。和殿の懐には瑞玉あり。某憚るよしあれば、只顧に相觸るゝことを欲せず。目今もいへる如く、和殿は響に傷けて、わが憤を洩し給へば、實に得がたき寶なれども、欸待し進らする物もなし。うち解て火にあたり給へ。夜寒を凌ぐに足るべきのみ。といひつゝ、蒼柴折燒て、傍にありける椎實を、すゝめて餓に充るにぞ。現八は火光に就て、件の男をつらく見るに、齡は三十あまりにして、形體骨立、顔色蒼然、纒經なる仁田山袖に、龜甲形の服章染たるが、幾月日を歴たりけん、海松の如くに垂垂れし、小袖ひとつを被たりける。その爲體何となく、この世の人とはおもはれず。わが護身囊なる、玉に怕るといひしを思へば、陰鬼ならずは、狐貳貉敷。問 試すは知るよしあらじ、と思へば膝を推進めて、和主は響にわが射たる、妖怪を響といへり。渠は何等の妖物にて、和主は亦甚麼なるものぞ。とくうち出して示さずや。とせわしく問れて件の男は、

嘆息しつゝ、額を拵て、語るも苦しき過去かたを、儂數れば十七年、いと長々しき言なるを、心 靜に聞給へ。鶴に和殿が射て落しつる、妖怪はこの高峰なる、胎内竈の邊に棲りし、野猫の化たる也。渠既に幾百歳の、星霜を歴る隨に、大きなること曠に等しく、猛きこと虎に似たり。神通自由なるをもて、この處の山神、土地を奴僕の如く、役使はずといふことなし。さらても木精年老獸、貓豹などの類まで、相從ふて渠に媚。今宵彼奴が乗たる馬は、是千載の木精にて、老樹の精の化たる也。又彼兩箇の從者と見えしは、所云山神と土地也。さるにより野猫が、射られて馬より墜たるをり、仇を索る意なく、慌 忙き野猫を、肩にかけつゝ、逃亡たり。おもふに件の兩神は、神通渠に敵しがたくて、年來使役せらるれども、眞實歸伏せしものならねば、手を負ふたるを幸にして、賣けて宿所に還れるのみ。もしかの猫と貂ならば、必和殿を索求めて、怨を復さんとこそ謀るらめ。然るをその事なかりしは、亦是和殿の洪福也。又某は陽人ならず。告るも面ぶせなることながら、この深山より程速からぬ、赤岩村の郷士なりける、赤岩一角武遠と、呼れしもの横死したる、冤魂こゝに留りて、假に姿を顯したり。某累世武弁の家にて、郷士にはなりたれども、武藝は人に譲ることなく、鞍馬入流武義を極めて、好みて人の師となりしより、鄙にはあれど弟子多かり。かくて寛正五年の初冬、某漫に武藝に自負して、名を顯さんとおもふをもて、昔よりして人の怕るゝ、この深山なる奥院を、見んとて門人等を誘引しに、衆皆齊一詰みて、諫るをいたく説破り、高弟僅に三四名と、從僕をのみ相俱して、はや山ふかく渉る程に、既に第二の石橋を、渡らんとせし折に、門人等は顔色の、着くなるまで戰慄て、半に至らず引かへしつゝ、ふたゝび諫めて已ざりしを、某些も聽かずして、弓杖突て只一己、彼石橋を渡果て、この岩窟のほとりまで、頻りに登る程もあれ、陰霾たる風颯と音して、倏忽塵埃を吹起れば、ふき倒されじ、と岩稜に、携る心の迷ふまで、前後もわかずなるのみならず、思はず沙石に眼を撲れて、怵ふべくもあらざれば、弓投捨つ、袖かき合して、頭を低て眼を掩ふ、由斷を關ふ件の山猫、この岩窟より跳出けん、某が後方より、背に爪をうちかけて、仰ざ

まに、邪僻すを、こゝろ得たり、と轡る隨に、手ばやく短刀を拵放て、乘し驚れる猛獸の、吠を頼んとしつれども、拳狂ふて前足を、一ト刀研りしが淺痕にて、灸所ならねば物ともせず、勢 籠て某が、吭に啖著たりける、牙は鋒より鋭きに、一トふり振られし大事の深痕に、霎時もあらず、絆斷れし、死骸を窟に引入られて、飽まで腹を肥されたり。かくとは知らぬ門人等は、某を待わびつゝ、その曠昏に宿所に還りて、云々と報しかば、妻子の歎きは大かたならず。さればその次の日に、里人さへに駆催したる、門人遺なくつれ立て、又この山に索來つれど、その回も長き石橋を、得渡るものなかりしかば、又 徒に引かへす。折から件の野猫は、はや某が貌に變じて、某が衣某が、大刀行膝さへ身に著て、胎内竈の邊にをり。既にして出てゆく、衆人を呼びとどめて、絆如此々といひ瞞るに、容貌言語一點違はねば、誰か非なりと疑ふべき。衆皆歡び勤りて、扶掖つ宿所に還れば、妻子も惑ふて死したるもの、甦生れる心地しつゝ、天に歡び地に喜ぶ、欸待態こそ淺ましけれ。抑件の野猫が、某に化たりし、絆のこゝろを甚かにいふに、某が後妻なりし、窻井はこのとき廿二歳、鄙には儻なきまで、容止美しかりければ、犯さんとての所行なりけり。憐むべし後妻窻井は、變化不測の妖獸を、良人と思ひつ夜毎々々に、枕の數も累りて、牙二郎と名づけたる、男子を産たれども、非類に膚を穢されし、精液漸々に衰へて、三十に足らて身まかりたり。是よりして後假一角は、妾 夥買易て、只淫樂を旨としつるに、その妾等はいく程もなく、或は精氣を吸耗されて、一トとせも歴ず死するもあり。或は寵の衰へて、竊に啖殺されしを、逐電しけんといはるゝあり。そが中に近屬來つる、船虫といふ妾は、邪智逞しく慾ふかく、行ひ穢れし淫婦なれば、彼同病は相憐み、同氣は相歡ぶ沿習にて、妖邪に觸れても恙なく、且妖獸のこゝろに愜ひて、はや正妻になりしかば、わが兒の爲には繼母といはる、これも亦恨むべし。ひとりわが兒角太郎は、忬きより孝友の、志 疎ならねば、彼妖獸を親とのみ、思ひ違へて慕へども、妖怪は己が子の、牙二郎が生れしころより、角太郎を憎むこと、不慈なる繼父の類にあらず。日毎の呵責に嘸らて、竊に殺して

その穴を、啖んと欲せしかども、角太郎は過世ありて、神明佛陀の護らせ給ふに、身に亦具はる瑞玉あれば、渠いかにともすることなかりき。かゝりし程に角太郎が、母の兄なる大村儀清、はやくその機を察しけん。養んとして宿所に呼取り、文學武藝飽まで教て、その女兒をもて妻せたり。これにより角太郎は、養父の家に成長りて、大村氏を冒せしも、過世の業因ある事にて、名を禮儀とつけられしは、渠禮儀を宗として、威儀を亂さぬ名詮自性、且瑞玉の字義を取れる歟。わが兒を譽るにあらねども、親には大く優りたる、孝にして且仁義に篤く、忠信にして又悌なり。禮節智慧も自然に具る、世の俊傑なりといへども、妖邪の爲に勞して功なく、養父母の世を逝りし後、彼船虫が奸計もて、角太郎夫婦のものを、赤岩村へ呼かへせしは、この夏四月の日子なるに、角太郎が妻離衣は、密夫の子を身ごもりぬ、といひ立られて妹と伏の、中を裂れし濡衣の、その妻のみにあらずして、角太郎さへ追出され、養父の遺財田園まで、推留られてすべなさに、法師にならんと思ふよしを、養家の里人に告しかば、里人等憐みて、返壁といふ地方に、褊小なる菴を締て、角太郎を容措つ、且米を贈り錢を遣りて、聊 恩とせざりし事は、大村蟹守儀清が、施しを好みたる、慈善の遺徳に報ん爲、及角太郎が孝友の、誠心に感じて也。是よりして角太郎は、或は讀經、或は坐禪、無言の行を旨として、世の交を絶ものから、心に任せぬよしありて、いまだ剃髮せてをるも、亦神明の擁護により。しかはあれども厄殃の、なほ實縁で離衣が、露命を保がたきに至らん。この一條より絆破れて、善惡邪正相顯れ、玉石眞偽の別れん折に、願ふは和殿わが兒を助けて、怨讐を撃し給へかし。と頼む言葉の露深て、霜となる夜の山風に、落るや秋の木葉より、脆きは人の涙なり。現八はつくくくと、聞くに胃且塞れて、洪歎やるかたなかりしを、思ひかへしつ握れる拳を、解つ、小膝を敲と拍て、原來御邊はけふ網芋にて、はじめてその名聞えたる、赤岩ぬしでありけるよ。嚮に彼里なる、茶店のあるじが、賣弄問話に、不憶く御邊の武勇、子息の孝友、傳聞しに違はねども、豈おもはんや一角、と名告れるものに眞あり買あり。今宵胎内寶の邊にて、某が射て墜したる、彼妖怪は買物

の、赤岩一角ならんとは、神ならずして誰か知るべき。爾るに御邊は身役に靈あり。こゝに居ながら赤岩なる、妻子のうへも、怨讐の事も、かくは定かに知りながら、なごて妻にもその子にも、枕邊に立、夢に見せて、絆如此々々と告ざりける。と詰れば一角頭を掉て、そこらの事は初より、思はざりしにあらねども、角太郎は孝子也。妖怪も亦神通あれば、既に貌を變せしより、言語應答、常住坐臥、武藝を教る刀法まで、わが身と異なる所なきに、果敢なき夢を實事として、親を疑ふことやはせん。又窻井も如右ぞかし。目前なる良人を非として、いかでか夢を恃むべき。然る人情を思慮らて、愁なる事したらんには、却妻や子の、疑ひを惹のみならで、彼等はいよく危からん、と思ひにければ黙止たり。これ某が十七年、冤を伸るよしもなく、死して朽ざる所以也けり。大約死して靈あるものも、時至らねば怨に答て、祟をなす事甚難かり。今幸ひに和殿に遇ぬ。和殿はわが兒と過世あり。夫幽明は辨じ難し。明は物に由て顯れ、幽は人に由て陳。もし人物作らずは、幽明分別すべからず。和殿この理をよくおもはゞ、わが兒の菴を敲くとも、交をのみ厚く結びて、且わが言をな告給ひそ。倘佻々しく説示さば、わが兒は一切信ずして、還て、和殿を疑ふべし。さりとて久しきことにはあらず。竊に時の至るを俟て、その回にこそ如此々々、と告なば無明の醉醒ん。是緊要の事にこそ。と諄かへしつ、説諭せば、現八しばし領きて、教諭寔にその理あり。目今御邊の言葉に就て、賢息のうへをおもふに、神明佛陀彼身を護り、且瑞玉を所持すと聞るに、養父の姓を冒せしより、大村としも名告れるは、亦是大士の一人にて、われと異姓の兄弟ならん。然らば御邊に頼れずとも、死力を盡し相資けて、彼妖怪を亡さざらんや。是某が願ひ也。さりけれども證據なくば、痴人の夢を説くに似て、いと烏滸也といはれやせん。この義はいかに。と期を推せば、一角も亦領きて、現その遠慮なくてはかなはず。某年來秘藏せる、正しき證據兩種あり。その一ト種は短刀なり。こは當時某が、彼野猫の吭のあたりを、刺んとしつ、差て、臂を砍たる刃なり。彼折に妖怪が、取遣れたりけるを、深く隠して今なほあり。願ふはわが兒にこの刃をもて、怨讐の胸臆を刺し

殺へ。さは然ながらこの短刀を、角太郎は認らずして、なほも疑ふ事あらば、この一ト種を證據とし給へ。これは是わが髑髏なり。説くとも解けぬ時に臨て、角太郎が鮮血をもて、これに沃がば凝著て、親子たること分明ならん。その餘は時宜に依るべきのみ。善に與する義士と見て、愛顧を憑み奉る。よくし給へ。と叮嚀に、説示して、岩窟の、奥のかたより取出す、髑髏は豫て準備やしけん、秋多の葉を二三枚、重合して包みしを、短刀と共に遞與にぞ、現入はひとつ／＼に、受とりてなほよく見るに、短刀は鏝の色もなく、蠹蝕るまでに縮たるが、柄糸ははやく朽斷離て、處々に残れる鮫は、開後れたる梅花に似たり。況てその鞆の、斑に剝たる、只是古墳石棺中の、殘劍に異ならねば、現入は見るに就、聞くに就ても懐舊の、涙ぞいと進みける。かゝりし程に星落て、東の山陝しらみにければ、一角外面うち仰ぎて、陽入陰鬼、道異なれば、久しくこゝに相譚ひがたし。縦非類に誣られて、窮厄その身に逼るとも、みづから愛して、血氣に早る、短慮の事なし給ひそ。今よりの後角太郎と、迭に扶け助られて、名を揚家を興し給へ。さればとて初對面より、玉の事などいひ出て、異性の兄弟なるよしさへ、明々地に説示さば、彼妖怪にはやく知られて、宿念合期しがたからん。彼妖怪は神通ありて、十里の外の事を知れり。彼奴は既に十七年、貌を變じて里に在れども、時として山林を、慕しくや思ひけん、月に必兩三度、小夜深る比宿所を出て、この深山に來て遊ぶことあり。彼奴が和殿に射られしは、今宵も遊山によりてなり。さればこの山の麓にて、折々人の亡たるは、彼畜生の所爲なりき。素この山は神迹にて、猛獸毒蛇あることなく、魑魅妖怪も棲ざりしを、彼畜生は憚からず、をり／＼に來て遊べるのみ。彼奴を退治するものならば、登山の人に思なく、神迹を世に傳ふべき、時やうやくに至れる也。なほしも告て後々の、こゝろ得にすべき事、なきにしもあらざめれど、あまりに天機を漏すときは、還て神の憎に逼らん。今ははや是まで也。しかはあれども後日に至りて、思ひ合せん爲にのみ、拙きまゝの口遊を、餞別にせん開給へ。といふに現入貌を飲めて、かさね／＼し高論明教、よく丹田に受納て、忘るゝことなかるべし。願ふは讒語を示し給へ。と乞れて一徹うち微笑み、某武藝を旨として、文藝に疎けれど、人死して靈となるときは、世に在し日に働ことありて、萬理に通ぜざるることなし。いで／＼といひかけて、聲朗に誦するを聞けば、

相遭講武、
再厄不釋、
入犬具足、
南總雖遠、
相別誘仇、
更問髑髏、
八犬未周、
越全露玉、
妖邪亡處、
窮達有命、
菊花謝秋、
申山應遊、
離合勿謀。

吟ずること三遍にして、現入記憶してければ、一角に謝し別を告て、件の髑髏を短刀と共に、行袂に包みつゝ、そが儘背にうち被て、端引結びて出てゆけば、一角は窟門まで、送り出て又いふやう、犬飼生、かへさには、奥院までうち上りて、平岩の斷間より、東のかたへ下り給へ。かゝれば路のいと近くて、胎内竈に出るなり。扱返壁に立よりて、角太郎を訪んとならば、箇様々々に赴き給ひね。もし又迷ふ事あらば、側柏を見るこそよけれ。かの胎内竈より、山路三四里の間には、彼此に彼樹あり。側柏はその枝の、みな西へ指すものなれば、よく東西を辨ずべし。實に不測の奇遇にて、又遇ふよしはなきものをや。かへす／＼もわが兒のうへを、只顧憑奉る。といふを現入慰めて、その儀は心やすかるべし。冥府人間同じからねば、いとど別の悲しけれ。しかはあれども赤岩ぬし、子息に髑髏を寄せんとて、讒語を吟じて示されしは、小野小町が芒を敷ひし、あなめ／＼の歌に優りて、世に未曾有の靈驗也。もし生る日に膽勇歩偏の、億萬人に捷れずは、死してかくまで靈あらんや。得がたかりけん武夫の、彼妖怪の爲にしも、横死したる事、嗔惜むべし／＼。といひつゝ後方を見かへれば、今までありつる一角が、貌は消てなかりけり。

第六十一回

柴門を敲きて繻衣窠柱を訴ふ
故事を辯じて禮儀薄命を告ぐ

却説大飼現八は、その曉がたに山を下りて、胎内竇を出しより、赤岩一角武遠が、靈魂の教しまゝに、銀山のほとりまで、一里の水澤を傳ひつゝ、その路凡四五里ばかりの、崎嶇を躑躅して、返壁を投てゆく程に、その日巳の比及に、犬村角太郎禮儀が、世を捨て世に捨てられて、日影に疎き露の身の、締ぶは名のみ花もなき、草の庵のほとりに來にけり。柴垣のこなたより、こゝかとおもふを心當に、裡面のやうを闕窺れば、樸材の柱、萱の檜、二間の竹縁、三尺の持佛棚、これより奥は見えねども、膝を容るゝに過ぎるべし。裏もかへさぬ新壁に、蝸牛の液を遺し、搔も帯はぬ庭の草葉に、蛩の聲幽也。彼此の粒る多樹は、この菴のなき時よりあるにや、流しかけたる雑炊は、昨夕の隨に
いまだ乾かず。秋深けれども、東籬の菊なく、門陝して、五株の柳を見ず、とばかりだにも哀れなるに、この菴の主なるべし、年紀は二十のうへを、一ツ二ツにやならんずらん、色白く唇、絳に、眉秀て居長高く、月顔の迹、眞黒に延たる、髪は藁の髻結して鬢ず、後さまに放たるは、彼白河の安珍にも、似たらん歟。身には薄鼠色の袴の衣、只一領被て、皂輪袈裟を掛たるは、華洛を出て嵯峨野に隠れし、瀧口の時頼が面影すめり。片折戸のかたを正面にして、端近う經、机を推居たる、あなたに新薬の圓坐を布設、そが上に結跏趺坐しつゝ、項には菩提樹の、最多角數珠をうち掛たる、合掌、觀念の、眼を閉て餘念なく、口に蒼松葉を、細枝ながらに銜たるは、是なん維摩の行なるべし。机のうへには、何の經文にや、五六句可あり。細小やかなる鐔一隻と、相馬製とかいふ、青磁の香爐もありけり。立升る香の煙の、靡きもあへず滅易きを、人の命に思くらべて、かくは行ひ濟すにやあらん。この人は是犬村氏、禮儀にあらずして、誰やはある、とひとり領く現八は、偲かねて、せわしく敲く柴の戸の、こなたに聲をふり立て、卒爾ながら物まうさん。吾儕は遠來の浪人にて、大飼現八居士と呼るゝもの也。犬村ぬしに要事あり。こゝ開給へ。と呼

門て、幾遍となく各告れども、裡面には絶て應ぜず。開たる眼がうちひらきて、こなたをたに見せりけり。大飼現八思ふやう、世を隠逸に甘んじて、人と交を絶もの也とも、かくまでに音づるゝに、耳なき人の如なるは、今勤行の最中にて、思ふに任せぬゆゑなるべし。三たび草庵を顧て、志を致されけん、われに昭烈の才なくて、臥龍を起すに急なりしは、心つきなき所爲にこそ。あの勤行の果る迄、俟ずは對面しがたからん、と尋思をしつゝ、そが儘に、折戸のこなたに立在て、心ともなく時を移せば、亭午の日影近づきけり。浩處に前面より、年尙弱き女房の、身のざまも賤しからぬが、その容止の艶麗なる、譬ば野花の目に美しく、村酒の人を酔する、類に優て、いにしへの、眞間の手古奈もかくありけん、と人を見るらめ鄙にして、鄙にはあらぬ繻衣と、まだ名告らねど匂やかに、あゆみ近づくと、先後に、心おく露玉なすまでに、涙を隠す袖頭巾、袖に包めどはや五月の、たゞならぬ身はおもくとも、輕き草履に跌かて、かよふ甲斐なき草の戸の、虫の名に呼ぶ横笛が、怨に似たる物思ひ、誰に差て敷外視せぬ、頭を低て來る程に、こゝに門成る犬飼が、立盡すとは知らざりけり。現八遙にこれを見て、はやく心に猜するやう、あの女房はこらに似げなき、容貌の醜からぬに、いたく愁を含めるは、雨を帯たる夕の花、雲に銷さるゝ月に似たり。且その腹のふくだみたるは、有身てより既にはや、四五箇月になれるにや。かゝれば是豫て聞く、犬村が離別の妻、彼繻衣と呼るゝもの歟。こなたへ來つるは要こそあらめ。飽ぬ別れに外目を竊びて、良人に逢はん爲ならば、われを鬱怏く思ひやせん。さは愁にここに在りて、中垣をすゑんより、はやく樹蔭に退きて、障りにならぬも惻隱の、端なるべし、と遽しく、一反ばかり南なる、枝いと繁き女青の、蔭を小盾に躲れけり。とはしらずして繻衣は、柴の局に立よりて、只潸然とうち泣きしを、やうやく思ひかへしけん、幾遍となく押拭ふ、涙を袖に斂あへず、眞白に細き手を抗げて、敲くもちからなよ竹の、籬笆に立る女郎花、くねらぬものを吹かへす、浮世の秋のあき風は、強顔人の心歟と。怨言つゝ呼かけて、嗚わが所天角太ぬし、こゝあけて給はずや。いふて返らぬ事ながら、逢ねば濟ぬ胸の火の、蠶さへ

滅ぬ物思ひ、辭敵も媒妁の、宿にかゝりて何日までか、歎きくらして、死んより、切ておん身の捨言葉、受て覺期を究めん、といぬる比よりかよふても、無言の行に假托て、應だにせず、戸も開ず、心づよきも程こそあらめ。けふは那方思ひしことを、いひ盡しても聽れずは、それをこの世の辭別、大村川は濁るゝとも、生て宿所へ還らじ、と思ひ訣めて侍るか。し。やよ開てたべ是啼。と身の瘦見ゆる手胼の、癱るゝ可敵けども、かき口説ども應せぬ、良夫はなほも不言の行に、心を凝らす莫妄想、形死灰に異ならねばや、膚擽まず目も瞠がす、庭の小草に集る虫の、聲のみ聴々と答けり。雖衣怨に堪されば、苦しき聲をふり立て、啼わが所天、目に見ず物を宣はずとも、是處より其處へ遠からねば、聲聞らすまでいふよしの、聞えぬ事はよもあらじ。今さら愚痴に侍れども、二人が中は高安の、井筒よりなほ縁しは深き、ふりわけ髪初より、親の結びし妹伏川、大和紀國いづれはあれど、外に花見ず、月見の船の、浮たる戀にあらざれば日暮て誘ふ阿曾沼の、眞菰隠れの紫鴛鴦も、及ばじと思ふ年を経て、夏の日より小腹の病痾、可ぬ薬も、加持御符さへ、身の仇となる幸なさは、思ひがけなき誣言に、この春々公の世を逝り給ひし、忌の中には山鶏の、峰上隔て妹と伏が、臥房を俱にせぬものを、有身ぬるは密夫の、胤なるべし、と繼しさの、母御に濡衣著せられても、しかはあらず、と醫師すら、決めかねしは冤枉神の、この身に實縁の一期の浮沈。宿の仇浪風騒ぐとも、神を誓ひに膽むかふ、清きころを君こそしらめ。人は左もいへ右もいへ、跡も證據もなき事を、情由も糾さて休書を、理なく取らして親品に、預けて後安良に、獨くらすが本意歟否。いはでもしるきことながら、おん身とわらは、從父母昆弟、養子妻せといふよしを、今さら忘れ給ひし歟。實の爹々公繼母御前の、無理を並べし仰ても、わらははとまれかくもあれ、外伯父なり師なり恩重き、養父の家を滅しても、何とも思ひ給はずや。切てわらはが二親達の、けふこの頃までましまさば、又せんすべもあるべきに、欺詭つゝ赤岩へ、呼取られしより程もなく、去られて歸る舊里の家すら舊の儘ならで、他の宿所に機を包て、津もつかぬ掛り船、風の便りに言ひて、尼になりても共に、住果よと

はいひもせて、あまし見なや新梨の、しは、來ても新米の、有無の筈も中風、隔る心の片折戸、扉き聲は言ひぞ。親の仰に術もなく、あかて出せし妻ならば、その折にこそ難くもあらめ。今はおん身も追出されて、よに憚の關もなき、遠山里の草の戸に、秋の螢と身をなして、あくがれてのみ來るものを、對面せしともいへばとて、外の咎はなからんに、言の葉絶てくちなしの、譯も知らず慰もせて、壁生草の何日までも、憂に堪はずは死ねかし、といはぬばかりの籠居は、舊來の氣質に似げもなく、男子らしうはあらずかし。二世をかけたるおん身にすら疑れたる小腹の内を、見せも見られぬ苦しきは、曾に竅ある胡の國に、生れぬ身とて甲斐なけれ。かくまでいふても聞えずや。不便と思ひ給はずや。こゝあけてたべ、開給へ。心づよし。と敵きつ推しつ、入らまくすれど懸鎖に、女子のちから屈きかねて、引放されぬ情縁の、いとも切なる恨みのかずく、胸に痞を壓あへず、倒れかゝりし樹牆に、携著つゝよと泣く、聲細るまで衰果て、地上に嘔と伏沈む、深き歎きの霧の海に、乾かね袖は芭蕉葉の、露とも見えてあはれ也。且して雖衣は、涙を斂め身を起して、裳引合し引揚て、柳の腰に柳茶の、副帶楚と締直しても、空に歸れば花もなき、菴をなほも見かへりて、喙角太主、とてもかくてもこの世では、得添れぬは前世で、造りし罪の報ひ來て、あかね別れに身を殺す、因果と思ひ締め侍れば、恨は絶てあらずかし。むかしよりして腹黒く、伎倆る人の誣言に、罪ならぬ罪を得給ひし、賢人も多かれど、終には齋るゝ雨後の月、光りは世々に顯れて、あまぞかりける時に優す、例を引くに侍らねど、人の心に誠なくて、命を捨る物やは侍る。死しての後にはわらはが胸を、裂も發きもし給はゞ、かの疑ひの解ずやあらん。その折にこそ又舊の、妻と思ふて朝夕に、只一遍の唱名も、おん身の回向を受侍らば、道德智識の十念にも、萬卷千寫の讀經にも、優て成佛しはべらん。今より久しき事ながら、おん身の齡百歳の、後を侍みて臺なす、蓮華を蓋て俟んのみ。さらばとばかり告別、聲は涙に結隠る、天さへ秋の雨催ひ、捨られぬ世をふり捨て、死天の旅路へいそがんと、思ひ訣てかへりゆく。うたてや妻の後影は、菴の中より見えねど

も、聲は定かに挾牡鹿の、夢野もかくや角太郎、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、と悟果ても活る身の、人木石にあらざれば、方寸の海に浪立て、心耳に風は吹ねども、合掌の拳揺動きて、口に銜し松の葉も、颯々として靡くが如く、斷腸の氣色顯れしを、忽地思ひかへしけん、寂寞として音もせず、なほも行ひ清しけり。さる程に現八は、女青の樹蔭より、今雛衣が角太郎に、怨じていひつる顛末を、遺なく竊聞たりければ、悲愁嘆嘆に堪ざれども、われこそその名を豫ても知れ、その良人にすらまだ遭はて、慰むべくもあらざれば、傍痛く思ふのみ、又せんすべもなき物から、既にして雛衣が、死を訣めたる氣色言葉に、且驚き且憐み、背より竊に跟てゆきて、倘淵川へ身を投る、事しもあらば禁ん、と思へば樹蔭を立出て、遣過しつゝ足早に、走り著んとする程に、遙に開ゆる遠寺の鐘は、亭午になりぬ、と角太郎、稍解行の眼をひらきて、松葉とり捨、經机を、搔遣りて衝と身を起す、外面には現八が、はや雛衣を追んとて、心いそしく幾足敷、ゆかまくしたる後影を、遙にうち見て聲高やかに、犬飼生等給へ。菴主只今解行せり。誘こなたへ。と呼留れば。現八と見かへりて、今さら否ともいひ難つ、心ひとつを先后に、躊躇ながら引かへす。その間に角太郎は、路次金剛穿て折戸口、懸鎖外して出迎れば、現八は引るゝ隨に、且竹縁のほとりにて、行袱を解卸し、草鞋も踏皮も脱捨て、躑躅るを、角太郎は、客座に請ふて、茶を煮め、貌を斂めて慇懃に、糊には思ひがけもなく、來訪のよしを知るといへども、戒行の最中にて、迎接に違なかりし、失敬を許し給へ。某則當國の人氏、物の數には候はねども、大村角太郎禮儀と呼ぶるもの也。既に貴客の高姓は、屢名告られしをも承知せり。扱も何等の所要ありて、遠く貴臨せられしやらん。某命運拙ければ、頻りに通世の情願あり。恩愛の絆を脱離して、雅俗の交遊を絶ものから、いまだ貌を更ざれども、こゝろは毘邪氏の城に入り、維摩の室に坐せんと欲す。貴客必高論あるべし。明教によりて迷ひを曉さば、そは幸ひ甚しからん。且寛やかに相譚給へ。といへば又現八も、袖かき合せ、手を膝にして、某は凡骨僧、上座に生れて、下座に成長り、近曾京師に旅宿をしたれど、をさ

をさ武藝を事として、一丁の字輩だも知らず、肝脾の兄弟五六人あり。某等は文學に長ふたふあり。武藝勇力の擧げたるあり。皆某が及ぶ所にあらず。されども因果同感の、過世あるをも棄られず。素より迭に厚きこと、骨肉にも優ること多く、苦樂を共にせんと誓へり。爾るに不測の厄難ありて、相別れしより往方をしらず、某只管索巡るに、はやくもこゝに三年を歴たり。かくて今茲は京師を出て、陸奥を志し、稍當國まで來る程に、きのふ網亭の茶店にて、貴所の孝友、文學武藝、並に養實兩大人の、學術武勇の事の趣を、傳聞て景慕に堪ず。いかで閑居の辱を敲きて、教を受んと思ひつゝ、勤行中とも知らずして、早りて頻りに呼門しを、さぞ無禮也と思はれけり。さばれ疎忽を海容せられて、呼留られしは一期の幸ひ、望足り候。と互に應答言訖れば、角太郎は且歡び、且羞て頭を拊、某過庭の訓を稟て、和漢の學を好めども、不肖にして成ることなし。さばれ今釋教に、流れて道人にならんとするは、已ことをえざるの所行のみ、胎を棄て男子と生れ、武士たるものが阿容々々と、法師になりて可ならん乎。この義を推して、某が、薄命を察し給へ。初見參にはあなれども、前路を急がせ給はずは、先や胸臆を盡すべし。夫千金はなほ得易く、斷金の友は甚得難し。さればとて、蓋を傾けて故が如く、白頭までも猶新なりといふ、孔聖子華子の交を、例に援くべきわれならねども、その志同して、學ぶ所の異ならずは、初見參も故人の如く、合璧比隣に年を歴るとも、その志異にして、その方の同じからずは、頭に霜を戴くまで、初見參に等かるべし。かくいへば何とやらん、客に傲るに似たれども、某既に貴客をもて、益友也と思ふよしは、昨夜の夢に、何處とはなく、いと大きな犬の、その色黒白雜毛なるが、その數すべて七頭あり。そが中に、隠れていまだ見えぬもあり。或は間遠くして、致しがたきも多かりしを、某深くこゝろに愛して、掌鳴らして呼ぶ程に、一隻の巨犬走り來つ、某これを搔抱くに、わが身も亦忽地に、犬になりぬと思ひつゝ、愕然として覺たりき。彼莊周が蝴蝶の夢に、似て非なるものなれば、占することもせざりしに、今又思へば虚夢ならず。貴客は犬飼氏にして、某は亦養家を嗣て、犬村氏

を冒したり。且貴客の言を聞くに、異姓の兄弟五六人、ありとしもいはれしに、いよ／＼因縁あるに似たり。願ふは件の人々の、姓名を知らまほし。厭しからずは示させ給へ。といふに現八感じて已す。そは寔に一大奇夢なり。某が義兄弟等は、犬塚信乃成孝、犬川莊助義任、犬山道節忠興、犬田小文吾悌順、犬江親兵衛仁、某と共に六名、この餘なほ二人あるべし。いまだ遇ふことを得ざるのみ。と告るに驚く角太郎は、頻りに膝の進むを覺す、原來皆是犬をもて、氏とせらるゝ不思議さよ。こゝに至てわが夢の、夢ならざるを感悟せり。さるにても六犬士の、義兄弟となりたる、因縁は亦いかにぞや。と問へば現八含笑て、その義を告るに難くもあらねど、外に憚るよしあれば、只今は時尙早かり。おもふに主人は感得の、瑞玉を持給はずや。その玉にはおのづから、禮の字の顯れて、定かなるものならずや。と問かへされて又驚く、角太郎は眼を睜りて、そをいかにして知られけん。某實にさる瑞玉を、年來秘藏したりしが。といひつゝ亦嘆息して、件の玉の事に就て、又一奇談なきにあらず。某が實母は、諱を正香と呼ばれたり。その性伶俐にして、且神佛を信ずること、大かたの婦女子に過たり。かくて某を産たる比、加賀なる白山權現の社頭の、粒石を乞まうして、その兒の護身囊に納置ときは、痘瘡も麻疹も究めて輕し、とある人のいへるを聞いて、北國へゆく商旅に、云々と憑聞えて、件の粒石を取よせしに、その人のもて來つるを見れば、石にはあらでこれ玉也。その玉はといひつゝも、項にかけたる珠數を拾りて、大約此大小にて、禮の字さへに顯れたるを、もて來し人も知らずして、初て驚くばかりなれば、母は殊さら尊信して、そが儘に某が、護身囊に納たりとぞ。かくて某三才の時、脾胃によりて危かりしに、鍼灸藥餌も驗なく、療養その術端たる折、わが母竊に心を師として、件の玉を水に浸して、その水を飲せしに、慈母の深信によりて瑞玉の、奇特やこゝに顯れけん、一たびにして食すゝみ、二たびにして肉を増し、三たびにして本復せり。この一條は某が、稍東西を知るころに、養父母の云々と、説き及されし傳聞なり。これよりの後某が、身に恙あるときは、此玉を服ひしして、件の玉の奇蹟を信じて、夢ありしをいふこと

なければ、近處養父母の稱申にも、玉を浸せし靈水を、しば／＼飲めたりしかど、只、某が稱申にのみ、奇蹟顯あるものにて、親には驗なかりしにや、又命數に限あるにや、させる奇特はなきものから、病苦は早に退きけり。爾るに今夏夏の初より、某は妻と共に、赤岩なる親異母弟と、同居して在けるに一日吾妻離衣は、腹痛猛に苦しく、百藥驗しあらざれば、某せんかたなき儘に、彼玉を浸しつゝ、水を飲せんとしたる折、繼母が先その玉を見んとて、離衣がもてる茶碗を、搔取らんとせし程に、離衣慌忙きて、愆て水もる共に、件の玉を飲てげり。こは何とせん。とばかりに、後悔したる離衣より、なほ某が周章遺恨は、驚るに物もなきを、然とて吐すべくもあらず。淨手に赴く度毎に、心をつけよと誨しに、腹痛ははや瘥たれども、その日はさら也次の日も、亦次の日も尿管と共に、玉の下れる事のなければ、思ひ捨てふたゞび問ず。かくて五月の比よりして、離衣は經水を見ず、腹は漸々にふくだみて、有身たるものに似たり。これにより醫師に見せて、その病症をいかにと問しに、寸口の脈平に増して、指頭の動脈顯れたれば、全く懷胎ならんといへり。よに恥しきことながら、某は三年以來、養父母の病中より、妻と枕を並べし事なし。況てこの春の末より、養父の忌中にいかにして、夫婦臥房を俱にすべき。然るを今離衣が、懷胎はこころ得がたし、といひし言葉に枝いて來て、さらば密夫の胤ならんに、阿容々々として産するや、といふものあればうちも置れず、いと不便には思へども、離衣を離別して、媒妁許預け置たり。さはさりながら某は、婿養子にして、離衣は、迺養父母の女兒也。且赤岩へ同居の折、犬村なる宅は人に住しつ、奴婢には暇を取らしたり。裕といひ恰といひ、よしや些の愆ありとも、去らるべき妻にあらず。素よりその性貞順にて、外心のなき事は、某これを知るといへども、離別してかへせしは、舊の住宅に住せん爲、明々地にはいひがたき、情由さへあるによりて也。爾るに某命薄く、休きころよりして、愛を父に失ひつ、年歴て親に呼かへされし、その歡びは空となりて、亦復同居を許されず。この身は路頭に呻吟ふとも、犬村なる田園は、離衣が一生涯を、送らん料にすべかるを、それすら親の返

さねば、義理ある妻と世を遊りし、養父へいひ解く辭もあらず。せんかたなきに世を捨て、法師にならば、吾妹子が、怨も散れん、わが親の、思ひかへさせ給ふこと、ありもやせん、と果敢なくも、神に佛に願言を、かけ盡したる日毎の戒行、初對面より懺悔話説は、恥を知らざるものに似たれど、纏に雛衣が来ていひつることを、貴客は聞せ給ひけん。爾らば又今さらに、隠さんとすともその甲斐なし。他人にいはぬことをしも、告るは則良友を、得たる歡びのあまりにこそ。なほ鳥辭也と思はれなば、教給へ。と他事もなく、聳き示す心の誠を、現入は聞く毎に、憂苦さこそと慰めかねて、感嘆の外なかりしを、やうやくに頭を擡て、聞しに彌増す貴所の孝友、天感空しからざりせば、夫婦の再會期して俟べし。然るを早りて只管に、法師にならんと思ひ給ふは、亦是千慮の一失なるべし。實に推量せらるゝ如く、纏に賢室雛衣どのの、いはれし事は洩聞つ。且その氣色を見て思ふに、逼りて漏すよしなきに、死を樂むは婦人の情也。萬一の事あるときは、後悔その甲斐なかるべし、と思ひにければ後を跟て、見届ばやとて兩三歩、走り去らんとしつる折、忽地主人に呼留られて、その義を果さずなりたり。爾るも婦人に不義なきを、知りつつその死を拯ん、と思ふ心のつかざりしは、主人に似げなき所行ならずや。と詰れば莞爾と微笑て、その疑ひは理りなれども、縦雛衣わが底意を、知らて死んと欲するとも、瑞玉今なほ腹に在らば、水に入るとも溺るべからず、火に入るとも焼るべからず。憶ふに渠が腹の病痾は、彼瑞玉の所以にして、懐胎にはあらざるべし。然るを死せんといふに怕れて、慌惑ひて對面せば、妻には信ありといふとも、親の爲には後ぐらき、不孝の罪を脱れがたし、と思ひにければ禁ざりき。といふに現入有りと曉りて、又いふよしもなかりけり。且して角太郎は、意の日影を見かへりて、今はや未到に近かるに、要なき多辯に、時を移して、さぞ物ほしうをはすらめ。さりて今朝は炊もせず。纏に犬村なる里人が、贈來したる團子あり。僅に飢を凌ぐべし。いざいざ、といひかけて、團子より餅す食籠の、蓋取りつ、粥を添て、そが現入に差し、樹屋に當茶を拵給て、山茶を煮つ、掛籠に、粥をさし入れて、うち食ふ。現入は、粥を食ふ、粥を、

こゝろは木置下池、船と船とに異なるらぬ、船待船ぞ観しき。團子も粥に盡るころ、湯立山茶を何太郎は、茶碗ふたつに汲とりて、いざとて齊一飲む程に、又現入に對ひていふやう、得がたき友に訪れながら、同好の義を述もせて、いと憂しき自家的話を、さぞな鬱悒思はれけめ。犬飼ぬしは何人を、師として武藝を學び給ひし。生れ得てその師に勝る。豪傑も世になきにあらねば、その壽にこそをはさめ。といはれて現入思はずも、呵々とうち笑ひて、否、某が師は二階松山城介なりけれども、身の不器用なるをもて、大刀ぬくすべを覺しのみ。武の一藝すらかくの如し。況て文武を極んことは、いとく難き所行なるべし。よに恥がましき言ながら、某は稗き時より、太平記を大く好みて、熟讀して候へども、なほ解しがたきこと多かり。そが中に、三人張の弓に、十三束三伏、篋かつぎの上まで引かけ、暫く堅めて、丁と放つなどいふこと、巻の七の三丁、この他にも處々に見えたり。この三人張といふよしを、師にも問ひ、又近曾京師に旅宿せし折に、古實者に問ひしかど、その答定かならず。爾るにある人の説に云、世に三人張の弓といふは、強弓の事にあらず。弓は總て三人にて張るもの也。弦かけ一人、張人一人、おさへ手一人也。貴人の弓など、一人にて張るは、大きな無禮也といへり。(武家故事要言といふ書に記す所これと同じ。)この説も亦こゝろ得かたし。弓は必ず三人にて張るものならば、三人張とことわらずともあるべし。況て五人張といふ弓もあるをや。且軍記に誌す所は、強弓の武者にありて、貴人の弓をのみいふにあらず。主人は二代の學者にして、且武藝にも長給へば、これらの事に考あらん。件の説はいかにそや。と問ふを角太郎うち聞て、二階松先生の、武藝はわが父もよく知りて、をりく嘆賞せし事ありき。彼先生すら考の、定かならぬを某などが、考得たるにあらね共、彼三人にて張るといふ、臆説は貴評の如く、論ふにも足ぬ事歟。按ずるに、軍記に、三人張五人張の弓といふよしは、猶唐山にて、三石の弓五石の弓といふがごとく、弓はその力を量らん爲に、弓の眞中に索をつけて、これを染などに吊して、その本末に、米苞を掛て見るに、強弓にあらざれば、重きによく勝ることなし。この義を彼の書に記せ

産にき。こゝをもて宮中にて、多く疑ふものありけり。その後淑媛は寵衰へて、いたく高祖を怨しかば、竊にその子綾告ておん身は是東昏君の遺腹ならんといひしを、綾は半信半疑して、共に高祖を怨みつゝ、潜びて曲阿に赴きて、齊の明帝の陵を、拜みなどせしかども、なほ東昏の胤なるを、定かに知るよしなかりしに、當初の俗説に、生者の血を以て死者の骨に瀝るに、滲れば父子也、といふものあるをうち聞て、綾は竊に東昏の墓を發き骨を出し、己が臂の血を以て瀝かけてこれを試み、又一男を殺して、その血を瀝ぎて試みけるに、並に驗ありしかば、是より常に異志を懷きて、後四年にして謀叛す、と五十五卷の初丁に見えたり。又唐書(九十五)の孝友列傳なる、王少玄が傳に云、王少玄は博州なる、聊城の人なりけり。その父は隋の世の末に、亂軍の中に殺されたり。少玄甫十歳の時、父の所在を母に問しに、母云々と答しかば、哀泣て彼此と、その尸を求るに、野中に白骨多くあり。時にある人教ていふやう、子の血を以骨に漬て、滲るものは父の齒ぞ、といふに少玄悦びて、野中の白骨を見る毎に、膚を鑿て血を瀝ぐこと、凡一旬あまりにして、遂に父の骨を得て、思ひのまゝに葬りけり。かくて、その創の甚しかりしかど、一トとせ餘にして瘞てけり。時に唐の太宗の貞觀年中、州よりその狀を言上せしかば、やがて徐王府の、參軍といふ、官人になされしよし、合本の四十一の、十二丁の右に見えたり。かゝればこの事、唐山の俗説に出るといへども、梁唐の時の事あり。且當時の史官、歴々として、その經驗を書せしかば、浮たる言にあらざるなり。是等は秘藏の説なるを、こゝらていはんは惜かれども、貴客の爲に譚するのみ。と問る、毎に古書を引く、證文疑ふべくもあらわば、現入頻りに感嘆して、應仁以來京師にすら、和漢の書籍亡失せて、四書だに全きをもてるもの稀なり。されば學問は地を拂ふて、五山の僧徒なソの外に、漢籍を讀むものはなきに、主人は今尙青年にて、博學宏才かくの如し。いと恐しく候。と悦びを述べて已ざりしを、角太郎は聞あへず、貴客の賞美は分に過たり。多言は徳の害なり、と玉通もいひにしものを、世の傳記に聞れば、驚しと笑れり。世傳は附録あれかし。と互に譚する聲、口置、笑聲の會に絶えな

く、時移るまで權譚を拵かり、外面に來る人居多、女装帽子一懸と、又一懸の十字竹輿を、折戸口に担げれば、先に建たる轎子の、戸を開けて出るもの、是則別人ならず、赤岩一角武遠が、賤配の妻船虫也。揚箔したる衣の下には、白小袖をうち襲つゝ、金襴の帶四下に光耀き、練の帽子の白妙に、扇翳して立あがり、呼門せよ。と鷹揚に、腮推向てさし示せば、一箇の從者がこゝろ得て、折戸を頻りに敲きけり。畢竟船虫こゝへ來て、又甚麼なる話説かある。そは第七輯に、解分るを見て知らん。

八犬傳第七輯有序

世有奇才。然後奇書出焉。有奇書。然後奇評附焉。朱元晦曰。好人難得。好書難得。非但好人好書之難得。好評亦不易得。何者。人之好惡不一。加之。學之深淺。才之優劣。各有用捨焉。是故所讀書同。而其所取不同。譬若彼金聖歎水滸傳評。讀者駭嘆稱妙。以余觀之。未可盡爲妙也。聖歎尙如此。而況其他乎。近見好奇之士。評稗史。徒搜其瑕疵。批之以理義。便是圓器方蓋。更鮮有不損作者面目。或聞余言。嘲之曰。稗說勝記。無用之冗籍。費工災。櫻安足道哉。嗚呼。憎無用者。不知用之所以爲用也。人之一身。無貴無賤。所起臥不過一席。然多席爲無用之物。廢之可乎。無用者有用之資也。余不貴虛文。所好乃經籍史傳舊記實錄已矣。而每歲所著。莫非稗史小說。所以然者何也。書買揣利以求於余。余欲著之書。書買不願刻。既已著。無益恁地書也。三三有八年于茲。潤筆以購有用之書。則用之與無用。不可得而分別也。宜乎。大器不入里耳。稗史雖無益於事。而寓以勸懲。則令讀之於婦幼。可無害矣。且也。醫之者與書畫劖刷印製本諸工。咸以衣食於此。抑不亦泰平餘澤耶。乃者八犬傳復續稿。迨于第七輯。每輯有自序。讀者罕矣。又唯述愚衷於端緒。爲知音解頤。

文政十年丁亥多十一月之吉

曲亭主人撰

南總里見八犬傳 第七輯總目錄

卷之一 第六十二回

船虫姦計說禮度

現入遠謀赴赤岳

同卷 第六十三回

携短刀來緣連訪師家

與衆兇挑信道顯武藝

卷之二 第六十四回

現八單身與衆惡戰

緣連牙二郎逐信道

同卷 第六十五回

逼娘一角求胎

劈腹離衣仆響

卷之三 第六十六回

斬妖邪禮度雪父怨

巧毒婦緣連歸白井

同卷 第六十七回

禮度義捨家祿

船虫謀脫縲絏

冰輪冷艷擅清光 銀漢斜添雁一行 船倚枯葭櫻樹岸
 人忘榮利宿鸞傍 斑姬哭子狂何甚 在五思京諷詠芳
 月色今宵千古似 秋寒徹水覺風霜

九月十三夜墨水賞月卽事

玉 照 堂 主 人

南總里見八犬傳 第七輯 卷之一

東 都 曲 亭 主 人 編 次

第六十二回

船虫奸計禮儀に説く
現入遠謀赤岩に赴く

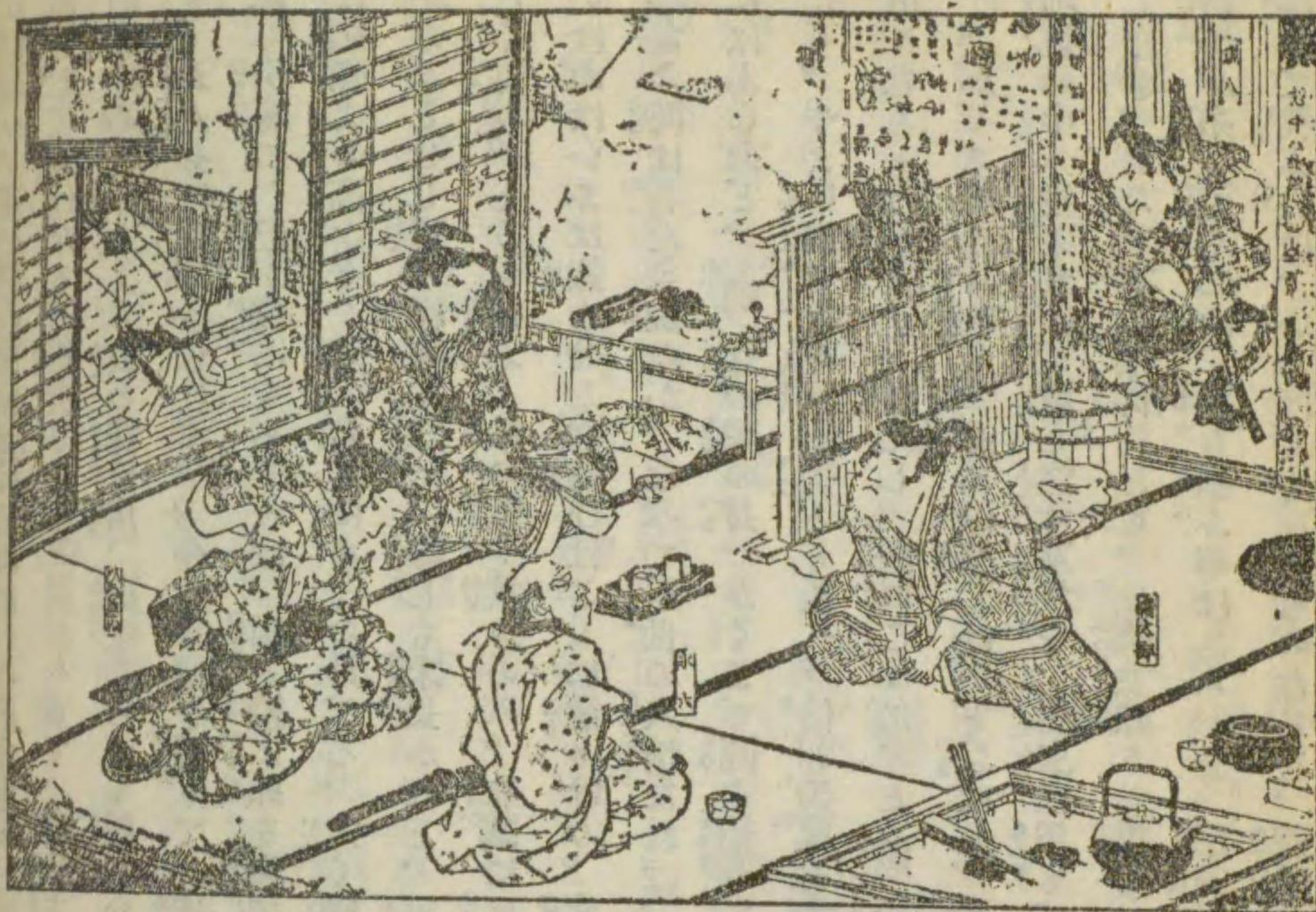
交遊の厚薄き、只その損益二友にあり。こゝをもて、その志愜ざるものは、肝膽も猶胡越のごとく、その志同じきときは、千里といふとも合壁に似たり。紹前論再説、犬飼現入信道は、下野國安蘇郡、返壁の白屋に、世を遁れたる一才子、犬村角太郎禮儀と、膝を交へ肝膽を吐き、文を論じ武を講じたる、主客の清談時移るまで、ほとと興に入る折から、亦復こゝへ来る客ありて、奴隸使の呼門高く、郎君はをはする歟。赤岩よりおん母公の、詣來させ給ひにき。今はや首へといひかけて、又外面へ走去りけり。登時犬村角太郎は、現入にうち對ひて、思ひがけなくわが母に、訪るゝは何事やらん。緯のこゝろを得がたきに、紙門のあなたへ避給はずや。然ともいつまでをるべき。且く横臥給へかし。といふに現入領きて、そはこゝろ得て候也。いでといひかけて、刀を拿つ行囊さへ、ひとつにいそしく引提て、はや次の間へ退けば、角太郎も手を被て、紙戸をやをら閉にけり。有如之程に船虫は、轎子を立出て、途よりして相伴へる、媒人氷六等共侶に、後方に立せし十字竹輿を、葦の底へ昇入させて、誘とばかりに縁頼より、先に立つち登れば、角太郎は遽しく、裡面より障子を推開て、こは思ひかけざりき。母御前よくこそ來ましたれ。氷六叟もこなたへ。と誘ふ辭他事もなく、そが儘立て迎ふれば、船虫は莞然に、はや上坐に著く程に、氷六は謙遜りて、地爐の邊に坐を占るを、角太郎はなほ請登して、茶を薦めなどしたる、管待態に船虫は、半ひらきし

扇の風を、胸のあたりに戦がして、霎時あちこち見廻しつ、疊む扇を側に措て、膝を進めて、喃角太、世ははや秋も
 央を過て、朝夕は最大う、身に入む風の厭しきに、恙もなくて歡び侍り。今さらに改めて、いふは要なきことながら、
 初は些の錯誤にて、親子口舌の起りしより、果は終れて釋がたき、妹と伏のみ歎、爹々公にすら、斯引別れて居給へ
 ば、安否を問んよしもなく、胸若しきを得ぞ知らぬ、世間舅姑の言仿なく、あの鬼々しき繼母が、不忍出せしなど
 といはる、憎れ役は吾儕に侍り。といふに角太郎嗟嘆して、そは宣はすることながら、親子の間は髪だも容れず。只
 是天性なるものを、身不肖にしてゆくりなく、親に愛を失ひし、不孝の罪の怕しく、且悲しみに勝ざれば、只願遁世
 の願ひあり、垂籠てのみ候へども、然りとて親のうへはしも、一日隻時も忘るゝ間なく、うち歎きて候ひしに、みづ
 から安否をしらせんとて歎、緯逆さまに訪ませしは、有がたきまで忝し。時とて氣候も順ならぬに、家尊の大人
 は腰痛の、持病の發り給はずや。と問へば船虫微笑て、否、持病は發り給はねど、昨宵初心の弟子達に、巻藥を射さ
 しつ、背後に立て、左せよかし、右せよかし、と誨給ひし、その折の事ぞとよ。初學の癖なれば、腕狂ふて、巻藥
 の、柱へ射つる箭の飛かへりて、うたてや大人は左の眼を、大く傷られ給ひにき。と告るに駭く角太郎、そは安から
 ぬ事にこそ。瘻の淺深いかにぞや。と急しく問へば、さればとよ。背缺くまでにあらねども、亦淺瘻にはなかりしを、
 素より悍き大人なれば、手づからその箭を抜捨つ、瘻を洗ひ、藥を布て、今朝までは吾儕にだに、知らさで起臥し
 給ひにき。しかはあれども、立働きの、心に愜ふべくもあらねば、曲糸に身を倚かけて、訪來る人に四表入表を、う
 ち相譚せてさり氣なく、みづから慰め給ふものから、面色さへに生平ならぬ、若痛さこそと推量れば、患人よりもい
 とよく、側病する吾儕が苦しき。醫師も既に三人まで、招きにけれど即功なし。かゝるときには神佛の、利益を祈
 るに優ることあらじ、と思へば總に宿所を出て、日出の神社へ詣る程に、大村川の下にて、氷六隻に呼かけられて、狂
 に思ふよしさへあれば、叔珍客を伴ふたり。是より下は、やよ妻よ、年寄申費に就給へ。大村川に下りて、

いひつゝ、咄々とうち笑へば、氷六やうやく進出で、喃角太の郎君、赤岩大人の刺傷は、片眼を失ひ給はんのみ。命め
 てたくをはすと聞けば、さのみ苦勞になし給ひそ。其にもまして苦になるものは、いぬる比より預りたる、襦衣どの
 の事也かし。いひこしらへても諫めても、涙の乾く隙はなし。然ばとて又わかき女中を、舊の宿所へかへしも得なら
 ず。もてあましたるそがうへに、ともすれば走り出て、巷路驟れをせらるゝには、困じ果れど老夫婦が、張番しては
 くらされず。けふもけふとて抜出て、何の程にか見え給はねば、うちも措れず追留んとて、彼此索求る程に、大村
 川なる柴橋より、身を投んとせられしを、遙に見つゝ後方より、走り著つゝ抱き禁めて、將てかへさんとしつれど
 も、既に必死を究めたり。放ち給へ。と身を拵けて、留るべくもあらざりき。折から赤岩なるおん母御前の、日出詣
 のかへるに、轎子吊して件の橋に、近づきたまふを呼びそがして、加勢に憑みまらせて、やうやく諫こしらへて、
 叔治りを商量せしに、かうくせばやと宣ふを、ちからに同道致したり。といへば船虫語を續て、喃角太の、向に
 もいひし事ながら、生さぬ親とて悪根ぞ、といはるゝ吾儕を世の人に、よく思はれん爲にはあらねど、只痛しきは襦衣
 也。飽も飽れもせぬ中を、些の言語の錯誤より、去られて久しく媒人許、かゝる歎きに身を措かねて、死んと思ひ訣
 めたる、心の中を思ひ汲みては、大村川もなほ淺かり。霎時共音にうち泣つゝ、いかでひとつになさばやとて、十字
 竹輿にうち乗して、路いそがして將て來つるは、吾儕がおん身に手土産也。よしや心に入らずとも、やよ何事も宣ふな。
 好も歹も吾儕に願て、受納めて給はらば、爹々公の機嫌のよき折に、勸解る方便はいくらもあらん。枉て承引給ひね。
 と他事なく諭す善心實意は、表皮ばかりの空情、とは思はねど角太郎は、うち驚きて貌を改め、今にはじめぬことな
 がら、大かたならぬおん慈愛は、彼もののみ歎某さへに、再得がたき幸ひなれども、親に稟たる勸當を、免されず
 して離別の妻と、ひとつにをらんはこゝろにず。と推辭を船虫聞あへず、如右思はるゝは無理ならねども、吾儕が思
 ふよしと異也。病痾平癒の加持祈禱も、慈悲善根に優ものなし。けふはからずも襦衣が、必死を途に拯ふても、おん

身とひとつにせて措かば、又只劬勞を倍さすのみ。儻作て魂を、容すといひけん世話に似て、眞の功德にあらずかし。必死を拯ふてそがうへに、情願を遂さしなば、これぞ眞の陰徳慈善。その善報ひの何處へ邁くべき。この功德をもて、公の痕の、はやく瘡り給ひなば、始終おん身の孝行の、空しからずといはまくのみ。これらの道理を思はずは、親に盾衝く子に手を下て、潜びてこゝへ訪も来じ。況てや舅姑には、よくも當らぬ離縁の娘を、おん身に勸解て復せとは、得こそいはれぬ情由なるを、いふは、廻々公の爲、おん身の爲を思へば也。かくても否歟、辭ひ給ふ歟。みづから尋思し給ひね。と説諭さるゝ角太郎は、有無の答に當惑の、胸安からねば頭を低て、なほいふよしもなかりけり。登時媒人氷六は、髀を鳴らす感嘆の、聲も調子をふり立て、吟發明なる女中ぞかし。日比よろづに烈しくて、五分でも透ぬ性ならずば、かくまで善にも強からじ。愚魯なりける俺們すら、よく吞了る意見の妙薬、經驗は信と見ゆめるに、やよ郎君いかにぞや。とくく承引給はずや。と急しく勸諭されて、角太郎は又きたる、手を釋き、やうやく頭を擡て、親にも他にも幾回となく、厄會を被奉る、この身の不肖いと恥かし。親の勘當免りずして、躰衣を召復さんは、本意に背く所行なれども、それ將大人の疾平愈の、爲とし教諭させ給へば、遂に脱るゝ方もなし。孝子は己を空しうして、親の爲にせざる事あらずとこそ聞くものを、この事後に大人に聞えて、當國をすらするゝとも、大人の金瘡癒り給はば、歎きの中の驕び也。親の爲には、死をだも辭せじ。況て夫婦の間にして、些の理義に違ふをや。左も右も計らせ給へ。といふに船虫歡びて、扱は納得し給ひしな。早に商量整ひて、かばかり愛たき事はなし。喃阿氷人、躰衣を、とくくこなたへ呼給はずや。といふに氷六こゝろ得貌に、笑つゝ縁類に立出て、その竹與こゝへ。と呼寄すれば、輔夫們がこゝろ得て、擡起しつ、縁類の、框へ懸て横著の、筵簾を反賜れば、誘こなたへ。と氷六が、扶出せど力なき、憂吉に變れし雨中の花、彌生の後の躰衣は、浮世の秋の韓錦、飽ぬ絳地の所天の指、こゝにこん地の、敷しきも、袖はまだ乾ぬ濡衣を、解んよすがはたなしらぬ、憂身はいとと面目も、又今さら

に泣顔の、髪、雪の白粉、眼包ははれの落合坐席、扶掖れて、姑の、背後のかたに座すれども、額づく膝に置得ぬ、頭病して重げなる。船虫さこそ見かへりて、喃躰衣、是首と彼首と遠からねば、角太郎に説諭めたる、粹の趣の聞えけめ。けふより故の妹伏川、山迹ならずも陸しき、六田の里に類りて、口舌の塵芥播流す、風波は稍おさまりしを、おん身は娛しう思はずや。今しも何を憚りて、逡巡をすることやはある。こなたへ進み給ひね。といひつゝ手を拿り引著て、己が側にをらすれば、躰衣纒に頭を擡て、鈍く縋らぬ言語には、思ふのみにて盡し得がたき、おん慈愛は須彌より高かり。氷六ぬしにもこの月ごろ、大く劬勞を被侍りき。時の不祥にあなれども、おん親切の甲斐ありて、絶えんとせし玉の緒も、妹伏の縁しも末長かれと、再結び留られし、恩義に何を報ふべき。身の幸ひに就て又、面なく侍り。とうち掩ふ、袖の涙を拭ふのみ。有繋に恥て良人には、いまだ何ともいはねども、維摩の室に毘耶の城、いはぬはいふに彌ませし、懐ひはこゝに籠りけり。氷六これを慰めて、事あるときに佛の御足を、戴くはこれ人情、事なき時は香だも焼ぬが、なべて浮世の人情なれば、口舌起りて引出さるゝも、みな氷人の役なるを、恩に被べき事にはあらねど、賤比の望の月、かくまで圓く納りては、寔に千秋萬歳樂、千宮の玉に千曳の石の、重荷を十々卸したり。やよ郎君、御深窓を受とり給へ。信と遞與しませしぞや。いぬる比より預り置たる、三行半の休書さへ、反故になりしはいよく愛たし。髓にこゝに、と懐紙の、間を搔撈り、とり出して、恭しく推披き、やよ郎君、爾せ。かゝる物は片响も、身に添措んはいと忌はし。兪立合せ給ふ折也。今面りに夏虫せん。これ見給へ。と推揉て、地炕の中へ投棄れば、發と燃立灰埃を、船虫は扇もて、あふぎ道ひつ、うち微笑て、喃角太郎、いつまでいふても果しなき、おなじ事には侍れども、念佛三昧うち措て、朝夕夫婦睦しく、爹爹公の勘當免さるゝ、日を俵て俵ねかし。吾儕が糸を引んには、繰り損ふ事はあらしを、躰衣も如右こゝろ得て、不覺なる事し給ふな。一年三百六十日、口を開きて笑ふ日は、いくばくもなきものなるを、親子夫婦の間でも、いと美しき事のみならんや。有身てはや月も岌み



(る 贈 を 胎 禍 虫 船 に 庵 の 壁 返)

ぬ。食物にも起臥にも。よろづのうへに心を用ひて、平
 けく安けく、産出し給はんことを、今より祈り侍るかし。
 なほ憚りの關の戸の、半開きなるよしあれば、音耗せん
 事易からず。對面はいよく難かり。其もしばしの程な
 るべきに、みづから愛し給ひね。と慰られて角太郎も、
 雛衣も感涙の、落るを覺ず額づき承て、かさねくし御
 洪恩、なほこのうへは家尊の大人の、おん怒瞋を和げ給
 ひて、恩免めでたく見參の、おん汲引を願ふのみ。とい
 ふに船虫領きて、そは又いはるゝまでもなし。吾儕に女
 才のあるべき歟。喃阿氷人、思はず時も移りたり、誘退
 らん。といひかけて、立まくするを氷六は、遽しく推
 禁めて、且俟給へ從者達の、漫行をしてもやあらん。
 といひつゝ外面見出して、人々は其處にや在る。赤岩殿
 の奥さまの、還らせ給ふに轎子を、はやく此方へよせず
 や。と喚る聲に轎夫等は、應と答て彼此より、欠伸して
 起て來つ、擡て寄する轎子を、霎時俟する船虫は、淨手
 し果て立出れば、雛衣がこゝろ得て、拿れる柄杓の懸水
 も、落れば石の音衣、老母草の珠に實種丹葉、夕陽目吹

くあから引、東にあらぬ西面、潜びて北を思にして、猿類よりぞ乗る轎子を、みんな見送る客態に、少し許されて立つ
 氷六も、かへり花さく老樹の歡び、あるじ夫婦に辭別、寔にめでたしく。といふより外に他事もなく、備ふて來た
 る十字竹輿に、足取せん。と己がゆく、後に吊して動揺々々と、出るや柴の片折戸、迹を頼むと離かけられて、杖も
 てよする轎夫が、楚と引閉て共侶に、舊來し路へいそぎけり。されば又船虫が、曩にこの地へ流浪して、赤岩一角武
 遠の、婢妾となりて後竟に、後妻にまでなり登りたる、その來歴を原るに、去々歳の秋の比、渠は武藏の豊島郡、阿
 佐谷村に在りし時、その夫並四郎は、犬田小文吾を害せんとして、還て小文吾に研仆され、その身は千葉の家臣なる、
 畑上語路五郎に擲捕られて、石濱の城に牽るゝ折、千葉の奸臣、馬加大記常武が資によりて、辛く途より逐電して、
 下野州二荒山の麓村に落留り、且く躲れて在りける程に、赤岩一角武遠が、婢妾を求るとて、媒妁するものありしか
 ば、便りに就て彼處に赴き、一角が側室になりて、いく程もなく後妻に、執立られしは、船虫が、男に媚る才ありて、
 奸智に長たる所以也けり。これよりの後船虫は、一角の家財を留めて返さず。これらの絆の善惡邪正を、犬村なる里人等は、
 件の夫婦を追出さして、そが養家相傳の、田園家財を留めて返さず。これらの絆の善惡邪正を、犬村なる里人等は、
 大方ならずよく知りて、恨憤るもの多かりければ、皆角太郎を憐愍つゝ、返壁なる草庵も、彼里人の手に成れる也。
 又一角が二男なりける、赤岩牙二郎と呼る、悪少年は、中妻齋井が産るものにて、角太郎が爲にはこれも亦、異母の
 弟なれども、船虫に子のなれば、執れにしても繼しきを、船虫は左にも右にも、牙二郎のみ愛慈みて、隔る心な
 かりけり。以あるかな牙二郎は、その心ざま直からず、善を疎み惡を好する、殘忍不善の癖者なれば、彼同氣は相求
 め、同病は相憐むといふ、古語に似たるなるべし。有此之程に船虫は、良人の矢傷平愈の爲、日出詣のかへるさに、
 氷六に呼かけられて、はからずも舊娘、雛衣が入水の必死を、禁よといはれしとき、倏忽心に計較あれば、いと正首
 に慰めて、角太郎許誘引來つ、然しも言語を巧にして、角太郎に説勧め、遂に夫婦を全うしたる、肚裏には計策の、

速に成れるを歡びて、從者等をいそがしつ、その日嘯時に、赤岩なる宿所に還りて、一角に云々と、角太郎がいひし事、雛衣がうへはさら也、己が伎倆の趣を、簡様々と聳くにぞ、一角は耳を傾けて、歡ぶこと大かたならず。日出の神の冥助より、儼の利益は捷徑ならん。その事甘く行はれなば、わが目の疾は忽地愈て、物を見ること左の眼の、恙なきに等しかるべし。微妙く謀り給ひしよ。と頻りに響て已ざりけり。案下某生復説角太郎は、赤岩へ歸ゆ、人々の背影の、見えざるまで目送り果て、懸て母屋に退きつ、隔の紙戸を推ひらきて、犬飼主犬飼主、大く無禮を仕りぬ。誘ふなたへ。と請進れば、現入は莫然に、刀を引提進みよりて、地炕の邊に對ひてをり、不測に夫婦再會の歡びを述しかば、角太郎は聞あへず、大く羞たる面色にて、家音の呂律調ねば、臭聲既に外に洩て、賓客を驚せり。こも歎待といふべきや。寔に面なく候。といふを現入慰めて、さな宣ひそ。唐山なる、返きむかしを傳へ聞くに、大舜の聖人なるも、弟に象あり、父母に瞽叟夫妻あり。或は爪をもて枯田を耕し、或は井に落て免れたり。只眼前の成敗もて、始終の榮枯を論ずべからず。既にして足下の孝あり。加るに又貞烈の令政あり。久後憑しく候。といはれてやうやく角太郎は、愁眉を斂めて傍を見かへり、やよ雛衣、こなたへ進め。と呼近づけて。犬飼ぬし、是なるは、荆婦にこそ候なれ。おん目を給はり候へ。と引あはすれば現入は、遽しく膝を進めて、こは令政にはする歎。某は下總浪人、犬飼現入信道と呼るもの也、曩に友達の往方を索ん爲、當國に杖を曳しより、主人の香名世に觀しく、景慕の懐ひに勝ざれば、けふしも柴の扇を敲きて、明教を受しかば、いよ捨がたき思ひあり。既にして莫逆の、友垣を結びては、胞兄弟にも優す心地にこそ。いかでか交る年月の、脩短きに依るべきや。されば古語にも、蓋を傾けて故が如し。白頭までも新なり、といへるは只その志の、合と合ぬに新故あり、あるじの爲には死をだも辭せじ。心くまなく思されよ。と他事なくいはれて、雛衣は、やうやくにうち見あげて、いと悲しき實さまに、思ひがけなく詠れたる、夫婦のうへに幸福多かり。いと恥しき事をのみ、はやおん耳に聞たれば、今さら包んよしも候

ならず。よろづに心つきなくて、濡衣さへに被せられし、装のみかは良人すら、犬村の家、赤岩の、寓居もならて遠離る、草の葬に草の床、虫より外に友もなき、浮世の秋を身ひとつの、秋歎と思へば膽向ふ、心細さを忘るゝまで、慰られて歡び侍り。見給ふ儘の不樂住ひにて、歎待とは侍らねども、いつくまでもおはせかし。長き旅路の風雨に、おん衣物の汚れたらんを、洗濯してまゐらせん。袷衣を脱せ給ひなば、代見出してまゐらすべし。先はや夕餉の準備をせばや。といひつゝ地炕にさし寄りて、柴折焼を現入は、つらくと見かへりて、否措給へ日の短きに、晝飯たうべて程もなし。珍饈美食は魯聖の誠、世に願しき事はなけれど、いまだ五友に環りもあはず。且あるじ夫婦のうへも、心にかゝる事多かり。いとひがたくあなれども、こゝに愚衷を盡さん歎。あるじの繼母船虫どのを、嚮に某闕窺しに、郎才多辯の婦人也。きのふ網學の宿りにて、里人の言を聞しに、繼子夫婦に強顔き事、いと腹黒き絆の由と、けふ聞く所は表裏にて、儼然として慈母に似たり。笑の中に刃を隠し、錦の囊に毒を包む、言の虚實を察せずして、いはれし旨に迷ひ給はゞ、恐らく不測の殃厄あらん。そをいかにぞと推て試給へ。船虫どのゝいへるがごとく、義理ある子也嫡也とて、よに慈愛の心あらば、初より夫婦の爲に、尊大人に勸解もすべきに、燃る薪に油を沃ぎて、追遣して、日比を匿つゝ、けふ媒人に呼びかけられて、雛衣どのを救ひしとて、彼氷六にはうちも任せず、みづから將て来て説諭し、絶たる縁しを結び留て、恩義の枷を被られしは、情由ありぬべき事ならずや。父子は只是天性也。然れば他人の疑ひを、容るゝは要なきことなれども、それ將時宜に依るべきのみ。もし某に任し給はゞ。赤岩へ赴きて、絆の虚實を探るべし。夫三省は曾子の謹慎、遠謀は逆、身を護るの増なれば、枉てこの議を容給へ。主人の賢慮いかにぞや。と密めき問れて角太郎は、沈吟じたる眼を開きて、教諭寔にその由あり。しかはあれどもわが父も、弟も心剛にして、容を愛するものならず。他郷の人と侮りて、迭に怒りを引起さば、禍災其處に起らん歎、これ亦測りがたかり。この義はいかに。と問かへせば、現入莞爾とうち笑て、弱はよく強を征す。柳の糸に雪折なし。

某彼處に至んに、彼人々禮義をもてせば、某これを敬ふべし。彼人々武をもて威さば、某も亦勇をもてせん。餘は機に臨み變に應じて、欲する所は足下の爲に、緯の虚實を撈質して、又只無異を搦るにあり。さのみは勞し給ふな。と進むを雛衣推禁めて、淡薄き女子のさし出口、いふはいはぬに増べけれども、赤岩の宿所には、玉阪飛伴太、月裏團吾、入黨東太、佐足潑太郎などいふ、一人當千の塾生侍り。侮り給はゞ過失あらん。といへば又角太郎も、犬飼ぬしの武備智術を、咄むとはあらねども、身單にして危室に臨むは、寡をもて衆に敵する也。みづから深念し給へかし。といふに現入頭を掉りて、某全く微力を憑みて、心頻りに急るにあらず。さばれ虎穴に入らざるもの、いかてか虎の子を獲てかへらん。愚意の決斷已ことを得ず、疾まからんと遽しく、袱包を搔奪て、やをら背へ投被て、端引結びつ、刀を引提て、はや縁頼に立出て、草鞋索ねて穿締れば、あるじ夫婦は禁めかねて、皆端近く出て來つ、切て今宵は休ひて、翌まで留り給ふとも、なほ遅きにはあらざるを、其も聴れぬものならば、夕膳たうべて出給はずや。といふを現入聞あへず、否、ものほしうは候はず。薄暮にならば路傍なる、人に求めて飢を凌ん。三とせ已來旅馴ては、饑寒も苦にならず。翌は必かへり來べきに、吉左右を俟給へかし。さらば、とばかり足早に、赤岩を投て出てゆくを、雲時目送る角太郎、雛衣も只交遊の、義信に感じて忙然と、折戸口にぞ立つくす、籬色に自生の玉蜀も、懐歎き庭ながら、拂子に似たる紫髯と、共に身の入る子もち達、端緒緩びし駒下駄を、踏な覆しそ、あぶなや。と夫に心つけられて、母屋へかへり新參の、妻は勝手にまだ狎ぬ、初々しさと樂しさの、貌にあらはれてあはれ也。

第六十三回

短刀を携來て縁連師家を訪ふ
赤兎と挑みて信道武藝を顯す
却説犬飼現入信道は、犬飼夫婦に立別れて、廻りに路を急ぎしかば、日もはや西に沈む比、圓月照るに、赤岩の

莊に來にけり。遂にて里人に語らる、赤岩一角武藝が、宿所は方にこゝなるべし、と思ひつゝ外に立て、彼此を見かへるに、この家は三方を、板垣にうち圍して、南面に衡門あり。いとふりたる赤松の、枝長やかに門を掩ふて、傘蓋に似たりけり。東のかたは庭にやあるらん、いろ／＼の樹立の、俯きあり短きあり、蒼きあり紅なるありて、秋色の目に爽然なる。樹傳ふ鳥の聲したり。この庭のあなたこそ、武藝の稽古所なりとおぼしく、撃合すらん被聲に、木刀の音をまじへて、或は笑ひ或は罵る、動搖みに餘念なきが如し。現入は莫介に、いひよるよしを得ざりしかば、查笠を翳しつゝ、夕陽の影を遮りて、件の垣のほとりに立在み、裡面より人の出るを俟に、秋の日なれば短くて、黄昏近くなりけり。浩處に一箇の武士の、行装苛めしく、純子に天鷲絨の縁とりたる野袴に、長やかなる朱鞞の兩刀を跨へて、紫縮緬の三尺帯を、端長に締做たる、身長は五尺八九寸もあるべからん。眉は濃く眼圓に、蒼髯頤に充て、年齢は四十あまり、五十には遠からじと見えたるが、従者五六名を將て、網芋のかたよりいで來にけり。そが中に若黨とおぼしきものの、長き蠟塗の篋を拿るあり、奴隸は鎗を持るあり、鎧櫃を擔るありて、後方に一挺の行轡子を吊しつゝ、はやこなたへぞ近づきたる。現入はこれを見れども、只一角が奴婢などに、便り求めていひよらん、と思ふより外他事もなければ、深く心をとめざりしに、件の武士は現入が、立在たるを怪しげに、幾回となく見かへりつ、臆て赤岩一角が衡門より進み入りて、供若黨に呼門すれば、裡面よりも執達の、若黨はやく出迎へて、引て客房へ請じけり。こゝに至りて現入は、件の武士を一角が、客なりけりと悟るのみ、なほも便者を得ざりけり。抑今赤岩一角が宿所へ詣來し羈旅の武士を、甚麼なるものぞと原るに、是則別人ならず。籠山逸東太縁連也。されば件の縁連は、今を距ること十七八年、寛正乙酉の冬の比、主命を矯て、杉門に鄰き松原にて、粟飯原首胤度主従を殘害し、己が宿意を果すものから、その折嵐山の尺八と、小笹落葉の兩刀を、盜賊に奪略られ、粟飯原が従者の、撃漏されしものどもは、逃て赤塚へかへりしかば、縁連進退谷りて、罪を免るゝよしのなければ、その宵

己が夥兵等を、岩槻なる古寺に捨措つ、ひとり忽地逐電して、些の由縁を心當に、下野なる宇都宮へ赴きしに、こゝも武藏と遠からねば、仕官の望み遂に稱はず。同國赤岩の郷士なりける、赤岩一角武遠は、素より武藝の達人にて、弟子二三百名あり、且熟生も少からねば、縁連は又縁を討めて、一角が家に赴き、初一兩年は、熟若黨にて在りけるを、一角殊に拔萃て、弟子頭にとり立つ、各代として彼此なる、稽古の席へ遣しければ、縁連は年々に、武藝やうやく上達して、侮るものはなかりけり。有如之程に、鎌倉山内家の内管領、長尾判官景春、越後上毛を伐靡けて、獨立の企あり。これにより、赤岩一角が武藝、關左に雙なしといふ、世の風聲を傳聞て、しばし使を遣し、且聘を篤くして、只願渠を招れしに、一角推辭て從はず。某は邊鄙の野人なり。世を我隨に送らんのみ、素より官途の望なし、某が熟生に、籠山逸東太縁連といふものあり。その大刀筋の精妙なる、某に劣り候はず。このものをや召さるべき。と眞實だちて稟し、かば、爾後使節往還りして、絆やうやくに整ひければ、縁連は思ひがけなく、越後の春日山に赴きて、景春にぞ仕へける。扱も逸東太縁連が、その師一角の意に愜ふて、夥の祿を得たりし事は、縁連その性奸惡にて、同門のもの共の、好き事も歹き事も、間なく時なく師に弄きて、その機を攪ること大かたならねば、一角これを歡びて、わが爲になるものとしつ、長尾家へ薦め擧て、その身の代にしたる也。かくて又七八箇年を歴る程に、景春は去歲の秋より、上毛白井の城に在り。白井は原是、長尾左衛門尉昌賢の居城なりしに、往る享徳年間よりして、管領定正の有となりしを、去年景春これを獲て、城普請をせし程に、一日井を鑿て一口の短刀を得たり。これにより景春は、縁連を使として、赤岩許遣しけり。間話休題、この日赤岩一角は、矢傷の疼痛をものともせず、瘻には些の膏藥を布して、白練に頭を紮ね、三四重し襦にをり、曲象に脇を持して、熟生等が試撃するを、うち見て笑ひを催したる、折から執達若黨走り來て、上毛白井の城中より、長尾殿のおん使に、籠山氏の被せられ、對面を請れ候也。いかゞ許自まうさんや。といふを一角見かへりて、長尾家の使となりとも、越後本ならは、

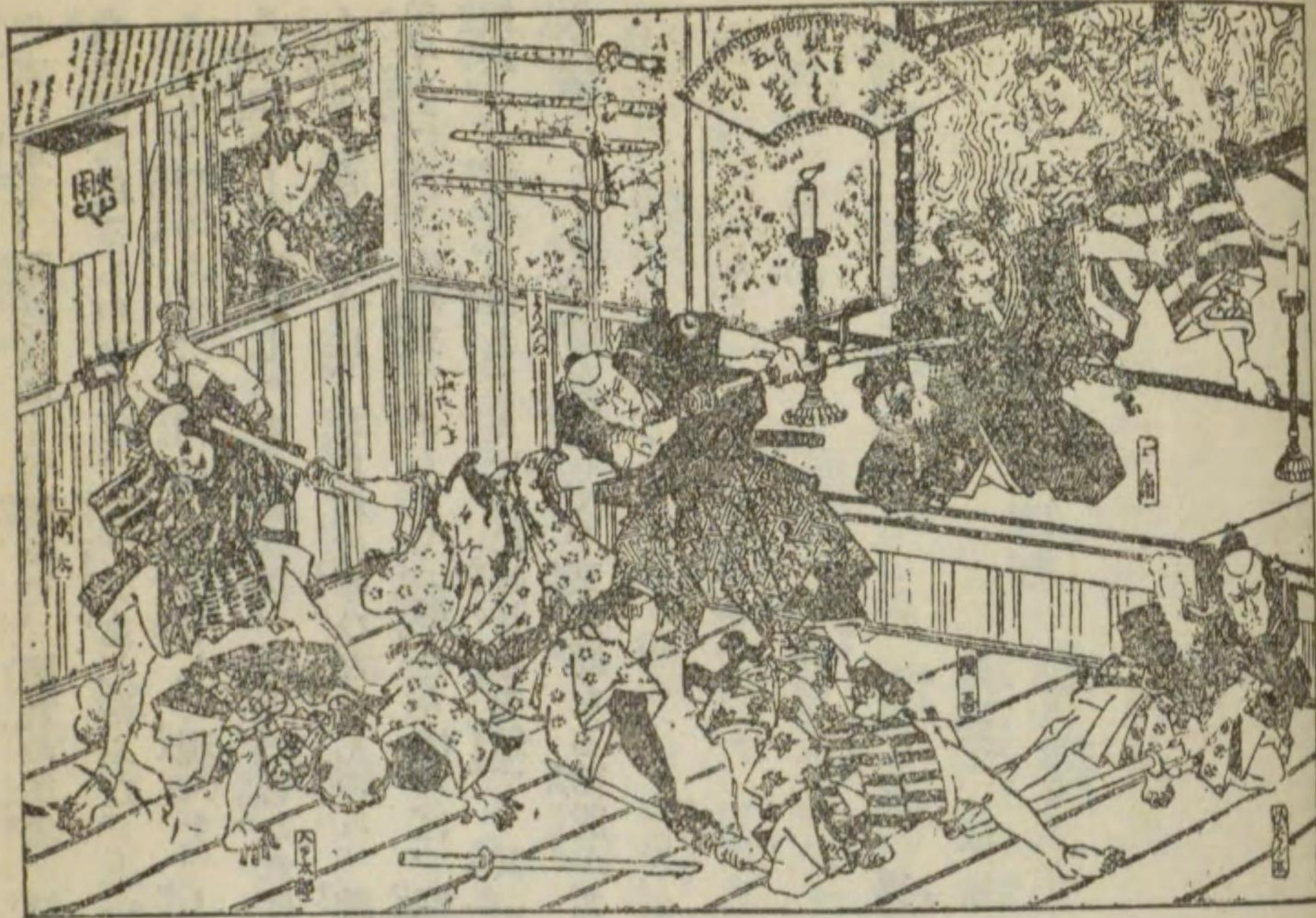
けしうはあらず。こゝにて會ん、疾せよ。といふに若黨こゝろ得果て、容房のかたへ退りし程に、熟生們は武藝を已て、各々威儀を繕ひつつ、師の左右にぞ侍りける。有然程に縁連は、彼若黨に案内をせられて、はやその席に入りしかば、遙に膝行頓首しつ、仰ぎて一角をよくも見ず。やうやくにして頭を擡げ、寒暖を述べ、無異を祝せば、兩箇の童扈從等が、茶を薦め菓子を羞て、形のごとくに款待しけり。登時一角微笑て、珍しきかな籠山生、わが身無異とはいふもの、近屬眼瘡の患ひあり。病床の對面は、いとも無禮なる所行なれども、懷愛ければ面會せり。こゝに侍る門生們は、みな相識にぞあらんずらん。うち緩坐ぎて相譚給へ。といふに縁連牌を進めて、そは思ひがけざりき。おん目を傷らせ給ひし歟。御容體はいかにぞや、おん痛みは候はずや。と問ふを一角聞あへず、否、さしたる瘡にはあらず。和殿いぬる比の來輪に、去歲より主君に從ふて、白井に在城し給ふと歟。越後と違ふて路の程も、遠からずしていと愛たし。爾るも猛に訪るゝ事、甚麼なる所要のあるやらん。といふに縁連、さし候。這回の參向私要にあらず、即主君の使也。聞も及せ給ひけん、上毛なる白井の城は、去歲より寡君の手に入りしかば、用水の爲に井を鑿られしに、土中に一口の短刀あり。とり揚てこれを見るに、長は凡九寸五分、木柄にして軽も木地也。或はいふ、木天蓼をもて造れるもの也。これは是故管領、持氏朝臣のおん物なりし、村雨丸にやあらんといへり。爾れども彼君の、滅亡よりして既にはや、夥の年を歴し事なれば、よくこれを辨ずるものなし。且く僉議を凝らされしに、所詮縁連が師匠と聞えし、赤岩一角武遠は、當世無二の武人にして、且古刀の鑒定も、をさ／＼よくするものならずや。然らばこの短刀を、縁連にもたし遣して、一角に眞偽を問せば、玉石共に分明ならん。とく下野へ赴けとある、君命を稟しかば、夜を日に續て到着せり。御眼疾を憚らて、無心の至りに候へども、先生鑒定なし下さらば、某も亦面を起す、公私の幸ひこのうへあらじ。と詳細に述訖りて、携來つる刀の箱を、恭しくさし寄すれば、一角聞てうち領き、木天蓼をもて柄となし、鞘となしたる短刀は、物數奇にしていと珍し。然るも亦疑ひあり。愚老が豫て傳聞たる、村

雨丸の名刀と、その長短同じからず。且村雨はうち振る毎に、その刀尖より忽然と、水氣飛散るものとぞいふなる。かの村雨と村雨ならぬは、この水氣をもて證とすべし。とはいふものゝ折のわろくて、只一眼の鑒定は、いと覺束なき所爲なれども、日の暮ぬ間に一見せん。蓋うちひらきて見せ給へ。といふに縁連こゝろ得て、萌葱の紐解く再重箱の、中より白氣立升りて、隠々として一角が、座邊に靡きて消失しを、縁連は心も得つかず。そが儘蓋を掻取れば、裏面には袋のみにして、彼短刀はなかりけり。是はいかに。とばかりに、顔色忽地土のごとく、驚憂へてわくよしもなく、忙然たること半响ばかり。やうやく心を推鎮めて、先生この箱を御覽せよ。不測の事こそ候なれ。某かの短刀を預り奉りて、首途したるその日より、轎子の内に入れ、或は若黨に持しなどして、奴隸の手には觸るゝことなく、夜も亦枕に引著て、等閑にせし事はなきに、目今蓋をひらきて見れば、袋のみにて短刀なし。既に短刀紛失したれば、罪を得んこと儂俟べし。疾退きて從者等を、一ト穿鑿仕らん。不敬を允し給へかし。と言葉急しくその議を告て、退き出んとしけるを、一角急に推禁めて、籠山生且等給へ。かの短刀を從者に、竊略たるものあらば、こゝまで從ひ來ることあらんや。然るをなほ疑ふて、愆に穿鑿せば、勞して功なきのみならず、身の過失を披露する、嗚呼の所行にぞあらんずらん。といふに縁連有理と曉りて、ふたゝび立もあがり得ず。爾らば又いかにして、この身の罪を免るべき。願ふは先生教え給へ。と不樂しげに、救ひを乞ふて已ざりしを、一角こそ。と嗟嘆に堪ず。愚老とても今さらに、せん術はなけれども、和殿立かへりてまうさんには、師にて候一角は、眼病によりて床にあり。病著の瘥り果なば、鑒定を仕らん。その日までおん短刀を、留させ給へかし。一角預り奉れば、前後相違あるべからず、とおん答をまうすにより、その意に任し候、と返命を聞えあげなば、且當分の罪を免れん。その間に穿鑿せば、かの短刀の出ざらんや。さのみな勞し給ひそ。と慰められて縁連は、體に色を直せども、心はいまだ安からず。當下一角が左右なる、月鏡の團扇、玉坂飛伴太、入黨東太、吃足源太郎などいふ諸生等、やうやくに進み出、縁連に

辭をかけた、恙なきを説し説され、或は又短刀の、紛失を悔ひ、且慰めて、又且く相諒ふ程に、その日も既に暮しかば、席上に燭を點じて、童扈從が持運ぶ、美酒珍饈のいろゝなる、所映まで披排べて、縁連を管待せば、一角が二男赤岩牙二郎、後妻船虫も出て來つ、皆縁連に應對したる、そが中に船虫は、初對面の事なれば、迭の口誼を述盡して、大酒醺にぞなりにける。主客の獻酬、置しく、盃屢巡りしとき、牙二郎は進み出、縁連にうち對ひて、籠山生は當家の高弟、こゝにさむらふ人々も、兪腹心の輩なれば、兄の如く弟の如く、意中を盡して遊び給へ。爾はあれども、某などは、邊鄙の弱輩なるをもて、江湖上の琦人をしらす。越後上毛の國々には、武藝の達者も候歟。と問へば縁連頭を掉て、否、某もよくはしらねど、多くは皆是似たるものにて、老先生の小指の頭にも、向ふべきものは候はず。是にて思ひ出したり。嚮に遠來の武士かとおぼしき、年尙わかき旅客が、こなたの垣に身をよせて、試撃の音を聞つゝ居たり。おもふに渠は國々を、武者修行するものにやあらん。なほ立去らてをるならば、呼入れて各々の、大刀すぢを見しらし給へ。そはいと興ある事なるべし。といふに飛伴太、濼太郎、東太、團吾も雀躍して、おもしろし。惜らくは時移りて、日の暮たれば立去りたる歟、とく外に出て一見すべし。といひつゝ衆皆立んとするを、一角ヤヤと呼禁めて、噫嘆々し四人ながら、うちも揃ふてゆくことかは、團吾一人て事足りなん。その人今なほ立在をらば、ともかくも説誘ふて、はやくこなたへ伴ひてよ。とくゝといそがせば、團吾は得たりと勇立て、外面さして出にけり。有然程に、犬飼現八は、赤岩が宿所の板垣の、ほとりに久しく立在て、裡面より出る人を俟しに、日は暮果ても便を得ざれば、つくぐと思ふやう、われ愆に遠慮して、いひも得よらず日の暮たれば、初更前に門を叩きて、宿とり後れし體にもてなし、一ト宵を此家に曉すべし。しからんには一角が、矢傷の淺深と船虫が、言の虚實も定かに知れん、と尋思をしつゝゆきも得やらず。初の儘にをる程に、忽地に入ありて、挑灯を引提つゝ、角門より立出て、左見右見つゝ現八が、ほとりへ早く進み近づき、御邊は乍麼何處の人ぞ。こゝにて伴侶を俟給ふ歟。

と問れて現八殿に、否某は下總浪人、犬飼現八と呼ぶもの也。獨行にて伴侶はなし。當國は不知案内にて、思はず宿をとり後れ、いかで大家に止宿を乞ふ、と思ふものから便宜を得ざれば、久しくこゝに立在たり。といふに團吾は領きて、それは痛しき事になん。近曾主人は眼疾にて、日夜徒然に堪ざれば、辭敵を討る折也。いはるゝよしを通達せば、うけ引れんこと疑ひなし。誘こなたへ。と先に立て、玄關のほとりに將て來つ、一箇の奴隷を呼出して、此如々々と分付れば、奴隷は廳で小盥に、温湯汲とりもて來つ、現八に足を洗しけり。かくて團吾は現八を、玄關の次の間なる、編室に憩しつ、その身はひとり一角等が、身邊に至りて云々と、縁由をぞ報にける。是より先に縁連は、東太。飛伴太、潑太郎等と、又盃を巡らして、團吾がかへるを俟程に、船虫は動もすれば、角太郎夫婦の事を、あしざまにのみ噂せしを、牙二郎も亦相槌打て、父の聞くだに憚らず、いと喋々しく罵りけり。浩處に外に出たる、月箕團吾かへり來て、現八が緋の趣箇様々々と報しかば、衆皆齊一手を拍て、緋はや成りぬとち笑ふを、一角急に推禁めて、聞くがごとくは件の旅客、犬飼とやら、現八とやら、下總浪人ならんには、二蓋松山城介が、弟子にもやあらんすらん。二蓋松は古人になりぬ。縦渠なほ死なずして、今この團坐に入りたりとも、絶て怕るゝ敵手にあらず。況その拙を受たらん、未々の弟子をや。爾はあれども小敵也とて、思ひ侮らば過失あらん。こゝろ得給へ。と傲れば、衆皆一句に承伏して、猛に威儀を繕ふ程に、團吾は又遠しく、現八がほとりに到りて、只今おん頼の一條を、主人一角に達せしに、病中には候へども、對面せんといはるゝなり。誘々といひかけて、先に立、案内をして、圓居の席へ伴へば、船虫はひとり避て、屏風の背に躲れつゝ、なほも竊聞したりけり。有然程に現八は、席末に列りて、あるじに對ひ、今宵止宿の、歡びを述べしかば、一角纏に腕をはなちて、遠遊の客人進み給へ。某近曾病弱に嬰りて、迎接に親ます。不敬は用給へ給へかし。こゝに候、弱冠は、拙兒赤岩牙二郎也。又それなるは愚老が高弟、今は長尾の家臣なる、龜山源次郎也。又同席なる此位共は、衆も皆學生にて、彼は某、此は乙某、陸某にて候。

一箇々々に告しらすれば、衆皆齊一膝を進めて、不測の對面をぞ祝しける。出づして一餅は、牙二郎を見かへりて、犬飼ぬしは珍客なれども、不用意にして管待なし。食暴せし肴なれども、盃をまゐらせよ。といふに牙二郎こゝろ得て、犬飼ぬし、弱年者の、特に禮なき所行なれども、巡り來つる小盃あり。異議なく受て過し給へ。といひつゝ、差を現八は、恭しく受戴きて、今宵の止宿を允さるゝすら、无是上幸福で候に、諸君の團坐に列りて、酒宴の餘興に與る事、口果報さへありといはまし。いかでか貴意に背んやとて、半受つゝ飲盡して、その盃を返せしかば、これよりして縁連等も、皆相識の爲にとて、現八をのみ敵手にしつゝ、獻つ酬つ時移るまで、武藝に誇る高笑ひ、醉に乘ずる潑太郎、東太も共に進みよりて、犬飼ぬしは何等の爲に、この地に遊歴し給ふやらん。といふを牙二郎うち消して、問ふまでもなき犬飼ぬしは、武者修行にこそあらんずらめ。といへば縁連領きて、若先生の鑒定は、某も同案也。進止を見て知りぬ。武邊に長たる人にこそ。と虚稱しつゝ、目を注すれば、團吾飛伴太含笑て、然る術藝の達人ならば、一ト太刀教を受まく欲す。此義はいかゞ。とそゝのかせども、現八騒ぐ氣色もなく、諸君の鑒定甚過たり。勿論某もはやくより、武藝を嗜み候へども、武者修行するものにはあらず。いかにして各位の敵手にせらるものならんや。その義は免し給へかし。といふを衆皆聞あへず、そは食言也。謙退ならん。是も非も容らず敵手に。と牙二郎さへに諸聲立て、動搖懸りて已ざりしを、一角大く叱り禁めて、現八にうち對ひ、壯健が大輕忽なる、さこそ可笑く思はれけめ。愚老が病中ならざりせば、一ト太刀試み候はん、おもふにも似ず遺憾し。切てこの壯健に、教へ給はゞ幸ひならん。と他事なくいはれて、現八は、推辭によしなくうち領きて、武藝を業にせざれども、只兩刀を帶たる甲斐に、かくまでに宣へば、脱るゝ路の候はず。誰々なりと教給へ。といふに衆皆歡びて、童扈從を呼近づけ、この一ト室に隣たる、稽古所に大きな、蠟燭點さして、準備立地に整ひければ、飛伴太は逸速く、稽古所の柱に掛たる、木刀多くとり卸して、現八がほとりにもて來つ、孰なりとも擇み給へ。といふに現八含笑て、



(勇を奮て八よ五を闘を)

いと短きを取りしかば、飛伴太は長きを拿て、間の杉戸を開放ちつゝ、藪の中に跳入れば、現八も推續きて、件の男と對ひてをり。かくて一角を初として、衆皆其方にうち向へば、この時までも竊聞したる、船虫も物の隙より、勝負いかにと見る程に、且して飛伴太は、忽地ヤツと聲を被て、撃んとするを現八は、兩三刀受拵て、逡巡をしてければ、飛伴太得たりと踏入て、ふたゞび撃んとする處を、現八はやく引外して、左の肩尖丁と撃つ。さしも尖銳き大刀風に、飛伴太は苦と叫て、矢庭に仰反り倒れけり。現八は今この敵手の、眉間を撃ば撃べかりしを、倘撃殺すこともやとて、只その肩を撃しなり。飛伴太既に打倒されて、やうやくに身を起せば、はや立代る八黨東太、參るさふと呼びかけて、赤檻の木刀を、閃かしたる勢ひの、猛きを現八ものともせず、六七撃合しつゝ、ヲツと嘯て右の拳を、痠痺るゝばかり撃しかば、東太は持たる木刀を、三間ばかり反飛されて、怯むを現八衝とよせて、左手に襟上搔抓み、力を究めて投たりける、勇士の手煉目覺しく、東太は腰を覺らして、震時は起も得ざりけり。この者共が再度の不覺に、齊一漂立渡太郎、團吾も俱に作法を紊して、兩人右より左より、只陽燄の閃くごとく、透間もなく撃木刀を、現八も亦右に拵、左に拂て寄せつけず、三人の被撃刀音は、冬の深山に杓木燃る、斧鐵の響に異ならず。勝負も果し、と見る程に、現八は足を蜚して、團吾が膝を蹴と蹴て、返す刀に渡太郎が、腰股拂ふ早技に、兩人齊一筋斗りて、足空さまに輾轉び、四挺の盤を逆さまに植並しに似たりけり。既に四箇の塾生等は、皆直轡に負しかば、怵難たる籠山縁連、通候犬飼生。頻りに勝に乗給へば、及びがたしと思へども、負て恥辱を遣さんより、撃殺さるゝも勇士の本意也。誘眞劍にて勝負せん。その木刀は措給へ。と言語急しく呼かけて、野袴の稜結み、刀を引提て立向へば、現八莞爾とうち笑て、現勇しき所望の器械、その義は貴意に任し給へ。某は恨みもなき、人を害する心なければ、なほ木刀こそ相應しけれ。誘撃給へ。と聲がぬ膽勇、憎さも悪し、と縁連は、應も得せず身を斜りて、膝四五寸拔蕪る、脚を註し筆法の神詔、沈んでふたゞび引抜く刃を、左へ拂て引抜たり。縁連も亦驚かざる、勇がは驚く、聲を遣し

いと短きを取りしかば、飛伴太は長きを拿て、間の杉戸を開放ちつゝ、藪の中に跳入れば、現八も推續きて、件の男と對ひてをり。かくて一角を初として、衆皆其方にうち向へば、この時までも竊聞したる、船虫も物の隙より、勝負いかにと見る程に、且して飛伴太は、忽地ヤツと聲を被て、撃んとするを現八は、兩三刀受拵て、逡巡をしてければ、飛伴太得たりと踏入て、ふたゞび撃んとする處を、現八はやく引外して、左の肩尖丁と撃つ。さしも尖銳き大刀風に、飛伴太は苦と叫て、矢庭に仰反り倒れけり。現八は今この敵手の、眉間を撃ば撃べかりしを、倘撃殺すこともやとて、只その肩を撃しなり。飛伴太既に打倒されて、やうやくに身を起せば、はや立代る八黨東太、參るさふと呼びかけて、赤檻の木刀を、閃かしたる勢ひの、猛きを現八ものともせず、六七撃合しつゝ、ヲツと嘯て右の拳を、痠痺るゝばかり撃しかば、東太は持たる木刀を、三間ばかり反飛されて、怯むを現八衝とよせて、左手に襟上搔抓み、力を究めて投たりける、勇士の手煉目覺しく、東太は腰を覺らして、震時は起も得ざりけり。この者共が再度の不覺に、齊一漂立渡太郎、團吾も俱に作法を紊して、兩人右より左より、只陽燄の閃くごとく、透間もなく撃木刀を、現八も亦右に拵、左に拂て寄せつけず、三人の被撃刀音は、冬の深山に杓木燃る、斧鐵の響に異ならず。勝負も果し、と見る程に、現八は足を蜚して、團吾が膝を蹴と蹴て、返す刀に渡太郎が、腰股拂ふ早技に、兩人齊一筋斗りて、足空さまに輾轉び、四挺の盤を逆さまに植並しに似たりけり。既に四箇の塾生等は、皆直轡に負しかば、怵難たる籠山縁連、通候犬飼生。頻りに勝に乗給へば、及びがたしと思へども、負て恥辱を遣さんより、撃殺さるゝも勇士の本意也。誘眞劍にて勝負せん。その木刀は措給へ。と言語急しく呼かけて、野袴の稜結み、刀を引提て立向へば、現八莞爾とうち笑て、現勇しき所望の器械、その義は貴意に任し給へ。某は恨みもなき、人を害する心なければ、なほ木刀こそ相應しけれ。誘撃給へ。と聲がぬ膽勇、憎さも悪し、と縁連は、應も得せず身を斜りて、膝四五寸拔蕪る、脚を註し筆法の神詔、沈んでふたゞび引抜く刃を、左へ拂て引抜たり。縁連も亦驚かざる、勇がは驚く、聲を遣し

伴太、東太、團吾等にうち對ひて、諸君の懇望、辭するに由なく、おん大刀筋を受たりしに、殆感心仕りぬ。勝負は時に依るものなれば、必介意し給ふな。といふに四人は領くのみ、顔を背けつ、倭尻しつ、應ずるものなかりけり。登時あるじ一角は、裊を外して現八を、上座に請薦め、扇を披きて扇立、扇立つ、言語を改め、思ふに優たる犬飼ぬし、いにしへの八幡太郎、九郎判官なればとて、いかにしてその右に出べき。某病中ならざりせば、又おん敵手になるべきに、ならぬは幸ひならんのみ。總て己が力を料らて、負腹を立ものは、皆その器量の窄き所以也。弟子們にはこの年來、よくく、倣たりければ、竊に遺恨を含むもの、あるべうも候はねど、改めて又一獻酌ん。僮共とく銚子を替よ。といふに衆皆怒を歟て、又盃を巡らすにぞ、物の蔭なる船虫は、歎息しつ、退きける。畢竟現八が、こゝに武藝を顯して、又甚麼なる話説かある。そは次の巻に、解分るを聴ねかし。

南總里見八犬傳 第七輯 卷之二

南總里見八犬傳 第七輯 卷之二

東都 曲亭主人編次

第六十四回

現八單身にして衆惡と戦ふ
縁連牙二郎信道を逐ふ

却説赤岩一角は、縁連を首として、大約五名の塾生等の、兪現八に撃伏られしを、媚て恚る氣色なく、又現八を歎符す程に、夜はやうやくに深初て、既に人定になりしかば、客もあるも酔ぬはなし。そが中に現八は、素より酒量に乏しとて、しばく、盃を推辭にければ、一角やうやくその意に任して、童扈従を呼近づけ、盃盤を納さして、又如此々々と分付れば、こゝろ得果て退きつ。客房に屏風建遮らし、現八が臥簾を儲て、云々と報しかば、一角これをうち聞て、犬飼ぬし、さぞ疲勞給ひけめ、とく退りて睡り給へ。籠山生は家族に同じ、牙二郎が子舎に至りて、共侶に寝まるもよけん。愚老も臥房に入るべきに。といふに現八席をくだちて、あるじ并に衆人に、よろこびを述別を告て、童扈従に引れつ、はや客房にぞ退きける。牙二郎これを目送りて、父のほとりへ髀を進め、大人はなどてや心弱く、嚮に某を禁め給ひたる。京より西はしらねども、關東にては武藝をもて、大人の右に出るもの、ありとしも覺ぬに、高弟達の現八に、撃伏するを外に見て、還て彼奴を譽給ひしは、抑甚麼なるこゝろぞや。是より當家の武名降らば、弟子も亦必離れん、いと朽をしき事にこそ。と敦圍悍く怨ずれば、一角呵々とうち笑ひて、そは和主等が知ることならず。みづからよく思へかし。彼現八が武勇藝術、籠山だにも捷こと難かり。然るを和主が手を出して、いよく後れをとることあらば、吾も亦見てはをられず、推捕籠て撃に至らば、縦現八を撃捕とも、こゝにも傷

人多かるべし。われはこの義をおもふをもて、些も色に顯さず、感服したる體にもてなし、由勵さして熟睡を窺ひ、結果れば人も得しらず。こゝらに心つかずや。といふに牙二郎有理と嘯りて、又いふよしもなかりけり。登時船虫は、屏風の背より立出て、良人の身邊に進み近づき、妾も嚮には腹のみ立て、抓みも蒐まほしかりしを、わが袂の深念の格別なる、さばかり手輕き事はなし。皆虚々してをることかは、撃捕る準備をし給はずや。といはれて縁連眼を睜りて、縦宿鳥を刺とも、彼奴が武藝は侮りがたし。倘撃漏すことあらば、後悔その詮なかるべし。出口々々に一兩人、埋伏せんこと肝要ならん。といふに飛伴太撥太郎、東太團吾も兪領きて、爾らば臥房の出口には、白樽などを倚かけ措て、走り出んとするときに、跌き軋ぶを撃こそよけれ。といへば船虫含笑で、その手配はさることながら、なほ漏さじ、と謀らんには、庭にも繩を引渡して、二重も三重も準備をよくせば、檻の獸籠の鳥、逃とも脱しはせじといふ、助言に牙二郎勇立て、然らば丑三過る比、潜びよりて寝首を捕ん敷、火事ありと呼りて、慌忙起きんとするを、總蒐りにして撃べき敷。と問ふを一角聞あへず、閑暇無事の時ならば、寝首を捕らるゝこともあらめ、渠は今大敵の中にあり。いかてかは熟睡をすべき。又火事ありと呼らんに、其聲隣へ聞えなば、四隣の人々走聚ふて、妨になることもあるべし。所詮五人も十人も、三四隔に捕籠て、盜賊入りぬ、と呼懸々々、起んとするを撃こそよけれ。然はあらずや。と誇貌に、左右を乞と見かへれば、衆皆齊一感服したる、そが中に縁連は、うち含笑つゝ聲を落めて、仰寔に理り也。某が腹心の若黨に、尾江内といふものあり。又奴隷に墓内といふものあり。兩人俱に心悍くて、さる所行を歡べり。是回も共に將て來たれば、渠等を加勢にし給へかし。かゝれば身方八人あり。現八なほも武勇に關て、三面六臂になりぬとも、撃漏すことあるべからず。かくて彼奴を撃捕給はば、首級を某に給へかし。白井の城へ齎して、主君長尾殿にまうさんには、道中なる某の驛にて、強盗數人うち入りて、御大刀を奪ふて走り出るを、某が透さず追駈て、馳立たる一人を、先聲に擊つ候へども、先なるは逃して、ふたゝび追へども、某に及ばず。驛に

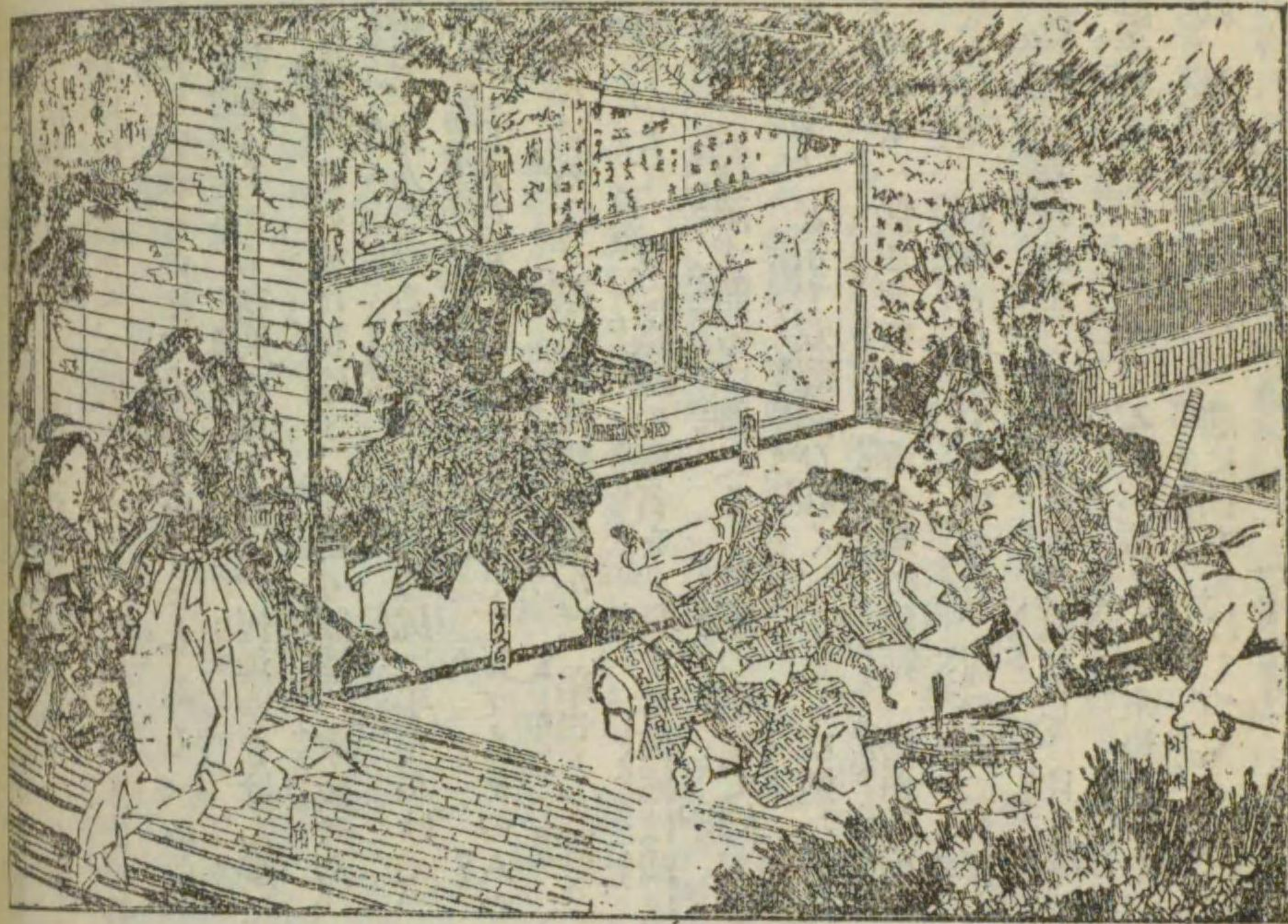
御大刀を失ひては、まうし懸べきよしのなけれど、縁連なき計せにて、賊の首級を獲たり、と聞えあけ、事らはば、縦罪科を被るとも、五十日罰百日で許さるべし。この譏はいかゞ。と聾けば、衆皆亦復感佩して、龍山ぬし説得て妙也。爾らば左せん右せよ。と迭に聾く手配の、商量に小夜深にけり。有然程に犬飼現八は、客房に赴て、既に臥簾に入りつゝも、肚裡に思ふやう、さしも赤岩一角は、頼切たる弟子等の、遺なくわれに撃伏られしを、聊怒る氣色もなく、いよくわれも款待たる、その奸詐測るべからず。且渠が左の眼の、矢傷は昨宵庚申山にて、正しくわれに射られしを、童蒙に射を教るとて、不憶く箭の飛返りて、眼を傷られたりとかいへるは、その本性を妻にも子にも、隠すが所以の食言也。さはさりながらかの折に、彼奴はいまだわれを認めず、仇なる由を知らねども、昨宵眞の一角ぬしの、冤鬼の告たる事と、是彼共に物合す。亦何をか疑ふべき。なほよく謀りて便宜を窺ひ、老妖怪を退治して、赤岩犬村親子の爲に、この年來の冤を釋すは、許諾し事もその甲斐なし。さばれ渠には羽翼多かり。且角太郎は孝心篤くて、彼妖怪を妖怪と、知らて眞の親とし思へば、相譚敵となすこと難かり。いかにすべき、と肚に問ひ、腹に答て左に右に、心おちめぬ旅宿の床に、目睡もせて在けるを、夜はやうやくに深く隨に、頻りに睡眠を催せば、なほ睡らじと思ひつゝ、何の程にか目睡けん、起臥するにも身を放さぬ、護身囊の中なりける、彼信の字の瑞玉の碎る如き音せしに、驚き覺て眼を開けば、枕邊なる行燈は、はや滅果て黒白もわかず、護身囊を表より撈るに、玉は碎けしごとくならねば、原來夢にてありける敷、と思ふに曾のうち騒げば、心いよく安からず。臥しつゝつらく尋思をするに、彼縁連等が執念深く恨て、今宵竊に害せん、と謀れるよしをしらせんとて、身に添ふ玉の戛然と、音して眠りを覺せし敷。こゝにて物を思はんより、密と立出て見ばやとて、身を起し衣を襲て、縁頼の障子を開るに、怪むべし障子の外方に、物多く並べ累ねて、こゝより走り出んとするとき、跌せんと操組たり、と思ふものから些も騒がず、ふたゝび徐かに臥簾にかへりて、袱包を腰に著け、大小の兩刀を、髻に帶つゝ、搔撈々々、又縁頼のかたに

に走り出て、はやくその戸を引閉るに、外面に大きな、葛石のありしかば、血刀投捨雙方をかけて、手ばやく起すかの石を、引戸へ楚と倚かけたり。これにより裡面なるものは、推續きて追んとするに、推せども引けども戸のひらかねば、こは何處いかに、と焦燥つのみ。縁連さへに戸口に聚ふて、ふたゝび捫擇したりけり。有然程に現八は、捨たる刀をとり揚て、血を押し拭ひ、斂めて、走り去らんとする程に、曉がたの天ふたゝび曇りて、其處ともわかず野干玉の、路いと暗くなりしかば、岐道多き刈田の畔に、投て往方を定めかねしに、忽然として一團の、陰火目前に燃出つゝ、先に立つゝ現八を、導くごとく隠々と、閃きてゆく程に、現八これに便りを得て、件の鬼燐を心當に、返壁を投て走りけり。されば又、牙二郎逸東太、團吾東太等は、思ひがけなく小門より、走り出たる現八を、透さず追んとしつれども、外面よりいと大きな、石を倚かけ措れしかば、開んとするにその戸動かず。送に罵り推重りて、戸爪戸尻に諸手を掛け、諸聲合して推外して、倒れかゝりし牙二郎は、石に小鼻を磨傷りて、霎時は起も得ざりしを、人余咄とち笑へば、向腹立ても今こゝに、いひ争ん暇なければ、稍身を起し塵うち拂ふて、われに續けといふ儘に、はや現八を追蒐れば、縁連も亦後れじとて、走り出たる背後より、赤岩が若黨奴隸と、籠山が從者等は、船虫が指彈によりて、後走に走り來つ、主の後方に引添んとて、喘々ぞ追ふ程に、團吾東太は留りて、尙片息なる潑太郎と、飛伴太を肩に引被て、且客房まで退きける。かゝりし程に、牙二郎は、縁連と共に、敵の往方を認めねども、足に信して追ふ程に、はや幾十町か走りけん、天はやうやくに明わたる、横雲の間よりして、前面遙に眺れば、現八は頻りに走りて、相距ること七八町、誰が連城を照しけん、踏も迷はて返壁なる、庵の中に入りしかば、縁連見つゝ歡びて、今あの庵へ走り入りたる、背影は疑ひもなき、現八に極まり。彼處は何といふ里やらん、菴主をしりてやをはする。と問へば牙二郎含笑て、彼處は大村の野盡處にて、返壁と字せり。菴主は則わが兄なる、角太郎にこそあんなれ。大村なる里人等が、建たる庵と聞しのみ、まだ一層もゆきては見ねど、既に彼處へ追蒐しては、袋の物を取より易かり。ゆきてはいはん、右せ

ん。といと高やかに權調つゝ、いよゝ歩を早めける。有然程に、返壁なる傾太郎は、鐵衣と共に、現八がうへをのみ、いかに／＼と思ひ不樂で、その通宵寐も寢られず、詰且は未明に起て、鐵衣をいそがしつ、朝の炊に柴折燒て、をさ／＼その還るを俟に、僅に旭の出る比、現八は喘々、折戸推開けかへり來つる、爲體の驟しく、衣に鮮血の塗れしは、絆ありけり、と驚き立たる、夫婦は右より左より、犬飼ぬしいかにぞや。彼處の安危心もとなし。有けんよしを聞まほし。といふに現八息吻あへず、赤岩の宿所にて熟生們と試撃の趣、且その怨を復さんとて、件の徒黨凡八名、盜賊入りぬと呼りて、現八を撃んとしたる、その絆の爲體、勝負の進退如此々々と、言語急しく報告すれば、あるじ夫婦は又驚き、且感嘆して已ざりしを、現八又報るやう、兵は寔に凶器にて、戦ひの間是非に及ばず。某かの折二人を斫伏せ、又二人に瘡を負したり。然ども大人一角殿は、その處へ出給はず、牙二郎ぬしも恙なし。又上毛白井の來客に、籠山逸東太縁連といふものあり。原是熟生なりしといへば、主人も豫て相識ならん。彼人頻りに箭を射かけしを、某辛く防ぎ留めて、箇様々々に謀りつゝ、竟に外面に脱れ出て、路を求て走る程に、天結陰りてゆくてをわかず。時に一團の燐火燃出て、某を導きしが、天の明る比消失にき。これらの由を報んとて、立かへりては候へども、程もなく追手蒐りてこの菴中を鬧すべし。わが身は今さら惜むに足らず。主人夫婦を連係せば、後悔すとも及んや。姑く餘毒を避てこそ、又再會を料るべけれ。暇まうす。といひかけて、立上らんとしてけるを、角太郎も鐵衣も、慌忙推禁めて、こは何事をいはるゝやらん。刎頸の交りは、憂樂禍福を俱にこそせめ、よしや赤岩より追入蒐りて、家捜せんとして闕くとも、某かくてあらん限り、阿容々々として遞與さんや。方便を盡して、そがうへにも、脱れがたくば俱に死ん。要なきことな宣ひそ。と言語尖く怨すれば、鐵衣も亦慰めて、俺們夫婦の爲にとて、赴き給ひし赤岩にて、うたてや冤をいひかけられて、萬死を出て一生を、保ちてかへり來給ひしを、又何處へか遣らるべき。とにもかくにもわが所天の、いひつるよしに任し給へ。と夫婦齊一禁むれば、現八只管感嘆し

て、爾らば主人はいかにして、こゝに追人を俟給ふぞ。と問ふを角太郎聞あへず、幾間もあらぬ草庵にて、この儘在らんは無謀に似たり。最窮屈にはあるべけれど、姑く戸棚へ躲れ給へ。是頼朝の伏木に隠れ、漢の高祖の野中の井に、敵を避たる例に同じ。誘とくく。といそがせば、現入竟に推辭に由なく、袱包を著たる儘に、刀を引提身を起して、家庵に鄰る戸棚の中へ、左手をかけてうち登れば、角太郎も立よりて、倉戸閉て、追來る人の、ありもやする、と俟程に、蹇然として走著たる、赤岩牙二郎、籠山縁連、若黨奴隷を後に立して、柴門窄しと込入て、呼門もせず縁頼に、足踏かけてうち登れば、角太郎は戒刀を、腰に跨へ出迎へて、こは珍し牙二郎、籠山氏とつれ立て、朝霧わけてはるくくと、訪來られしは故もやある。と問へば牙二郎冷笑て、兄弟牆に闘がねども、親の勘當受たる兄貴は、鄙語にいふ他人の權輿、胡越の如くなりたるを、訪はて叶はぬ這回の緊要。とく兪兒を出し給へ。といはせもあへず角太郎は、其方へ膝を推向て、こゝろ得がたき兪兒呼はり。出せといはるゝ覺はあらず。といへば牙二郎項を伸して、又阿々とうち笑ひ、否、宜ふな隠し給ふな。跟より人の來るともしらで、こゝの柴門を推開て、裡面へ入りしを遙に見たり。益なき口を嚼んより、推出して遞與給はゞ、異母でも兄弟の、好みに阿爺へ勘當の、勸解して取する法もあらん。強情張らば他人扱ひ、用捨は得せず、いかにぞや。と聲高やかに詰問ふを、縁連霎時。と推禁め、角太郎にうち對ひて、絶て久しき犬村ぬし、某這回當地に來つるは、主君長尾殿の仰を稟て、村雨丸に相似たる、短刀の鑿定を、赤岩大人に請ん爲、そを携へて赤岩の、宿所に逗留したりしに、唯宿所に宿りを討めし、旅客犬飼現入が、竊略て走り出るを、某並に熟生達、牙二郎ぬしと俱に入名、推捕籠て撃んとせしに、彼現入は手煨煉にて、某が從者なりし、尾江内墓内は命を隕し、熟生飛伴太潑太郎は、深痕を負ふて倒れたり。この故に現入を、撃漏しつゝ遺恨に堪ず、牙二郎ぬしと共侶に、なほ脱さじとて追蒐しに、天は明朝日の升る比、迦に見れば現入は、この菴中へ走り入たり。罪あるものを會殿前、桑門の習儀にて、是も非も分けぬ御ごころを、慈恵普賢と、思はれんが、兪兒に御懸せ

よといふ、僻が僻あることを聞かず。これらの理髪を激わきて、とく現入を逐與給へ。異謀に譬はゞ家扱しして、捕捕すは得こそ還らじ。深念を決めて應給へ。と臆しつ威す老狸、一穴なる牙二郎も返答遅し。と焦燥たり。然けれど、も角太郎は、騒きたる氣色もなく、籠山生の來歴話説は、虚實を奈何とするよしなけれど、兪盜戒は世尊の妙法、兪兒と知て舍職ものは、出家といふともあるべからず。有如之者件の現入が、この柴門へ入りたりとも、脱路多る野中の孤館、しかも夜明の比ならば、何地ゆきけん夢にもしらず。なほ又外を索ね給へ。といふに慄立縁連牙二郎、争ひ給ふな、その術は喫はず。論より證據、家扱せん。誘立給へ。と共侶に、奥へ進むを、さはさせじとて、引展して立塞る、良人を資る離衣も、紙戸の尻に手をかけて、そは聞わきなし。白屋の、裏も返さぬ下地壁、凌かねたる夜寒の床も、良人の爲には一城塚、搜して見てもその人の、をらずはいかにし給ふぞや。といふに角太郎微笑し、離衣微妙くいひけるよ。禁るに無禮を働かば、弟也とて許さんや。事を好みし昨宵の試撃、五人一撃伏られたる、怨を竊に復さんとて、世に盜賊の悪名を、負する伎倆は浅はかならん。といはれて駭く縁連牙二郎、驚としながら些も怯まず、問ふには落す語るに落たる、試撃の事まで知てをれば、舍職たるに疑ひなし。先踏入て引揚出さん。者共背門へ心をつけよ。と示す双聲勢ひ猛く、ふたゝび進むを角太郎、離衣も亦共侶に、前に遮り後に引つ、挑み争ふ兄弟夫婦、他人も一箇こき雑て、春の錦に秋筵、善悪邪正の抓織、組つ縦つ隠口の、はてしなれば縁連牙二郎、刀の柄に手をかけて、拔放さんとする折から、何の程にか昇もて來にけん、庭に二挺の轎子の、裡面より高く呼かけて、やをれ牙二郎慄りなせそ。逸東太も大人氣なし。且く等ね。と禁めたる、聲に驚く兩箇の悪棍、彼は正しく家尊の大人。什麼先生がいかにして、みづからこゝへ來給ひけん、思ひかけず。とばかりに、猛に衣紋搔繕ふて、舊の席に座を占れば、角太郎と離衣は、迭に面をあはしつゝ、そが儘出てぞ迎ける。當下赤岩一角は、綿の長絹長袴、腰に朱袴の兩刀も、四下を拂ふ荷物造りの、刀を引提て立出れば、次に居たる轎子の、戸をひらかして出るもの、是則船虫也。



(結を郎太角で雙太東逸郎二牙)

綾の袷衣緋の小袖、下に襲し白無垢も、尙巳の時なる揚
 袂の、所天を資て左手には、細小なる壺搔抱き、はや共
 侶に母屋に入りて、上座に著しかば、角太郎雛衣は、等
 しく怕り敬ふのみ、絆間かねてぞ畏る。そが中に牙二
 郎は、意氣揚々と親の身邊へ、髀を進め脇を張りて、こ
 は思ひかけざりき。大人も家母もうち揃ふて、勘當した
 る子の宿所へ、來ませしは所以もやある。こゝろ得がたく
 候。といへば又縁連も、先生は病中を、敷せ給ふこと
 もなく、よくこそはるゝ來給ひけれ。御眼瘡のおん疼
 痛は、いよゝたひらぎ給ひし敷。と問ふを一角見かへ
 りて、昨宵夜深に不慮の騒動、牙二郎は和殿と俱に、彼
 癖者を追蒐て、返璧のかたへ走りき、と告るものある
 により、絆の成敗心もとなく、病苦を忍びていて來れり。
 然るを、又船虫が路次の往還の覺束なしとて、迹を慕ふ
 てこれも亦、竹輿を蜚して今來たり。彼偷兒はいかにぞ
 や。と問れて歡ぶ縁連牙二郎、辭ひとしく、さう候。彼
 偷兒はこの草巻へ、走り入りしを認めにければ、逃さず

解あふて、合辭はすとの不陳すれども、問ふには落す語るに落る、言語の中に舍藏たる、儼は既に駈れたり。こゝろを
 もて某等は、家捜をせんといひしを、あるじ夫婦はなほ聽て、争ひ果しなき折から、大人の來ませしに憚りて、靈
 時穿鑿を寛うせり。願ふは大人のおん勢ひもて、彼偷兒をおし出さして、搦捕せ給はらば、あるじ夫婦は同類の、罪
 を免るゝ歡びあらん。この議を搦らせ給へかし。といへば一角歎息して、偷兒のこゝに入りしを、認めしといふも證
 據なく、又争ふて偷兒を、舍藏すといふも證據なし。角太郎はいぬる比より、こゝに離居してありとて、官府へ訴
 まうして、遠絶したるものにあらねば、今も則わが兒なり。角太はわが兒なるときは、雛衣も亦わが娘也。さる疑
 ひの解がたくば、はやく愚老に報てこそ、その弟たる禮に違はず、その舊友たる義にも稱ふを、血氣に乗して罵り争
 ひ、迭に鑢を削るに及ばず、理ありといふとも科は免れず。寔に疎忽といはまくのみ。彼偷兒の有無は、愚老が代り
 て穿鑿せん。別に所用もあるなれば、籠山生は赤岩の、宿所へ退りて俟給へ。噫無益しや。と咤けば、牙二郎はこの
 幾條に、窘められて再得はず、しばしば傍を見かへれば、縁連差たる面色にて、老先生の教諭の趣、感心少から
 ねども、何とやらん角太どのを、鼻眞せ給ふごとく聞えて、某安心仕らず。彼短刀の紛失したるに、偷兒だにも捕
 得ずして、還らば主君の咎めにあはん。この義を憐み給へかし。といふを船虫うち消して、そはわが所天の膺三寸に、
 斂められての事なれば、おん身あしかれとは謀り給はじ。とく赤岩へ退きて、吉左右を俟給へかし。と諭せば縁連推
 辭に由なく、爾らば貴教に従ひまつりて、某ははや退りてん。かへすくも件の一議を、憑み奉る。と期を推して、
 一角夫婦牙二郎等に、別を告て外面へ、出て從者をいそがしつ、ゆくこと纏に一町あまり、從者等を見かへりて、簡
 様筒様と聳けば、從者等はこゝろを得て、そが儘に立別れつゝ、赤岩のかたに趣くを、縁連雲時目送りつ、ひとり竊
 に立かへりて、庵の庭なる袖牆の、蔭に躲るゝ狐疑邪猜、裡面のやうをぞ窺ひける。

角太郎雛衣に、取かはしたる盃の、數も巡りて僉歡ひの、一席に二夫婦、三組偏提とり納め、紐引結ぶ四手製、五人寄てむつまじき、笑坪の會ぞ樂しげなる。當下一角は、只管款待す角太郎と、雛衣を見かへりて、言改めていふにはあらねど、老ては物に怵、情なく、むじんなる事をいひもせん。さばれ孝行を盡さんと、目今いひし和殿也。雛衣も何にまれ、親のいふことを背きはせじ。さりとも背く敷、いかにぞや。と笑つゝ問ふを角太郎、雛衣も聞あへず、そは宣はするまでもなし。理なき事を仰るとも、身に相應しき事ならば、力を竭し骨を折り、成し果んとこそ思ひはべれ。いかてか背きまつらんや。と夫婦齊一諾ひたる、回答に一角領きて、背かじといはるゝ證人には、船虫牙二郎等もこゝにあり。且試にうち出さん。殊に無心の所望なれども、秘藏の物を給へかし。といはれて角太郎こゝろを得ず。某一旦遁世の、志ありしその日より、金銀珠玉も懸念せざれば、秘藏の物は候はず。といへば一角頭を掉りて、否わが所望は然るものならず。されば古歌にも

白かねも黄金も玉も何せんに子にます寶世にあらめやは

父が所望はこの意を以す。秘藏といひしは雛衣が、胎内にはや五箇月の、子をとりに出して給へかし。といふに駭く角太郎、雛衣は只呆れ果て、顔つく／＼とうち目成れば、船虫は携來たる、壺とり揚て犬村夫婦の、間へ直と推居たり。當下一角儼然として、縁由を具に告ねば、驚きもせん、疑ひもせん。已ことを得ぬ所望の願末、わが兒も娘も聞ねかし。われ一昨の宵愈て、左の眼を傷りしかば、醫師を招きて診せけるに、一箇の名醫誨ていふやう、この眼瘡には妙藥あり。百年土中に埋れし、木天蓼の眞の細末と、四箇月已上の胎内なる、子の生胎とその母の、心の臟の血を取て、彼細末に煉合して、屢これを服すれば、刺破られたる目子の、再故のごとくに愈て、物を見ること鮮明ならん。もし胎内の子を獲ずば、件の木天蓼一種を、飲むとも立地に疼痛去りて、七日にしてその痼癒ん。只見ることを得ざるのみ、といはれにけれど、こゝろなかり、いと憂がたき難なれば、娘も思ひ察たるに、さのふ不測に彼木天蓼の、昔年あまり出の帳に、埋れけんと思ゆる良材、既にはや手に入りぬ。且試に細末にして、昨宵しばしば用ひしかば、嗚がたには疼痛を覺ず、瘡も大かた乾きたり。かゝる經驗のあるなれば、況てその餘の二種を、加味して用ひばわが眼の、故のごとくにならん事、絶て疑ひなきもの也。親の爲には命だも、惜まじといひし孝行に、甘へて頼む藥種の調達、むかし平の貞盛ぬしは、その身の病痼の良藥に、その子の娘の胎内なる、子を求たる例もあり。この事は今昔とか、いへる草子に見えたり、と囊にある人のいへりしを、不仁の所行ぞと思ひたるも、けふはわがうへわが娘の、うへになりけるうたてさよ。飽まで孝ある子共ならずは、いふともいかてか承引べき。推辭はせじ、と豫てより、思へばいと不便にこそ。といひつゝ拭ふ虚泪を見まねに船虫鼻うちかみて、喃角太郎よ、雛衣よ、凡生とし活る物の、命を惜ぬ例はなきに、その胎内の子も母も、爹々公の病痼の良藥に、なるはこよなき孝行節義。廿四孝と名にしおふ、唐山人も及んや。甚麼なる過世の業報にて、親子と生れ娘とはなりけん、痛ましきよ。と聲立て、かきも口説ば牙二郎も、目をしばたゝきて、喃母公、さのみ大きな泣給ひそ。小の虫を殺すとも、大の虫を助けよといふ、諺もあるなれば、兄貴も嫂御もよく諺めて、歡でこそ給はんを、泣立られなば卻に、心弱くぞなりぬべき。涙を斂め給ひね。と慰められて船虫は、頻りに臉を押し拭ふ、親子三人の虚愁嘆に、窺らるゝ角太郎は、頭を低手を叉きて、且く應をせざりしを、天うち仰ぎつ數回、嗟嘆に聲を曇らして、推辭に由なき大人の御所望、只某がうへのみならば、身を八創にせらるゝとも、惜むべきにあらねども、雛衣はわが養家の嫡女、特に義理ある妻なるに、懐胎もまだ定かならず、倘血塊の類ならば、その功もなく狗死ならん。その義は許させ給へかし。と推辭を一角聞あへず、眼を腫し聲ふり立て、さはいはせじ角太郎。親の爲には何事まれ、背じといひしその座も去らず、時も移らぬ今の間に、許諾し事を忘れし敷。と敦閑猛く詰らるゝ、角太郎は脾を進めて、その義は忘れ候はねども、仰も事によるべきもの敷。一旦傷れしおん目の薬に、娘と孫とを殺し給はゞ、誰か不仁といはざるべき。且雛衣が懐胎は、爾るや否や

となく侍れども、然りとて妾も武士の妻、武士の女兒に生れし申斐に、後れじとこそ思ひ侍れ。爹爹公母御前二はし
 ら、世を松竹と共侶に、御壽命長くをはしませ。名残は盡ぬわが所天には、思ひあまりて卻に、いひ遣すべくもあ
 らざりき、こゝろを猜し給へかし。さらば。と許り抜放つ、刃の光りに角太郎は、そなたへ膝を推向て、うちも目成
 れば降そぐ、膝に涙の玉あられ、胸は板屋の妻夫、迭に顔を見あはして、共に無言の告別。とくくせずや。と一
 角が、焦燥聲は冥官の、使に似たる阿鼻泥黎、外に弘誓の船虫も、牙二郎も亦とくく。と死天を促す無常の首
 途、後れはせじ。と雛衣が、はや握持つかの間に、晃したる刃の電光、刀尖深く乳の下へ、ぐさと衝立て引繰ら
 せば、颯と漬る鮮血と共に、顯れ出る一箇の靈玉、勢ひさながら鳥銃の、火蓋を切て放せし如く、前面に坐したる
 一角が、鳩尾骨殿と打碎けば、苦と一聲叫も果す、手足を張てぞ仆れける。緋の不測に船虫牙二郎、驚きながら見か
 へりて、こはわが所天は撃れ給ひぬ。大人は緋絶給ひし敷。悖逆不孝の角太郎、妻雛衣と謀し合して、親を害する人
 面獸心、其處な動きそ。と呼かけて、撃んと進む牙二郎を、資て引添ふ船虫も、等しく懷劍抜閃かして、面も振ら
 ず殺て蒐れば、角太郎は戒刀を、鞋ながらに握持て、受流しうち拂ひ、標り給ふないふ事あり。某夫婦いかにし
 て、親を害す悪心あらん。やよ等給へ。と禁めても、些も聴ぬ無法の大刀風、禦ぐのみなる角太郎は、右手の臂を一
 寸許、かすり瘻負つゝ右に柱え、左に當る一期の重厄、最も危く見えたる折から、戸棚の紙戸の間より、打出す鉄鏡
 に、牙二郎は乳の下三寸、背脇までにうち申れて、叫苦と叫ぶ聲と共に、刃を捨てぞ仆れける。程もあらず現
 八は、倉戸殿と蹴放ちて、棚より撞と飛下れば、船虫いよ／＼驚嚇で、逃んとするを逸しもやらず、現八はやく走
 懸りて、利手を捕て引被ぎ、向ふさまに投しかば、船虫は火盆の棧に、暗を大きく打惱されて、灰に塗れて倒れけり。
 角太郎はこの爲體に、且駭き且怒りて、無益しき大飼現八。人も頼ぬ助大刀は、われを不幸に陥さん爲敷。われ弟
 と親母を害して、身を脱るゝものならんや。交遊の妻も親族の、想には易がたし。とくく。船虫を流せよ。と教諭

く咎咎かけ、戒刀懸りと引被て、船を揺りてふり擲る、刃の下を現八は、驚きつゝ捕籠る、御太郎が二の腕より、船
 る、鮮血を乞と見て、遮しく懐より、出す鬮に、響る鮮血の、吸入如く塗著て、瓦に沃ぐ水に等しく、只一滴
 も鬮より、下に溢れぬ親子の明證、奇特に勇む現八は、思はず聲をふり立て、標り給ふな犬村ぬし、打仆されし一
 角は、御邊の眞の親ならず、この鬮をこそ眞の亡父、赤岩一角武遠大人の、白骨なるをしらざるや。今面りに骨と
 血と、ひとつに凝りしは親子の徴据。告ぐべき事の多かるに、怒を刃と俱に斂めて、よく聞れよ。と突放せば、角太
 郎は思ひがけなき、奇特を見つゝ疑ひの、なほ解ねども勢ひ折けて、折布く膝に戒刀の、柄押立て由断せず。こゝろ
 得がたし大飼ぬし。彼處に仆れしわが父を、父ならずといはるゝ事、いかなる所以ぞ、聞まほし。と問へば現八歎息
 して、儻稀なる孝子烈女も、妖怪の爲に欺れて、うちも累る厄難に、雛衣どのゝ自殺により、腹の中より顯れたる、
 彼靈玉に假一角の、撃仆されしは天の冥罰。彼もの御邊の父ならねば、牙二郎も亦弟にあらず。廻妖怪の胤にし
 て、船虫は妖怪に、列添ふ妻といふべきのみ。緋の來歴一朝に、盡すべうはあらねども、繁きを爰て所要を摘ん。
 抑一昨哺時に、某網亭を過るとして、里の茶店に憩ひしに、茶店のあるじ鴟平が、問ずがたりに御邊親子の、噂を
 大抵聞得たり。かくて茶店を走り出て、神子内のあなたなる、嶺村を投ていそぐ程に、思はず途に日は暮て、天さへ
 俄頃にか曇る、路次に迷ふて其處ともわかねば、行べきかたに得ゆかずして、庚申山にありといふ、胎内蟹の邊に來
 にけり。網亭より携たる、弓と箭を身の護にして、こゝに一夜を曉す程に、丑三にやと思ふ比、東のかたより忽然
 と、怪しきものゝ近づき來つ。その本體を見ん爲に、弓箭手挟み老たる松に、攀登りつゝ窺へば、その面猫に類せる
 異人、野裝束して馬に乗たる、その馬も亦異形にして、自然木の木馬の如し。左右に従ふ兩箇の従者、いづれも夜叉
 に似たりけり。彼馬上なる怪物の、眼光りて四下を照らせば、某これに便りを得て、弓に箭刺ふて穩固め、標と發
 てば愈たず、彼怪物の大將の、左の眼に丁と立つ。窮所なれば堪ずやありけん、馬より撞と落けるを、従ふ兩箇の怪

物等が、傷者を肩に引被て、何地ともなく逃亡たり。さばれ件の怪物が、なほ等類を駆催して、來ることあらば當りがたし、と尋思をしつゝ、櫛抄を下りて、庚申山に攀登るに、第二の石橋を渡り果て、前路に岩窟あり。そが中に、いと大きな窟の中に、火を焼てあたる異人の、某を呼近づけて、不測の値偶を歡れぬる、語次に某は彼妖怪の事を告て、その本性を語しに、その人答て、馬上なりし妖怪は、むかしよりこの山の、麓に棲たる山猫也。又相從ふ若黨二人は、山の神と土地神也。通力山猫に及ばねば、神ながらも彼怪物に、既捕れて扈從せり、實に歸伏せしものならねば、その瘻を負ひしを幸ひにして、扶掖つゝ逃亡たり。この他兩箇の從類あり。そは老たる猫と貂也。もしこのものども從ひ來なば、仇を復さんとこそ揣らめ。又彼馬は木精也。これも亦山猫の、猛き勢ひに威服せられて、役するゝものになん。件の猫はこの年來、當國赤岩の郷士なりし、赤岩一角武遠が、形貌に變じ濟して、今もなほ彼村に在り。さばれこの山を景慕して、折々夜半に來遊べり。今宵眼を射られしも、遊山に餘念なければ也。渠は神通無量にして、十里の外の事を知れり。然るを今宵眼前なる、和殿を知らて、瘻を負ひしは、こも不用意に依て也、と辭詳に告られし。某頻りに、駭嘆して、爾らば御邊は何ものぞ、と問ふに彼人又答て、われは是陽人ならず。赤岩一角武遠が亡魂の、假に見れ出たる也。今茲より十あまり、六七年さきつ冬、十月の比なりき。某發起するよしありて、昔より人のかよはぬ、庚申山に登らんとて、門人纔に三四名を將て、未明より登陟する程に、第二の石橋の邊に至り、怕れてよく渡るものなし。この故に、某一人橋を渡りて、この岩窟の邊に來つ。時に山風猛に發りて、沙石に眼を撲れしかば、弓投捨て目を拭ひたる、後に窺ふ件の山猫、驀直に走り蒐りて、引倒さんとする程に、腰刀を引抜て、吭を刺んとしつれども、腕、狂ふて山猫の、前足を劈しに、淺瘻なれば物ともせず、勢ひ籠て某が、吭に吸着しかば、靈時もありて離れし、死骸を岩窟に引入れて、穴を啖ひ骨を遺し、體て某が衣裳を被て、某が大刀を佩き、相繼言語進出まで、よく某が腕に懸して、如此々と欺詐りつ、次の日赤岩にかへ

り來にければ、門人里人いへばさらせ、後妻意井すら欺られて、一毫も疑ふものなし。かくてその次の年、意井が腹に男兒産れて、牙二郎と名づけたり。是よりして假一角は、某が見の角太郎を、憎むこと甚しく、日毎の呵責間斷なければ、外伯父なりける、犬村の郷士、犬村蟹守儀清夫婦、角太郎を憐みて、養ひとりて教導き、近曾獨女なる、雛衣もて妻したり。是より先に後妻意井は、妖邪に精氣を吸耗れて、病こと久しうして身まかりぬ。かゝりしかば假一角は、嬖妾をのみ物しつゝ、近曾來たる嬖妾の、船虫といふものを、後妻に執立たり。彼船虫は心ざま、邪智奸惡の淫婦なれば、同氣かならず相求るにや、妖邪に觸ても恙なし。又犬村なる蟹守夫婦は、うち續きて世を逝りしかば、遺財田園を利せん爲に、船虫が欺詐りて、角太夫婦を召とりつ、筒様々々の口舌起りて、雛衣は離別せられ、角太郎も亦追出されて、今は返壁なる庵にあり。假一角は幾回となく、角太郎を害せんと思ふこと大かたならねど、角太郎は身を護る、禮字自生の靈玉あり、身に又如此の恙さへあれば、僅に害を脱るゝのみ。その危きこと雞蛋を累ねたるに異ならず。和殿返壁に赴きて、角太郎に對面して、渠を資けてわが爲に、假一角等を擊果して、冤を雪め給へかし、といとも哀れに頼れし。某感涙やる方もなく、御邊かくまで靈あれば、枕に立夢に見えて、辭の趣云々と、などてその子に告ざりし、と語りければ尊父の靈魂、いと恥たる面色にて、さればとよその事なれ。後妻意井が在し比より、如此思はぬにあらねども、妻もわが兒も只管に、假一角を眞の良人、眞の父ぞと思ひをれるに、よしや夢に入て告るとも、いかでか實事と思ふべき、只疑ひを起すのみ、彼等はいよく危うからん、と深念をしつゝ黙止たり。和殿返壁に赴きて、角太郎に對面すると、これらのよしを且くいはて、筒様々々に談し給へ。眞偽やうやく顯るゝとき、角太郎が迷ひを解く、よすがには短刀あり。これは是當初、彼山猫が略遣れて、この岩窟へ残し置たる、某が短刀なり。よりて今に秘藏せり。しかれども角太郎は、この短刀を認らずして、なほも疑ひ解がたくば、わが觸腰こゝにあり。彼が鮮血をこれに灑がば、親子の微据分明ならん。只顧憑むとかき口説て、觸腰と

短刀を遞與されたり。かくてその曉に、立別れんとしつるとき、靈魂四言十四句の、讖詞を吟じて示されたり。某記憶したれども、その折には解しがたかりしを、今さら思へば的如として、當らずといふことなし。さればその詞に、相遺講武相別誘、仇といふ起句あり。是則きのふ某こゝへ訪來て、御邊と武事を討論し、爾後又某は、赤岩へ赴きしを、牙二郎船虫、假一角すら、追ひつゝこゝへ來つるをいふ也。又その次に、越全露玉菊花謝秋といふ兩句は、雛衣どののうへをいへり。露玉は則禮字の靈玉、烈女これを全して、謝秋はその死をいふのみ。又その次に、再厄不釋、更問鬪體といふ二句あり、是目今の事にして、こゝに主客の再厄も、鬪體によりて安かり。又その次に、妖邪亡處、申山應遊といふ兩句あり。是は此、假一角の山猫亡びて、庚申山に妖邪絶たり。是より衆人登山を得つべし。又その次に、八犬具足、八犬未周、窮達有命、離合勿謀、南總雖遠、終歸一一流といふ六句あり。こはきのふ告たる義兄弟、犬塚、大川、犬山、犬田、犬江等五犬の人々、御邊と某と俱に七名、皆是安房の里見殿に、因縁あるをいへり。絆の濫觴を原るに、里見殿の息女伏姫君、一言の信を失はじとて、八房といふ犬に俱して、富山の奥に入り給ひつゝ、彼犬の氣を感じて、腹ふくよかになり給ひしを、懐胎にやと思ひ愁ひて、自殺せんとて覺期の折、里見の忠臣金碗大輔、彼八房を擊斃せし、鳥銃の鐵丸抜て、姫うへも瘡を負ひ給ひつゝ、みづから刃に伏し給ひし、その瘡口より白氣升起りて、八方へ散亂し、且役行者より、感得せられし水晶の、數珠の數とりの大玉八箇も、共に散亂して往方をしらず。件の玉には仁義禮智、忠信孝悌の八箇の文字の、自然に見ゆるものになん。かくて金碗生は出家しつ、件の玉を索んとて、抖擻行脚に年を歴たり。加旃里見の家臣、登崎十一郎照文も、主君の密意を稟奉りて、金碗入道の迹を慕ひ、智勇の賢士を募ん爲に、渠も諸國に遊歴して、金碗、大法師と共に、下總なる行徳に旅宿せし折、某等ゆくりなく、大照文に對面して、里見殿に因縁ある趣を感じせり、その因縁をいかにといはば、他門七名幼雅き時より、仁義禮智忠信孝悌の文字あらはれたる、靈玉を感得せり。靈玉は件に數珠

の、數とりの玉なること、文字によりて分明也。又時是のみならずして、吾黨七名は、各々その身の中に、牡丹に似たる痣ある事、彼八房の犬の毛色に、類せしを知るべきのみ。有如之者各々親はありとも、皆伏姫のおん子に等し。曩に安房へ件んとて、照文の勸にけれど、八人ンいまだ具足せざれば、推辭てその義に従はず。折から不慮の厄難起りて、大江親兵衛の往方を知らず。犬塚犬田某等は、大照文に相別れて、大川莊助と共に、上毛なる荒芽山に至りしとき、彼處にも亦災害起りて、犬山大塚犬田大川の四大士に別れしかば、索巡りてこの地に至れり。かゝれば智字の玉をもてる、一犬士なほあるべし。いまだ遇ふことを得ざるをもて、八犬未周、と彼詞句に示されたり。さばれ八犬具足して、安房に至りて里見家に仕るよしを示さんとて、南總雖遠、終歸一流の句あり。因縁かくの如くなれば、彼靈魂の頼みなくとも、某既に御邊をもて、犬士一人ンたらんを知らば、いかで死力を竭さんとて、絆のこゝに及べる也。よりに思ふに、あの山猫の、通力自由を得たりしも、彼靈玉に怖るゝ故に、年來御邊を害することかなはず。且昨宵弟子等が、某と試撃せし折、その身は病痾に假托て、某と試撃せず。夜深て又彼惡棍等が、某を害せんとしつる折、假一角は出ざりしも、わが懐中に信字の、靈玉あれば怕れしならん。然れども雛衣どのの、吞たる玉の腹中に、あるよしをのみ知らずして、懐胎なりと思ひつゝ、胎内の子を求るとて、その靈玉に撲仆されしは、是天罰の時節到來、その數こゝに竭たるならん。これらによりて又思ふに、縁連が携來つる短刀は、柄も輕も木天蓼にてありしかば、假一角が竊略て、藥劑に用ひながら、某を賊とし誣たり。木天蓼はなべての猫の、よく好むものにして、薄荷銅杓子の粉と共に、究めてこれ妙藥也。然るを醫師の云々と、いひしといへるは虚言ならん。但山猫と唱るものは、又是一種の妖獸にて、人家の猫と同じからず。その小犬に等しく、猛きこと虎に似たり。深山には罕にこれあり、好みて人家の小兒を竊て、啖ふことありとなん。況數百歳を歴たらんもの、通力變化さこそありけめ。かく逞しき妖怪の、脆く婦人に斃されしは、御邊夫婦の孝友貞烈、人に掛れしその徳その義を、神

明佛陀の憐 助けて、仇を復さし給へるならん。裕といひ恰といひ、唯痛しきは罽衣どの也。その心操賢にして、怨つこともなかりしを、良人に添ふ日の長からて、非命に終り給ふこと、唯薄命といふべき歟。名を揚げ良人を資けたる、貞烈末世に傳ふに及ばず、亦洪運といはれん歟。禍福は糾ふ繩の如し、誰か奇伏を前知すべき。抑これらの趣を、初より告ざりしは、御邊の信じたからんと、彼妖怪にはやく知られて、洩もやせんと思へば也、今こそ遞與す尊父の短刀、獨體と俱に受納め給へかし。といひかけて、像見の兩種をさしよすれば、角太郎は愕然と、初て夢の覺たるごとく、且驚き且恥て、遽しく戒刀の、鞋とり揚て斂たる、手首さへに戦くまでに、感涙さながら泉の如く、胸を拍胸を拊て、懷舊悲歎に堪ざりけり。

南總里見八犬傳 第七輯 卷之二 終

南總里見八犬傳 第七輯 卷之二

東都 曲亭 主人編次

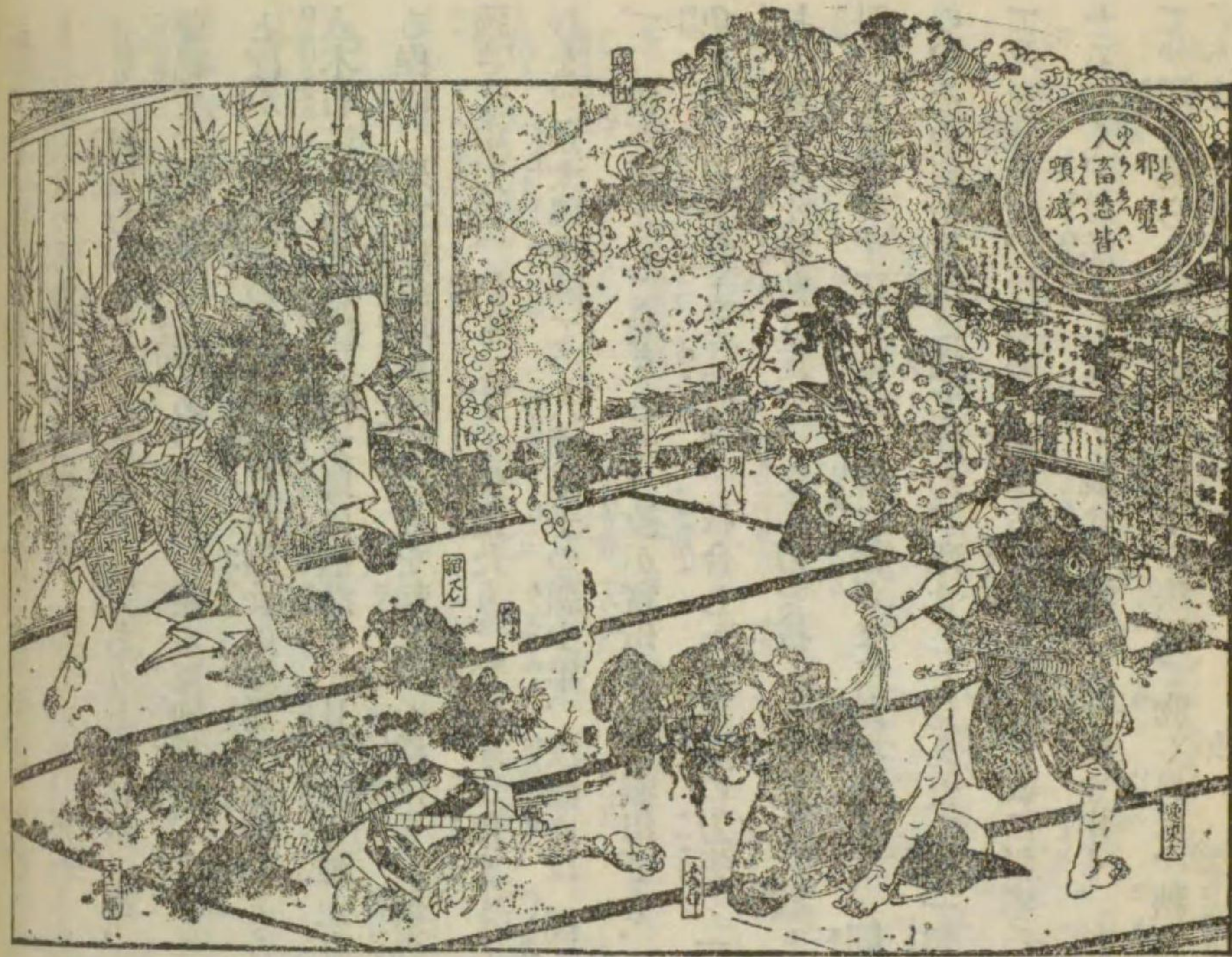
第六十六回

妖邪を斬て禮儀父の怨を雪む
毒婦を巧て縁連白井に還る

再説。大村角太郎禮儀は、信友犬飼現八が、長物語に初て聞得し、父の眞偽は鮮血の明證、疑ふべくもあらざれば、像見の獨體短刀を、受戴々々て、視る目に流るゝ千行の、涙をやうやく斂めても、後悔慚愧やる方もなく、歎息の外なかりしを、思ひかへして貌を改め、現八にうち對ひて、賢なるかな犬飼ぬし。御邊の忠告なかりせば、某悟るに由なくて、眞の父の横死を得しらず、なほ仇をもて親とし事へて、又只非人妖怪に、苦めらるゝのみならず、その毒惡の術にこそ死なめ。然るを今贈られし、父の白骨像見の短刀、これを見彼を思ふにも、和漢今昔例稀なる、一大奇異といふべきのみ。父の横死は、某が、四五歳の比なりしかば、實にこの短刀も、けふはじめて見る心地して、一毫だも認めねど、僅に遺る家の紋、魚葉牡丹は紫銅の、輪によりて分明也。いはんや亦某が、腋の鮮血を獨體に受て、早に疑ひを解れたる、緯の進退武藝の精妙、かの白刃の下にして、一言によく義を盡されし、その緯の用心を、今さらに思ひ合すれば、きのふ武藝を討論せられし、言次に何となく、親子久しく離別して、眞偽に疑ひあるものの、或はその血を合して試み、或は親の白骨に、子の血を灑ぎて知るといふ、俗説をいひ出で、和漢の出處を問れしに、某はさる心もつかず、梁書新唐書を引出て、云々と答にき。これ將後に疑念を釋する、方便と知られて、意味深かり。然るにてもこの年來、身は深山の土と化したる、冤を伸るに由なかりけん、亡父の怨を復せし事、

是皆御邊の賜ものにて、且雛衣が命を棄たる、不用意の資によれり。併、靈玉の、奇特は神速、至妙の天刑、一箇闕ても通力不測の、響を撃こと難かるべきに、神と人との助によれり。只わが不肖を顧れば、いと恥しくいと悲し。爾はあれども不憶、世の豪傑たる犬士の隊に、うちも入りぬる歡びあり。安房の里見に由あることさへ、亡父の御邊に示したる、詞句は奇にして、誠に當れり。死して靈ある事を思へば、然しも在世の志操、想像られて痛ましけれ。悔の八千遍百千遍、かき口説とも甲斐ぞなき。往事はこゝに逐ふべからず。憂苦に得堪ぬ諄言は、女々しきものと思はれん、許し給へ。とうち暗話で、家庶の紙戸を押しひらき、鬮を斂め、額つき拜みて、靈時祈念を凝したる、廻向了て退けば、現八は撲仆されたる、假一角等を見かへりて、大村主々々々、靈玉の威徳によりて、虎彪にもます妖猫の、鳩尾骨碎けて仆れしかども、怨の十々滅をとく刺ずは、甦生れることもやあらん。今さら猶豫すべからず。といふに角太郎嗟嘆して、某とてもその事を思はざるにあらねども、舊體を露さずと、親に似たらん儘なるを、頭搔捕らんは、快からず。大凡老たる妖怪の、死して本體を露さずとも、二十四時捨置ば、舊體になるとかいへげ、姑く時を俟んのみ。彼に就き此に就ても、遺憾きは雛衣也。乳の下を思ひの隨に、かき斬て伏たれば、又華陀蒼公在とても、救るべうはあらねども、狗斃ならぬ渠が大功、緋の趣如此々々と、報知せなば後の世の、迷ひもこゝに舞ぬべし。然はあらずや。といひかけて、妻の身邊へ立よれば、現八も亦感涙の、眼包を共に數瞬きて、寔に御邊は孝子也。妖怪は且捨措て、雛衣どのを呼活ん。さはとて體て客あるじが、傷人の右より左より、手をさし入れて引起せば、鮮血に塗れし雛衣は、大腸小腸溢れ出て、目も當がたき光景に、兩人聲を隠らして、やよ雛衣、ひなぎぬどの、心を髓にし給へかし。おん身が自殺の功德によりて、曩に認て吞たりし、靈玉瘡口より顯れ出て、親の冤家を撃仆しぬ。かゝれば腹の腫張たるも、亦彼玉の所以にして、懐胎にはあらざりき。やよ哺々。と呼活る、聲届きてや雛衣は、物く息も目も細やかに、やをら左右を見かへりて、甯わが所天よ、大歸ぬし歎。爾よりこれ後一はしらの、長...

がたりを、現八も夢ともわかて聞侍り。鬮の奇標に鬮公の、響を初めてしられし事、不思議といはんもあまりあり。大約人の命根の、長き短き等しからぬも、稟たる定數ありとか聞けば、十九の厄を一期にして、非命に終る幸なさも、何憾むべき良人の爲に、功ありといはるゝ事、妻たるものの面目なり。歡しや。とばかりに、いよ／＼細る聲絶て、纒に動く唇の、色さへ變る死知期時、左右に罵る唱名の、聲をちからに雛衣は、持る刃を投捨て、南腹とばかりに合掌の、心神紊れぬ烈女の終焉、忽地噫とうち俯せし、そが儘息は絶にけり。豫て期したることながら、人木石にあらざれば、角太郎は愀然と、且く立も難たりしを、現八慰め且獎して、雛衣が亡骸を、とり片よせんとする程に、牙二郎忽地息出て、身を起しつゝ、鏡を、搔抓み拔取りて、前面に立たる現八が、胸前望て投かへすを、現八透さず中刀の、柄もて丁と受留たり。登時牙二郎ます／＼怒りて、俊儉ながら刀をうち振り、敵手を擇まず撃んと進むを、角太郎推隔て、人面獸子の悪少年、汝嚮には罵つて、われを人面獸心など、いひしは廻わがうへならで、汝が事としらざるや。汝が實母はわが繼母でも、父は四足の人非人、胤を人倫に瀆したる、天の冥罰いかでか免れん。刃を受よと罵りて、抜合したる手煉の刀尖、一上一下と殺結べば、牙二郎は初度の巨瘡に、太刀筋取次の亂打、遂に刃を打盡されて、又中刀を抜んとせしを、抜しも果す角太郎が、閃かしたる刀の牙に、細頸丁と撃落せば、叫びもあへず牙二郎が、軀は後さまに踏地ろぎて、間近く俯たる假一角に、うち累りてぞ仆れける。物の響と恩愛の、その氣や自然に通じけん、死せしと見えたる假一角は、忽地嘔く聲震動して、障戸紙戸も裂るが如く、雙手を張て身を起せば、はじめに異なる奇怪の相貌。既に年老る山猫の、形體を露す面部の斑毛、眼の光は百煉の、鏡を並掛たる如く、影然として長く鋭き、髯は宛雪を串く、枯野の芒に異ならず。耳まで裂て凄じき、口は血を裝る盆に似て、牙を鳴らし爪を張り、四下を疾視て物く息は、狭霧となりて朦朧たる。庵の中は雲に入る、月下の宿歎と疑はる。角太郎は妖怪の、本體を見て些も騒がず、持たる血刀拭ふに隙なく、敵の左手に間近くよせて、姑く透を窺へば、後



(滅 頓 皆 悉 畜 人 魔 邪)

方に引添ふ現八も、俱に刃を抜欲めて、呼吸を掃る初大刀の進退、倘手に餘らば資んとて、等しく心を配りけり。この時までも虚滅したる、船虫は驚怖れて、其處に俯つゝをるに勝ねば、一ト膝抜きに膝退きて、外面投て逃出るを、角太郎も現八も、大敵既に前にあれば、後を見かへる暇なく、勝負をこゝに決せん、となほ近づくを睨へて、頻りに哮る妖怪は、人語自由の聲高やかに、朽をしやこの年來、われ人間に交參て、妻に狎れ子を産せ、夥の人に敬れて、快樂に光陰を送りしに、角太郎が秘藏の玉は、鱗衣が呑しより、そが腹中に在るを思はず、胎を求めて自殺を薦めし、只この一事にわがうへ敗れて、深痕を負へるのみならず、牙二郎さへに命を隕せし、累る怨は禮儀信道、犬士と唱る名詮自性、犬はわが身の仇なりけり。かゝれば一昨小夜深し、庚申山のほとりにて、吾を遠箭に被たりしも、現八汝が所爲なるべし。二人ながら引裂て、血を吸ひ肉を喰はすは、わが通がもその甲斐なし。腹をせよ。

と罵るを、二犬士呵々とうち笑ふて、言をかしや畜生が、些の魔術に長たりとも、竟に漏さぬ天の網、父の體妻の仇、名器雨ながら潰されたる、けふ復讐の天運通環、(句) 庚申山の樹の上に、われ在としもしらす弓、本事はその身に覺あるべし。退な、進め。と雙方齊一、寄するを寄せじ、と山猫は、飛鳥のごとく蜚過るを、現八戸口に立塞りて、初大刀を讓る勇士の進退、頻りに勇む角太郎は、是首に追詰彼首に攻つけ、撃閃かす刃に怯まぬ。妖怪ますます哮り狂ふて、窓の簾子に爪うち懸け、脱れ去らんとする處を、丁と撃たる角太郎が、手煉の刀尖愈たず、さしも猛かる山猫は、腰の髻を吹放されて、臀居に撞と轉輒ぶを、得たりと刀を拿直し、登し竟て吭のあたりを、鎧も徹れ。といくたびとなく、刺貫きてぞ山猫は、やうやくに息絶にける。既にして角太郎は、父の像見の短刀を、懐より拿出して、十々滅を刺せば奇なるかな。彼禮の字ある靈玉は、瘡口より顯れ出しを、角太郎ははやく見て、血を押しひうち戴きて、現八に云々と、告てその玉を見せしかば、現八も亦歡び感じて、凡わが犬士の黨、皆秘藏せる靈玉の、奇特あらずといふ事なし。既に玉の冥助によりて、妖怪親子は討れしかども、そが妻たりし船虫は、虚死をして逃亡たり。聊時の移りしかども、何地まで走るべき。先追蒐て引揚來てん。といひつゝ裳を高く引折て、外面望て出んとすれば、縁頼に人ありて、犬飼ぬし俟給へ、靈時々々。と呼留めて、母屋に進入るものあり。是則別人ならず、籠山逸東太縁連也。當下逸東太は、大刀の緒をもて綁たる、船虫を牽立來つ、その身も亦大小の腰刀を除却けて、二犬士の身邊にさし措き、障子のこなたに退きて、恭々しく額をつき、犬飼犬村の兩豪傑に、勸解るも面なき所行ながら、凡眼玉石を辨し得ずして、妖怪の爲に惑され、犬飼ぬしを賊とし誣て、推捕籠て撃んとしたるは、そは某一人の、心もてせし事にはあらねど、今さらいひ解く由もあらず。然るを亦牙二郎に、そゝのかされて追蒐來つ、犬村ぬしを罵りたる、過言は馴も及ばず。爾るに嚮に假一角、夫婦がこゝへ來つるとき、某に説諭して、とく赤岩へ退け、といはれし事のこゝろ得がたく、従者をのみ且いなして、某は又執て返しつ、この庭面なる袖障の、蔭に

隠れて竊聞したれば、雛衣どのの自殺の一條、妖怪親子の絆の顛末、且仇撃の爲體に、駭羞て今さらに、出るにも
 出がたければ、なほも便宜を窺ひしに、この船虫が脱れ出て、走るを矢庭に引捕へて、かくの如くに綁たり、某
 主君より預りて、携來つる短刀は、假一角が幻術もて、竊略り聲を擡きて、末とし服せし趣さへに、竊聞してはじ
 めて悟れり。幸ひにして彼短刀は、今菴中にありといへども、離失たればなきに同じ。兩君子は悍しといへども、心
 ざま慈善にして、好て人を殺し給はず。有如之者犯せし科を免して、その短刀を給ふとも、某白井へ立かへりて、
 主君へいひとく辭はあらず。この船虫も假一角が、悪を資けし耦賊也。短刀と共侶に、某に賜らば、白井の城へ牽
 もて歸て、まうしわきの種にしつべし。某おもひ足らずして、兩君子に強面當りし、先非は臍を噬まで、その
 罪萬死に當れども、幸ひにして免されなば、そは再生の大恩也。賢慮を仰ぎ奉る。と嘲がましくかき口説く、額を
 席薦に鑿埋めて、哀しむ告る佞辯邪計を、憎しと思へど二大士は、冷笑ふのみ冒譴めず。且して現八は、角太郎に
 うち對ひて、縁連、事の敗れに及びて、船虫を擲捕り、猶且辭を巧にして、竊に利を搦らんとす。この議を何と思ひ
 給ふ。と問へば角太郎領きて、逸東太は御邊の仇也。又船虫は、わが妻の怨敵也。免すべきものならねども、渠既に
 兩刀を、投わたして命を乞へり。斬らば刃を漬さんのみ。又船虫はちかき比、妖怪に相狎て、そが後妻になりたれど
 も、わが父の讐にはあらず。但雛衣に強顔かりしは、その牡妖に媚るの所以也。かゝれば白井へ遣して、その刑罰を
 人に任せば、假にも繼母といはれたる、わが恥辱に遠離らん。この議はいかゞ。と問かへせば、現八も又領きて、然ら
 ば船虫に問ふことあり。汝は假一角を、妖怪也と知たる歟、大かたは知らぬなるべし。爾るにきのふ雛衣どのの、入
 水せんとせられし時、媒人氷六と共俱に、禁めてその死を救ひし事の、その本意ならぬはさら也。聽て十字竹與にう
 ち乘して、この草菴へ伴ひ來つ、巧言利口、舌に任して、遂に夫婦を一處にせしは、胎内の子を奪ん爲歟。しかりと
 もその折には、彼木天蓼をいまだ得ず。抑汝はいかにして、はやく矢傷の薬法に、用るよしを知りたるぞ。無念の

間に似たれども、後の疑ひを釋ん爲なり。明々地に首伏せよ、いかにぞや。と責問へば、船虫應むことを得ず、
 きつゝ陳するやう、おん疑ひは理り也。妾は素より連副ふ夫を、妖怪也とは夢にも知らず。きのふの朝一角が、不慮
 に眼を傷しよしを、妾に告て又いふやう、わがこの眼の矢傷の薬に、百年土中に埋れたる、木天蓼の眞木と、胎内の
 子と母の血と、この三種を用れば、目子舊のごとくに愈て、物を見ること明ならん。或は木天蓼を獲て、胎を獲
 ず、或は胎内の子のみを獲て、木天蓼を獲ずといふとも、何にまれ一種にても用るときはその効あり。但物を見がた
 きのみ。雛衣は有身て、四五箇月になりぬといへば、究竟の藥劑也。惜らくは離別せられて、今はその子を求るに由
 なし。便宜を得なば左にも右にも謀給へ、といはれし事あり。かくて妾が日出の歸さに、圖らずも彼婦人の、身を枝
 川に投んとせしを、禁めて便を得たりしかば、聽て夫婦を一處にしつゝ、勸當をさへ許さして、親の威光に胎内なる、
 子を求んと計較しに、いく程もなく、木天蓼の、良材も亦手に入れば、いよゝ一角と謀合して、絆云々と謀りに
 き。今さら後悔その詮なけれど、世に女子と生れしもの、好も歹も夫の爲に、心を用ひぬ事のなければ、夫の指揮
 に已ことを、得ざりしよしを猜し給へ。といふに現八冷笑ひて、夫の爲に謀るとも、悪事と知らば諫めもすべきに、
 残忍邪慳を事として、夫に忠ある貞女といはんや。寔に烏計の癖者也。と叱懲せば船虫は、頭を低てふたゞび得いは
 ず。登時現八は、又逸東太にうち對ひて、縁連和主が辯舌もて、言を飭りてかなしみ乞ふとも、允すべきよしはあら
 ねど、武士たるものの恥をしらで、阿容々々として命を惜むは、志ある百姓にも、町人にも劣りたり。さる白物
 を敵手にして、官府を勞し奉らば、不狂人も走るに似たり。犬村ぬしに意趣なければ、われも亦怨をおもはず。乞る
 る隨に木天蓼丸も、船虫をも取らすべし。さばれ赤岩犬村なる、村長里人等に報知さて、この儘允さば證人なし。後
 の異論の爲なれば、件の人々を招きよすべし。赤岩より隨ひ來つる、妖怪親子の從者等は、なほ外面にをるならん。
 彼等を使に遣すべし、とく呼てよ。といそがせば、逸東太はこの幾條に、初て生たる心地して、遽しく答るやう、

否赤岩の従者等は、嚮に妖怪の暴哮りたる、聲に怕れて逃亡たり。といふに現八沈吟じて、爾らば縁連和主を勞せん。件の村に赴きて、村長等を將てかへり來よ。とくくせずや。と分付る、權を執られし逸東太は、是すら推辭ことを得ず、承りぬ。と應つ、船虫を縛たる、索の端を柱に繋ぎて、走去らんとする程に、外面に又人ありて、やよ等給へ。と呼禁め、障子の蔭に立別れたる、左右齊一進入るを、と見れば是別人ならず、月義團吾、八黨東太なりければ、角太郎現八は、緯のこゝろを搦りかねて、些も油断せざりけり。當下團吾東太等は、携來つる異類の頭顱を、席上に推並べ、二犬士にうち對ひて、年來名を藉り、形を似せたる、妖怪やうやく發覺れて、仇を撃れし緯の趣は、曩に假一角親子の徒者の、逃て赤岩へかへり來て、云々と報るにより、その歡びを述ん爲に、兩個の首級を齎したり。是はこれ、彼山猫の眷屬なる、最も年老る猫と貂也。山猫に相從ふて、熟生の形貌に變じ、猫は玉坂飛伴太と呼れ、貂は足足濃太郎と呼れて、人間に在ること久し。然るを昨宵犬飼ぬしの、大刀風に殺立られて、是奴等既に深疾を負ぬ。さばれなほ死ざれば、逃て深山へ隠れんとしてけるを、某等相謀て、刺殺して首級を捕たり。今は何をか慙むべき。俺們も亦人倫ならず。庚申山の麓なる、土地の神と山神也。神通山猫に及ねば、こゝろならずも役使れて、亦熟生に變じつ、團吾東太と呼れし也。眞實歸降したるにあらねば、一昨の宵山猫が、胎内竈の邊にて勇士の獵箭に射て落されしを、幸ひにして肩に引被け、扶けて赤岩に還りにき。又只俺們のみならず、件の山の木精すら、役使れ馬に變じて、この年來赤岩なる、宿所の既に繋れしが、けふ山猫の撃れしよしを、聞くとそが儘絆を外して、舊の山路に還りたり。犬飼犬村兩豪傑の、資によりて怨敵亡び、俺們ふたゝび舊所に安堵す。歡び鬢を取るに物なし。よりにて赤岩犬村なる、村長里人等に、徇知らし、及赤岩の弟子等に、縁由を告しかど、弟子等は皆駭くのみ、妖怪を師とし仰ぎて、その大刀筋を慕たりしを、羞てこゝへは來べくもあらねど、村長里人等は命來つべし。これらの由を告んとて、且くこゝへ立よりぬ。去來々々と。脚を告て、はや外面へ出ると思へば、忽ち二朶の雲と變じて、既

申山のかたに飛去けり。逸東太船虫は、かさねかさねし奇異怪事に、呆れてそなたを仰ぐのみ。角太郎と現八は、件の惡獸兩箇の首級を、引寄してつらく見るに、猫も貂も尋常ならず、現稀なるべき妖怪也。只是のみにあらずして、牙二郎が首級も亦、惡相を顯して、齒を切りて呪詛たる、眼は宛猫に似て、金銀のごとく光つ、全身斑に毛さへ生たり。現山猫の胤なること、疑ひなしと思ふにも、なほ歎息に堪ざりけり。かくて角太郎は、里人を俟程に、寛の水を掬ひかけ、靈玉の血を洗ひ流して、袋に斂め項に懸け、譬の十々滅に刺たりし、像見の短刀を抜とりて、亦血を拭ひ鞋に納め、現八と相譚て、雛衣が亡骸を、扛て納戸へ容るゝ折から、氷六を首として、犬村赤岩なる村長等、各々母立たる里人の、利鎌連柳ななどを、携たるを夥將て、はやくも聚ひ來にけるを、里人等は居あまりて、愈庭面に土居たり。角太郎はこれを見て、且氷六村長等に、現八を引あはして、雛衣が自殺の趣、假一角親子の事、大約仇撃の顛末を、辯短く説示せば、氷六村長等はさら也、外面なりし里人等も、雛衣が死を憐み、又妖怪に舌を振ふて、駭怕れざるものなく、只二犬士の孝義武勇を、感嘆しつゝ置々と、雲時罵り已ざりけり。かくて角太郎現八は、逸東太が非義、舟虫が穢惡、且そのいひつる緯の趣、二犬士の思ふよしさへ、村長等に報知するを、衆皆齊一うち聞て、籠山も船虫も、いと憎むべきもの共なれども、この事官府へ訴られなば、假一角が弟子なりし、里人も引出されん。然らば大村赤岩の村の雜費の多く被りて、難義に及ぶものもあらんを、籠山を許しかへして、船虫をさへ捕し給はゞ、風波立ていとめでたし。後日に異論の起りもせば、俺們證人たるべし。と愈共侶に應しかば、角太郎現八は、逸東太に云々と、所望を允すよしを答て、木天蓼の短刀と、渠が兩刀を返しにければ、縁連歡び再拜して、二犬士に別を告、船虫を牽立て、はや外面へ出る程に、逸東太が従者は、何の程にか還來にけん、行轡子を昇居て、柴門のほとりにをり、主の出るを見かへりて、聽て轡子をよせしかば、逸東太は云々と、従者にこゝろを得さして、船虫をわが轡子に、うち乗してあちこちと、兩戸を搦げて成を固くし、みづからこれに附そふて、綱苧